

ISSN 1342-6818

滋賀県立大学

# 国際教育センター研究紀要

第3号

1998年12月



*Academic Reports  
of  
The University Center for Intercultural Education,  
The University of Shiga Prefecture*

Hikone, Japan

December 1998, No.3

# 『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』

## 第3号の刊行に際して

滋賀県立大学国際教育センターは、本学を構成する環境科学部、工学部、人間文化学部の3学部に通ずる外国語教育、情報教育、健康体力教育の授業科目を担当する組織であって、これらの授業科目を通して、国際社会で活動するために必要な能力と心性を育てる手助けをしている。

このような組織の性格上、所属教員の研究領域は、イギリス文学、英語教授法、応用言語学、言語心理学、異文化理解教育、異言語教育政策、ドイツ文学、フランス文学、自然言語処理、宗教学、近接場工学、確立統計論、電波工学、画像処理、経営情報システム論、生活情報論、生活経営学、運動生理学、体力科学等、さまざまな分野にわたっている。

近年、大学の学部教育がユニバーサル化するとともに、これらの研究分野における教員の最新の研究成果が学部教育の授業科目の内容と直接的に結びつくことは少なくなっていると言わざるを得ないけれども、教員が学界で評価の高い研究者であることは、その研究内容が、直接、教室で講義されるのではない場合にも、担当課目を通じて、学生に多くの教育的、学問的な影響を与えることだろう。この意味で『研究紀要』を各教員の専門分野の研賛の場として育てていきたいと考えている。

個々の研究者の立場から言えば、さまざまな分野の研究を寄せ集めたような印象を与える危険を伴う『研究紀要』よりも、所属する学界の機関誌等に研究成果を発表するほうが、いろいろな意味で、いっそう効果的であるという考えも当然あり得る。しかし一年に一度、国際教育センターの教育理念を念頭に置きながら、『研究紀要』に研究成果の一端を発表することは、研究に新しい視点を持ち込んだり、発表のかたちに学会機関誌の場合とはひと味違った工夫を凝らしたりする機会として、望ましいことではないかと考えている。

巻末には国際教育センターの教育・研究活動の向上を目指すさまざまな議論の経過を踏まえて作成された、いわゆる「自己点検・自己評価」的な資料の一部を掲載することとした。

ご高覧、ご尊評をお願いする次第である。

平成10年12月25日

滋賀県立大学  
国際教育センター長  
栗山 稔

## 目次 (Table of Contents)

### — 研究論文 —

栗山 稔 (Minoru KURIYAMA)	
コールリッジにおける黙示録的想像力の問題 ( <i>The Apocalyptic Imagination in S. T. Coleridge</i> ) .....	1
大谷 泰照 (Yasuteru OTANI)	
日本人の言語意識を問う ( <i>Attitudes toward Language and Culture</i> ) .....	21
奥村 清彦 (Kiyohiko OKUMURA)	
要約指導がリスニングとライティングの能力に及ぼす効果 ( <i>Some Effects of Summary Writing on Listening and Writing</i> ) .....	39
石田 法雄 (Hoyu ISHIDA)	
<i>Nietzsche and Saṃsāra: Suffering and Joy in the Eternal Recurrence</i> .....	53
クリンガー ウォルター (Walter KLINGER)	
<i>Card Games for Language Learning</i> .....	71
小栗 裕子 (Yuko OGURI)	
リスニング向上に効果のあるいくつかの要素2 —著しい伸びを示した学生にみられる動機づけ— ( <i>Factors for Improving Listening Comprehension 2</i> ) .....	91
深見 茂 (Shigeru FUKAMI)	
C. F. マイアーの『聖者』について ( <i>On Conrad Ferdinand Meyer's "Der Heilige"</i> ) .....	103

- 長島 律子 (Ritsuko NAGASHIMA)  
*Le Problème de la Narration dans "Monsieur Ouine" de Georges Bernanos— en  
comparaison avec "The Unicorn" d'Iris Murdoch—*..... 117
- 呉 凌非 (WU Lingfei)  
深層格フレームによる日本語動詞の意味記述  
(*The Description of Japanese Verbs Based on Deep Case Frame*) ..... 133
- 高橋 信行・小倉 久直 (Nobuyuki TAKAHASHI & Hisanao OGURA)  
ランダム表面の相反定理と後方強調散乱  
(*Reciprocal Theorem and Backscattering Enhancement in Random Surface  
Scattering*) ..... 167
- 亀田 彰喜・吉田 勝廣 (Akiyoshi KAMEDA & Katsuhiko YOSHIDA)  
複式簿記の論理構造と会計情報システム  
(*Logical Structure of Double Entry Bookkeeping and Account Information  
Systems*)..... 181
- 岡本 進・宮本 孝・佐藤 尚武 (Susumu OKAMOTO, Takashi MIYAMOTO &  
Shobu SATO)  
大学ボート選手における模擬的漕力の変動に關与する無氣のおよび有氣的能力  
の検討  
(*A Study of Anaerobic and Aerobic Capacities Concerning the Change of Simulated  
Rowing Power of Collegiate Oarsmen*) ..... 193
- 寄本 明 (Akira YORIMOTO)  
低周波超音波法からみた骨質と身体活動水準との關係  
(*Relationship between Ultrasound Measurements of the Os Calcis and Lifetime Physical  
Activity*) ..... 203

— 「国際教育センター内活動」の紹介—

国際教育センター主催のセミナー .....	213
Wendy JACKSON	
<i>Take the Risk</i> .....	213
教員による学界ならびに社会における活動 .....	215
国際教育センターに対する研究費交付一覧 .....	221
在外研修報告 .....	223
大谷 泰照.....	223
小栗 裕子.....	225
長島 律子.....	227
石田 法雄.....	229
滋賀県立大学特別研究費研究報告 .....	233
寄本 明 .....	233
呉 凌非.....	237
国際教育センター担当科目に関するアンケート .....	241

# 研 究 論 文

## コールリッジにおける黙示録的想像力の問題

### The Apocalyptic Imagination in S. T. Coleridge

栗山 稔

Minoru KURIYAMA

#### 1 フランス革命論争：1790年代後半のイギリス

ワーズワースは『二部序曲』（William Wordsworth, *Two-Part Prelude*, 1799）の末尾の箇所、フランス革命に寄せる希望が崩壊した一七九〇年代後半の時代を次のように表現している。

in these times of fear,  
This melancholy waste of hopes o'erthrown...  
mid indifference and apathy  
And wicked exultation, when good men  
On every side fall off we know not how  
To selfishness, disguised in gentle names  
Of peace and quiet and domestic love—  
Yet mingled, not unwillingly, with sneers  
On visionary minds— ...in this time  
Of dereliction and dismay...

*Two-Part Prelude*, II, 478-87

この恐怖の時代に、  
覆った希望の残骸が累々と広がる意気消沈の中で、・・・  
無関心と冷淡と間違った歓喜のまっただ中で、  
まわりでは善良な人々が、平和とか平安とか家庭的な愛とか、  
耳触りのよい穏やかな名称で言い繕っているけれども、  
実は夢想的な精神を嘲笑することも厭わない利己主義へ、  
どうしてか分からないけれども脱落してゆく時に、・・・  
この怠慢と落胆の時代に・・・

「恐怖の時代」はフランス革命にならってイギリスの政治、社会の改革を求める思想や運動が厳しく弾圧され、フランス革命に希望と共感を寄せるイギリスの急進派がもっとも強固な少数者に減少させられた時

代を言っている。

フランス革命に寄せるイギリス人の希望と共感は、国民議会の設立（1789年）、市民的自由と宗教的自由の確立（1790年）、ルイー六世の逃亡計画（1791年）等を経て急速に高まり、共和国宣言（1792年）によって頂点に達した。しかし、一方、聖職者民事基本法の成立（1790年）、オーストリアに対する宣戦布告、チュイルリー宮の攻撃、王権の停止、九月の大虐殺、ヴァルミーにおけるフランスの勝利（いずれも1792年）は、体制側の人びとにとって重大な脅威と感じられていた。そしてルイー六世の処刑と英仏間の戦争の勃発（1793年）によって、フランス革命に対する共感の表明は、實際上、叛逆罪とみなされる危険を伴った。ペインが『人間の権利』（Thomas Paine, *The Rights of Man*, 第一部1791年、第二部1792年）によって叛逆罪に問われ、危うく逮捕を逃れてフランスへ脱出したこと（1792年）や、ゴドウィンが『政治的正義』（William Godwin, *The Political Justice*, 1793年）が、国民に悪影響を及ぼすには高価すぎるという理由で告発をまぬがれたエピソード（1793年）は、よく知られた例である。さらに人身保護法の停止と叛逆罪裁判（1794年）がフランス革命に寄せる希望と共感にとって最後の打撃となった。叛逆罪に問われた十二名の被告の中にはゴドウィンの友人ホルクロフト（Thomas Holcroft）、セルウォール（John Thelwall）、トゥック（Horne Tooke）が含まれていた。イギリス人の耳目を集めたこの裁判は、結局、小ピット（William Pitt, the younger）の政府の敗北に終わった。セルウォール、トゥックの無罪が相次いで票決されるにいたって、政府は他の被告に対する起訴を取り下げたのである。

しかしこれはフランス革命に寄せる希望や共感にとって一時的な勝利に過ぎなかった。フランスにおける恐怖政治（1794年）、総裁政府の成立（1795年）、イギリスにおける扇動的集会および言論を禁止するいわゆる「二法」（*Treasonable and Seditious Practices Act* および *Seditious Meetings Act*）の成立（1795年）が一七九〇年代前半の政治、社会の改革思想や運動の息の根を止めることとなった。ゴドウィンは叛逆罪裁判の年に初版を出した『ケイレブ・ウィリアムズの冒険』（*The Adventures of Caleb Williams*, 1794）第三版（1797年）の序文で、この作品の執筆意図がイギリス社会の現状のもたらす悲惨な結果を忠実に展開してみせることによって、フランス革命に反対して、社会の現状維持を主張する体制派と、フランス革命に共感して、社会の現状改革を求める急進派との論争に役立てることであったと説明しているが、その最後に次の言葉を付け加えている。

この序文は出版者の警告にしたがって、初版から削除された。ケイレブ・ウィリアムズが初めてこの世に姿を現したのは、イギリス人の自由に対する血なまぐさい陰謀が企てられたのと同じ月であった。この陰謀は、幸い、最初の犠牲者とされそうになった人びとがその年の末に無罪釈放されて終わった。恐怖政治が時代の風潮であり、一介の小説家と言えども、無理矢理、叛逆者と立証されてしまう恐れがあった。

これは時代の思想弾圧の状況を如実に物語る証言の一つとなるだろう。

一方、フランスの情勢そのものもイギリス人の期待と共感を裏切る方向に転回していた。フランスはナポレオンの台頭とともに軍事的な性格を露わにし始めた。海によって守られたイギリスもナポレオン軍の侵攻に恐れおののかなければならなくなった。1797年2月にはフランス兵1200が、ブリストルその他の

港湾破壊を意図して、ウェールズ西南部のフィッシュガード (Fishguard) に上陸するが、作戦目的を果たすことなく降伏するという事件が現に起っている。<sup>1</sup> この年の7月、ワーズワースはプリストル南西のオールフォックスデン (Alfoxden) に移り、近くのネザー・スタウィー (Nether Stowey) に住むコールリッジ (S. T. Coleridge) と親密な交際を始め、頻繁にプリストル湾を望む「クウォントックの緑の丘」(Quantock's grassy hills, *Thirteen-Book Prelude*, XIII, 393) を歩き回ったために、たちまちフランス軍の上陸作戦を支援するスパイと疑われ、土地の住民の密告するところとなって、8月には彼らふたりを監視するために政府の密偵が派遣されたりしている。<sup>2</sup>

そして1798年2月に始まるフランスのスイス侵攻が多くのイギリス人にフランス革命に対する希望と共感を失わせる決定的な事件となった。スイスは多くのイギリス人にとって自由と独立の象徴であったのである。

And now, become Oppressors in their turn,  
 Frenchmen had changed a war of self-defense  
 For one of conquest, losing sight of all  
 Which they had struggled for; and mounted up  
 Openly in the view of earth and heaven  
 The scale of Liberty. I read her doom...

*Thirteen-Book Prelude*, X, 791-96

さて、今度は自分たちが圧制者となって、  
 フランス人は自衛の戦いを征服のいくさに変え、  
 闘い取るべき目標をすべて見失ってしまった。  
 天地の目に、明らかに、「自由」を載せた  
 天秤の皿が跳ね上がるのが見えた。  
 私は「自由」の運命を読み取った・・・

フランス革命軍は、当初、「自衛」と反革命の鎮圧のために戦っていた。しかしベルギー、オランダ、プロシヤ、イタリア、スペインに対する侵攻はすでに1794年から始まっていたと言える。ミルトンの『楽園喪失』(John Milton, *Paradise Lost*, IX, 996 以下) に由来する天秤のイメージは、フランス人が他国の自由を抑圧する圧制者となって、ともに闘い取るべき自由を羽毛のように軽んじるにいたったことを表現している。

このように小ピットの政府の弾圧的な恐怖政治と、革命当初の理想に託していた希望の喪失が、多くのイギリス人に、無私の精神、当時の言葉で言えば博愛の精神に立脚して、社会の完全状態を実現するという、一七九〇年代前半の全人類的大義達成の希望を放棄させた。冒頭に引用した『二部序曲』の箇所はイギリスのこのような政治的、社会的、思想的な状況を語り、続けて、転向者の陥った精神的状況を語っている。それは「無関心」、「冷淡」、「間違った歓喜」、「怠慢」、「落胆」などを顕著な特徴としている。革命の掲げる全人類的大義に託した希望を挫折させられて「落胆」し、大義の命じる義務に「怠慢」

となり、人類全体の問題には「無関心」、「冷淡」を装って、ひたすら自分一個の「家庭的」な「平和」、「平安」を願う精神状況である。「家庭的」と読んだ 'domestic' は同時に「自国の」とも読めるから、この意味では、全人類的大義をイギリス一国に対する配慮に後退せしめた精神を表していることは言うまでもない。「間違った歓喜」は、例えば、フランス革命軍に対するイギリス軍の勝利を祝う喜びであろう。フランス革命軍の敗戦の真の意味、全人類的大義の敗北が理解されないで、祖国イギリスの戦勝が素朴に喜ばれる。この狭い愛国情の喜びを「間違った歓喜」と言っているのであろう。ワーズワースは田舎の教会で祖国イギリスの戦勝を祈願する素朴な会衆に混じりながら、フランスの勝利を祈らずにはいられなかった時の名状しがたい苦悩の記憶を語っている (*Thirteen-Book Prelude*, X, 263-74)。これは狭義の祖国愛と広い人類愛との葛藤の回想である。全人類的大義の敗北が祖国イギリスの戦勝を喜ぶ愛国情、国王への忠誠という「上品な名称」に覆い隠されてしまう。また全人類的大義に基づいてイギリスの政治、社会の改革を要求する真の「祖国愛」が、ひたすら軍事的勝利のみを願う低次元の愛国情に取って代わられる。こうして全人類的大義からの転向が低次元の愛国的言動で言い繕われるのである。

ここでイギリスにおけるフランス革命に対する賛否の論戦、いわゆる書物戦争、パンフレット合戦の出発点となったプライスの説教が『愛国情について』という題であったことが興味深く思い出される。プライスは低次元の愛国情が高次元の人類愛によって厳しくコントロールされる必要を説いていたのである。プライスはわれわれの関心が自分自身から始まって、家族、親戚、友人、そして祖国へと徐々に広がるものであることを認めた上で、この狭い関心はいっそう広い関心に道を譲るべきであると言う。プライスは続けて次のように言っている。

特に祖国の利益を追求する際には、それを超えたところにも目を向けるべきである。われわれは祖国を愛すべきであるが、もっぱら祖国のみではいけない。我々は祖国の利益を求めべきであるが・・・それと同時にわれわれが世界の市民であることを考え、他の国々の権利を正しく尊重し続けるように注意すべきである。

Richard Price, *A discourse on the love of our country*, 1789; reprinted by Woodstock Books, London, 1992, p.12.

このようにみえてくると「夢想的な精神を嘲笑することも厭わない利己主義」は、全人類的大義を放擲して、自国イギリスの勝利を優先させた人々の狭義の愛国情を意味することとなる。たしかに一七九〇年代の後半は全人類的大義を抱き続けた人びとが「夢想的な精神」として「嘲笑」された時期であった。1798年初版のマルサスの『人口論』 (*Thomas Robert Malthus, An Essay on the Principle of Population*) が、フランス革命の原理に基づいて完全状態を目指して人間と社会を改善しようとする計画を「全く夢想的」 (第三章他) であると言って「嘲笑」するものとして歓迎されたことに疑いはない。そしてこの「嘲笑」は「脱落」した者が「脱落」しなかった者に向ける場合にいっそう激しかったのである。

ここで「脱落」を表現するのに 'fall off' という言葉が使われていることにも注意する必要がある。

good men/On every side fall off.../To selfishness

まわりでは善良な人々が利己主義へ脱落してゆく

『政治的正義』の著者ゴドウィンも同じ「脱落」をよく似た文脈の中で同じ言葉を使って表している。

My fellow labourers have...fallen off from me on every side.<sup>3</sup>

仲間の運動家たちが私のまわりから脱落していった。

時代のミルトンであろうとしたワーズワースや、カルヴィニズムの影響下に成長したゴドウィンが、この言葉を宗教的なニュアンスを十分に意識しながら、使ったことは容易に想像されるだろう。それは聖書の神の御心からの「脱落」、神の御心に対する「離反」というニュアンスである。例えばミルトンの次の一節を思い出してみるとよい。

say first what cause

Moved our grand parents in that happy state,

Favoured of heaven so highly, to fall off

From their creator, and transgress his will

For one restraint, lords of the world besides?

Who first seduced them to that foul revolt?

The infernal serpent...

*Paradise Lost*, I, 28-34

まず語り給え、あれほど幸せな境遇にあり、  
あれほど高い神の恩寵を受けながら、われわれの最初の親が、  
ただ一つの禁制ゆえに、それ以外は世界のあるじであったのに、  
いったい、いかなるものに惑わされて、  
創造主に背を向け、その御心にそむいたかを。  
最初、あのおぞましい叛逆へ彼らを欺き誘ったのは誰か。  
地獄の蛇・・・

ここでは‘fall off’が‘transgress’と同義であることが分かる。すなわち「地獄の蛇」、蛇の体内に潜んだ、地獄の墮天使サタンに唆された神への叛逆、神への「不服従」（‘disobedience,’ *Paradise Lost*, I, 1）という意味である。ワーズワースやゴドウィンの用いる‘fall off’には、全人類的な大義にしたがって政治、社会の改革を目指すことが神の摂理の実現であると考えた姿勢が込められていることが理解できる。彼らにとっては全人類的な大義からの「脱落」、「離反」は神への叛逆、神の摂理からの逸脱であったのである。

ところで1799年9月10日頃、コールリッジはワーズワースに宛てて、次の一節を含む手紙を書いている。

...those, who, in consequence of the complete failure of the French Revolution, have thrown up all hopes of the

amelioration of mankind, and are sinking into an almost epicurean selfishness, disguising the same under the soft titles of domestic attachment and contempt of visionary philosophes.

S. T. Coleridge, *Collected Letters*, I, 527

フランス革命が完全に失敗した結果、人類改善の希望をすべて放棄して、ほとんどエピクロスの(享楽主義的)と言えるほどの利己主義に沈み込み、しかもそれを家庭(国家)への愛情とか、夢想的哲学者に対する軽蔑とか、耳触りのやわらかな名称で言い繕っている人びと・・・

多くの措辞の類似から、ワーズワースは『二部序曲』において一七九〇年代後半のイギリスの思想風土を要約する時、このコールリッジの手紙を念頭においていたと考えられている。<sup>4</sup> これは、もちろん、ワーズワースがコールリッジの判断を鵜呑みにしたというようなことではない。前年の1798年7月、ワーズワースがコールリッジとの頻繁な行き来を繰り返していた時期の詩に、同じような言葉を使って、人類の大義を放擲した者がなお大義に固執する者へ向けた批判を表現した詩行がみられる。

neither evil tongues

Rash judgments, nor the sneers of selfish men...

'Tintern Abbey Lines,' 129-30

悪意の中傷も、

性急な批判も、利己的な人びとの嘲笑も

ワーズワースとコールリッジの間では、転向者を「利己的な人々」と呼ぶことを含めて、時代思潮の認識が同じ言葉で語り合われていたと考えるべきであろう。

## 2 コールリッジが 'recant' したもの：1798年のパンフレット詩集

このような「恐怖の時代」にワーズワースの詩心がどのような展開をしたかについては別に論じているので、<sup>5</sup>今回は1795年、ブリストルで行った『政治、宗教に関する講演』(*Lectures on Politics and Religion*)や定期刊行紙『見張り人』(*The Watchman*)等によって、いわゆるイギリス・ジャコバン派として知られていたコールリッジのケースについて考えてみたい。このためには1798年に『ひとり恐れおののく』(*Fears in Solitude*)と題して発表されたパンフレット詩集を検討する必要がある。この詩集は標題の「ひとり恐れおののく」と、「取り消しのオード」(*Recantation: an Ode*)および「夜更けの霜」(*Frost at Midnight*)の三編を収めている。まず、1802年以降、「フランス オード」(*France: an Ode*)と呼ばれることになる「取り消しのオード」を取り上げる。コールリッジは『巫女シビルの言の葉』(*Sibylline Leaves*, 1817)に次の書き込みを残している。

「ゆく年に寄せるオード」(*Ode to the Departing Year*)を読む際には、これがイギリス立法府による奴隷貿易の廃止や、またフランスによるスイス侵攻の何年も前に書かれたことを忘れてはいけぬ。

フランスのスイス侵攻は一種の取り消しの詩として次の「フランス オード」を書く契機となった。<sup>6</sup>

またコールリッジは『巫女シビルの言の葉』と平行して出版の準備をした『文学的自叙伝』 (*Biographia Literaria*) 第十章でも、「取り消しのオード」を「フランス 取り消しの詩」 (*France: a Palinodia*) として、新旧の題名を融合したような名称で引用している。したがってこの詩はスイス侵攻を契機として、コールリッジがフランスに対する態度を変更したことを表明していることになる。

1793年2月、イギリスが対仏大同盟に加わって革命フランスの制圧に乗り出した時、胸に「漲る」 (*swoln* 34) 「愛国的感情」 (*the patriot emotion* 34) にもかかわらず、コールリッジは祖国の敗北とフランスの勝利を願ったと言う。

my voice, unaltered, sang defeat  
 To all that braved the tyrant-quelling lance...  
 O Liberty!  
 [I] blessed the paeans of delivered France,  
 And hung my head and wept at Britain's name.  
 'France: an Ode,' 36-42 から  
 暴君打倒の槍に立ち向かう者に敗北あれ、と  
 私は変わらぬ声で歌い続けた。  
 おお、「自由」よ、  
 私はフランス解放の讃歌を感謝の気持ちで歌い、  
 イギリスという名には、うなだれて泣いた。

そして恐怖政治も一時的な「嵐」に過ぎず、フランスが、ただひたすら、その幸福な姿を示してくれることによって、他の国々は後に続くという希望を失わなかった。

Ye storms, that round the dawning East assembled,  
 The Sun was rising, though ye hid his light!...  
 conquering by her happiness alone,  
 Shall France compel the nations to be free...  
 'France: an Ode,' 47-48; 61-62  
 明けゆく東の空で、強まる嵐よ。  
 おまえが光を隠すとしても、太陽は昇っていった。・・・  
 フランスの勝利は、ただ幸福な姿を見せること。  
 そのことだけで諸国民を自由へ駆り立てる・・・

しかしスイスへの侵攻が始まり、人類の自由のチャンピオンであったはずのフランス人が「卑しい征服欲」

(the low lust of sway 86) にかけては君主と選ぶところがなくなってしまい、自由を愛するスイス人に対して、フランスを讃美した許しを乞わなければならなくなる。

forgive me, that I cherished

One thought that ever blessed your cruel foes!

'France: an Ode,' 70-71

許してください、あなた方の残酷な敵に  
祝福を与えようと思ったことを。

コールリッジはフランスと重ねた自由の探求がむなしく終わったことを知り、そもそも自由は人間の世界に存在するものではないと悟るのである。

O Liberty!... thou [never]

Didst breathe thy soul in forms of human power...

'France: an Ode,' 89-92 から

おお、「自由」よ・・・人間の力でできたものに、  
「自由」が魂を吹き込むことなどなかったのだ。

このように「取り消しのオード」は、自由を讃えるという点では、全く態度の変更を示していないけれども、フランスが自由を表象するという点では、完全に態度を変更していることになるのである。

1796年12月に書かれた「去りゆく年に寄せるオード」でコールリッジは、ロシアの女帝エカテリーナ二世を「飽くことを知らぬ」(insatiate 45)「野心、殺人、征服」(Ambition 38; Murder 44; Conquest 50)の化身として捉え、この年11月の彼女の死が対仏大同盟に与える打撃を喜び、島国の安全を恃んで、フランスの自由を抑圧するイギリスを、エカテリーナの姿とダブらせながら、イギリスの黙示録的終末とも言うべき破滅を予言した。このフランスの自由を抑圧する者としてのイギリスという点に関しても、「取り消しのオード」は態度の変更をみせてはいない。しかしイギリスが革命フランスとの戦争に突入した時、イギリスの敗北を願ったことを表現する

my voice, unaltered, sang defeat

To all that braved the tyrant-quelling lance

暴君打倒の槍に立ち向かう者に敗北あれ、と  
私は変わらぬ声で歌い続けた

という箇所では、イギリス兵を表現する 'braved' (勇敢に立ち向かう) という言葉は、イギリスに対する態度が新しく、肯定的に変更されつつあるように感じさせる。

イギリスに対する態度はフランスのイギリス侵攻に対する恐れを歌った「ひとり恐れおののく」にいっ

そう明瞭にみられる。イギリスは、島国である安全を恃んで、他国に対しては暴君の態度で臨み、隷属、殺戮、流血の苦しみを与え、また腐敗した政治、墮落した宗教という悪徳を掲げるといふ重大な罪を犯した。このためイギリスを「非難するうめき声が、東から西まで、天を貫き」(From east to west / A groan of accusation pierces Heaven! 43-44)、ついに神の御怒りにふれることとなったと言う。フランス軍の侵攻はイギリスに黙示録的な破滅をもたらす神の御怒りの顕れと考えられている。先にワーズワースやゴドウィンにとって、全人類的大義にしたがって政治、社会の改革を目指すことは神の摂理を実現することであったと指摘した。コールリッジにとっても同様であり、全人類的大義に反する行為は神の御怒りにふれることになるのである。

Therefore, evil days

Are coming on us, O my countrymen!  
 And what if all-avenging Providence,  
 Strong and retributive, should make us know  
 The meaning of our words, force us to feel  
 The desolation and the agony  
 Of our fierce doings?

'Fears in Solitude,' 123-29

こうして、我が同胞たちよ、  
 災いの日々が我われを襲ってきたのだ。  
 なにも驚くにはあたらない。  
 すべてに復讐と罰を与える万能の神意が、  
 口にした言葉の意味を覚らせ、  
 悪行のもたらす荒廃と苦悶を  
 実感させようと意図されたとしても。

このようにイギリスに対する態度には「前言取り消し」に当たるような変化はないと考えられる。

イギリスに対する神の御怒りに猶予を乞い願う箇所には、自由のチャンピオンであったフランスに対する賞讃を取り消すさらに激しい言葉がみられる。

Father and God! O! spare us yet awhile!...  
 Stand forth! be men! repel an impious foe,  
 Impious and false, a light yet cruel race,  
 Who laugh away all virtue, mingling mirth  
 With deeds of murder; and still promising  
 Freedom, themselves too sensual to be free...  
 And oh! may we return

Not with a drunken triumph, but with fear,  
Repenting of the wrongs with which we stung  
So fierce a foe to frenzy!

'Fears in Solitude,' 130; 139-43; 150-53

父なる神よ、今しばしの猶予を与え給え。 . . .  
立ち上がれ。勇敢に撃退せよ。神を信じぬ敵を。  
神を信じぬ、不法な敵を。殺人に浮かれ、  
自由の精神を失いながら、自由の約束をふりまく、  
陽気で、かつ残忍な民を撃退せよ。 . . .  
ああ、そして勝利に酔い痴れることなく、  
これほど猛々しい敵を  
狂気に駆り立てた自分の悪行を悔い、  
恐れおののきながら凱旋できますように。

フランスは「神を信じぬ」、「不法な」、「残忍な」国となり、フランスへの隷属こそが自由であると強弁するような、まったく「自由の精神を失」った「狂気」を表象することになる。しかしもともとフランスをこのような「狂気に駆り立てた」ものは、フランス人が革命によって獲得した自由を圧殺しようとしたイギリスの「悪行」であると考えられている。

このように「取り消しのオード」と「ひとり恐れおののく」において、自由に対する変わらぬ熱烈な賞讃ゆえに、フランスの自由を抑圧したイギリスに対する批判は相変わらず厳しく、自由を裏切ったフランスに対する賞讃は完全に取り消されてしまったのである。しかしこれら二編の詩でいっそう注意を引くことは、コールリッジが人間の世界に自由を見いだすことに希望を失い、自由を感じることのできる場所として自然の世界に感謝を捧げていることである。

while I stood and gazed, my temples bare,  
And shot my being through earth, sea and air,  
Possessing all things with intensest love,  
O Liberty! my spirit felt thee there.

'France: an Ode,' 102-05

目を凝らして立ち、頬を風に吹かれて、  
身も心も、大地と海と風の中に、解き放ち、  
万物を強い愛で抱きしめた時、  
おお「自由」よ、私の心はそこに君を感じた。

ここには自然の万物と強い愛情によって結ばれ、半ば恍惚とした状態で自然の万物と一体となった感覚が歌われ、このように彼と融合した自然の中のみ自由があると歌われている。この自然はもちろんイギリ

スの自然であり、これは祖国の自然に対する愛の表明である。これは、「立ち上がれ。神を信じぬ敵を撃退せよ」という詩句とともに、高次元の愛国心によって行動するコールリッジが、低次元の愛国心によって動く人びとによって、祖国の敵として排斥されたことに対する、コールリッジ自身の反駁として読むことができる。「コールリッジ氏は、他のもっとも純粋な愛国主義の人びととともに、祖国の敵という呼称で中傷されていた」からである。<sup>7</sup>

また次の箇所にはコールリッジが住むネザー・スタウィーの村、村の教会等の風景が描かれている。

now, beloved Stowey! I behold  
 Thy church-tower, and, methinks, the four huge elms  
 Clustering, which mark the mansion of my friend;  
 And close behind them, hidden from my view,  
 Is my own lowly cottage, where my babe  
 And my babe's mother dwell in peace! With light  
 And quickened footsteps thitherward I tend,  
 Remembering thee, O green and silent dell!  
 And grateful, that by nature's quietness  
 And solitary musings, all my heart  
 Is softened, and made worthy to indulge  
 Love, and the thoughts that yearn for human kind.

'Fears in Solitude,' 221-32

愛しいスタウィーの村よ。村の教会が、  
 また友人の館の目印となっている  
 四本のニレの大木とおぼしき木影が見える。  
 あのすぐ後ろの、ここからは見えない  
 賤が屋には、赤子の我が子とその母が  
 安らかに暮らす。軽やかに、足取りを速めて、  
 我が家を目指す時、おお、静かな緑の谷よ、  
 君を思い起こして、自然の静寂の中で、  
 ひとり瞑想に耽り、心が和らぎ、  
 愛と、人類に寄せる共感で満たすのに、  
 ふさわしくなったことを感謝する。

ここにも高次元の愛国心が祖国に敵対する感情ではなく、祖国の自然、郷土、家庭に対する愛によって生まれ、育まれるという、コールリッジの終始一貫して、取り消されることのない主張を読み取ることができる。高次元の愛国心などというものは「子としての愛の感情は愚であり、感謝の感情は罪であり、特定の男や女に対する愛情は正義に反するものであり、男女の無差別な交わりが叡知であり、義務であると教

える」<sup>8</sup>「現代哲学」<sup>9</sup>のもととなっており、この不道徳な「現代哲学」をゴドウィンと一緒に説いているという誤解を、コールリッジはここで一掃しようとしているのである。また「コールリッジ氏はその後結婚し、子供を持ったが、今は国を捨て、世界の市民となって、子供たちを父無し子とし、妻を置き去りにした」<sup>10</sup>のは、彼の「現代哲学」に基づく行動であるというような非難、攻撃に対して身構えていたことを示していると言えるだろう。

最後に「夜更けの霜」は、他の二編の政治詩によって1798年のパンフレット詩集に醸成される政治的コンテクストを考えるのでなければ、ほとんど政治的な詩であることに気づかないだろう。「夜更けの霜」は、もっぱら、「暖炉の火格子に揺らめく薄い灰」(that film, which fluttered on the grate 15)から広がる追憶—暖炉の灰にまつわる古い言い伝え、少年時代、故郷の村、村の教会、教会の鐘の音、肉親たちの追憶—と、追憶の中の自分と重なる「揺りかごに安らかに眠る我が子」(My cradled infant slumbers peacefully 6)、我が子が育つイギリスの自然、そして自然の中で成長する我が子に寄せる深い愛情と希望を歌っており、先にふれたコールリッジに加えられた政治的非難、攻撃に対する自己弁護として、高次元の愛国心が郷土や家族に対する愛から育つことを主張した詩として読んで初めて、政治的な意味を持つ詩であることに気づくのである。

このように1798年の詩集に収められた三編の詩は、一方において自由に対する強い希求、高い次元の愛国心(全人類に及ぶ博愛心)の称揚を、他方においてイギリスの政治的腐敗、宗教的墮落に対する厳しい攻撃を、「撤回」(recantation)することなく、繰り返し主張し、「ふたたび詩に唱」って、一方を称讃し、また他方を攻撃しているのである。recantationは「撤回」ではなくて、re+chant、すなわち「ふたたび詩に唱う」ことであり、palinodiaは「取り消しの詩」ではなくて、again+ode、すなわちふたたび「オードに歌って讃える」ことであつたのである。もちろんすでにみたように「撤回」(recant)されたものもある。コールリッジは自由と高い次元の愛国心の讃歌をふたたび唱いあげると同時に、それらの表象としてのフランスに対する称讃を取り消したのである。

### 3 「いっそう優れた世界」

先に自然の事物の中に「身も心も解き放ち」、自然の事物と強い愛で結ばれ、一体となった感覚が歌われ、このような自然との融合感の中で、自然に宿る自由の存在が感じられると歌われるのをみた。しかし同じ自然との融合、合体の感覚の中で感じらるものは、自由の存在だけでなく、自然に宿る神の存在、さらに「いっそう優れた世界」のヴィジョンでもあつたのである。

Sweet influences [from nature] trembled o'er his frame;  
 And he, with many feelings, many thoughts,  
 Made up a meditative joy, and found  
 Religious meanings in the forms of Nature!  
 And so, his senses gradually wrapt  
 In a half sleep, he dreams of better worlds...

‘Fears in Solitude,’ 21-26

自然の心地よい靈気が身のまわりでふるえる時、  
 多くの感情や思いが瞑想の喜びを生み出し、  
 自然の万物が宗教的な意味に気づかせる。  
 すると、やがて感覚は半ば眠りに包まれ、  
 いっそう優れた世界のヴィジョンが観えてくる・・・

またコールリッジは赤子の我が子にも自然界に自由と神といっそう優れた世界を観るよう希望している。

shalt thou see and hear

The lovely shapes and sounds intelligible  
 Of that eternal language, which thy God  
 Utters, who from eternity doth teach  
 Himself in all, and all things in himself...

‘Frost at Midnight,’ 58-62

おまえは神が語り給う永遠の言語の  
 麗しい文字を読み、音を聞いて理解する。  
 神は万物に在り、万物は神に在ると  
 永遠の世界から、神は教え給う・・・

ここには神は自然界の万物の中に存在し、万物は神の中に存在しており、自然界の万物の形姿と音声は神の言語であるという認識が歌われている。コールリッジは、この時期、国教会であれ、カトリック教会であれ、教会の神に対する幻滅から、このような一種の汎神論的な神の信仰に到達していた。コールリッジは1797年に「宗教的瞑想」(*Religious Musings*, 1794-96)に次のような自注をつけ加えている。

1794年1月21日、国王陛下の勅語に対する奉答文を討議している過程で、ギルドフォード[原文ノママ]伯爵は次のような趣旨の修正動議を提出した。「本院は陛下がもっとも早い機会を捉えて、フランスとの講和を締結されるよう希望する・・・」。この動議に対してポートルランド公爵は、「この戦争はもっぱらキリスト教の護持という理念に基づく戦争である」という理由をあげて反対した。また1794年5月、ベッドフォード公爵は、フランスとの講和の締結を目指す幾つかの決議案を提案したが、反対された。反対者のひとりアビンドン卿は次の驚くべき言葉を吐いた。「講和への最善の道は戦争です。それも造り主を礼拝する方法として教えられたのと同じやり方で、すなわち、魂と精神と心と力のすべてを傾けて、遂行する戦争こそ最善の道なのです。」<sup>11</sup>

コールリッジは小ピットの政府が高次元の愛国心=全人類の大義=フランス革命に対する憎悪へと大衆を狂奔させる際に用いた「国王と教会」というスローガンに組み込まれた教会、すなわち国家権力と結合し

た教会権力を嫌悪していた。そして神はその御名において高次元の愛国心と敵対することを命じられるという国教会の主張に対して、コールリッジは彼自身が自然界に存在することを実感する神の教えを説くのである。ミルトンは「神の道の正しさを人びとに証明する」(justify the ways of God to men, *Paradise Lost*, I, 26) ために『楽園喪失』を書いたのであるが、コールリッジも、同じように、彼が自然界に実感する神の摂理を証明するために「宗教的瞑想」を書いた。「宗教的瞑想」においては神の摂理がキリストの降誕以降、どのように人類を導いてきたかについて、コールリッジの認識が語られる。そして最後に黙示録的な終末の世界が歌われ、キリストの再臨によって実現される至福千年のヴィジョンで結ばれる。

is the day of Retribution nigh:

The Lamb of God hath open'd the fifth seal:  
 And upward rush on swiftest wing of fire  
 Th' innumerable multitude of Wrongs  
 By man on man inflicted! Rest awhile,  
 Children of Wretchedness! The hour is nigh:  
 And lo! the Great, the Rich, the Mighty Men,  
 The Kings and the Chief Captains of the World,  
 With all that fixed on high like stars of Heaven  
 Shot baleful influence, shall be cast to earth,  
 Vile and down-trodden, as the untimely fruit  
 Shook from the fig-tree by a sudden storm,  
 Ev'n now the storm begins: each gentle name,  
 Faith and meek Piety, with fearful joy  
 Tremble far-off...

'Religious Musings,' 316-30

最後の審判の日は迫っている。  
 神の子羊は第五の封印を開かれた。  
 すると人間が人間に加えた  
 数え切れぬ、無数の害悪が、瞬く間に、  
 炎の翼と化して立ち昇る。しばし耐えよ、  
 惨めな子らよ。時は近づいた。  
 見よ、この世の大いなる者、富める者、  
 力ある者、王や千人隊長が、  
 天の星のように常に高くに位置して、  
 邪悪な靈気を放つすべての者とともに、  
 突然の嵐に振り落とされたイチジクの  
 青い実のように、大地に投げ落とされ、

汚らしく、踏み碎かれる。嵐はすでに起こり、  
 信仰と柔和な敬神というやさしい名の者が  
 彼方でおずおずと喜びにふるえている・・・

この一節は黙示録第六章（特に第十二節）からの直接の引用で構成され、黙示録と同様に、神の国が実現する予感を語っている。そして神の国の実現は、コールリッジの場合、「信仰」と「敬神」によって特徴づけられる時代の後続くことが分かる。この時代には人間は、人間に許される最高の至福を享受し続ける。過去に人間の状況を改善しようと努力したすべての者は甦り、現世において人知れず蒔いた種子の花と果実を享受する。また邪悪な者は、同じ時代に、それぞれの悪行に応じた苦しい矯正を受ける。この時代の後に地は終わり、人間は純粹知性の状態となり、すべての被造物は苦役を止めて、休息する。コールリッジはこの「信仰」と「敬神」の時代を、神の国に先立つ至福千年と考えたのであろう。またコールリッジは「神は万物の中に在り、万物は神の中に在る」、言い換えれば、「神は自分自身の中に在り、自分自身は神の中に在る」というような実感に基づいて、神の存在を知覚する者は「神を補佐する者」(Coadjutors of God 379) となって、至福千年を目指して進む神の摂理の実現を補佐すると考える。このような人びとも、至福千年に甦り、努力の果実を享受するのである。

そしてコールリッジは地の王国の権力と、これと結託した教会の宗教とを没落させ、至福千年を実現する黙示録的な「嵐はすでに起こっている」と言う。そして「宗教的瞑想」につけた1796年の「自注」にコールリッジはフランス革命こそがこの黙示録的な「嵐」であると明記する。すなわち、コールリッジは1796年にはまだフランス革命を至福千年を実現する神の摂理の顕れと考えることができたのである。1798年のパンフレット詩集の時期に取り消されたフランスに対する賞讃の核心には、フランス革命と至福千年との直接的な結びつきがあったのである。もちろん、フランス革命と至福千年とを短絡的に結びつけることを取り消し、また神の御名のもとに対仏戦争へイギリス人を駆り立てる国教会の神に対する嫌悪を持ち続けただけでも、コールリッジは神と神の摂理への信仰を失ったわけではなかった。「神が自分自身の中に在り、自分自身が神の中に在る」という実感に基づく信仰は、1798年のパンフレット詩集からも明瞭に読みとり得ることはすでにみたとおりである。そして神の存在を実感する者として、神の摂理の実現を「補佐する」覚悟にも変化はないと考えられる。「ひとり恐れおののく」第二十六行目の「いっそう優れた世界のヴィジョンが観えてくる」の「いっそう優れた世界」は「宗教的瞑想」の至福千年と重なる世界であると言ってよいだろう。コールリッジはこの世界の実現をフランス革命と関連づけて、目前に差し迫った事態と考えることは取り消した。彼はこの世界の到来は、人間すべてが神の存在を実感し、「神を補佐する者」となる日まで、その実現を神の御心にゆだねて待たなければならないと考えるにいたったのである。

#### 4 「神を補佐する者」の教育

このようにフランス革命と神の摂理との直結を撤回 (recantation) すると同時に、神と御心のままに実現する摂理に対する信仰の讃歌を反復朗詠 (recantation) するという精神の展開の過程で書かれた『老水夫行』(The Rime of the Ancient Mariner, 1797) は、革命という政治的手段によるのではなくて、「神を補佐する者」

を教育するという方法によって、神の摂理の実現を助けようとする覚悟を示した作品として読むことができるように思われる。

『老水夫行』は、コールリッジ自身の梗概に明らかなように、老水夫の「舟が赤道を越え、嵐のため南極に近い極寒の地へ漂流し、そこから熱帯の太平洋へ航行したこと、この間、遭遇した不思議なことども、また老水夫がどのようにして故国へ戻ったか」を物語る、超自然的要素に満ちた、神秘的な作品である。しかし神秘的ではあるけれども、ストーリーの展開には原因と結果のくっきりとした連鎖的な構造を指摘することができる。今、全曲七部の各部最終スタンザに注目してみると、第一部の最終スタンザでは「大弓で私はアホウドリを射殺した」(With my cross-bow / I shot the Albatross 81-82)という老水夫の罪の行為が、第二部の最終スタンザでは、仲間の水夫たちが「十字架の代わりにアホウドリを私の首に吊した」(Instead of the cross, the Albatross / About my neck was hung 141-42)という罪の最初の結果が語られる。そして第三部の最終スタンザでは、結果が全員にふりかかって、仲間の水夫がひとり残らず死んだことが物語られる。「彼らの魂は通り過ぎてゆく時、大弓の弦のうなり声をたてた」(And every soul, it passed me by, / Like the whizz of my cross-bow! 222-23)。こうして老水夫は「死中の生」(Life-in-Death 193)と表現される絶対的な孤独に陥る。しかし第四部でストーリーの転回点がかかる。老水夫はわれ知らず、腐った汚水の海面を這い回る海蛇を祝福する。第四部の最終スタンザはこの祝福が罪の重荷を取り除いてくれたことを告げる。「アホウドリは首から落ち、鉛のように海に沈んだ」(The Albatross fell off, and sank / Like lead into the sea 290-91)。しかし第五部においても罪の結果はなお続いている。その最終スタンザは「老水夫は罪の償いをした。さらに償いをするようになる」(The man hath penance done, / And penance more will do 408-09)となっている。第六部は故国への航海と老水夫の帰郷を語り、その最終スタンザは「この隠者が私の魂の懺悔を聴き、アホウドリの血を洗い流してくれるだろう」(He'll shrive my soul, he'll wash away / The Albatross's blood 511-12)という希望で結ばれる。第七部では、隠者による懺悔の聴聞も老水夫を罪から完全には解放せず、その後生涯にわたってしばしば罪の苦悶が彼を襲い、彼を放浪の旅に赴かせ、懺悔として航海の物語を繰り返えさせた次第が語られる。そしてその最終スタンザでは、今も、老水夫は物語を終え、聞き手の婚礼の客は「翌朝、いっそう悲しみを知る賢い者として目覚めた」(A sadder and a wiser man, / He rose the morrow morn 624-25)ことが語られる。

このくっきりと浮き彫りにされた原因結果の連鎖構造は重要な役割を果たしている。たしかに人は、老水夫のアホウドリ射殺のように、発作的に馬鹿げた無意味な行為をする。その結果は彼（または彼女）自身に跳ね返ってくるばかりでなく、他人にもふりかかり、彼（または彼女）は痛切に後悔し、懺悔する。こうして罪の重荷は軽減されるけれども、彼（または彼女）は死ぬまで後悔している行為の結果を刈り取り続けなければならない。ここにはわれわれ読者がよく知っている人生があると言えるだろう。この因果の連鎖は神韻縹渺たる神秘的な物語に内面的統一を与え、真らしさを与えるという役割を果たしているのである。そして因果の連鎖構造が生み出す物語の統一性と真らしさから深い宗教的感情、道徳的感情が生まれ、物語は罪と罰と贖罪と流浪の表象となる。

コールリッジは「カインの流浪」(The Wanderings of Cain)と題する散文作品の「前置き」で、カインの罪と罰と贖罪と放浪をテーマとした作品の合作をワーズワースに提案したが、このように与えられた主題ではワーズワースが一行も書けなかった次第を説明し、続けて次のように書いている。合作の計画は「大

笑いの内に挫折し、それに代わって『老水夫行』が書かれた」。この経過からみると、『老水夫行』は必然的に罪と罰と贖罪と放浪の物語となることを運命づけられていたことが分かる。

それでは老水夫のアホウドリ射殺はこのような宗教的な物語の全体を支えるに足る重大な罪と言えるだろうか。それは罪と言えないばかりでなく、馬鹿げた無意味な行為ですらなく、飢餓に瀕した水夫にとって、食糧を確保するための当然の行為ではないのか。<sup>12</sup> また救済の契機となる海蛇の美の発見と祝福は、「老水夫が海蛇の色を称讃することで救われるとは」<sup>13</sup>と、ある論者があきれたように、納得の得にくいものである。

老水夫の罪と贖罪の問題を考えるにあたって、「神は万物の中に在り、万物は神の中に在る」という詩行を思い出す必要があるように思われる。この詩行は、言うまでもなく、コールリッジが自然界の万物を自然界に存在している事物として感覚的に認識しているばかりではなく、その背後に感覚器官以外の知覚力によって神の存在を直観していることを語っている。コールリッジにとって自然界の万物は人間の直観力と神との出会いを仲介する場なのである。こうして自然界の万物は感覚的な事物であると同時に、霊的、神的な存在として認識されることとなる。このようなコールリッジ的な感性に基づいて理解しようと努めるとすれば、アホウドリは鳥であると同時に霊的、神的な価値の世界にも属するものであることが理解できる。こうして老水夫の罪はたんに愛鳥の精神に反するというようなことではなく、神に対する罪となり、罪と罰の物語の発端となる重みを持つことになるのである。

アホウドリがたんなる鳥ではないように、海蛇もたんなる海蛇ではない。救済は老水夫がこのことを認識するために、たんなる感覚器官を超えた新しい知覚力を得た時に始まる。この新しい知覚力によって自然界の事物を観る時、汚濁の海を這い回る「ぬるぬると汚らしいもの」(slimy things 238)であった海蛇が、「言葉では言い尽くすこともできない美しい、幸せな生き物」(O happy living things! no tongue / Their beauty might declare 282-83)に変化する。この新しい知覚力を獲得してみると、水夫はアホウドリ射殺が神に対する叛逆であり、そのために神からの恐るべき離別、精神的な死の状態によって罰せられたことを悟ることができる。この新しい知覚力が神の恩寵であり、神の恩寵が訪れた後は、老水夫は自然界に常に存在している神的な力に対して受容的になる。そして彼は贖罪として自然界の神的な力に対する罪と罰の物語を繰り返すことになるのである。

『老水夫行』には全曲を通じて語り手である老水夫の世界と聞き手である婚礼の客の世界の対照がみられる。婚礼の客は老水夫の物語にしばしば口をはさむ。このことは二つの世界が常に共存し、相互に浸透しあっていることを示している。この二つの世界は「感覚的知覚」の世界と「感覚的知覚プラス直観的知覚」の世界と言い換えることができる。物語は「感覚的知覚」の世界に住んでいた老水夫が「感覚的知覚」の世界の背後にある「直観的知覚」の世界を認識できなかったために展開する。そしてついに「直観的知覚」の世界の認識に到達した老水夫は、偉大な精神的体験を得た人として「感覚的知覚」の世界の人である婚礼の客に彼の新しい認識を伝えようと努力するのである。

コールリッジは『老水夫行』の題辞としてバーネットの『哲学的考古学』(Thomas Burnet, *Archaeologiae philosophicae*, 1692) から、大意、次の一節を引用している。

天地の間には目に見える存在よりも目に見えない存在の方が多いと信じることは容易である。しかし

これらすべての存在の種族を誰が解き明かし得ようか。その階級、関係、特性、職能は、いったい、何なのか。何を為し、どこに住んでいるのか。人はこれらのことを知ろうとするけれども、常に堂々巡りとなって、未だかつて知り得た者はいない。しかし、私は疑わないのだが、この世界よりさらに偉大な、さらに優れた世界を、あたかも絵に描くように、折々、胸中に思い観ることはよいことである。

ここにも「目に見える存在」の世界と「目に見えない存在」の「さらに偉大な、さらに優れた世界」の対照がある。『哲学的考古学』でバーネットの言う「目に見える存在」の世界とは、人類の祖先が墮落した後の、またノアの洪水によって破壊された後の、現に我々が見ている世界であり、「目に見えない存在」の「さらに偉大な、さらに優れた世界」とは、例えばミルトンが次のように描いた世界である。

This most afflicts me, that departing hence,  
As from his face I shall be hid, deprived  
His blessed countenance; here I could frequent  
With worship, place by place where he vouchsafed  
Presence divine, and to my sons relate;  
On this mount he appeared; under this tree  
Stood visible, among these pines his voice  
I heard, here with him at this fountain talked...

*Paradise Lost*, XI, 315-22

私をもっとも悲しませることは、ここを立ち退けば  
神のお顔から隠れて暮らすも同然で、  
神のお顔を拝する至福を奪われることです。ここに残れば  
神が神聖なお姿を顕わされた場所をたびたび訪れ、礼拝し、  
この山の上に神はお姿を見せられた、この木の下に  
お立ちになっているお姿が見えた、この松林では  
お声を聞いた。ご覧、この泉のほとりではお話した、などと  
子供に語り聞かせることもできるだろう・・・

それは人類の祖先が「立ち退く」以前の楽園であり、墮落以前の人類が神や天使の姿に接しながら暮らしていた楽園である。バーネットは『哲学的考古学』において、ノアの洪水による破壊の状況を推測することによって、復元される原初の楽園について推論している。こうして人類史の発端に想定される原初の楽園と、神の摂理が人類史の最後に回復されると約束している神の国とは、キリスト教的想像力においては、多くの場合、重なり合う世界であると言うことができる。

大洪水による楽園的な地球の破壊についてコールリッジがバーネットと同じように考えたかどうかは今  
は問題ではない。しかし彼が神の摂理が人類史の最後に回復を約束している「この世界よりさらに偉大な、

さらに優れた世界を、あたかも絵に描くように、折々、胸中に思い観ることはよいことである」と考えたことはたしかであろう。彼はすでに述べたように感覚的知覚の世界の背後に直観的に把握し得る神的な世界が存在すると信じていた。そして楽園追放以後の人間にもこの神的な世界を直観する知覚力が残されていると信じていた。そしてこの残された知覚力によって神的な世界を直観させることが、フランス革命と至福千年との直結を取り消した今、人類が至福千年へ向けて前進する唯一の方法であると、コールリッジは信じたのである。『老水夫行』はこのような教化の意図を持った作品として読むことができる。

## 注

- 1 Nicholas Roe, *Wordsworth and Coleridge: The Radical Years* (Oxford: Clarendon Press, 1988), 251-57.
- 2 コールリッジの『文学的自叙伝』第十章にこのスパイ騒動についてのユーモラスな記述がある。
- 3 Gary Kelley, *The English Jacobin Novels 1780-1805* (Oxford: Clarendon Press, 1976), 9 から引用。
- 4 Mary Moorman, *William Wordsworth, a Biography, the Early Years, 1770-1803* (Oxford: Clarendon Press, 1957), 445.
- 5 栗山 稔 『ワーズワス「序曲」の研究』（風間書房 昭和 56 年）；「『ティンターン・アベイ』—政治=宗教的瞑想詩として」（『人文研究』34:8 大阪市立大学文学部 昭和 57 年）；「『逍遙篇』とその時代」（『人文研究』35:7 昭和 58 年）；「日影うららなデヴォンの入江—『逍遙篇』第三巻における象徴的意味—」（『人文研究』37:6 昭和 60 年）；「ワーズワスにおけるフランス革命の表出—クリスマス休暇のエピソード—」（『人文研究』43:8 平成 3 年）等参照。
- 6 Ernest Hartley Coleridge (ed.), *The Complete Poetical Works of S. T. Coleridge*. 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1912), I, 168; James Dykes Campbell (ed.), *The Complete Poetical and Dramatic Works of S. T. Coleridge* (London: Macmillan, 1893), 588.
- 7 *Analytical Review* (Dec. 1788), reprinted in *The Romantics Reviewed, Contemporary Reviews of British Romantic Writers*, ed. by Donald H. Reiman (New York: Garland, 1972) 参照。
- 8 *The Collected Works of S. T. Coleridge*. Vol. I: *Lectures 1795 on Politics and Religion*, ed. by Lewis Patton and Peter Mann (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), 164.
- 9 ハズリットはゴドゥインの哲学を「現代哲学」と呼んだ (William Hazlitt, *The Complete Works of William Hazlitt*, ed. by P. P. Howe (1932; reprinted by AMS Press, New York, 1967), Vol. XI: *The Spirit of the Age* の中の 'William Godwin' の章参照)。
- 10 *The Collected Works of S. T. Coleridge*. Vol. VII: *Biographia Literaria*, ed. by James Engell and W. Jackson Bate (London: Routledge & Kegan Paul, 1983), I, 66.
- 11 1797 年の「宗教的瞑想」自注。
- 12 William Empson, 'The Ancient Mariner,' (*Critical Quarterly*, 6:4, reprinted in *Argufying, Essays on Literature and Culture*, ed. by John Heffenden, London, Hogarth Press, 1988) 参照。
- 13 Irving Babbitt, *Rousseau and Romanticism* (1919; reprinted by Meridian Books, New York, 1955), 222.

## Abstract

I discuss, firstly, what WW (William Wordsworth) and STC (S. T. Coleridge) thought about the British climate of opinions concerning the French Revolution in the latter part of 1790s, by commenting in detail on WW's *Two-Part Prelude*, II, 478-488 and STC's letter of December 1799 to WW, which the phrasing of the *Prelude* lines necessarily recalls. Secondly, I discuss what precisely STC 'recant' in his opinions about the Revolution in this contemporary climate, almost by a line-by-line analysis of STC's three poems, 'Fears in Solitude,' 'Recantation: an Ode,' and 'Frost at Midnight,' which were published in a quarto pamphlet in 1798. I put forward the conclusion that STC found he had made an error to connect the Revolution hastily with the coming of Millennium, and that he therefore 'recanted' the connection, while earnestly recanting (in the meaning of re-chanting) the ideals of the Revolution: liberty, equality and benevolence. Finally, I discuss that STC began to try to find, in *The Rime of the Ancient Mariner*, the way he would help forward the realization of Providence, not by a violent political revolution, but by a quiet educational way of creating 'Coadjutors of God' (*Religious Musings*, 379).

日本人の言語意識を問う<sup>1)</sup>

## Attitudes toward Language and Culture

大谷 泰照

Yasuteru OTANI

## 1 外国語学習者の言語志向

## 外国語学習者の変化

変動のはげしい今日のような時代に、しかもますます多様化する学習者、とりわけ外国語の学習者の意識のありようを的確にとらえることは、教師にとってはかつてなく困難な作業になりつつある。それだけに、この問題は、単に今日の狭い目先の問題としてよりも、むしろ、より広く歴史的な視野のなかにおいてとらえる発想が必要になる。いわば、時代の進展にともなう学習者層の変化という視点である。

その変化は、まず学習者自体の量的な増大に端的に表れている。たとえば、中学生（昭和 20 年までは高等女学校生徒を含む。ただし、旧制中学は 4~5 年制、新制中学は 3 年制）数についてみると、明治 33 年（1900 年）9 万人、大正 9 年（1920 年）30 万人、昭和 20 年（1945 年）152 万人であったものが、平成 9 年（1997 年）には 448 万人、そして同年の高校生は 437 万人という急増ぶりである。また大学生（ただし、旧制大学は 3 年制、新制大学は 4 年制）については、それぞれ 3 千人、2 万人、10 万人、306 万人となり、平成 9 年度の進学率は高校で 97%、大学は 41%にもはねあがった。これは、大学はもちろん中学でさえも、かつては一定の能力をそなえた学習者のためのいわば一種のエリート教育の場とみられていたものが、今日では大学でさえもほとんど一般市民教育の場に転化したことを意味している。学習者の意識や関心も、いきおい大きく多様化することは避けられない。

時代の進展にともなう学習者層の変化は、また彼らを取りまく社会的環境の変化に負う部分が少くない。たとえば、いわゆる「読み、書き、そろばん」の学習については、長らくその必要性は毫も疑われることはなかった。それのみか、本来その学習はエリートたちのための一種の特権とさえ考えられていたほどである。ところが、高校進学率が 70%を越えた昭和 40 年代になると、高校 3 年生の 75%までが、「そろばん」のうちでも四則計算以外の数学学習の必要は認めていないという調査結果が出て、数学教育者たちに大きなショックをあたえた。<sup>2)</sup> 高校生の多くが、解析や幾何が日常生活にとってはたして必要なのか、微分や積分がいったい何の役に立つのかと考えるようになったのである。さらに、昭和 50 年代以後の電卓の急速な普及の結果、最近ではついに、その四則計算そのものの学習の必要性についてさえ、多くの学習者たちは懐疑的になりつつあるといわれる。カード型電卓 1 枚あれば大抵の計算ができるこの時代に、なぜわざわざ九九を覚えなければならないのかという。

「読み、書き、そろばん」にもまして、長らく一部エリートの独占物であったのは、外国語、とりわけ英語の知識であった。英語の学習にあこがれる多くの大衆はいたとしても、英語の学習に懐疑的なエリートはほとんどいなかったといつてよい。ところが、昭和40年代後半にかかるあたりから、数学の場合と同様に、英語の学習についても疑問をもつ若者たちが目立ちはじめた。ようやく日本は世界の先進国の仲間入りをしはじめた頃である。この頃、國弘正雄が、若い読者たちから「なぜ英語を勉強しなければならないのか．．．むしろ外国人に日本語を勉強させたらいいではないか」という趣旨のたくさんの質問カードを受けとって驚いたという。<sup>3)</sup> 同じ頃、中津燎子の『なんで英語やるの?』<sup>4)</sup> がベストセラーとなり、大宅壮一賞を受けることになる。

コンピューター時代の到来は、英語の学習者にとってもけっして無関係ではありえなかった。昭和50年代に入って出現した小型自動翻訳機は、もちろんその性能は限られたものではあったが、「英語の勉強よ、さようなら」というそのCMそのままに、多くの英語学習者に対して「なんで英語やるの?」の疑念をいっそう強めさせたことは否めない。そして、昭和59年には、40年の長い歴史をもつ月刊雑誌 *Business English* (商業英語出版社) がついに廃刊に追い込まれたことは象徴的な出来事であった。最終号の1月号巻頭の「お別れのことば」で、編集者尾崎茂はつぎのように述べている。「．．． **computer** が商英 [商業英語] に代わって、外国に在住のビジネスマンとの商取引に使用されることになってきた。故に商英の利用範囲は極めて狭くなってきて、商英不要論さえ飛び出す時代になってきた．．．日に日に商英の利用範囲が **computer** のために狭められつつある．．．」。要するにこれは、学習者の商業英語離れがすすみ、もはやこれ以上同誌を支えきれなくなったという、いわばコンピューターに対する商業英語の事実上の敗北宣言である。貿易立国のわが国で、しかも「国際語」のはずの英語が、もはや必要とされなくなるというのである。英語教育全盛の夢をむさぼる英語教師にはとても信じられないような話が、当時すでに現実のものとなりつつあった。これを、単に商業英語だけの問題として、英語教師はなおも対岸の火災視し続けられるのであろうか。

## 日本人学生の言語志向

筆者は昭和36年以来すでに30数年にわたり、毎学年はじめに、関西のいくつかの国・公・私立大学の新入生に対して言語意識の調査を行っている。少ない年で約500名、例年はほぼ1,000名をこえる学生の意識調査である。入学早々であるから、正確には大学生というよりも、むしろ高校卒業生の意識の実態と考えたほうが適当かもしれない。

その調査の項目に必ず入れるものの一つに「もしも生まれかわることができるのであれば、何語を母語に選びたいか」という設問がある。世界の5,000をこえるといわれる言語のなかで、学生は母語として何語をもっとも望ましいと考えているかを調べようとするものである。わざわざ「生まれかわることができるのであれば」と断ったのは、われわれのおかれた現実はともかく、少なくとも意識の上だけは日本人であり、日本語が母語であるという現実を離れて、できるだけなものにもとらわれない自由な発想を期待したからである。

ところが、最近の学生はずいぶんと覚めていて、「人間は生まれかわることはできないのである」という自明の事実を、受験勉強で仕入れた生物学の知識を総動員してアンケート用紙いっぱい書いてくれる

もの、「そんな仮定の質問にはお答えできかねる」と、こちらの質問にのってこようとしないものなどが、文学部の学生のなかにさえ出てくる。以前の学生は、もう少しいろいろな楽しい夢や希望を語ってくれたものだが、いまは、もはやそんな時代ではなくなったのかもしれない。

回答の結果、昭和36年当時もっとも多かったのが英語で69%、次が日本語の14%であった。「日本のような国に生まれなければよかった」「日本語などを母語にして大損だ」と考えているわけである。「生まれかわったら英語を母語にしたい」「アメリカ人になりたい、イギリス人になりたい」、これが昭和36年当時の学生たちであった。旧国鉄城東線（現 JR 大阪環状線）の左右の窓から見える大阪城そばの旧陸軍造兵廠跡には、昭和20年8月14日の大空襲の際にできた1トン爆弾の大きな穴がまだ地面のあちこちに残り、敗戦の傷痕の癒え切らぬまだまだ貧しい日本であった。

ところが、それから10年たって昭和46年になると、これがかなり変わってくる。英語を母語にしたいという学生が69%から54%に減少し、一方、日本語を母語にもちたいという学生が14%から30%に優に倍増している。その10年間に何が起こったのか。昭和39年には世界一の高速鉄道の東海道新幹線が開通した。これは、敗戦後の日本人にとって誇るに足る出来事であったと思われる。同じ年に東京でアジア最初のオリンピックを開催し、これを見事に成功させた。昭和43年にはGNPが自由世界第2位まで成長した。こんなことが、おそらく学生の言語意識にも敏感に影響したものと考えられる。

そしてさらに10年後、昭和56年の調査では、ついに英語願望と日本語願望が横一線に並んでしまった。ともに42%の同率である。その前年に、経済白書が「先進国日本の試練と課題」と題して、高らかに全世界に向かって、先進国宣言をした直後のことであった。

そして、現在はどうか。平成10年春、英語と答えたものは39%にまで減少してしまった。そして、日本語という答えは実に44%、いまや日本語が英語を追い抜き、日・英語の順位は完全に逆転してしまった。わが学生たちの母語願望には、今日まで3分の1世紀以上を通じて、一貫して英語志向の漸減、そして日本語志向の漸増傾向が明瞭にうかがえるのである。

学生が英語を選ぶ理由としては、つねに「国際語だから」が圧倒的で、ついで「外国語の学習が不要だから」「他の外国語（印欧語）の学習が容易だから」が続き、この3つでほぼ90%以上を占める。さらにそれ以外に、英語は「美しいことばだから」「論理的なことばだから」「魅力的なことばだから」「易しいことばだから」などの答えが目立つ。彼らは、いわゆる「国際語」を母語にもつことが、はたしてそれほどまでに有利なことなのかどうかについて、あらためて考えてみようとすることもあまりない。しかも、「国際語」が母語であれば、外国語の学習まで不要であると信じこんでいる。

一方、日本語を選ぶ理由は、ほとんどの場合、「好きだから」「美しいから」「独特だから」「難しいから」「すぐれているから」「表現力が豊かだから」、およびこれに類する理由で80~90%を占める。これをみると、われわれが自分の母語から自由になること、そして自己文化中心の発想から少しでも脱却することが、いかに困難であるかがよくわかる。

さらにわが学生たちは、言語には美しい言語と美しくない言語、論理的な言語と非論理的な言語、難しい言語と易しい言語があり、さらにはすぐれた言語と劣った言語があると大真面目に信じこんでいる。これではわれわれは、「スペイン語は恋人のことば、イタリア語は歌手のことば、フランス語は外交官のことば、ドイツ語は馬のいななき、英語はガチョウの鳴き声」などというロマンス語賛美、ゲルマン語蔑視

の偏見に満ちた例のスペインのことわざを、はたして笑う資格があるのであろうか。あるいは、「フランス語は神のことば、英語は泥棒のことば、ドイツ語はカラスの鳴き声」といったナポレオンの滑稽なまでの自己文化中心主義を、はたして憐れむ資格があるのであろうか。

実は、もしも日本の学校外国語教育が、実際に世間でよくいわれるように「欠陥教育」であるとするならば、それは英語が少々話せないとか、英語の手紙が書けないということよりも、むしろことばそのものに対してこのような偏見に満ちた圧倒的多数の学生を育ててきたためと考えるべきではないか。この事実には、われわれはもう少し重大な関心をもつ必要がありそうに思われる。

筆者は滞米中、アメリカの学生についても、2回にわたって同様の調査を行った。第1回目は昭和48年から49年にかけて、第2回目は昭和57年で、それぞれ732名、462名のアメリカ生まれのアメリカ人大学生が被験者であった。

アメリカ人大学生たちは、もしも生まれかわることができるのであれば何語を母語にしたいと考えているのであろうか。アメリカ人学生も、たしかに英語願望がもっとも多いことには変わりはない。しかしわれわれの大方の予想よりもはるかに少なく、昭和48～49年には36%、昭和57年には33%程度にすぎない。しかも、そのなかにはイギリスの‘Queen’s English’と答えたものさえ目についた。

次に多いのがフランス語のそれぞれ28%、27%。アメリカ人のフランスに対する独特の感情を伺い知ることができよう。さらにアメリカ人学生の特徴は、日本人学生には考えられないほど大小とりまぜて多様な言語が出てくることである。英語やフランス語だけに集中しないのである。いま一つ、われわれにとって注目すべきことは、「何語でもよい(同じ)」という回答である。これが実に昭和48～49年には19%、昭和57年には23%。生まれたところのことばなら何語でも構わない、ことばに上下の差はないというこの答えは、さすが多民族国家アメリカの学生ならではといえよう。アメリカではその当時、外国語教育の不振ぶりが大きな政治問題にすらなっていたが、それでもこういう学生が5人に1人もいるという事実は、アメリカにとって大きな強みということができる。日本にはこういう学生はわずか1%にも満たないのである。

こうみてくると、とくに日本人学生のことばに対する考え方は、政治や経済の動きにつれて、実に敏感に変化していることがよくわかる。アメリカであれ日本であれ、大国でありさえすればその国のことばが望ましいということであって、言語・文化の視点から考えるというよりも、むしろ極端に政治的・経済的大国志向であるということが出来る。まさに「寄らば大樹の陰」であって、とにかく大国のそばに身を寄せたい。したがって、アメリカ人学生と違って、逆にそれ以外の国、とくに小国はほとんど眼中に入っていないという困った結果にならざるをえない。

### 外国語学習者の実態への対応

以上のように考えてくると、英語に対する学習者の興味や関心は、実は時代の推移につれて、時には教師も思い及ばぬほどに大きくゆれ動いていることがわかる。われわれが学習者の「ニーズ」を問題とする際には、まずこの点を念頭におく必要があると思われる。さらに、これまで述べてきたことから明らかなように、いわゆる「学習者のニーズ」と考えられるものも、けっして一様ではない。実用的な四則計算中心の算数だけで十分で、「役に立たない」代数や解析は学びたくない、九九を覚えるかわりに電卓を使

いたい、という願望も今日の高中生や小学生のもつかなり強い「ニーズ」と考えることもできよう。同様に、面倒な単語の暗記はコンピューターにまかせて、学習者には辞書を引かせない学習を、あるいは母語習得の場合と同様に文法などやらせない英語学習を、という要望も、今日の大学生の大真面目な「ニーズ」といえなくもない。実用主義的傾向を強める学習指導要領と、そして「省力学習」が合言葉の受験体制のもとで育った彼らとしては、むしろきわめて自然な要求とさえいえる。

しかし、一般に教師を人気歌手から明確に区別するものは、おそらく学習者の「ニーズ」こそ絶対であり、「学習者は神様です」などとは簡単にいえない立場なのではないか。いいかえれば、教育（・研究）機関として、あるいはプロの語学教師としては、まず学習者の「ニーズ」そのものの当否をみずからの手でチェックする重要な機能を持ち、その結果を学習者に投げ返す責任をもたねばならないということであろう。そして、そのチェックの尺度となるのは、いうまでもなく、英語文化圏とは異質のこの日本という国において、社会教育ならぬ学校教育で、第2言語ならぬ外国語としての言語を、幼児期をはるかにすぎたいわば adult beginner としての学習者に対して、さらに広く国民的な規模で、しかもごく限られた時間と多人数クラスで行う英語教育が、それ自体としてもつ本質的なニーズである。

こんな尺度に照らして、学習者とともに彼らのいわば「うわべ」のニーズを1枚1枚丹念にはがしていく以外には、その底にひそむ彼らのニーズの「核」に迫る有効な方法はなさそうに思われる。

## 2 歴史的にみた日本人の言語意識

### 平成の外国語教育「異変」

平成に入って、わが国の学校外国語教育は注目すべき展開をみせた。われわれはいま、たしかにわが外国語教育史上ひとつの重要な転換点にさしかかっているように思われる。

平成元年に改訂された新高等学校学習指導要領「外国語」は、「オーラル・コミュニケーションA」（日常会話）、「オーラル・コミュニケーションB」（リスニング）、「オーラル・コミュニケーションC」（討論）と、口頭によるコミュニケーションを重視したコースを3科目ももうけ、しかも、そのうち少なくとも1科目の履修を事実上義務づけることにした。旧学習指導要領では、オーラル・コミュニケーション関係科目は「英語ⅡA」（リスニング、スピーキング）ただ一つで、しかもそれがほとんど履修されていないに等しい状態<sup>5)</sup>であったことを考えれば、平成のこの変化の大きさが理解できよう。

中学・高校英語教育のための外国人助手についても、昭和40年代半ばから50年代初めにかけてのフルブライト助手の時代には、全国でその数わずかに4名から7名程度にすぎなかった。それが文部省英語指導主事助手（MEF）の制度に変わって、ずいぶん増員されたといわれながら、たとえば昭和60年現在でやっと167名であった。ところが語学指導等を行う外国青年招致事業（JETプログラム）の英語指導助手（AET）は、平成に入るととたんに急増を続けて、平成2年度には2,284名、平成10年には、実に5,687名にまでふくれあがってしまった。しかも、その上さらに今後も増員が予定されているという。たとえ「助手」とはいえ、言語にも教育にもズブの素人に近い欧米の若者を、これほどまでに大量に雇い入れるプログラムは、AETを送り出す側の国々においてさえ、一種のおどろきをもってむかえられている。

平成の「異変」は大学にも及んだ。平成3年、大学設置基準の根本的な見直しが行われ、戦後の大学教

育を形作る2本柱となってきた「一般教育」と「専門教育」の区別がついに廃止された。これは、いいかえれば、戦後の度重なる日経連要望書に代表される一般教育よりも専門教育強化の要求を、これまでかろうじて阻止し続けてきた唯一の防波堤が完全に崩壊したことを意味する。一般教育を「極めて重要である」と認識し、「大学人の見識を信ずる」とうったえた大学審議会のことばにもかかわらず、18歳人口の激減期に直面して「生き残り」をかけた大学が、偏った専門教育に走ったり、目先の就職本位のカリキュラムを組むことも十分可能になった。

こんな懸念は、けっして単なる杞憂ではなかった。大学設置基準の改正をうけてこの7年間、さまざまな大学で実にさまざまなカリキュラム改革が行われてきた。ところが、そのさまざまな改革のなかに見事に共通する一点が、いわゆる「教養」科目の削減・縮小である。「教養」部そのものでさえ、つぎつぎと廃止・解体の憂き目にあっている。

「教養」科目のなかでもとりわけ哀れを止めたのが、「役に立たない」教科の代表格とみなされがちな体育であった。単位数の削減ならまだしも、大学正規の科目からはずされて、完全に課外活動化してしまった大学さえある。外国語についても、実は、体育の場合とさして大差はない。これまでの1外国語必修という最低ワケさえもとりはずされてしまったいま、とくに「役に立たない」第2外国語は、大部分の大学で縮小もしくは自由選択化されることになった。第1外国語の英語でさえも、従来の必修単位数をかろうじて維持できた大学は、むしろ少数派である。東京大学など国立大学をはじめ、多くの大学で軒並みに単位数は削減され、なかには外国語を完全に必修科目からはずして、卒業のためには外国語の履修を一切必要としない大手私立大学まで現れた。

かつてわが国では、すべての大学は「学部・学科にかかわらず2つ以上の外国語について夫々8単位以上の授業を必ず用意しなければならない」（大学基準協会「大学基準」）ことが当然のことと考えられていた。ところが、国が富み、国際化が進展するにつれて、大学の外国語教育は、むしろ確実に削減・縮小の一途をたどってきた。

中学・高校におけるAETの大量増員や高校「オーラル・コミュニケーション」科目の増設・強化、そして大学における一般教育の大幅な削減・後退——これほどまでに具体的な形で、わが国の学校外国語教育があらゆるレベルで、いわゆる「教養」志向から「実用」志向、もしくは縮小化の方向に転じたことはめずらしい。目先の「実用」に役立たない「教養」科目の不人気も、ここに極まった感さえある。

## わが国の外国語教育史をどうみるか

以上のような「異変」は、あるいは平成に入って突然に降って湧いた新しい事態であるかのようにみえるかもしれない。しかし、実はその予兆は、すでにわが国の長い外国語教育の歴史のそこそこに読みとることができそうである。

明治初年以來今日まで、わが国の英語教育の歴史はすでに130年にも及ぶ。しかし子細に検討してみると、その間わが英語教育は、けっして一般に考えられているほど直線的・上昇的に発展を続けてきたわけではない。むしろ、どちらかといえば、回帰的・反復的な動きを繰り返しながら次第に推移してきたと考えるほうが正しそうである。私見では、実はこの130年は、ほぼ40年から50年の周期で、英語一辺倒のいわば英語蜜月段階と、英語に多かれ少なかれ拒否反応を示す英語不適合段階が交互に3回繰り返されて

きたとみることができる。

まず第1回の周期は、明治初年から明治40年頃までのほぼ40年である。幕末期には「尊皇攘夷」を唱えた志士たちでさえも、明治維新を境にして、まるで手のひらをかえしたように欧米への急接近をはじめた。わが国の英語熱は、福沢諭吉が大量の英書をアメリカから持ち帰った慶應3年から翌明治元年の頃から高まり、明治5～6年は「英書の大洪水の有様を呈し」<sup>6)</sup> た英語異常ブームの時代であった。明治6年、後に初代文部大臣になる森有禮は日本語を「貧弱な言語」<sup>7)</sup> と考え、この日本語をすてて英語をわれわれの母語にしようという「英語国語化論」を提唱した。彼はまた、後に第2代首相になる黒田清隆らとともに、「劣等な」日本民族を、欧米人と結婚させることによって人種改良をはかろうと大真面目に考えたほどである。明治14、15年はわが国最初の英学の最盛期といわれ、18年には、さらに文相森有禮が英語教育強化の方針をうち出している。中学校の英語週時間数も、1～3学年に限ってみると、明治19年には6(1学年)―6(2学年)―7(3学年)時間にまでなった。当時は、高等教育も多くは英米人の教師によって行われていた。

このように明治の初めの約20年間は、英語一辺倒の欧化主義の時代が続く。その風向きが変わってくるのは、明治22年に帝国憲法が制定され、23年に教育勅語が公布された頃からである。この頃から自由主義的思潮は次第に排斥されて、国家主義的・国粹主義的傾向が強まってくる。外国人教師の多くが大学を去り、日本人がそれにとって代わるようになる。明治26年になると、文部大臣井上毅は森有禮のそれまでの外国語教育奨励の方針を大きく転換して、国語尊重論を説く教育政策をすすめる。

その頃から学生の語学力も低下の傾向が目立ち、たとえば森鷗外は明治35年に講演「洋學の盛衰を論ず」(3月24日、於小倉偕行社)のなかで、学生の語学力が「十數年前に比して、劣るとも優らざるに似たり」<sup>8)</sup> と述べている。また夏目漱石も、明治44年に雑誌『學生』(1-2月)に「語學養成法」を書き、井上文相の政策にふれながら、最近の学生の語学力が明治の初めに比べていちじるしく低下したことを嘆いている。

明治27、28年の日清戦争、明治37、38年の日露戦争と、国家主義が最高潮の時期をむかえる。明治の初めの約20年間は英語一辺倒の欧化主義の時代とすれば、それに続く20年はすでに鹿鳴館時代が終わり、英語に対する反発の強まる国粹主義の時代である。このほぼ40年を第1回目のサイクルと考えることができる。

大国相手の2つの戦いに勝利したわが国は、明治の末期から大正にかけてのいわゆる大正デモクラシーの時代をむかえることになる。ふたたびリベラルな風潮が高まり、欧米への窓が大きく開かれた。外国語はそれまでの英語だけでなく、ドイツ語、フランス語、さらには中国語も奨励されるようになった。多くの翻訳書が街にあふれた。大正8年には、中学校の英語週時間数は、明治をも上回る6―7―7時間となる。今日まで120年をこえる日本の中学英語教育の歴史のなかでも、もっとも英語時間数の多い時代がこの時期である。

明治の後半には、東大のLafadio Hearnと夏目漱石の例のように、御雇い外国人を解雇して後任に日本人を据えることが多かった。しかし、大正になると、ふたたび欧米人教師を日本の教壇に迎える例が目立つ。たとえば、大正11年にはロンドン大学からHarold E. Palmerが文部省の英語教授研究所の所長として招かれ、日本の英語教育の大改革を行うことになる。明治の後半には考えられもしなかったことである。

ところが、昭和に入る頃から様相は一転、昭和2年には藤村作の英語教育廃止論が出て反響を呼ぶ。年とともに次第に英語教育排斥の動きが高まり、昭和6年には、中学校の英語週時間数は5—5—6時間に削減されてしまった。昭和10年になると、文部省は高校や大学予科で使う教科書を規制しはじめる。たとえば、思想関係、恋愛関係のものは使用不可とされ、Thomas Hardy, John Galsworthy, Aldous Huxley, James Joyceなどが使用禁止書目になってしまう。その後はふたたび国粹主義的傾向が強まり、ついには日中戦争、太平洋戦争に突入し、英語は「敵国語」となってしまう。昭和17年、高等女学校の英語は随意科目になり、18年には中学校英語週時間数は4—4—4（しかも3学年は選択科目となる）時間にまで縮小され、昭和19年には英文科を廃止する大学まで出はじめた。

欧米にふたたび傾斜した明治末年から大正期の約20年、それに続いて英米を「鬼畜」と呼び、英語の教育を抑圧した戦時を含む敗戦（昭和20年）までの昭和前期の20年、この合わせて約40年を第2回目のサイクルとみることができる。

そして、敗戦から平成の今日にいたる50年ばかりが第3回目のサイクルと考えられる。

敗戦の一夜が明けると、それまでの英語に対する強い反発は、手のひらをかえしたように英語一辺倒に急転する。敗戦1か月目に出た『日米會話手帳』は、その後1年間に360万部という空前の爆発的売れ行きを示した。「敵国語排斥」が、敗戦の一夜を境にして「一億総英語會話」に変わったのである。

この変わり身の速さは、あるいはわれわれ日本人のひとつの国民性であるのかもしれない。戦時中、米軍語学将校であったDonald Keeneは、後に『日本との出会い』（中央公論社）を書いたが、そのなかで、交戦相手を「鬼畜米英」とさげすんでいたはずの戦時中の日本兵が、いったん捕虜になると、とたんに今度は味方の死命をも制するような重要機密を、尋問するアメリカ兵もおどろくほどペラペラとしゃべったと述べている。傲慢から卑屈へのこれほどまでの豹変ぶりは、ヨーロッパ戦線のドイツ兵捕虜にもあまりみられなかったことであるという。

戦後の「一億総英語會話」もその例にもれない。昭和21年には、将来の日本の天皇を予定される皇太子の日常の教育を、ほんの1年前までは敵国人であったElizabeth G. Vining夫人というアメリカ人に委ねてしまう。皇太子は、名前も「アキヒト」ではなく、「Jimmy」と呼ばれた。同じ年に、それまで日本語で小説を書いて「小説の神様」とさえいわれた志賀直哉が、『改造』4月号誌上で「日本の國語程、不完全で不便なものはない」と述べ、「世界中で一番いい言語、一番美しい言語」のフランス語を日本人の母語にすべきであると提唱している。昭和25年には、「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄も『毎日新聞』（6月12日）紙上で、「日本人が民主主義を體得するには今の國語を思ひ切って英語にした方がよい」と「英語國語化論」の論陣をはっている。いったん戦いに敗れると、今度は身も心も相手に捧げ尽くそうとするかのような変貌ぶりである。

昭和22年には英語が義務教育の新制中学校にとり入れられ、事実上、日本人総英語学習が始まる。昭和24年には、中学校（新制）の英語週時間数も6—6—6時間にまで回復するほどの勢いであった。

しかし、昭和30年、加藤周一がそのエッセイ「信州の旅から」（『世界』昭和30年12月）で、「日本語でまにあわないことは、一つもない」といいきり、日本人中学生に、英語教育を事実上強制することは「正気の沙汰とは思えない」、「愚民政策のあらわれとしか考えられない」と述べた頃から、様子が見えづつ変化しはじめた。昭和33年になると、中学校の英語の時間数は「週最低3時間」と定められ、まず

下限を示して時間数は減少の傾向をみせはじめる。そして昭和45年の学習指導要領では「週標準3時間」とさらに後退し、できるだけ3時間にすることが望ましいという行政的「指導」が強まることになる。

高校の英語も、昭和45年には必修から選択に変わった。昭和49年の平泉試案は、「わが国では外国語の能力のないことは事実としては全く不便を来さない」と考え、義務教育で外国語を課することは適当でないとして、「国民の約5%が．．．英語の実際的能力をもつ」教育を提唱した。昭和56年には、中学校英語時間数については「週3時間」にまで削減され、英語の履修時間は週3時間を越えてはならないことが厳しく求められた。これは、あれだけ英語教育を抑圧した戦時中の週4時間（旧制中学校）をも下回る時間数であり、さらに世界の主要40か国のなかでも最低の外国語時間数であった。戦後、世界の各国はあげて外国語教育の拡充・強化につとめているなかで、わが国は、過去40年間近く、一貫して外国語教育を削減・縮小し続けてきた世界でも唯一の国であるということが出来る。

なお、この頃からわが国では、英語時間数の削減とは逆に、外国人に対する日本語教育強化が唱えられ、昭和59年からは、国際日本語能力試験も世界各地で実施されることになった。同じ頃から、それまではほとんど耳にすることのなかった日本の政治的指導者たちの戦争責任に関する暴言や他民族侮蔑発言が相次ぎはじめ、海外では日本人の傲慢さが厳しく指摘されるようになった。

終戦直後には自信を大きく喪失していた日本人が、現在では逆にいささか自信過剰気味にさえなった。戦後は異常なまでに卑屈であったわれわれは、いまやいくぶん尊大傲慢になりすぎたといってもいいかもしれない。あるいは、戦後は英語一辺倒であった日本人が、いまや大きく日本語に回帰を始めたともみることができそうである。これが第3回目のサイクルである。

このようにしてわれわれは、過去130年の間に、英語一辺倒ともいえる英語蜜月段階と、英語に多かれ少なかれ拒否反応をともなった英語不適合段階という2つの対立する極の間を、ほぼ40年から50年の周期で3往復したことになる。相手のすべてが目新しく、好ましく映る蜜月段階では、英語は、異文化として汲めども尽きぬ「教養的」学習の対象であった。しかし、強大な軍事力や経済力をもった「大国」に成長して、いささか自信過剰気味になってしまった不適合段階では、英語はもはや異文化として謙虚に学ぶ対象というよりも、むしろ単なる自己発信のための技術として、いわば「実用的」学習の対象と考えられがちである。さらに時としては、目ざわりとさえ感じられて縮小・排除すべき対象ともなりうる。

平成の外国語教育「異変」は、このような文脈でとらえる必要があるように思われる。その意味で、平成の英語は、いわば英語不適合段階に達した日本人学習者にとっては、とかく「教養的」でありにくく、より「実用的」に偏る傾向が強い。時には、それが高じて、「大国語」日本語をもって英語そのものに代えようとするほどに目先の「実用」とらわれすぎることにもなりかねない。

### 3 言語文化的「一辺倒」

#### 「親英」と「知英」

「親日家」と呼ばれる人たちがいる。日本の自然や文化に特別の好意をもち、時には『私は日本人になりたい』などという本まで書く。日本人の生活に器用にとけこみ、一般の外国人ならとても我慢できないナットウやシオカラなども平気で食べたりする。

われわれが、こんな「親日家」に好意や親しみをおぼえるのも無理はない。たしかに、彼らはなににかにつけて日本びいきである。対外貿易摩擦などが深刻化すると、ついこんな「親日家」がもっと増えてくれたらと希う気持ちにもなる。かつて田中角栄首相が渡米した折に、当時の金で1千万ドルをアメリカの大学にばらまいて大学関係者たちをおどろかせたのも、その後とくにアメリカの諸団体に対して日本企業の大口寄付が相次いだのも、あるいはそんな希いを託してのことかもしれない。

しかし、いわゆる「親日家」が増えてくれることが、一般に考えられているほどにわれわれにとってプラスなことなのかどうかは、いまいちど立ち止まって考えてみる必要があるように思われる。少なくとも、国際的な相互理解のためにわれわれが本当に必要とするのは、日本びいきで、気心が知れて、話が簡単に通じる、いわば日本人のコピーのような「親日家」ではないはずである。むしろ、たとえナットウやシオカラは好きになれなくとも、こんな奇妙なものを好んで食べる民族がこの地球上に存在するという事実を、冷静にうけとめることができる人々ではないか。

これはいいかえれば、文化的尺度の多様性や相対性に目覚め、彼らの目には奇異に映るかもしれないわれわれの生活や文化を、できるだけ偏見にとらわれず、ありのままに認めようと努める人々である。いくなれば、「親日家」ならぬ「知日家」たちである。そんな覚めた「知日家」たちこそ、日本の中にのめりこんだ「親日家」たちの見逃しがちなわれわれの盲点や問題点を、厳しく見据える貴重な目をもっていることが多い。

同様のことは、立場をかえて外国語を学ぶ日本人の姿勢についてもいえそうである。今日、わが国の英語教師の最大の悩みの一つは、英語が不得意で「英語嫌い」の多くの日本人学習者たちをいかにして「英語好き」にするかという問題である。「英語好き」の学習者をつくるのが、英語教師の責任であるかのように考えられている。

しかし、はたしてそうであろうか。英語教師の本来の役割は、英語という特定の言語の愛好者や支持者を育てるというよりも、おそらく、英語やその文化について、学習者に新鮮な関心とできるだけ偏りのない理解をもたせることではないのか。それは、単に英語だけでなく、ひいては異質の言語・文化一般に対してわれわれの目を見開かせることにも通じるはずである。いわば覚めた「知英」を目指す教育である。その結果として、もちろん英語やその文化に好意をもつ学習者が育つことはあり得る。

ところが、わが国の現状はそうではない。他の先進諸国では一般に、学習者は複数の外国語のなかから履修外国語を選択できるのに対して、わが国の学習者には事実上、そんな選択の自由はまったくない。ただ定められた英語一言語が、一方的にあたえられるだけである。それでいて全学習者は、好むと好まざるとにかかわらず、等しく「英語好き」になるように期待される。これは一種の「親英」的教育であり、「英語支持者教育」とさえいうことができる。

こんな「親英」一辺倒教育からは、英語もまた世界の数ある言語の一つであるとみる覚めた「知英」的視点が欠け落ちるのも無理もない。多様な価値に目を見開かせるはずの外国語教育本来のあり方からみると、わが国のこの現状は、いかにも異様な光景といわざるをえない。

## 「親英」と「反英」

戦前の「親日」的アメリカ人のなかには、日米戦争が始まったとたん日本にそっぽを向いて、簡単に

「反日」に転じた人たちが多かった。1907年創立のアメリカの親日団体Japan Societyからも、日米開戦と同時に脱会者が相次いだ。しかし、Ruth BenedictやDonald KeeneやEdward Seidenstickerなどのいわば「知日」派アメリカ人たちは、逆に戦争の開始によって日本語やその文化への関心を深める結果になった。

一般に、言語・文化的関心に支えられた覚めた「知日」派にくらべて、心情の好みが加わった「親日」派の場合は、政治的・経済的ないわば外的変化に、より敏感に反応するように見受けられる。その意味では、「知日」にくらべた場合、「親日」は意外に簡単に「反日」に転ずるといふ皮肉な傾向がある。

これは、日本人の対外国（語）態度にもはっきりと表れているようである。たとえば、先に挙げた大学新入生に対する「母語にしたいことば」調査の結果もそれを明瞭に示している。昭和36年には英語と答えたもの69%、日本語は14%と完全に英語一辺倒であった。それが、年を追って日・英語の差が縮まり、昭和56年にはついに日本語は英語と同率で並ぶところまでくる。そして今日では、英語39%、日本語44%と、立場は完全に逆転してしまった。かつての英語に対する一辺倒は、このように英語に対する冷淡さに転じてしまったのである。

この英語志向の減少も、学習者が日本語にいくらか自信をとりもどしたただけのことで、彼らがそれぞれの言語に固有の価値に着目した結果ではない。それというのも、日本語+英語の割合は、この30年以上の間ほぼ一定して80%強で、彼らの大国語志向、あるいは中央語志向は一貫して変わっていない。

戦後のこの30数年の間に、大学新入生たちの言語的好みに影響をあたえたものは、いうまでもなく日本の経済や技術の発展と、世界におけるアメリカの政治的・経済的地位の低下である。そして、この日本人の学生たちにとっては、アメリカと日本の2つの「大国」以外の言語はほとんど眼中にはないらしい。ましてや「何語でも同じ」や「生まれた土地のことばなら何語でも」などの回答は、ほとんど期待できない。

しかし、よく考えてみると、これはけっして戦後の大学新入生たちに限ってみられる新しい現象ではない。われわれ日本人が英語を学びはじめてから今日まで130年、その間に、同じような現象が何度か繰り返されているという事実に着目する必要がある。すでに前節でみた通り、われわれはこの130年ばかりの間に、明治初年から明治40年頃までと、明治40年代から昭和20年まで、そして昭和20年から平成の今日までと、英語に対する一辺倒と英語に対する冷淡さ・反発の間の往復運動をほぼ40年から50年の周期で3たび繰り返してきた。これはいいかえれば、いずれも軍事的・政治的、あるいは経済的な自信の喪失からくる「親英」「拝英」と、一転して自信の過剰からくる「反英」「嫌英」のサイクルであった。そして今後もおわれわれは、この同じ2極間の往復運動を繰り返し続けるのであろうか。

いまは亡き中野好夫は、英語が敵性語として排斥され、多くの英語教師が口をつぐんでしまった太平洋戦争の最中に、つぎのように訴えている。

アメリカ心やイギリス心は、彼等に対する僕等の無知によって克服しうるものと思ったら大間違ひだ。無知こそ最大の危険であるのだ。英語全廢や削減をもって米英克服の道だなどと思ふのはとんでもない見當違ひである。<sup>91</sup>

その中野は、昭和40年代半ば、全国に吹き荒れた例の大学紛争のさなかには、関西のある大学で学生たちとAdolf Hitlerの*Mein Kampf*を読んでいた。やはり、相手に対する「無知こそ最大の危険」と考えていたからである。

われわれは今日まで、外国語との付き合い方というきわめて緊急の国民的課題をかかえながら、130年もの間、みずからの過去の体験に学ぼうとしない相も変わらぬ堂々回りを何度も繰り返してきた。しかし、その130年の日本人の体験がわれわれに教えているものは、目先の時流に押し流されない覚めた外国語との付き合い方であろう。おそらくそれは、「一辺倒」とも「反発」とも無縁な、その2極を越えたところにしか求められないものと思われる。それはとりもなおさず、心情的「親英」や「反英」を越えた、いわば覚めた「知英」の付き合い方以外にはないはずである。

#### 4 外国語教育と外国語アレルギー

##### カルチャー・ショック

人間は一般に、それをとりまくさまざまな文化的制約から、完全に自由ではありえない。そのために、慣れ親しんだ環境から、一步でも新しい環境に足を踏み入れると、われわれは必ずといってよいほど、一種の心理的衝撃を経験する。これを文化人類学では Culture Shock と呼ぶ。この Culture Shock の考え方を最初に提唱したのは、アメリカの人類学者 Kalvero Oberg であった。<sup>111</sup> 1954年のことである。

文化的環境の違いに由来するこのようなショックは、程度の差こそあれ、日常的に個人相互の関係にも、地域間の移動の際にも、さらに国境を越えての相互接触の場合などにも広く認められる現象である。

いうまでもなく、われわれが経験するこのショックの度合いは、個々人がおかれた条件の違いによって、けっして一様ではない。それにもかかわらず、ショックのプロセス自体には、明らかに一定の傾向が認められる。Howard Lee Nostrand は、Culture Shock をそのプロセスにしたがって3つの段階に分ける。<sup>112</sup>

第1の段階は「蜜月」段階（'honeymoon' stage）。この段階では、期待と好奇心にかられて、新しい環境のすべてが、実際以上にすばらしくみえる。いわば過大評価に傾く段階である。反面、それ以外の環境は実際よりも色あせて、かすんでみえるのが一般である。男女間でいえば、これは甘く楽しい婚約から新婚の時代であり、地域間を例にとれば、希望に胸をふくらませて地方から上京してきたばかりの大学新生や、あるいはあこがれの外国へ到着したばかりの留学生や観光客がこれにあたる。

とすると、例の 'Seeing is believing' という有名なことわざもまた、必ずしも一般に考えられているような「真理」とはいいにくいことがわかっていよう。しよせん、われわれの「一見」など、往々にしてずいぶんバイアスのかかった、あてにならない「蜜月」段階の「一見」でしかないのである。

女性の美しさをいうことわざに、「夜目 遠目 笠の内」がある。夜見る女性、遠方から見る女性、笠をかぶった女性が実際より美しく見えるというのも、相手のありのままの姿がまだはっきりとは見えない、いわば Culture Shock の第1段階、すなわち過大評価に傾く段階なればこそなのである。

しかし、この「蜜月」段階でのわれわれの反応は、多分に衝動的性格が強く、一般にそれが長続きすることはまずない。

これに続く第2の段階が、もっとも困難な不適合段階（stage of uncomfortableness）である。身についた慣習の違いからくる不適合が目立ちはじめ、ひいては新しい環境に対する反発・敵意さえ強まる。完全な拒否反応を示すことさえ少なくない。新しい環境のすべてが実際以下につまらなく見え、さらに、その反動として、古い環境に対する郷愁や美化の傾向をともしなうことも大きな特徴である。新しい環境に対する、

いわば過小評価の段階である。とくに、「蜜月」段階での期待が大きいほど、この第2段階の不適合も、逆に深刻になる傾向が強い。

夫婦間でいえば、新婚時代がすぎて倦怠期にいたる時期にあたり、この時期に離婚率が增大する。入学間もなく「五月病」にかかって故郷ばかりをなつかしむ学生、異国で異質の環境からくるストレスに苦しみ、自室に閉じこもって日本の古新聞ばかり眺めている留学生などは、みなこの第2段階の症状である。なお、五月病が、四月病でも六月病でもなく、とくに「五月」病であるのは、4月の新入学生や新入社員が、新しい環境に対する幻滅を味わって Culture Shock の第2段階にいたるのが、ほぼ1か月後であることによる。

この苦しい段階をのり越えて、はじめてひらけるのが第3の適応段階 (stage of adjustment) である。人によっては諦めという消極的な姿勢、いいかえれば「忍耐」によって、また人によっては、文化的多様さに目覚め、それを相対的に見直そうとする積極的な姿勢、いいかえれば「知恵」によって、適応の域に達する。

一般的にいて、Culture Shock は、新しい環境に対して高い順応性をもつ年少者よりも、文化的個性の確立した年長者により顕著に現れる傾向が強い。さらに、相互の文化的距離の小さい場合よりも大きい場合に、ショックはより厳しく、「適応」の達成はより困難となる。このように考えてくれば、たとえばつぎつぎに出版される海外印象記の類一つをとってみても、類似文化圏を扱ったものと異質文化圏を扱ったもの、若者が書いたものと年配者が書いたもの、さらには1か月の観光旅行記と5年間の在留記では、それぞれに別個の Culture Shock の光にてらして読まれる必要があることが理解されよう。

しかし、われわれはこのような現象に、従来あまり注意を払うことがなかった。海外印象記といえ、その国との文化的距離も、筆者の年齢も、さらには滞在期間でさえも区別なく、まったく同列に考えることが多かった。たとえば、夏目漱石と内村鑑三が、それぞれの留学体験から得たまるで対照的な英米観も、このような Culture Shock の光にてらしてみれば、これまでとはいくらか違った解釈も可能かもしれない。

### 漱石・鑑三・ハーン

漱石が、イギリス留学の結果、極端なイギリス嫌いになったことはよく知られる。『文學論』(明治40年)では、イギリス人を狼にたとえたり、「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も(ママ)不愉快の二年なり」<sup>(12)</sup>「自己の意志を以てすれば、余は生涯英國の地に一步も吾足を踏み入る、事なかるべし」<sup>(13)</sup>とまでいい切っている。漱石には、ついにイギリスでの適応段階は望めなかったけれども、しかし、彼の日記・手紙類を調べてみると、その彼にさえ、実は留学当初の一時期、イギリス人やイギリス社会を手放しに賛美した「蜜月」段階があったことがよくわかる。

明治33年10月28日にロンドンに着いた漱石は、12月26日の鏡夫人にあてた手紙では「当地のもの一般に公德に富み候は感心の至り」<sup>(14)</sup>と、当時の日本のあさましい状態に引きくらべて、イギリス人の秩序正しさや、人を信用するに厚い態度に、感嘆の声をあげている。翌明治34年1月3日付けの日記にも、「彼等ハ人ニ席ヲ讓ル本邦人ノ如ク我儘ナラズ」<sup>(15)</sup>と記している。しかし、漱石の「蜜月」段階はこの頃までで、3月13日付け日記は、一転「英國人ノ不品行ナル日本人ニ勝ルトモ劣ルベカラズ」<sup>(16)</sup>と、すでに不適合段階の兆しを明瞭に示している。必ずしも自分からすすんで渡英したとはいえぬ漱石は、ロンドンの留

学期間の大半を、ひとり下宿に閉じこもって読書と執筆に明け暮れて、少なくとも不適合段階をみずから乗り切ろうとする意欲は感じられない。五高教授という社会的地位もあり、33歳という歳になってからの、2年3か月の滞英であったことも心得ておかねばならないであろう。

これに対して内村鑑三は、23歳の若さで、みずからすすんでの3年4か月の滞米であった。彼は、漱石とは対照的に、積極的にアメリカ社会の中に入りこみ、異文化への適応を比較的容易に果たしたが、彼にとっての問題はむしろ、アメリカから日本に帰国した際の、いわゆる復帰ショック (Reentry Shock) ではなかったであろうか。これは、久しぶりの故国で経験するいわば裏返しの Culture Shock である。「愛國者」であるはずの彼が、同時に「今日の日本に生まれ來たりしを悔ひたり」<sup>17)</sup>を書いたり、日本での不適合に苦しむたびに、逆にアメリカへ帰りたいと願って、アメリカの友人たちに「望郷」の念を書き綴っていたのは、その表れと考えることができるであろう。

海外へ出かけた日本人だけではない。海外からこの日本へやってきた外国人についても、彼らが異文化に当面することによって体験する心理的衝撃について、われわれはこれまで十分な理解を示すことはあまりなかった。たとえば、Lafcadio Hearn は、日本の魅力にとりつかれた熱烈な親日家とみる見方がこの国では一般的である。日本女性を妻とし、日本に帰化までした欧米人は、今日でさえさほど多くはない。

Hearn にとって、来日直後の松江時代は、いうまでもなく文字通りの「蜜月」段階であった。彼のこの時期にはたしかに、日本人のことを ‘forty millions of the most lovable people in the universe’<sup>18)</sup>とまでいっている。しかし、そのわずか2年後には、早くも彼は ‘Here the peasants and the lower classes . . . make me mad to think that I wrote all the Japanese were angels . . .’<sup>19)</sup> と、異文化に対するみずからの幻滅ぶりをしたためている。来日4年目には、東京帝国大学の Basil Hall Chamberlain にあてた手紙で、‘I find I described horrible places as gardens of paradise, and horrid people as angels and divinities.’<sup>20)</sup>とさえ述べて、Hearn にも、この日本に対する厳しい不適合段階があったことを示している。

## 外国語アレルギー

今日、わが国の英語教師がかかえる最大の悩みの一つは、学生の「英語アレルギー」の問題である。中学生は入学当初、どの学科目にもまして、初めて学ぶ英語に対して強い興味を示す。ところが1~2年もたたぬうちに、教師はみずからの手で、「英語好き」の彼らを立派な「英語嫌い」に仕立ててしまうといわれる。この「英語好き」をいかに減少させないで維持するかが今日の中学英語教育の大きな課題と考えられている。

中学生の対英語意識

調査時期	英語の学習に興味がありますか		英語はむずかしいですか	
	ある	ない	むずかしい	むずかしくない
1年生 5月	98%	0%	0%	95%
1年生 10月	80%	5%	33%	32%
2年生 9月	45%	19%	62%	10%

上の表は、羽鳥博愛教授による学習段階別にみた中学生の英語についての意識調査の結果である。<sup>21)</sup>

中学生は入学時には、英語の学習に興味をもたないものはないし、英語をむずかしいと考えているものさえまったくない。ところがこんな中学生が、1年半もたつと英語の学習に対する興味は急激に減少する。

たしかに、興味の失せたところに、十分な動機づけを期待することは困難には違いない。しかし、だからといって、はたして「英語嫌い」は、一般に期待されているほど簡単に一掃できるものであろうか。これは、他の教科とは異なる異言語・異文化学習の特殊な性格と深くかかわっていることを忘れてはならない。いったい、学校教育のすべての学科目のなかで、およそ英語ほど日本人の環境・習慣から遠くかけ離れているものはあるまい。そして、それであればこそ、英語は学校教育科目としての存在意義をもつとさえいえる。これは、とりもなおさず、異文化間の衝撃的効果をねらった学科目なのである。とすれば、英語という異言語・異文化の学習が、Culture Shock の正常のプロセスをもっとも顕著にたどったとしても、それは少しも不思議ではない。英語入門初期の「蜜月」段階を経過した学生が、その後一度は不適合の段階を体験するのは、避けて通れぬいわば英語学習的はしかであって、むしろ健全な発展の一過程と考えるべきではないか。のちに英語教師・英文学者となった漱石でさえも、中学時代には、重度の「英語アレルギー」に苦しんでいたことを思い出す。

さらに、W. Penfield などの神経生理学者たちの報告によれば、自然な環境以外の環境で外国語を学習する場合、もっとも適当な学習年齢、いわゆる臨界期は4歳から10歳までの間であるという。<sup>22)</sup> この段階では、まだ新たな言語に対する適応性が強く、しかも、母語も、強力な言語的干渉を及ぼすまでには確立されていない。ところが、わが国の学校英語教育は、生徒の外国語学習にもっとも適したこの時期が終了するのを待つかのように、12歳(中学1年)という年齢になって初めて開始される。その上、日本語からみて、英語は、おそらく多くの外国語のなかでもっとも言語的差異の大きな言語の一つであるということが出来る。このようにみえてくると、われわれが英語を学習する際に出くわす Culture Shock とは、本来、けっしてそれほど生やさしいものではなかったはずである。

考えてみれば、結婚の場合であれ、海外在住の場合であれ、あるいはまた外国語学習の場合であれ、今日のわれわれの考える「蜜月」段階は、一般にあまりにもカッコよい華やかな夢に支えられていることが多い。今日のわれわれは、時代とともに、むしろ次第に「適応」にいたるための「忍耐」も「知恵」も失い、また異文化理解の必要が叫ばれるにつれて、逆にその理想から次第に遠ざかりつつあるように思われる。たとえば、夫婦間「文化」の相互理解については、時代とともに離婚という「不適合」段階での挫折率が増大している事実にはっきり現れている。近年の外務省の外交白書『わが外交の近況』によれば、国際化時代といわれる今日、日本人は、むしろ戦前の日本人にくらべるとはるかに外国不適合が高くなってきているという。

外国語の学習についても、先の表からも明らかなように、中学1年生の実に100%近くが英語の学習などむずかしくないとはいえず、むしろ「1か月で身につく英会話」や「英語が1週間で喋れる本」に彼らが群がるのは、それをよく示している。母語ならぬ2番目の言語を、12歳という年齢になって、しかも抽象的な環境のもとで、その上、母語の場合とは比較にならぬわずかな時間で行う外国語学習の困難さなど、ほとんど思いいたらない。それはちょうど、白衣の天使にあこがれながら、看護婦労働の厳しさ

には思い及ばない少女の例にも似ている。この本質的理解のスッポリ欠落したこの種の皮相的な興味が、強い忍耐を要する地味な訓練に直面して無残にもくずれ去るのは、理の当然ともいえる。

今日の知日派アメリカ人の1人 Jack Seward は、その著 *The Americans and the Japanese* のなかで、彼の35年にわたる日本語学習の体験を綴っている。<sup>29)</sup> それによれば、彼は戦時中、米軍の陸軍専門教育計画 (Army Specialized Training Program—ASTP) の日本語学校で、2か年半にわたり、毎日10時間もの厳しい日本語の集中訓練を受けたという。このASTP受講者のなかから、何人もの日本語アレルギーによる発狂者が出たことは以前から伝えられていたが、Sewardによれば、この期間中に、彼の小さなクラスの中からも、2人の日本語学習に原因すると思われる自殺者と1人の自殺未遂者が出たという。有能で意欲的な軍人ばかりを選びすぐって受講生として、そのなかから、Keene や Seidensticker などすぐれた日本語将校を生み出したASTPではあったが、その背後には、これほどまでに厳しく悲劇的な Culture Shock の障壁がひそんでいたことを見落としてはならないであろう。

Seward は当時、滞日25年、日本語・日本文化を研究してすでに35年にもなっていたが、その彼にしてなお、日本語が十分に理解できないと思うことがままあるという。そんな彼の目には、*Japanese in Three Weeks* や *Instant Japanese* などと題した、まるで外国語学習の苦しさなど、どこかに置き忘れてきたかのような本が、いかにも空しく滑稽に映るといふ。内村鑑三は、そのかくれた名著『外国語之研究』(明治32年)で、8項目の英語学習心得を説いているが、思えば彼もまた、その項目の第1に、「忍耐なれ」、そして第8の項目に、なお「執拗なれ」と教えている。

学校外国語の学習は、本来、他の教科では望めない異文化間の Culture Shock の体験を、学生に期待しようとするものである。とすれば、学生の英語学習が効果的に行われれば行われるほど、それは当然、逆に他の教科の学習の際には考えられない彼らの心理的不適合も、一時的にしろ、強まるという皮肉な結果を生むことを、われわれはあらかじめ覚悟してかかる必要があるようである。したがって、このような心理的緊張や衝撃をとまなう英語学習の「楽しさ」や「面白さ」とは、精神的弛緩を通してえられる寄席の「楽しさ」「面白さ」とは、本来、異質のものであろう。実用主義的・能率主義的傾向の強い現代の学生に、これが容易にアピールするとは思われないが、しかし、この点の理解を欠いたままの外国語学習や無自覚な海外旅行は、国際的理解を増進するどころか、むしろ民族間の誤解を拡大し、偏見を増幅する危険すらはらんでいることに、そろそろ気づいてもよい頃である。

われわれはこれまで、「英語嫌い」という「不適合」を恐れるあまり、「蜜月」の上いきなり「適応」を打ち立てようとする無理を重ねてきたようである。しかし、今後のわれわれにとって必要なことは、むしろこの「不適合」の体験を大切にしながら、「蜜月」段階の安易な興味や期待に反省を加え、それを有効に英語学習の「適応」段階に結びつけようとする新しい姿勢であると思われる。

## 国民的カルチャー・ショック

Culture Shock のプロセスを忠実にたどるのは、単に個々の学生の外国語学習だけではない。異質の言語・文化とのかかわりという点では、さらに広くわれわれ日本人一般の対異言語・異文化意識そのものもまた、Culture Shock の影響から完全に自由ではありえないはずである。

明治以来130年のわれわれの異言語・異文化体験のうち、すでに述べた明治初年から明治40年頃まで、

明治40年代から昭和20年まで、そして昭和20年から今日までのほぼ40年から50年周期の3回のサイクルは、実はいずれも異言語・異文化に対する日本人の国民的 Culture Shock のプロセスそのものとみることができる。それは、欧米文化に対する過大評価の「蜜月」段階と過小評価の不適合段階という、いわば不安定な第1と第2の段階をいたずらに繰り返し、その度毎に安定した第3の適応段階、いわば欧米文化をありのままの等身大の姿に評価できる段階には達していないことを意味する。いいかえれば、政治や経済や、時には軍事に動かされやすい心情的「親英」や「反英」を繰り返し、確固たる言語・文化的関心に支えられた覚めた目の「知英」の域には到達できていないということである。これは、わが国の多くの学生の外国語学習の場合とあまりにも酷似している。

しかし、個々の学生の場合、彼らの Culture Shock のプロセスは、一般に1回きりのサイクルをもって終わるのに対して、われわれ日本人一般は、過去130年ばかりの間に、実に3回にわたってほぼ同様のサイクルを飽きることもなく繰り返してきた。しかも、それぞれのサイクルからサイクルへの転換点となったものは、いずれも異文化との決定的な衝突、すなわち薩英戦争(1863)・馬関戦争(1864)であり、日清戦争(1894-5)・日露戦争(1904-5)であり、そして太平洋戦争(1941-5)であったという事実を見落としてはならないであろう。

### [注]

- 1) 本稿は、平成8年9月21日、大谷大学における大学英語教育学会全国大会で行った講演「日本人の言語意識を問う」の内容を整理したものである。
- 2) 銀林浩「数学社会学のすすめ」『数学教室』(国土社)昭和45年8月号。
- 3) 國弘正雄『国際英語のすすめ』(実業之日本社、昭和47年)、pp. 9-10。
- 4) 中津燎子『なんで英語やるの?』(午夢館、昭和49年)。
- 5) 全国の高等学校普通科における「英語ⅡA」の開設状況は、昭和57年で6.1%、その後も年とともに減少して、昭和63年には、わずかの2.3%にすぎなかった(文部省初等中等教育局内部資料)。
- 6) 大和田建樹『明治文学史』(博文館、明治27年)、p. 4。
- 7) 原文は‘our meagre language.’ 森有禮‘Education in Japan’(明治6年)『森有禮全集』(宣文堂書店、昭和47年)第3巻、p. 286。
- 8) 森鷗外「洋学の盛衰を論ず」(明治35年)『鷗外全集』(岩波書店、昭和49年)、第34巻、p. 222。
- 9) 中野好夫「直言する」『英語青年』(英語青年社)昭和18年2月1日号。
- 10) Kalvero Oberg, *Culture Shock and the Problem of Adjustment in New Cultural Environment* (Mimeo, 1961)。
- 11) Howard Lee Nostrand, ‘Describing and Teaching the Sociocultural Context of a Foreign Language and Literature,’ *Trends in Language Teaching*, ed. Albert Valdman (New York: McGraw-Hill, 1966), p. 7。
- 12) 『漱石全集』(岩波書店、昭和41年)、第9巻、p. 14。
- 13) 同上、p.15。
- 14) 同上、第14巻、p. 158。

- 15) 同上, 第13卷, p. 29.
- 16) 同上, p. 48.
- 17) 『内村鑑三著作集』 (岩波書店, 昭和28年), 第1巻, p. 354.
- 18) *The Writings of Lafcadio Hearn* (Boston and New York : Houghton Mifflin, 1922), Vol. 5, p. 12.
- 19) *Ibid.*, Vol. 16, p. 314.
- 20) *Ibid.*, p. 188.
- 21) 羽鳥博愛『英語教育の心理学』 (大修館書店, 昭和52年), p. 260.
- 22) W. Penfield & L. Roberts, *Speech and Brain-Mechanisms* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1959), p. 255.
- 23) Jack Seward, *The Americans and the Japanese* (Tokyo: Eichosha, 1976), p. 44.

## Abstract

If one takes a close look at the past one hundred years and more in our foreign language education, one sees a persistent factor recurring with sufficient frequency to call attention to itself. This is the 'servile-arrogant attitude' cycle toward foreign languages and cultures observed approximately every forty or fifty years since the beginning of the Meiji era.

There is more than one reason for our moving in a 'servile-arrogant attitude' cycle, but one phrase, *Culture Shock*, seems to explain a major part of it: *Culture Shock* on a national rather than an individual basis. Thus, our 'servile-arrogant attitude' cycle can be interpreted as a 'honeymoon-discomfort stage' cycle. We are, apparently, unable to attain the stage of adjustment.

# 要約指導がリスニングとライティングの能力に及ぼす効果

## Some Effects of Summary Writing on Listening and Writing

奥村 清彦

Kiyohiko OKUMURA

### 1 はじめに

筆者が所属している大学英語教育学会関西支部のライティング指導研究会は、1995年4月に、近畿の7大学の学生約1,000名を対象に、ライティングに関するアンケートを実施した(廣田、岡田、奥村、時岡、1995)。そのうちの新入生約500名に、大学入学以前のライティングの練習方法についてたずねた項目を見てもみると、次のようになっている。

表1 「以下の練習方法について、それぞれどのぐらい経験したか教えてください。」 (%)

項目	たびたびある	いくらかある	ほとんどない	まったくない
日本語の短文を英訳した経験	39.5	53.2	6.0	1.3
文型や文法規則を使って和文英訳した経験	27.0	55.3	14.4	3.3
ある話題について自由に英語で書いた経験	6.3	28.0	37.5	28.2

表1に見るように、日本語の短文を英訳した経験が「たびたびある」「ときどきある」を合わせて92.7%あり、文型や文法規則を使って和文英訳した経験も同様に83.3%あるのに対して、ある話題について自由に英語で書いた経験は、合わせて34.3%と非常に少ないことが分かる。

さらに、1998年4月に、筆者が指導している大学の1年生87名を対象に、これと同様の項目に関して別の問い方をしたところ、次のような回答があった。

表2 「高校時代の主な英作文の方法は次のどれでしたか」 (%)

和文英訳	94.3	自由作文	4.6	作文なし	1.1
------	------	------	-----	------	-----

この表に見られるとおり、高校でのライティングの指導方法は和文英訳が圧倒的に多く、自由作文の占め

る位置がいかに小さいかが一層はっきりする。

これと同じ傾向が、小池ほか（1990:136）が大学教員にたずねた次のデータの中にも見られる。

表3 「Wの授業では、あなたは主にどれに力点をおいて指導していますか。」

(回答者数大学教員 786名)

(%)

和文英訳	31.2
自由作文	17.6
文型や表現の練習	31.7
書きかえ練習 (例えば、reproduction, precis writing)	6.6
その他	13.0

上表から分かるように、大学においてもライティングの指導方法は高校とほとんど変わっておらず、和文英訳や文型・表現練習などの、いわゆる記号変換的な作業が中心で、情報発信や自己表現などを中心とする指導はあまり行われていない。

さらに、同じアンケート（小池ほか、1990:115/132）から、リーディングなどを含めた英語指導全体からライティングの位置付けを見ると、表4のとおり、書く指導が他のスキルと比較して、あまりにもないがしろにされていることが分かる。

表4 「あなたは授業で最も何に重点をおいていますか。」（高校教員 1,412名）

「一般英語の教育目標として英語のどの技能を最も重点的に教えたらよいと思いますか。」

(大学教員 999名)

(%)

高校教員		大学教員	
文法・構文	14.0	Hearing	28.6
英文の内容理解	53.4	Speaking	18.1
英文和訳	7.9	Reading	80.3
聞くこと・話すこと	2.8	Writing	19.9
書くこと	0.9	その他	9.2
総合(聞く・話す・読む・書く)	28.4		

要するに、高校・大学の英語指導の重点は読解であり、書く指導の占める位置は非常に小さいということである。これを言い換えると、日本の学校英語教育では、インプットが重視される反面、アウトプットが非常に軽んじられていると言って差し支えない。また、インプットといっても、それはリーディング・インプットである。さらに、リーディング重視といっても、ライティングの場合と同様に、記号変換作業

が支配的であり、その読む量も極めて少ない。つまり、教科書以外はほとんど何も読まず、唯一読む教科書も年に1冊全ページが読みきれない程である。(注1)したがって、インプットも十分行われているとは決して言えないのであるが、本稿ではこれ以上触れないことにする。

筆者は高校であろうと、大学であろうと、アウトプットの指導はインプットの指導とともに、車の両輪のように等しく重視されなければならないと考えている。なぜなら、英語の運用能力はインプットだけでは決して身に付かないからである。Rivers (1992) も大学の外国語教育での運用能力育成の重要性を強調して、「大学のカリキュラムの作成や実施に当たっては、受講生が運用能力を伸ばせるようすることが極めて重要である」と述べている。

アウトプットといえは先ずスピーキングが考えられるが、日本ではクラスサイズや指導体制などの点で、現実には十分な指導を行うことが極めて困難である。実際には、少数のネイティブ・スピーカーが、大クラスの学生に戸惑いながら、かろうじてスピーキング指導がゼロなることを防いでいる程度である。しかし、もう一方のアウトプットであるライティングなら、指導する側にその態勢さえあれば、現在のような条件下にあっても、スピーキングの指導ほどの困難はなく実行できる。また、ライティング指導の工夫によっては相当の運用能力を学生に付けさせることができる。(注2)

最初に紹介したアンケート結果を受けて、筆者ら(1995)が『大学におけるライティング指導の10課題』を設定し、その中の1つとして、「リーディングやリスニングの授業にもライティングの指導を行う」という課題をあげたのも、このような考えから発したものであった。つまり、リーディングやリスニングの重要性は大いに認めるが、それだけに止まらずに、あらゆる機会をとらえて情報発信や自己表現を意図したライティングの指導を行なう必要があるという考えがその根底にある。

本稿では、リスニングの授業の中に、ライティングを、特にサマリー・ライティングの指導を取り入れた実践研究について報告をする。

リスニングの授業にサマリー・ライティングの指導を取り入れた理由は、筆者が過去数年間にわたって、リーディングの授業の中でサマリー・ライティングの指導を行い、リーディングとライティングの両方に好ましい結果が出ることを確かめてきたからである(奥村1997)。すなわち、サマリー・ライティングは、リーディングやリスニングの時間をあまり奪うことなしに、ライティングの指導を行えるというメリットがある。特に、サマリー・ライティングは、リーディングやリスニングの内容と有機的に関連付けて指導し易く、コメント作文を加えれば自己表現作文とも直結する。

リーディングの場合、教材を英文和訳や内容把握だけに使用するのではなく、サマリー・ライティングの指導によって、文章全体を俯瞰する習慣が付くと同時に、学生はパラグラフの組立てやパラグラフ間の相互関係など、英文の構成を「書く立場」で検討するようになる。さらに、サマリーを書くことに慣れるにしたがって、その能力を生かした課題を与えることもできる。筆者は実際に、学生に平易な読み物を自由に読ませ、ブックレポート(book report)の形で、サマリーやコメントなどを書いて提出するように指示したところ、自由提出であったが、学生は非常に積極的に提出をした経験を持っている。このような学生の多読志向の上昇は、サマリー・ライティングの指導を行なわなかった時には考えられなかった現象である。

今回サマリー・ライティングをリスニングの指導にも導入しようと決意したのは、とりあえずどんな授

業にもライティングの要素を取り入れたいという願いの他に、リーディングの授業での経験からその結果にある程度の見込みがたったことと、さらに直接的な動機としては、リーディング教材を学生に要約をさせた時の、かれらの取った対応の仕方からである。つまり、初期の頃、学生にサマリーを書かせると、元のテキストを短縮するだけで、文の表現などはそのまま写してしまうことがしばしばあった。したがって、これを止めさせ、自分の言葉を使って要約させるためには、テキストを見ないようにする必要があり、これにはリスニング教材を利用するのが一番よいと考え、ときどきこの方法を取り入れたことがあった。

この経験から、LL を利用してリスニングを指導する際にも、聞いた内容をサマライズさせる指導に抵抗なく入れるようになった。この方法を積極的に取り入れ始めたのは1997年4月からで、本稿では、それからの1年間と1998年4月から7月までの半年間の実践経過とその結果を報告したい。

## 2 研究仮説

研究仮説として、次の2つをあげた。

リスニング授業の中にサマリーライティングを取り入れると、

- (1) リスニング能力の向上に役立つ。
- (2) ライティング能力の向上に役立つ。

まず、「リスニング能力の向上に役立つ」という仮説を立てた理由は次のとおりである。

サマリーライティングを行なうには、聞いた内容全体を把握しなければならない。したがって、学生は必ず「今聞いた内容は全体としてどんな内容であったか」の確認作業が求められる。同時に、中心内容と補助内容の区別もする必要がある。サマリーライティングを行なわないで、true-or-false や multiple-choice questions を与えて適当な答えを選ばせたり、dictation を行なったりするだけの、いわゆるテスト方式の授業では、ともすれば全体を見失い、部分だけしか注意を払わない姿勢を学生の中に作ってしまう恐れがある。その結果、今聴き取り練習をしたばかりの内容が、何も頭に残らずに素通りしてしまうことが起こりかねない。しかるに、聞いた後でサマリーを書くことにしておけば、学生の聞く姿勢も自ずから変わったものになり、積極的になってくることがこれまでの観察からも十分予想できる。それが結果的に、リスニング能力の伸長に役立つことになると考えられる。

次に、「ライティング能力の向上に役立つ」という仮説は、リーディング指導の際の経験から十分検証できる見込みがあった。ただ、リーディングの場合と違って、テキストが全く学生の手元にない条件でも、同様の効果が得られるか不明であった。リスニングの練習をすると同時に、サマリーを書く基本を授業で指導する結果、パラグラフの構成の仕方が分かったり、実際に書くというタスクをたびたび実施するため、ライティング・フルーエンシーなど、ライティング能力が向上するものと考えた。

## 3 研究対象

研究対象は2つあり、1997年4月から1998年1月までの対象は、滋賀県立大学人間文化学部の2回生で、1998年4月から7月までの対象は同大学の環境科学部と人間文化学部の2回生である。ここでは先ず、1997年4月から1998年1月までの研究について報告する。

いずれの場合も、週一回、90分のLL授業が研究対象である。実際にサマリーライティングの指導を行

なったのは、90 分のうちの約 20 分である。主な使用教材は、オーディオ教材が *Airwaves* (Macmillan Language House)、ビデオ教材が *America on Video* (Meynard) の Unit 4~6 である。その他多様なオーディオ及びビデオ教材も随時に使用した。

## 4 研究手順

### プリテストとポストテスト

プリテストとして次の3つのテストを4月に実施した。

- ① リスニング・テスト --- JACET Basic Listening Comprehension Test, Form A
- ② サマラー・ライティング・テスト --- JACET Intermediate Listening Comprehension Test の Part 4 (この部分を聞いて、50 語程度の英語で要約する。要約時間 20 分)
- ③ フリー・ライティング・テスト --- Sports and I, Music and I, または ~ and I のタイトルの中から一つを選択して書く (5 分間構想、制限時間 20 分間で、できるだけ多くの情報を盛るように書く)。

なお、上記と同じテストを約 10 箇月後に、ポストテストとして実施した。

### 指導方法

日常の指導方法としては、単に最初から「サマリーを書きなさい」と指示するのではなくて、サマリーライティングに慣れさせるために、次の基本的な指導ステップを踏んだ。

#### a. Key-word writing

特定のキーワードを基に文やパラグラフなどを作らせる方法。

- a-1. 教師が思い付くままに単語を数語板書する。その単語を全部使って、意味の通る英文を作ってみせる。
- a-2. 単語を変えて、同じことを学生に行わせ、出来上がった文を発表させる。
- a-3. 教師がテープで読まれる文章を聞きながら、メモを板書して見せる。そのメモを見ながら、学生に元の文を復元させる。ただし、全く同じ表現でなくてよいことにする。むしろ、自分独自の表現で書くことを奨励する。
- a-4. 上記 a-3 と同じことをすべて学生だけで行わせる。

#### b. Outlining

文章 (ストーリーや会話など) を聞きながらメモを取らせ、短くまとめさせる方法。

- b-1. まとめるのを手助けするために、内容について questions を発し、メモを頼りにその答えを書かせる。書いた答えを必要な接続語 (connectives) でつないで、アウトラインを完成させる。
- b-2. 冗長 (redundant) になることを防ぐために、制限語数内に要約することも練習させる。

#### c. One-sentence summary

比較的論理のまとまった文章 (簡単なレクチャーなど) を聞かせ、1 文で要点を書かせる方法。この場合の 1 文とは、単文に限ることなく、むしろ複文でまとめられるように指導する。

#### d. One-paragraph summary

One-sentence summary と相前後して、まとまった文章を聞いて、1~2 パラグラフで要約を書かせる。この場合、トピック・センテンス (topic sentence) や、メイン・アイディア (main idea) と サポートング・ア

アイデア(supporting idea)など、パラグラフの基本形式を改めて指導する。

#### e. Assignments

サマリー・ライティングにある程度慣れてくる後期からは、その能力を自由に生かすために、自由提出の課題を与えた。例えば、毎回使用しているオーディオ教材の *Airwaves* の問題解答は教室で行ない、学習した教材を学生が持参したテープに録音させ、英語でテキストの一部を要約して提出させたり、*Academy Shuppan* の *The Adventure of a Quarter* の一部を全員に聞かせながら録音し、授業外でそのサマリーを書かせて提出させた。提出は自由ではあるが、聞いてサマリーを書くことに抵抗感がなくなったためか、学生は積極的に提出した。

#### f. Feedback

学生が提出したサマリーのフィードバックは、原則として個人添削を行わずに、注目すべき作品を2つ～4つ、教材提示卓を使ってモニターテレビに映し、コメントを加えながら紹介した。同時に全体の問題点や今後の努力目標などを指示した。ある時には、モニターテレビに映された作品に対するコメントを学生に言わせたり、書かせたりすることもあった。

提出したサマリーを修正させる場合は、学生自身で行わせることを基本とした。その場合、チェックリストを用意して、それを拠り所にしなが、学生に自己修正や相互修正などを行わせた。このやり方はリーディング授業のサマリーの扱いでも同じで、10 数年来この方法を続けている。

## 5 指導結果—その1

約10箇月後に、プリテストと同じテストをポストテストとして実施したが、結果は以下の通りである。

リスニング・テストは、JACET Basic Listening Comprehension Test, Form Aを実施したが、表5に見るとおり、平均点が53.06 から61.32へと伸びている。有意差もあり、この伸びがサマリーライティングによって一層促進されたものであるかは、比較する対象集団がないので断定できないが、かなり大きな伸びである。

表5 リスニングテスト平均点の比較

n=35

	プリテスト (1997. 4)	ポストテスト (1998. 1)	伸び (%)	t
平均点	53.06	61.32	15.57	4.20*
S D	19.715	19.835		

\* p < 0.001

さらに、リスニング・テスト結果の伸びの違いを高・中・低のレベル別に見ると、表6のとおり高位より中位が、中位より低位がそれぞれ伸びが大きいことが分かる。特に、問題が比較的平易なこともあって、低位者の伸びが非常に大きくなっている。

表6 リスニングテストのレベル(高・中・低)別平均点の比較 n=各11

レベル*	プリテスト	ポストテスト	伸び (%)
高 (73点以上)	79.4	84.3	6.17
中 (50~63)	58.4	64.7	10.79
低 (33~46)	40.5	50.3	24.20

\*プリテストの得点で分ける

表7は、要約テスト(Listen-and-summary writing test)結果の比較である。このテストは、アメリカの高校生の「高価な持ち物」の傾向について話されるレクチャーを聞きながら、数値がブランクになったヒストグラムに必要事項を記入した後、そのグラフを見ながら50語程度の英語で内容を要約させるテストである。要約文の評価については、Jacobら(1981)の *English Composition Profile* を参考にし、内容、構成、語彙、文法、メカニックスの5つの観点から、5段階のホリスティック評価を行った。内容と構成について説明を加えると、「内容」は、レクチャーを正確に聞き取り、それが適切な要約文で示されているかを評価し、「構成」は、トピックセンテンスがうまく書かれているか、聞いた内容をテキストの順序どおりにまとめずに、「文順」が適切に変更されているか、テキストで使われている「数字」をそのまま使わずに、包括的な表現で言い換えているかなどを測定するものである。なお、今回、筆者を含めて2人で採点を行ったが、採点者間の信頼度は0.81であった。

表7 要約テスト評価の比較(5段階評価) n=40

	内容 (聴解)	構成			語彙	文法	メカニックス
		トピックセンテンス	文順	数字の扱い			
プリテスト	2.35	1.59	1.11	1.22	2.08	2.11	1.89
ポストテスト	2.70	1.81	1.46	1.38	2.37	2.41	2.24
伸び	0.35	0.22	0.35	0.16	0.29	0.30	0.35
t	2.26	1.51	3.38	1.97	1.87	1.88	3.09
p	<0.05	<0.2	<0.01	<0.1	<0.1	<0.1	<0.01

表7からも分かるように、どの観点においても、ポストテストのほうが、プリテストよりも高い評価を得ている。有意差の点から見ると、内容、文順、メカニックスで特に差が出ている。「内容」の評価が向上したことは、聞き取り能力の向上と切り離せないものと考えられる。また、「文順」を変更するには要約の中でも比較的高度な能力を要するが、この項の向上が見られるのは要約指導の結果以外には考えにくい。

語彙、文法のジャンルはあまり目立った差は見られない。

フリーライティング・テストは、Sports and I, Music and I, ~ and I のタイトルの中から1つ選ばせ、5分間構想し、20分間でできるだけ多くの情報を盛るように指示して書かせたものである。要約テストと同様に、Composition Profile 方式のホリスティック評価を行ったが、表8のとおり、内容、構成、語彙、文法、メカニックスのすべてのジャンルで、ポストテストの評価が高かった。とりわけ、内容とメカニックスのジャンルで有意差が出ている。一方、両者の差が最も小さかったのは文法である。これは要約テストの場合と同様の結果で、文法力の向上はサマリー・ライティングだけでは限界があることを示唆している。

表8 フリーライティング・テスト結果の比較 (5段階評価)

n = 40

	内容	構成	語彙	文法	メカニックス
プリテスト	2.38	2.50	2.28	2.43	2.83
ポストテスト	2.80	2.63	2.50	2.50	3.08
伸び	0.42	0.13	0.22	0.07	0.25
t	3.68	1.09	1.78	0.90	2.08
p	<0.001	>0.2	<0.1	>0.2	<0.05

なお、フリーライティング・テストの場合は、ホリスティック評価に加えて、特定の小項目についてアナリティック評価も実施した。表9を見ると、まず、作文の単語数が大きく伸びている。つまり、ライティング・フルーエンシーが高まったものと解釈することができる。作文時間が制限されている場合は、書いた単語の数が作文能力の一つの指標となることが、過去の種々の実践から判明しているが、Ferris (1994) や Homburg (1984) などの論文も同様の発表を行っている。

表9 フリー・ライティングの語数・T-Unit 数・従属節数・誤り数の比較

n=40

	語数	T-Unit	従属節(%)	*第2レベルの誤り(%)	*第3レベルの誤り(%)	第2+第3レベルの誤り(%)
プリテスト	85.7	7.21	9.19	2.58	1.93	4.51
ポストテスト	101.8	7.83	17.91	2.23	1.72	3.95
伸び (%)	18.79	8.60	8.72	-0.35	-0.21	-0.56
t	3.07	2.06	4.09	0.17	0.45	1.19
p	<0.01	<0.05	<0.001	>0.2	>0.2	>0.2

\*第1レベルの誤り:伝達に全く支障のないもの。第3レベル:伝達に支障のあるもの。第2レベル:その中間的なもの (Homburg, 1984)

T-Unit についても、向上の跡が見られる。また、従属節の使用頻度も作文能力の指標になるという説 (Homburg, 1984) に則って調べてみると、従属節の数が大きく増えていることが分かる。

誤りの分析については、同じ Homburg が使用している基準に従った。今回の分析では第2、第3レベルの誤りの出現率を比べたが、ポストテストではその両方のレベルで誤りの出現率が若干減っていることが分かる。

以上の結果から、作文の評価については、ホリスティック評価とアナリティック評価の両面から、ポストテストの作文のほうが上回っているという結果が出た。

## 6 アンケート結果

このサマリー・ライティングを取り入れたリスニングの授業について、受講生にアンケートを行なった結果を一部報告する。まず、「この授業で、自分の学力は向上したと思うか、思わないか」を、リスニング、サマリーライティング、フリー・ライティングという3つのスキルについて自己評価をさせたところ (表 10)、リスニングとサマリーライティングでは「非常に向上した」「少し向上した」を合わせて、「向上した」と思っている学生が過半数を占めているのに対して、フリー・ライティングでは「向上しなかった」のほうが差は1名であるが、多くなっている。

表 10 アンケート「自分の力は向上したか、しなかったか」(レベル別)  $n=24$  (各レベル8)

	非常に向上した				少し向上した				向上しなかった				分からない			
	計	高	中	低	計	高	中	低	計	高	中	低	計	高	中	低
聴解	1	0	1	0	14	5	5	4	9	3	2	4	0	0	0	0
要約	1	0	1	0	13	5	5	3	9	3	2	4	1	0	0	1
作文	1	0	1	0	10	2	6	2	12	6	1	5	1	0	0	1

これをリスニング・テストの高・中・低別に分析してみると、リスニングとサマリーライティングについては、良く似た傾向が見られ、高位の学生と中位の学生に向上したという評価が多いのに対して、低位の学生は向上感がやや少ない。特に、フリー・ライティングの面では、高位の学生と低位の学生が共に「向上しなかった」が最も多い。これは、この分野の指導を直接行ったことがないため、(高位者と低位者の考え方にはずれがあると考えられるが)、ある意味では当然のデータだと考えられる。

アンケート項目のもう1点は、「リスニングの授業でサマリーライティングを行なうことをどう思うか」という質問である (表 11)。筆者はこの質問に対する学生の反応について非常に強い関心を持っていたが、約7割の学生が「役に立つ」と思っており、「役に立たない」は2.8%で、実数は最低位の学生の1名だけであった。「分からない」も最低位の学生が最も多くを占めている。この数値から判断できることは、筆者が行なったサマリーライティングの方法が、大多数の学生に好意的に受け止められはしたものの、最も低位にある学生には合わなかったということである。

表 11 「リスニングの授業でサマリー・ライティングを行なうことをどう思いますか。」

	役に立つ	役に立たない	分からない
計(n=36)	25 (69.4%)	1 (2.8)	10 (27.8)
高 (n=7)*	6(85.7)	0 (0.0)	1 (14.3)
中上 (n=9)*	7 (77.8)	0 (0.0)	2 (22.2)
中下(n=11)*	10 (90.9)	0 (0.0)	1 (9.1)
低(n=9)*	2 (22.2)	1 (11.1)	6 (66.7)

\*高: 80 点以上, 中上: 79~60, 中下: 59~40, 低: 39 以下 (リスニング・テストのポストテスト得点)

次は、サマリー・ライティングが「役に立つ」「役に立たない」「分からない」のいずれかを選んだ理由を自由に書かせたものであるが、筆者の予想を越えて、この指導方法を積極的に評価する学生が多いことを知った。

#### 「役に立つ」「役に立たない」「分からない」を選んだ理由 (自由記述)

##### ◇ 「役に立つ」を選んだ理由：

\*内容を深く（正確に）理解するように聞くから。\*理解の助けになるから。\*聞き取った情報を文章にして整理する力が養えたから。\*全体を理解する練習になるから。\*文章をまとめる力がつくから。\*より集中して聞くようになるから。\*要約作業がなければ、なんとなく聞き流してしまうし、理解できても英文にする力がつかないから。\*聞き取るだけではどうしようもなく、大切なのは人に伝えることだから。\*要点をまとめて聞き取るのに役立つから。\*聞いたことをまとめて書くことを、今までにやっていないから。\*English を近くに感じた。\*要約ができると英語になじみやすいと思う。\*英単語をおぼえられる。英語に対して抵抗がなくなる。聞き取る力がついたことを実感できたので、など。

##### ◇ 「分からない」を選んだ理由：

\*要約することは良いことだが、一文にまとめる要約の必要が分からない。普段、そんなに長い一文を話す人はいないのではないか。\*自分の書いた要約について、書いたら書きっぱなしで、文法があっているか自分で判断できない。\*英語力は上がったと思うけど、人には得手不得手があるのだから、もう少し違う内容のこともしてほしかった。\*あまり身に付かなかった。

##### ◇ 「役に立たない」を選んだ学生の記述なし。

## 7 指導結果—その2

1997年度は研究対象クラスが1クラスしかなかったため、サマリー・ライティングがどの程度結果に影響しているかを、データで比較することができなかった。幸い、1998年度はLL授業を2クラス担当することになったので、1つのクラスをサマリー・ライティング指導を行うサマリー・ライティング・グルー

ブ (S群) とし、もう1つのクラスをディクテーションの指導を行うディクテーション・グループ (D群) として、授業を開始した。ただし、互いに異なった指導を行うのは90分中約20分間だけであった。

具体的には、S群ではビデオを見て、スキットのサマリーを書いたり、サマリー・ライティングの基本を指導したりするが、一方のD群では、同じビデオ・スキットの一部又は全部を、録音したテープを起こしながら、ディクテーションをしたり、リダクションの基本を指導した。

表 12 1998 年度前期 授業グループ別リスニングテスト平均点の比較 n=各群 24

授業グループ	Form A (1998.4)	Form B (1998.7)	伸び (%)	t	p	レベル別平均点の伸び
S (Summary)	60.4	63.1	4.47	1.02	>0.2	高: 81.3 ⇒ 73.9
S D	17.80	13.21				中: 59.1 ⇒ 62.6
D (Dictation)	61.0	59.3	-2.79	-0.63	>0.2	高: 82.5 ⇒ 71.5
S D	17.88	15.21				中: 58.8 ⇒ 58.3
						低: 41.9 ⇒ 48.0

df=23, F=0.991, p>0.05 (プリテスト)

半年を経過した前期修了時点 (1998 年 7 月) に、2つのクラスで、指導方法による結果の違いが出ているかどうか、その途中経過を見るために、リスニング・テストと聴解・コメント作文なるものを実施した。リスニング・テストについては、JACET Basic Listening Comprehension Test の Form A を 4 月に、Form B を 7 月に実施した。平均点を比較すると (表 12)、S群が Form A よりも Form B のほうが僅かに上回っているのに対して、D群は逆に Form B のほうが下回っている。ただし、有意差が見られるほどの差ではない。また、高・中・低別の平均点の伸びも若干異なるものがある。

表 13 1998 年度前期 授業グループ別聴解・コメント作文テスト平均点の比較

(5 段階評価)

n=各群 24

授業グループ	内容	構成	語彙	文法	メカニックス
S (Summary)	2.73	2.67	2.67	2.33	2.73
S D	1.16	1.18	1.11	1.05	1.10
D (Dictation)	2.20	2.20	2.40	2.40	2.87
S D	1.46	0.86	0.99	0.91	1.06
t	1.28	1.68	0.90	0.27	0.44
P	>0.2	>0.1	>0.2	>0.2	>0.2

上記のテストの他に、前期修了時点だけ、聴解・コメント作文を実施した。このテストは、英語の文章 (JACET Intermediate Listening Comprehension Test, Part 4) を聞いて、それに対するコメントを書かせるものである。5段階のホリスティック評価を2人で行ったが (信頼度 0.78)、表 13 で見るとおり、平均点では、

内容と構成と語彙でS群がやや高く、文法とメカニックスの面でD群が少し高いという結果が出た。中でも、構成の面での差が他よりも大きい。これらの違いが指導方法によるものかは不明であるが、いずれも有意差があるほどの開きはない。この傾向が後期の授業を継続するにつれて一層強まるのか、あるいは、たまたまこのような結果になったのかどうか、注視していく必要がある。

## 結び

L1教室を利用して、リスニングの指導を中心におきながら、サマリー・ライティングの指導を短時間導入した経過と結果を報告した。今までに提供したデータだけでは、サマリー・ライティングがリスニング指導に役立つという統計的な確証はない。しかし、同時に20分を割愛して、リスニングだけの指導からサマリー・ライティングを含めた指導に割り振っても、学生のリスニング能力伸長にマイナスになるとは考えにくい。むしろ、学生の立場からはリスニングの仕方にメリハリができるし、教師の立場からも、授業外で行う課題の提示なども含めて、授業の幅が出てくるというメリットがあるように思われる。同時に、「書く」という運用能力が向上するならば、いわば一石二鳥である。

ただ、問題は週1回という普通授業の中で、真に違いが出るような効果をあげられるかどうかは疑問である。一方、データを出すためのテスト方法や評価の仕方も確立されているとは言い難い。

いずれにしても、学生の積極的な学習参加を促すことが大切であり、聞く力と書く力を同時に伸ばすという、一見欲張った授業をさらに改善し、一層効果のある授業を模索していきたい。

## 注

(注1) 廣田、岡田、奥村、時岡(1995)が近畿7大学約1,000名に実施したアンケートによれば、「授業時間以外に(宿題を含めて)やさしい英語で書かれた新聞・雑誌記事・物語などを自分で選んで、楽しみや情報のために読んだ経験がありますか。」の問いに対して、「まったくない」「ほとんどない」と応えた者が合わせて57.5%いる。

(注2) 奥村(1993)、「Speakingの指導に効果的な faster writing」(日本英語教育学会関西支部・英語教育研究17)は、制限時間内(5分)にできるだけ多く、早く書く faster writing の指導を1年間にわたって、週1回10分間程度行った結果、ライティング・フルーエンシーが高まったと同時に、スピーキング・フルーエンシーが更に著しく向上した実践を述べている。

## 参考文献

- 英語教育実態調査研究会(代表 小池)(1990)。「わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合研究」。
- Ferris, D. (1994). Lexical and Scientific Features of ESL Writing by Students at Different Levels of L2 Proficiency, *TESOL Quarterly*, 28(2), 414-420.
- 廣田、岡田、奥村、時岡(1995)。「大学における英作文指導の在り方：英作文実態調査の報告」, JACET 関西支部英作文指導研究会紀要第1号。
- Homburg, T. (1984). Holistic Evaluation of ESL Composition: Can It Be Validated Objectively? *TESOL Quarterly*, 18(1), 87-107.

Jacobs, H., Zinkgraf, S., Wormth, D., & Hughey, J. (1981). *Testing ESL Composition: A Practical Approach*. Rowley: Newbury House.

Okumura, K. (1997). Summary Writing in the Reading Classroom. 「大学における英作文指導の在り方：実践研究の報告」. JACET 関西支部英作文指導研究会紀要第2号、 pp. 13-24。

Rivers, O. (1992). *Teaching Languages in College*, National Textbook Company, USA.

## Abstract

Since little importance is attached to writing in the English classroom in Japan, the author has tried to teach writing even in the reading classroom for several years. This paper reports on the introduction of summary writing into the listening classroom. Twenty minutes out of ninety every week were used for summarizing practice, which has been found to have a favorable effect both on listening ability and on writing ability. The questionnaire given at the end of the course reveals that most of the students agree to the idea of writing summaries in the listening classroom.

# Nietzsche and *Samsāra*: Suffering and Joy in the Eternal Recurrence \*

Hoyu ISHIDA

## INTRODUCTION

Whether it be his religious preoccupation with the eclipse of God, his preposterous assessment of Bizet's *Carmen* as the greatest opera ever written, or his transcendence as a visionary and poet of the very Enlightenment mechanism he seems to have espoused as a critic of traditional metaphysics, again and again the advocate of the Superman uses his strident voice to describe the suffering of finite human beings. His dazzling psychological insights and his devastating destruction of cant are in constant tension with his aim to overcome nihilism and to save the modern soul not only from the idolatry of false prophets but also from the tyranny of absolute cognition yielding a meaningless universe in which to be alive. As an Apollonian, Nietzsche may be compared with Voltaire's shredding the errors of his day, but he was also a highly self-conscious Dionysian in accord with Kierkegaard's injunction that "truth is subjectivity." There is no simple Nietzsche in any single tradition except those who cannot bear to face, as Nietzsche did, the terrors of existence in their awesome concreteness.<sup>1</sup>

In *The Buddhist Nirvana and Its Interpreters*, Guy Richard Welborn asserts that Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900) was greatly influenced by Indian studies in his philosophy and works.<sup>2</sup> Welborn says, for instance, that the title *Thus Spoke Zarathustra* brings to mind the reflex of the Buddhist Pali Canon: *evaṃ me sutaṃ* ("thus have I heard"), and that

---

\* This paper was originally presented at the IASBS European District Conference at Oxford University on August 8, 1998.

"passages suggesting Buddhist parallels appear on every page"<sup>3</sup> of the *Zarathustra*. Welborn then singles out the three most important interrelated items among many aspects of Nietzsche's philosophy which could be influenced by or hinted at his Indian studies. These three items are: (1) the notion of the eternal return and the accompanying idea of its creative potential as the two may relate to Indian theories of *saṃsāra*; (2) Nietzsche's Zarathustra compared to the bodhisattva ideal in Buddhism; and (3) his concept of transvaluation and its possible ties with his own understanding of the Buddhist *nirvāṇa*.<sup>4</sup> Welborn, however, is not saying that Nietzsche was a Buddhist. He is insisting that there is no basic conflict between Nietzsche and Buddhism on several important issues, and that Nietzsche's presentations reflect Buddhist influences.<sup>5</sup>

This paper first examines some of Nietzsche's philosophy and Buddhist doctrine while limiting the discussion to Nietzsche's view on morality and equality for the herd, his theory of the eternal recurrence, and the Buddhist concept of *saṃsāra* ("transmigration; perpetual repetition in the course of mundane existence--conditioned becoming"). It then tries to see the background of Nietzsche's philosophy in analyzing the role of his severe experiences--suffering from sickness and rejected love in his life, seeking and hopefully suggesting what then can be done as people today are living in a chaotic world of *saṃsāra* in confusion and disorder. Nietzsche accepted reality and things as they were in a Dionysian affirmation with *amor fati* ("joy of fate"), trying to live the will to power as the overman.

### ( 1 )

Nietzsche is fundamentally pessimistic about the world or the way the world is. He sees that there is no order in the world for things to correspond to; there is nothing that we can claim to be totally and absolutely true. There is neither order nor purpose in the world, neither things nor facts, nothing whatever to which our beliefs can correspond. So Nietzsche claims that our beliefs are false. This is the "incurable pessimism"<sup>6</sup> of Nietzsche. Man finds it difficult and hopeless to function in such a world without supposing external source(s) of authority and significance, so we instinctively create and worship God or science, and further, conscience, reason, social instinct, history, or morality, in order to preserve ourselves.

Morality, for example, is the will to power for the herd. Nietzsche in *The Will to Power* says that in European history since Socrates, people have attempted to make moral or religious values dominate over all other values. Moral values have been the guide and judge of

their "life," "knowledge," "the arts," and "political and social endeavors."<sup>7</sup> He then says that three powers are hidden behind these moral values. These are: (1) the instinct of the herd against the strong and independent; (2) the instinct of the suffering and underprivileged against the fortunate; and (3) the instinct of the mediocre against the exceptional.<sup>8</sup> According to Nietzsche, this movement has possessed an enormous advantage, although "much cruelty, falseness, and narrow-mindedness have assisted it."<sup>9</sup> In his argument against Darwin's theory of evolution or natural selection, he also mentions that while the higher types of man--the strong, the independent, the fortunate, and the exceptional--are rarely achieved and have to "maintain superiority with difficulty," the lower or weak types--the herd--"are favored by a compromising fruitfulness,"<sup>10</sup> thereby inevitably dominating society and being able to survive much easier.

Nietzsche senses that this movement of the herd is not healthy, claiming that there are problems in this tradition, especially in terms of the Christian morality that he is familiar with. In Christian morality, says Nietzsche, the occasion of the highest honors is the time when every man is considered "as an object for others."<sup>11</sup> What Nietzsche is saying here is that an individual is not highly honored or evaluated highly in morality if one considers things just for one's own sake. However, if one puts the major priority on others, then one receives high honor. Another problem, according to Nietzsche, is the idea of "equality." He says that "this is so insipid, so obviously crazy," since "we are supposed to make exactly the same demands on ourselves as we make on others," although it is "felt to be holy, of a higher rank"<sup>12</sup> by the herd.

Ideas like "every man as an object for others" and "equality" that the herd consider as high virtues or morality have accumulated in the herd's mind as if they are the core legitimacy for making any judgments. These ideas have formulated the superego of the herd making them believe that they have to do things for the sake of others as good moral men, and that everything is equal, thereby suppressing the id or libido of the herd. Freud said that the civilization created by the operation of the superego has produced discontent in the human species since the id is always suppressed. Nietzsche explained that this morality of the herd is the problem. People in nature like to do things freely for themselves, but not for the sake of others. If one is programmed to do things willingly for others, then one is really sick. Nietzsche then says that "we all thirst after distinction"<sup>13</sup> but not after equality. He seems not to be saying, however, that we should all become selfish, but that we all have different interests and interpretations. Therefore, the idea of "equality" under any condition (for example under or before God) cannot be granted. While

Freud sees discontent in civilization, Nietzsche sees the notions of "every man as an object for others" and "equality" as problems of the herd.

Nietzsche says that "the whole of European morality is based upon what is useful to the herd."<sup>14</sup> Since the herd or the weak types of man can survive more easily while the strong or higher types do not last but perish easily since they have to maintain their superiority with much difficulty, explains Nietzsche, it is the herd who are the ones who have created the Western civilization and moral values. Based on these moral values and judgments, Nietzsche lists the conditions and desires that are praised: "peaceable, fair, moderate, modest, reverent, considerate, brave, chaste, honest, faithful, devout, straight, trusting, devoted, sympathetic, helpful, conscientious, simple, mild, just, generous, indulgent, obedient, disinterested, unenvious, gracious, industrious...."<sup>15</sup> Nietzsche, however, says that they "are none of them felt to be 'good' for their own sake."<sup>16</sup> Rather, these conditions and desires are all fictions of morality, religion, and civilization, which keep people far from their drives or instincts by which they live the will to power.

For the sake of survival, preservation, and protecting themselves from the privileged ones, the herd have created their tradition or movement, though, says Nietzsche, it is *sick* and *unhealthy*. Is Nietzsche therefore saying that morality or civilization should not have been created by the herd? Should the privileged types have been the ones who govern society and are responsible for civilization? What would happen if the privileged ones created morality or civilization instead? Nietzsche does not answer these questions specifically but criticizes morality, which has dominated the Western world, and sees its values such as "every man as an object for others" and "equality" as problems, since these values have been created by the weak types of man for their survival and preservation and they have suppressed man's drives and wills.

To Nietzsche, the world is "existence as it is, without meaning or aim, yet recurring inevitably without any finale of nothingness: 'the eternal recurrence'." Nietzsche calls this "the most extreme form of nihilism: the nothing (the 'meaningless'), eternally!"<sup>17</sup> He elaborates more on the existence of the world:

The world exists: it is not something that becomes, not something that passes away. Or rather: it becomes, it passes away, but it has never begun to become and never ceased from passing away--it maintains itself in both.--It lives on itself: its excrements are its food.<sup>18</sup>

The world becomes itself and lives on itself. Therefore, there is no beginning nor ending. Nietzsche expounds on the world more in detail:

This world: a monster of energy, without beginning, without end; a firm, iron magnitude of force that does not grow bigger or smaller, that does not expend itself but only transforms itself; as a whole, of unalterable size, a household without expenses or losses, but likewise without increase or income; enclosed by "nothingness" as by a boundary; not something blurry or wasted, not something endlessly extended, but set in a definite space as a definite force, and not a space that might be "empty" here or there, but rather as force throughout, as a play of forces and waves of forces, at the same time one and many, increasing here and at the same time decreasing there; a sea of forces flowing and rushing together, eternally changing, eternally flooding back, with tremendous years of recurrence...this, my *Dionysian* world of the eternally self-creating, the eternally self-destroying, this mystery world of the twofold voluptuous delight, my "beyond good and evil," without goal, unless the joy of the circle is itself a goal; without will, unless a ring feels good will toward itself--do you want a name for this world?<sup>19</sup>

This world repeats itself and recurs everlastingly without any specific meaning or purpose. However, Nietzsche seems to be throwing out, at the same time, a kind of hope. He says that this world is without goal "unless the joy of the circle is itself a goal" and is "without will unless a ring feels good will toward itself." He also says that "this world is the will to power--and nothing besides!" and that "you yourselves are also this will to power--and nothing besides."<sup>20</sup>

Nietzsche seems to be advising that there is nothing wrong with the way the world is, though it may sound pessimistic and desperate. If one lives along with the way this world is, leaves oneself to it, and does not count on the superficial items such as religion, science etc., then there is a new life in affirming a new way of seeing things as they are--though full of suffering and pain, but with joy, in which there is no longer pessimism. Just by changing or converting one's conventional or unconsciously suppressed view and being able to accept the new way, one is totally free from falsity. "This world is the will to power" and one oneself is "also this will to power," which is the only truth and reality for Nietzsche. This affirmation of

reality of the eternal recurrence with joy is called *amor fati*, which will be discussed later.

( II )

According to Buddhism, in general, all things are composite and dependent on each other. As a corollary to the fact that all things are composite, they are transient and impermanent, since the composition of all aggregates is liable to change with time. There is no exception to this rule. Moreover, being essentially impermanent, they have no eternal self as an essence or entity, and no abiding individuality. Also, all beings are inevitably liable to sorrow. Man, for example, experiences suffering or sorrow, for he or she is attached to things, which are essentially impermanent. This threefold characterization of the nature of the world *saṃsāra* is in short a) impermanence (*anitya*), b) no self (*anātman*), and c) suffering (*duḥkha*).

The inevitability of suffering or sorrow is explained through the teaching of cause and effect, for instance, in the Twelffold Formula of Causation. This formulation of the causal principle in early Buddhist texts is stated in the following way:

When this exists, that exists or comes to be: on the arising of this, that arises. When this does not exist, that does not exist or come to be; on the cessation of this, that ceases. That is to say:

- on ignorance depend dispositions;
- on dispositions depends consciousness;
- on consciousness depends the psychological personality;
- on the psychological personality depend the six 'gateways';
- on the six 'gateways' depends contact;
- on contact depends feeling (or sensation);
- on feeling depends craving;
- on craving depends grasping;
- on grasping depends becoming;
- on becoming depends birth;
- on birth depend aging and death.

In this manner there arises this mass of suffering.<sup>21</sup> The Twelffold Formula of Causation traces the cause of old age and death (the cause of fundamental suffering) back to ignorance and teaches that man can totally overcome suffering or sorrow by getting rid of ignorance, thereby attaining the state of enlightenment. Thus, under the principle that all events take place in terms

of cause and effect, change is to be understood as the process of events--cause and effect take place accordingly in *saṃsāra*.

In *saṃsāra* or transmigration, it is generally said that there are six rebirth realms or destinies. They are from the bottom 1) the hells, 2) hungry ghosts, 3) animals, 4) *asura* ("fighting beings"), 5) human beings, and 6) *deva* ("heavenly beings").<sup>22</sup> According to one's karmic deeds, one is to be reborn again and again in one of these six realms and repeats everlastingly without any meaning, unless one cuts off the cycle of birth-and-death and becomes free from it. This world of *saṃsāra* is meaningless in a sense, since it is an unenlightened realm and is full of suffering or sorrow. Buddhism, especially Mahāyāna Buddhism, however, does not stress the notion that man transmigrates from one life to another by births and deaths according to his or her karma, but rather that the theory of six rebirth realms describes the way *saṃsāra* is: it merely repeats itself over and over again and is beginningless and endless. One can be happy in morning feeling as he or she were in heaven, while the same person may become sad at night as if he or she were in hell. Even one telephone call could drastically change the state of one's heart/mind--from heaven to hell or from hell to heaven. Enlightenment (*nirvāṇa*) is then total freedom from this karmic repetition.

Early Buddhism or Theravāda Buddhism has a tendency of viewing *nirvāṇa* apart from *saṃsāra*: the notion is dualistic. Therefore, *nirvāṇa* is a liberation from *saṃsāra*. On the other hand, Mahāyāna Buddhism sees that *nirvāṇa* and *saṃsāra* are one. This does not literally mean *saṃsāra* or birth-and-death is *nirvāṇa*. With realization or awareness (which means becoming a *buddha*), one enters *nirvāṇa* in *saṃsāra*. "*Kleśa* (evil passions or defilements) are then *bodhi* (enlightenment)" (*bonnō soku bodaī*) and "birth-and-death is then *nirvāṇa*" (*shōji soku nehan*). Of course, "*kleśa* are then *bodhi*" does not literally mean *kleśa* are *bodhi*, and "birth-and-death is then *nirvāṇa*" does not literally mean birth-and-death is *nirvāṇa*. *Kleśa* are not *bodhi* and birth-and-death is not *nirvāṇa*. Yet *bodhi* is sustained by *kleśa* and *nirvāṇa* is sustained by birth-and-death. *Kleśa* and *bodhi* are extreme opposites according to our conceptual meanings, but they are closely interrelated in the sense that they share the same ground of the unity of all. *Kleśa* are not the same as *bodhi* but one cannot exist without the other. The same can be said of the interrelationship between *nirvāṇa* and *saṃsāra*.<sup>23</sup> Nāgārjuna, for instance, expounds the sameness of both realms with the doctrine of *śūnyatā* ("emptiness"). While unenlightened ones experience it as *saṃsāra*, to enlightened ones it is *nirvāṇa*. Therefore, *nirvāṇa* is to be realized in this world of *saṃsāra*. The *Vimalakīrtinirdeśasūtra* stresses that non-duality or enlightenment is

in the world but not of the world. Among many schools of Buddhism, there are different theories as to *nirvāṇa* and *saṃsāra*, but it is always essential in any school that the notion of *saṃsāra* symbolizes perpetual repetition, impermanence, and suffering.

( III )

Arthur C. Danto in *Nietzsche as Philosopher* refers to Buddhism as the "Nihilism of Emptiness," saying that Buddhism holds that:

the world we live in and seem to know has no ultimate reality, and that our attachment to it is an attachment to an illusion. Reality itself has neither name nor form, and what has name and form is but a painful dreaming from which all reasonable men wish to escape if they knew the way and knew that their attachment was to nothingness. Life is without sense and point, there is a ceaseless alternation of birth and death and birth again, the constantly turning wheel of existence going nowhere eternally; if we wish salvation, it is salvation from life that we must seek....<sup>24</sup>

Danto's understanding of the world as *saṃsāra* is appropriate in viewing its meaningless repetition. Danto is saying, however, that Buddhism is a nihilistic religion, since it does not advocate the ultimate reality as such and says everything is empty. This definition of Buddhism as nihilism is the way Buddhism had been introduced and understood by and among the Western schools until recently. The teaching of Buddhism, however, does not advocate nihilism but affirms the notion of true reality instead.<sup>25</sup> The ultimate reality in Buddhism is called *tathatā* ("thusness" or "suchness")--the state of things as they are, which is true and real in Buddhism. But the way human beings see the world is provisional and false, since they see through their own deluded interpretations. Reality maintains itself as it is; yet people interpret it differently and respectively. For instance, rain is rain, but while farmers who need water appreciate rain, baseball fans waiting impatiently for the world series to be played hate the same rain when the game is canceled. What Buddhism is saying here is that rain is not the universal cause which makes people happy or unhappy but people themselves, who are responsible for happiness or unhappiness of their own, and that people are essentially self-centered, unenlightened, and deluded. Therefore, the world looks (and is) an illusion to those unenlightened ones; and suffering or sorrow arises as they are attached to whatever is conditional and impermanent of this samsaric world. Above all, Buddhism affirms ultimate reality in terms of *tathatā*, though

some philosophical school names it *śūnyatā* or emptiness, it is always basic in Buddhism that "the real emptiness is the profound being" (*shin kū myō u*): while "the real emptiness" was expounded by Nāgārjuna in terms of a "static" aspect of reality (such as *śūnyatā*), "the profound being" could be attributed to Vasubandhu in terms of a "dynamic" aspect of reality.

When one is deluded or unenlightened, one's world is *saṃsāra*, in which things are impermanent, changing, and transforming (or transmigrating) meaninglessly: it is the negative and pessimistic world. The whole world is beginningless, endless, and self-supporting (not increasing or decreasing).

In examining the notion of *saṃsāra*, we find that the theory of Nietzsche's eternal recurrence has many things in common with that of *saṃsāra*. I am not insisting that both theories are identical, because while Nietzsche discusses the way the world is, Buddhist *saṃsāra* implies the realm of this mundane "unenlightened" world and is more complex (depending on schools) with the notion of *karma*. However, we find many similarities between the two in the way they interpret this mundane world as we have seen and in the attitude that they try to find the way out from this mess--while Nietzsche seems to be suggesting that we should go along with the way things are, affirming one's fate and living the will to power with *amor fati*, Mahāyāna Buddhism generally claims enlightenment is to be attained in this realm by realizing *tathatā*, the state of things as they are, and by becoming "awakened."

#### ( IV )

There seem to be, in Nietzsche's life, two vitally important experiences which must have played a significant role in bringing about his philosophy, which sounds pessimistic or negative but very existentialistic and realistic when one directly faces reality of one's life. These two elements in his experiences are "sickness" and "not being granted in love." Nietzsche suffered from persistent headaches and eye-trouble from his childhood days and was rejected twice in marriage proposals.

In Buddha-Dharma, the First Noble Truth is "Life is *duḥkha*" or "All existence is suffering." Without understanding this reality, one will be unable to attain the final goal of *nirvāṇa* or enlightenment. Buddhism is therefore sometimes misunderstood as a pessimistic religion because of its claim of *duḥkha*. It is neither a pessimism nor an optimism. Accordingly, there are eight kinds of *duḥkha* or suffering in human life: birth, old age, sickness, death, separation from beloved ones, meeting with disliked ones, and the suffering or pain from the

vigor of the five aggregates composing one's body and mind.

Nietzsche suffered from sickness throughout his life. Nietzsche was born on October 15, 1844. During the summer of 1856, at age of eleven, he was released from school because of persistent headaches and eye-trouble. In 1865, Nietzsche suffered from syphilis and he was treated by two doctors for a syphilitic infection during 1867. In 1871, at age of twenty-six, Nietzsche began to suffer from regularly recurring periods of exhaustion, and thereafter was never really well. In 1875, Nietzsche suffered a general collapse and in the following year he was granted a long period of absence from the University of Basel because of his persistent ill-health. In April of 1879, Nietzsche suffered the worst and most protracted attack of migraine and sickness he had yet experienced. When his sister Elizabeth came to meet him in Basel, she found him apparently on the point of death. Nietzsche then petitioned the University for release from all duties. That year, he suffered severe attacks on 118 days. In 1888, Nietzsche experienced what doctors called a delusive improvement in his health, and in the last quarter of the year was the victim of a "morbid euphoria" which was the immediate prelude to complete collapse. On January 3, 1889, Nietzsche collapsed in the Piazza Carlo Alberto, Turin. When he recovered consciousness, he was no longer sane. He became paralyzed and died on August 25, 1900.<sup>26</sup> Nietzsche's major works were all written during, between, and/or after his massive suffering experiences of sickness and illness.

Although Buddha-Dharma says that life is *duḥkha*, it is very hard to really accept it. When we get sick, we say, "Why me?" When we are healthy, we do not want to think about getting sick. Yet we do get ill. When we become seriously ill, we get depressed and weak not only physically but also spiritually. We hold a negative and pessimistic view of the world without hope for today and for the future. When we recover from sickness, however, even for a short period of time, we begin to really appreciate what we have. Just being able to feel alive again pleases us and encourages our very existence.

Walter Kaufmann says in *Nietzsche: Philosopher, Psychologist, Antichrist*:

Developing the picture of the Dionysian fever, one can express Nietzsche's point in terms of a dialectical conception of health. It would be absurd to say the work of healthy artists is *eo ipso* beautiful, while that of the ill must be ugly. Keats was consumptive, Byron had a clubfoot, Homer was blind and Beethoven deaf. Even Shakespeare and Goethe--Nietzsche thinks--must have experienced a profound defect: artistic

creation is prompted by something which the artist *lacks*, by suffering rather than undisturbed good health, by "sickness as great stimulants of his life."<sup>27</sup>

Esthetics in art and religious awareness often play an important role on our becoming aware of being alive, being allowed to live, and being made to live. We sometimes encounter "something unbound" or "something unsurpassed." In terms of appreciating esthetics in art, Nietzsche loved music. Even though he had a falling out with Wagner later in his life, he loved Wagner and must have continued to love Wagner and his music. Nietzsche was also greatly inspired by the Ode to Joy in Beethoven's Ninth Symphony. He experienced, through and after his suffering of massive attacks of illness, the emotional and sensual joy of the Dionysian world of art, which must have helped Nietzsche break out of his shelled "self" or "ego" and become aware of something unbound, some hope--the hope for the will to power. This hope he could not find in the traditional Western theology or philosophy. This is where Nietzsche got separated in his philosophical conclusion from Schopenhauer (1788-1860) in whose understanding the final stage or step involved a negation of the will to live. Nietzsche was not able to negate the eternal recurrence. He saw it as it was. As Nietzsche says that "this world is the will to power," and that "you yourself are also this will to power--and nothing besides,"<sup>28</sup> we cannot escape from it, no matter how painful it can be, for it is reality and we have to find "breaking through" in the world now.

If we put this in the metaphor of Buddha-Dharma, it is like a lotus flower painfully but beautifully growing up and blooming through the mud. In terms of religious experience according to William James, Nietzsche can be categorized as a person of "the twice-born" or "the sick soul" type, as compared to "the once-born" or "the healthy-mindedness" type.<sup>29</sup> Shinran (1173-1262), the founder of Shin Buddhism, has something in common with Nietzsche insofar as both are in the same category.<sup>30</sup>

The second important element of Nietzsche's personal experiences in forming the core of his philosophy is his rejection from two marriage proposals. First in 1876, Nietzsche proposed marriage to Mathilde Trampedach and was turned down. The second time he was rejected was when he proposed marriage to Lou Salomé. Walter Kaufmann says in *Nietzsche*:

Nietzsche's relationship to Lou Salomé (1861-1937) had been far closer and meant much more to him. She was, he thought, of very unusual intelligence and character, and she had written a "Hymn to Life" which he

considered magnificent and set to music. Later, long after his break with Lou, he had the poem published with the score and still referred to it with high praise in *Ecce Homo*. He had found a person to whom he could speak of his innermost ideas, receiving not only intellectual understanding but a response based on Lou's own experience.<sup>31</sup>

Nietzsche not only was in love with Lou but needed her as a life partner, though she was seventeen years his junior. Lou was only twenty-one years old when she met Nietzsche. But she was the least strait-laced and most entertaining woman Nietzsche had yet met. Lou was a new-style liberated woman dedicated to independence. She was also the most intelligent and Nietzsche fell in love with her. At Lucerne in May, 1882, Nietzsche proposed to her in person and was again rejected.<sup>32</sup> Along with his physical suffering, he also had mental, spiritual, and sensual suffering. His sense of existence of himself was surely gone! He was deprived of everything he clung to. He must have experienced the bottom of life, hell. Nietzsche was emotionally and physically exhausted this year.

In January of the following year, 1883, however, Nietzsche wrote *Thus Spoke Zarathustra*, Part One, which helped him to recover and revive. On February 13, his great friend Wagner died. One happy note was that Nietzsche became reconciled with his sister Elizabeth. He finished *Zarathustra*, Part Two. In the following year, he wrote Part Three and began the preparation of *The Will to Power* and so on. In the depth of his suffering, Nietzsche produced many of his major works. Right in the middle of *saṃsāra*, Nietzsche was trying to find the way out. He knew that he was not able to escape from reality no matter how painful it was. What then could be done? Nietzsche had to live. He had to live in the middle of suffering and pain. Right in the middle of *duḥkha*, Nietzsche might have been inspired or revealed, consciously or unconsciously, through the universal "Primal Vow" to get recovered or revived.

### ( V )

Nietzsche was not a Buddhist in terms of being a person who takes refuge in the "Three Treasures"--Buddha, Dharma, and Sangha. The way he sought the path, however, was not totally different from the very basics of the Buddhist way. One should accept reality or, at least, one should not escape from it, reality of life as *duḥkha*. *Duḥkha* is painful and full of suffering. In Shin Buddhism, if one accepts things as they are and entrusts oneself to the working of Amida Buddha in *saṃsāra*, then one becomes liberated. One lets go of one's self-

power or self-endeavor and further becomes aware that one's attainment of that realization of Amida Buddha's Wisdom and Compassion has been brought about by the working of Amida Buddha, the realization being referred to as *shinjin* in Shin Buddhism. Nietzsche was not a Buddhist. Yet his analysis of existence is very close to that of Buddhism and is severe and strict. Some may call it pessimistic, but it is realistic and honest. Only through understanding this reality of *duḥkha* will one be able to find the final goal of liberation or emancipation. Only through total self-negation in an ultimate sense will one be able to encounter "something unbound" such as Amida Buddha encompassing one's whole existence, including one's "suffering and joy," "delusion and enlightenment," and "birth and death."

Shan-tao (613-681), a Chinese Pure Land master who greatly influenced Shinran analyzes the awakened heart/mind or profound realization, which is called religious experience. This experience of awareness is simultaneously made up of two qualities. One is the awareness of oneself or the "profound realization of oneself as a limited sentient being" (*ki no jin shin* in Japanese), and the other is the awareness of Amida Buddha or the "profound realization of the Dharma" (*hō no jin shin*). The profound realization of oneself as a sentient being is to "deeply recognize that we are ignorant sentient beings filled with evils in the realm of birth and death, and that we have been constantly submerged and transmigrating from time immemorial with no hope of liberating ourselves." The profound realization of the Dharma is to "deeply recognize that the Forty-eight Vows of Amida Buddha will take in and save sentient beings, and that we will assuredly gain birth in the Pure Land through the power of Amida Buddha's Vow without doubt or anxiety."<sup>33</sup> In short, one's self-negation comes through encountering "something unbound" or encountering "something unbound" comes about through one's self-negation. These two qualities cannot be separated.

Nietzsche does not refer to Amida Buddha as such. He was born and raised in Europe with a strong Christian background some one hundred and fifty years ago. Yet his introspection into "existence" is Buddhistic, especially in terms of Mahāyāna Buddhism. Nietzsche had to live in the middle of *saṃsāra*. He had to continue to live in this world. He underwent *duḥkha*, and in seeing reality he sought the overman or superman (*Übermensch*). He tried to go along with the way things were living the will to power. Walter Kaufmann says:

Nietzsche's philosophy of power culminates in the dual vision of the overman and the eternal recurrence. The two conceptions have seemed contradictory to many readers, and most interpreters of Nietzsche's

thought have simply disregarded the recurrence. In view of Nietzsche's own conviction that the two ideas belonged closely together and that the doctrine of recurrence was the climax of his whole philosophy, the usual approach must be considered perilous. The present exposition of Nietzsche's philosophy, on the other hand, allows for an understanding of both conceptions in their intimate relation, and it obviates any lengthy argument: for the two ideas will be seen to fit quite naturally into the setting we have provided.<sup>34</sup>

Nietzsche says in *Thus Spoke Zarathustra*:

Just now my world became perfect; midnight too is noon; pain too is joy; curses too are a blessing; night too is a sun--go away or you will learn: a sage too is a fool.

Have you ever said Yes to a single joy? O my friends, then you said Yes too to *all* woe. All things are entangled, ensnared, enamored; if ever you wanted one thing twice, if ever you said, "You please me, happiness! Abide, moment!" then you wanted *all* back. All anew, all eternally, all entangled, ensnared, enamored--oh then you *loved* the world. Eternal ones, love it eternally and evermore; and to woe too, you say: go, but return! *For all joy wants--eternity.*<sup>35</sup>

Nietzsche came to thoroughly accept reality or things as they were. Yet he not only accepted what was given or destined to him, but also came to love both reality and destiny. He lived both, and living was its own reward, in which Nietzsche tried to find out who he was. He loved the world--the eternal recurrence--though it is filled with suffering and pain. The term or idea of Nietzsche's love of fate (*amor fati*) was first introduced in *The Gay Science*.<sup>36</sup> Nietzsche later says in *Ecce Homo*, "My formula for greatness in a human being is *amor fati*: that one wants nothing to be other than it is, not in the future, not in the past, not in all eternity. Not merely to endure that which happens of necessity, still less to dissemble it - all idealism is untruthfulness in the face of necessity - but to *love* it..."<sup>37</sup> Nietzsche is here saying that one wants nothing to be different in the past, present, and future. One just needs to accept things in the past, present, and future as they are. Leslie Paul Thiele then says in *Friedrich Nietzsche and the Politics of the Soul: A Study of Heroic Individualism*, "Here acceptance is not enough. It cannot be mixed with hope to yield a higher grade of satisfaction. One must indeed *love* one's

fate to desire that it be as it was without the slightest modification.... True love of fate demands that one no longer need hope in order to live joyfully."<sup>38</sup> Nietzsche in *The Will to Power* expounds "a Dionysian affirmation of the world as it is" and asserts that "it wants the eternal circulation." He then adds, "The highest state a philosopher can attain: to stand in a Dionysian relationship to existence--my formula for this is *amor fati*."<sup>39</sup>

## CONCLUSION

Bodhisattvas in Buddhism are all aware of *duḥkha* of sentient beings, so that they have established Vows to save them all. This bodhisattva ideal does not mean just saving others in a common sense. Saving is an act of sharing. By saving others, one is able to save oneself. Everything is interrelated and nothing stands by itself without exception in the theory of *pratītya-samutpāda* ("interdependent co-arising"). The bodhisattva ideal is a very natural and spontaneous act or working of compassion of existence itself in *saṃsāra*, for bodhisattvas themselves are in *saṃsāra*. There is no other place but this *saṃsāra* where bodhisattvas are able to exist or abide, for they are with those who are suffering from *duḥkha*. There is nothing special superimposedly out there. What one can do in this world here and now is all one has. Some may say that this is only what they can have, while others may say they can have this much with deep appreciation.

Nietzsche lived in *saṃsāra*. He suffered greatly. He accepted things as they were, being filled with suffering and pain, knowing that it was all he had. There was no way out from reality as *duḥkha* except for accepting it. Through encountering and experiencing the Dionysian affirmation of the world, Nietzsche recovered and revived with joy of fate in the middle of the eternal recurrence, trying to live the will to power as the overman. This eternal recurrence itself is the source of not only suffering/pain but also *amor fati*. "Suffering" and "joy" are not able to be separated. They are "reality"--true and real--and worth living indeed. Nietzsche lived *saṃsāra*.

## NOTES

- 1) Geoffrey Clive, ed. *The Philosophy of Nietzsche* (New York: Meridian, 1996), p. ix.
- 2) Welborn, *The Buddhist Nirvana and Its Western Interpreters* (Chicago: University of Chicago Press, 1975), p. 184.
- 3) *Ibid.*, pp. 191-2.

- 4) *Ibid.*, p. 187.
- 5) *Ibid.*, p. 189.
- 6) Nietzsche, *Beyond Good and Evil* (Middlesex: Penguin Books, 1973), p. 67.
- 7) Nietzsche, *The Will to Power* (New York: Vintage Books, 1968), p. 156.
- 8) *Ibid.*, p. 156.
- 9) *Ibid.*, p. 156.
- 10) *Ibid.*, p. 363.
- 11) *Ibid.*, p. 156.
- 12) *Ibid.*, p. 157.
- 13) *Ibid.*, p. 157.
- 14) *Ibid.*, p. 157.
- 15) *Ibid.*, p. 161.
- 16) *Ibid.*, p. 161.
- 17) *Ibid.*, pp. 35-6.
- 18) *Ibid.*, p. 548.
- 19) *Ibid.*, p. 550.
- 20) *Ibid.*, p. 550.
- 21) David J. Kalupahana, *Causality: The Central Philosophy of Buddhism* (Honolulu: The University of Hawaii, 1975), p. 141.
- 22) The order of six realms is not always the same. For example, see: Richard H. Robinson and Willard L. Johnson, *The Buddhist Religion: A Historical Introduction*, 2nd ed. (Belmont, California: Dickenson Publishing Company, Inc., 1977), p. 36.
- 23) Hoyu Ishida, "Salvation for Oneself and Others: 'The Wish to Save All Beings' in the Present" in *The Pure Land, The Journal of the International Association of Shin Buddhist Studies*, New Series, Nos. 13-14, December 1997, p. 232.
- 24) Danto, *Nietzsche as Philosopher* (New York: The MacMillan Company, 1967), p. 28.
- 25) The notion of affirming ultimate reality is, for instance, expounded by Walpola Rahula in his *What The Buddha Taught* (New York: Grove Press, Inc., 1962).
- 26) Nietzsche, *Ecce Homo* (Middlesex: Penguin Books, 1992), pp. xx-xxx.
- 27) Kaufmann, *Nietzsche: Philosopher, Psychologist, Antichrist* (Princeton: Princeton University Press, 1974), p. 130
- 28) Nietzsche, *The Will to Power, Op. cit.*, p. 550.
- 29) William James, *The Varieties of Religious Experience* (New York: New American Library, 1958), pp. 76-139. First English publication, 1902.
- 30) Hoyu Ishida, *Myōkōnin O-Karu and Her Poems of Shinjin* (Kyoto: Nagata Bunshōdō & International Association for Buddhist Culture, 1991), p. 93.
- 31) Kaufmann, *Nietzsche, Op. cit.*, p. 48.

- 32) Nietzsche, *Ecce Homo*, *Op. cit.*, pp. xxxvii-xxxviii.
- 33) *Shinshū shōgyō zensho* I (Kyoto: Ōyagikōbundō, 1941), compiled, Shinshū shōgyō zensho hensansho, p. 534.
- 34) Kaufmann, *Nietzsche*, *Op. cit.*, p. 307.
- 35) Nietzsche, *Thus Spoke Zarathustra* (New York: Penguin Books, 1978), p. 323.
- 36) Nietzsche says, "I want to learn more and more to see as beautiful what is necessary in things; then I shall be one of those who make things beautiful. *Amor fati*: let that be my love henceforth!" in *The Gay Science* (New York: Vintage Books, 1974), p. 223.
- 37) Nietzsche, *Ecce Homo*, *Op. cit.*, pp. 37-8.
- 38) Leslie Paul Thiele, *Friedrich Nietzsche and the Politics of the Soul: A Study of Heroic Individualism* (Princeton: Princeton University Press, 1990), p. 201.
- 39) Nietzsche, *The Will to Power*, *Op. cit.*, p. 536.

#### BIBLIOGRAPHY

- Allison, David B, ed. *The New Nietzsche: Contemporary Styles of Interpretations*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1994.
- Clive, Geoffrey, ed. *The Philosophy of Nietzsche*. New York: Meridian, 1996.
- Danto, Arthur C. *Nietzsche as Philosopher*. New York: The Macmillan Company, 1967.
- Freud, Sigmund. *Civilization and Its Discontents*, tr. by James Strachey. New York: W.W. Norton & Company, 1989.
- Gardiner, Patrick L. *19th-Century Philosophy*. New York: The Free Press, 1969.
- Hollingdale, R.J. *Nietzsche*. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.
- Horvath, Nicholas A. *Essentials of Philosophy: Hellens to Heidegger*. Woodbury: Barron's Educational Series, 1974.
- Ishida, Hoyu. *Myōkōnin O-Karu and Her Poems of Shinjin*. Kyoto: Nagata Bunshōdō & International Association of Buddhist Culture, 1991.
- \_\_\_\_\_. "Salvation for Oneself and Others: 'The Wish to Save All Beings' in the Present" in *The Pure Land, The Journal of the International Association of Shin Buddhist Studies*, New Series, Nos. 13-14. Kyoto: Nagata Bunshōdō, 1997.
- James, William. *The Varieties of Religious Experience*. New York: New American Library, 1958.
- Kaufmann, Walter. *Nietzsche: Philosophy, Psychologist, Antichrist*. Princeton: Princeton University Press, 1974.
- Leslie Paul Thiele. *Friedrich Nietzsche and the Politics of the Soul: A Study of Heroic Individualism*. Princeton: Princeton University Press, 1990.
- Nietzsche, Friedrich. *Beyond Good and Evil*, tr. by R.J. Hollingdale. Middlesex: Penguin Books, 1973.
- \_\_\_\_\_. *Ecce Homo*, tr. by R.J. Hollingdale. Middlesex: Penguin Books, 1992.
- \_\_\_\_\_. *The Gay Science*, tr. by Walter Kaufmann. New York: Vintage Books, 1974.

- \_\_\_\_\_. *Thus Spoke Zarathustra*, tr. by Walter Kaufmann. New York: Penguin Books, 1978.
- \_\_\_\_\_. *Twilight of the Idols & The Anti-Christ*, tr. by R.J. Hollingdale. New York: Penguin Books, 1990.
- \_\_\_\_\_. *The Will to Power*, tr. by Walter Kaufmann. New York: Vintage Books, 1968.
- Rahula, Walpola. *What The Buddha Taught*. New York: Grove Press, Inc., 1962.
- Robinson, Richard H. and Willard L. Johnson. *The Buddhist Religion: A Historical Introduction*, 1st ed. Belmont, California: Dickenson Publishing Company, Inc., 1977.
- Russell, Bertrand. *A History of Western Philosophy*. New York: Simon and Schuster, 1945.
- Shinshū shōgyō zensho hensansho, compiled. *Shinshū shōgyō zensho*. Kyoto: Ōyagikōbundō, 1941.
- Solomon, Robert C. ed. *Nietzsche: A Collection of Critical Essays*. Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1973.
- Welborn, Guy Richard. *The Buddhist Nirvana and Its Western Interpreters*. Chicago: University of Chicago Press, 1975.

## Card Games for Language Learning

Walter KLINGER

In the last few years, collections of attractive clip-art drawings have become available on CD-ROMs. In this article, I will introduce three styles of card games that I have been developing with these drawings for use in the language classroom.

Students often say they want more practice in speaking the target language; these games, which can be played with a minimum of written text, or without any text at all, are intended to help the instructor in satisfying this request. A game, defined by Merriam-Webster as an “activity engaged in for diversion or amusement,” can be seen as an opportunity for the language being studied in perhaps more tedious textbook grammar study to be used in an apparently more realistic or authentic situation. In this way it disguises its ulterior function as grammar and sentence pattern practice.

The **Q&A Cards** combine drawings with short dialogue captions; a variation of the game has no written captions.

The **Battle Cards** are flash cards of pictures of Animals, Hobbies & Sports, Jobs, Objects, Food, and Famous Faces, for use in free talk, discussion, storytelling, pattern practice, vocabulary learning, and for playing *Slap!*, *Who Am I?*, *Bingo*, and *Charades*.

The **Storyline Cards** are pictures of scenes relating to Childhood, School Days, Home, Office, Medical, Danger, Holidays & Events, Emotions, Travel in Italy, Travel in Japan, Things Japanese, and Fairy Tales, and are also used for discussion and free talk.

### (I) Q&A CARDS

My Q&A games were inspired by the “Do Me A Favor” card game in Jill Hadfield’s *Elementary Communication Games* (Longman, 1984 ISBN0175556954). This was one of the most successful games I have used in my language classes insofar as it produced a great deal of animated talking and laughter among the players. “Do Me A Favor” has 20 pairs of pictures of everyday household activities; the object of the game being to find out which

player has the answer card that matches the question card. A player holding a question card makes a request with the pattern “Please (*do this for me*)” and the replies are either “Yes, sure!” or “Sorry, I’m busy.” The cards do not have any written captions, and the card pairs have non-identical pictures showing the action that needs doing and the completed action.

A similar game for beginner-level students, with written captions, is “Can Cards” in *Heinemann Children’s Games* by Maria Toth (Heinemann, 1995 ISBN0435294660).

For my Q&A games, I decided to use the same picture on both cards in a pair, and to include the captions written directly on the cards, allowing for a wider range of questions or short dialogues, and assuring that the players use grammatically correct sentences. Even with the captions written on the cards, the game is probably still too difficult for many language learners to play right away without going over the sentences before play.

Some captions can be quite long, particularly in the song lyric game, and players can become quite exhausted from having to say the same thing over and over before finding the player with the matching answer card. However, much of the hilarity of the game comes from this fairly inane repetition. While the point of the game is not necessarily to memorize the sentences, the repetition process no doubt serves a beneficial pedagogical process.

Certain pictures readily bring to mind suitable questions and answers; these can be used on Q&A card sets without captions. Students playing these games will inevitably produce many grammatically incorrect sentences; however, the act of struggling to say something on one’s own is also a worthwhile learning practice. Higher level players can of course be encouraged to make their own captions even for the Q&A games that originally already have written captions.

**Material:** One A4 size page has 8 pairs of Q&A cards = 16 individual cards. Two pages are used for a game = 16 pairs = 32 cards. *Written Style* cards have pictures and written captions relating to General Topics, Spring, Hot Days, Rainy Days, Phone, School, Home, Office, Medical, Travel, Idioms, Quotes, Poems, Movie Dialogue, and Rock, Pop, & Xmas Songs. *Blank Style* cards have just pictures, without written captions, referring to Time, Numbers, Objects-Doing Something, Signs, and Famous Places.

**Classroom Organization:** Students form circles of 4-6 players. In a group of 4 players, there are 8 cards for each player. For a group of 5 or 6 players, one pair of cards may be taken out and discarded before shuffling and dealing. One game can be played 3 or 4 times in a minimum of 30 to 40 minutes.

**Teacher Preparation & Classroom Procedure:** Choose two pages of Q&A cards. Photocopy one set for every group of 4-6 players. Slice up the sheets into individual cards and put them in envelopes. Demonstrate to the class how to shuffle and deal, and how to ask a question to one other player. Use an overhead projector to show the two pages, or hand out the sheets for groups to refer to. Read the captions aloud together with the class, or, for the blank-style cards, ask for and suggest suitable sentence patterns. Doing this should also help prevent the players from just showing the cards to each other to see if they have a match instead of saying the question.

Distribute the envelopes. Observe the groups playing to make sure they know how to play. After the standard game has been played once or twice, you might suggest alternate games, although groups will probably discover and invent new rules on their own initiative. When a group has finished playing, ask a question to see if anyone in the group can give an appropriate response.

*Additional Written or Oral Tasks:* Ask students to think of new captions for each card, or write what you could say if you don't have the matching card, or write a longer conversation based on the cards.

### ☆ Q&A Game Rules ☆

- ① In your group, decide who will be the dealer.

Decide if you will play clockwise or counterclockwise.

- ② The dealer shuffles and deals the cards face-down to each player.  
 ③ Pick up and check your cards. If you have any matching pairs in your hand, put them out.  
 ④ The first player (Player A) asks one question to one other player.

You can't ask **everybody** at the same time, just ask **one** other person.

For example, Player A asks Player C "*How about going swimming with me?*"

- ⑤ ♪ If Player C **does** have the answer card, Player C says the answer, e.g. "*OK, but I'm not a very good swimmer,*" and both cards are put out.

♪ If Player C **doesn't** have the answer card, Player C should think of an appropriate reply.

For example, Player C can say "*Sorry, I don't want to go swimming.*"

\*Try to say something better than just "*No.*"

Then Player A has to wait until his/her turn comes around again to ask someone else.

♪ For advanced level players: If Player C gives the correct answer, then Player A should give an additional response to continue the conversation, e.g., “*Well, that’s OK. I’m not a very good swimmer either, but let’s go anyway!*”

- ⑥ Next player (Player B) asks someone a question.
- ⑦ Continue in turn until all the cards are out.
- ⑧ Play again! Think of a different way to play! Make your own, original questions to ask! Try to remember what you said in the game and ask your friends these questions again when you see them tomorrow!

### **General Game Vocabulary:**

Shuffle. Deal. Whose deal is it? It’s your deal. It’s your turn to deal.

Are we playing clockwise or counter-clockwise? Let’s begin! Whose turn is it? It’s my turn.

Could you repeat the question, please? Sorry, what did you say?

You already asked me that question! Sorry, I don’t have the matching card.

Is this the right card? I have no question cards. I’m out. Pass.

Drat! Darn! Rats! Heck! Yay! Hooray!

Let’s play again. Let’s play a different way. Do you have any idea how to play a different game with these cards?

### **Alternate Game: Jijinuki - Old Maid**

Put one card back into the envelope without looking at the card, so that the game will end with one player holding a card that doesn’t have a match.

### **Alternate Game: Draw**

Deal out all the cards. Fan out the cards in your hand, and put out any matching pairs you might already have. Player A pulls a card from Player B’s hand, and reads the caption aloud. If Player A has the matching card, both cards are put out. If you don’t have a match, keep the card in your hand. Next, Player C draws a card from Player A’s hand. Continue until all the cards are out. This is a game for speaking English, so don’t just pull the cards silently!

### **Alternate Game: Slap!**

Put all the Answer Cards face-up, spread out on the table. Put the Question Cards face-down in a stack. Player A picks up and reads aloud one Question Card, and the other players slap their hands on the matching Answer Card. The first player to slap the correct card takes the card. Next, Player B reads a Question Card. Whoever collects the most cards is the winner.

**Alternate Game: Concentration**

All cards are face-down, spread out on the table. Player A turns over any two cards, and reads them aloud. If they are a match of Question and Answer Cards, Player A can take the cards. If they don't match, put them face-down again. Next, Player B turns over two cards to try and find a match. Whoever collects the most cards is the winner.

**Alternate Game: Go Fish**

Deal out just 4 cards to each player. Put the remaining cards face-down in a stack. If someone asks you a question and you don't have the answer card, you say "Go Fish!" and that player has to pick up a card from the deck.

**INDIVIDUAL Q&A TITLES:****DESCRIPTION & SUGGESTED PATTERN PRACTICE****Title: Quotes, Poems, Movies Dialogue, Song Lyrics**

The Question Cards have the first part of phrases; the Answer Cards have the second part. Pictures shown on the cards can be stars, books, musical notes, guitars, piano keys, Christmas theme pictures, etc. You might play a tape with the songs, pausing after the lyrics, and the first person in the group to find the card in their hand or among the cards spread out on the table wins a point (*Suggested by Chris Heaume*).

**Title: Time**

Clocks and watches showing different times. Ask questions like: "What were you doing at exactly 3:00 p.m. yesterday?" "Where were you just after 3:00 yesterday afternoon?" "What are you going to be doing at 10:10 tonight?" "What do you think you'll be doing at noon tomorrow?" "Where are you going to be just before 7:00 tonight?"

**Title: Numbers**

Various numbers, e.g., 0, 1, 2, 3, 4, 10, 18, 20, 25, 60, 100, 500, 1998, 2000, 10000, 1000000. Ask questions using the number. "What games did you like to play when you were 10 years old?" "Can I borrow ¥10 from you?" "What is twelve minus two?"

**Title: Objects-Doing Something**

Pictures of common objects. Say you want to do something, so you need some thing. "I want to clean the floor. Where is the mop and bucket?" "I want to make a dress, but I don't have a sewing machine. Do you have one?" "I want to mail a letter, but need a stamp. Do you have any?" "Here it is." "Here, do you want to borrow mine?" "Do you want some of mine?" "I'll

lend you some.” “You can have mine.” “Sorry, I don’t have one.” “Sorry, I can’t help you.”

**Title: Signs**

*Traffic Signs:* If you have a Question Card, pretend you are a passenger in a car. Say something to the driver like: “Be careful! The right lane merges!” “The road is slippery!” A suitable reply might be: “Yes, I see the sign. Thank you for pointing it out!”

*Warning Signs:* Say something suitable, like “Better carry this box this side up!” “We can’t go in this way!” “We can’t go in here!” “Be careful with this can, there’s gasoline in it and it’s flammable!”

**Title: Famous Places**

Make conversational dialogues using scenes of well-known landmarks, maps, flags. “What did you see when you went to New York?” “You must be thinking of someone else. I’ve never been there.” “Have you ever seen the Statue of Liberty?” “No, I can’t say that I have.” “Do you know where the Eiffel Tower is?” “Yes. It’s in Paris, isn’t it?” “Paris is a beautiful city, isn’t it!” “Yes, I’d like to see the Eiffel Tower!” “China is an interesting country, isn’t it!” “Yes, I’d like to go someday!”

## (II) BATTLE CARDS

Commercially available sets of flash cards are mostly aimed at the children’s market and so have a disappointingly small number of cards with a vocabulary that is too simple for older learners. With over 120 cards in homemade sets that can be compiled from various CD-ROM clipart collections, the play becomes more challenging and fun. For large school classes, which require perhaps 10 sets of cards, the cost of buying commercial cards is prohibitive, but, by using clip-art, teachers can put many pictures on one sheet of paper, and economically photocopy the pages.

**Material:** Each A4 size page contains 24 different picture cards of Animals, Hobbies, Jobs, Objects, Food, or Famous Faces. Each set has 5-10 pages.

**Classroom Organization:** Students form groups of 4-6 players, or play with the whole class as one group. Photocopy one set for each group, cut up the cards and put them in large envelopes. Or, hand out full sheets to the groups and have the students cut up the cards by themselves. To give the players a chance to familiarize themselves with the cards, in my classes I start with the *Snap!* game, before trying the *Who Am I?* game.

If the students are capable, I would let them think of what to say by themselves,

rather than giving suggested vocabulary and sentences at the beginning of play. After I have briefly visited with each group, I ask the full class what questions or sentences they managed to come up with, and write these on the blackboard or OHP, along with my suggestions. Then the groups can continue their play using the given examples.

## BATTLE GAME INSTRUCTIONS

### #1 Snap!

Divide the cards into two piles, face-down. Turn over the top card from each pile. Try to think if there is any relationship between the two cards. If you can think of something that the cards have in common, say “Snap!” and explain what the match is. If another player can think of something else, all the players should discuss and decide whose answer is the best, and that player can take **all** the cards that are **face-up**. If there is nothing that anyone can think of to say, turn over another card. Keep turning over cards until someone can say something.

### #2 Who Am I?

Deal the cards face-down equally to all players. Choose one of your cards and give 10 hints about it, one hint at a time, to the other players. Or, the other players ask you ten questions to try to guess what your card is. If guessed, the winner takes the card. If not guessed, the losers all give you one of their own cards. When you answer a question, you can only answer using these words: “Sometimes” “Usually” “Always” “Never” “Yes” “No.”

#### *Variation: Who Am I? Large Class Battle*

The whole class is one group. Each student pulls out a decided number of cards from a big envelope. E.g., with 120 animal cards, 40 students can each take 3 cards.

#### ☆ Rules ☆

- ① Don't show your cards to other players. Choose one of your picture cards.
- ② Find a partner to play with. Find out who is older, or whose date of birth is a lower number, etc. The older person or the person born on an earlier day, etc. gives the hints.
- ③ Give up to 10 hints about the picture.
- ④ If your partner guesses the card, you must give up the card. If your partner can't guess, he/she has to give you one card.
- ⑤ Find a new partner to play with. If you don't have any more cards, go along with your friends and cheer them on.

⑥ *Showdown!* After about half an hour, the teacher will say, “*It’s Showdown Time!*” From now, if your partner guesses your card, you must give up ALL your cards. If your partner can’t guess your card, your partner has to give you all his or her cards. Continue until there is only one winner who has all the cards.

### #3 Talk

All the cards are in a stack, face-down. Each player in turn picks up one card. The player must say something about it, either in free talk or using the given pattern, and then ask a question to another player. That other player must give a reply and then ask a question to the next player. Continue until everyone has said something.

### #4 Day in the Life

Make a story about a day in the life of the animal, or the person who has the job.

### #5 Arrangements

Lay out the cards in groupings, explain the grouping, or say something using given patterns. Lay out the cards alphabetically and spell the word.

### #6 Board Games

Prepare Bingo sheet cards or Snakes & Ladders games.

### #7 Charades

Each player in turn takes one card from the envelope. One player mimes while the other players try to guess what it is by calling out what they think the actor is doing.

#8 **Written Work** Various assignments based on the above games.

## **INDIVIDUAL BATTLE TITLES:**

### **SUGGESTED PATTERN PRACTICE**

Title: **Animals**

#2 *What Am I?* “Do you have fur / scales / tentacles / wings / fins? Do you live in a nest / cave? Do you fly / crawl / slither / run? Do you eat grass / meat? Do people eat you? Is your body green? Are you cold-blooded? Do you lay eggs? Are you an insect? Do you give live birth? Do you breathe with gills? Do you make a loud cry? Can you be trained to do something? Can I see you in a zoo / on a farm / in Japan? Are you from Africa / Australia / a tropical country / a cold place?”

#4 *Arrangements* big-small, dangerous-harmless, domesticated-wild, endangered-common, native lands, pets-farm-zoo, species, groupings like flock, herd, school.

**Title: Hobbies**

#2 *What's My Hobby?* "Is it a sport? Is it a board game? Do you play a musical instrument? Do you collect something? Do you play it on a field / on a stage/ in a team / in the winter/ on ice/ on water/ in water? Do you use a ball / a net/ a machine? Is it an Olympic sport? Can children play it? Do you play it? Do you wear a uniform/ a helmet to do it? Is it dangerous?"

#3 *Talk* "When I was a child .... I know someone who ..... What are the rules of the sport or game? Have you ever played this? Can you play this? Do you play this? Would you like to play this? I'd like to someday. I have (...ed/ been ...ing ) since/ for ..... I have never/ I haven't ..... since/ for .... I'm not interested in ..... because ....."

#5 *Arrange cards* play-do, indoor-outdoor, individual-team-pair, tournaments-competitions-shows, dangerous-safe.

**Title: Jobs**

#2 *What's My Line?* "Do you work in an office / a hospital / a factory / a shop / a restaurant / outdoors? Do you travel a lot? Do you drive / sell something? Do you wear a uniform? Do you work with a tool / a machine? Is it a good-paying job? Is it dangerous / heavy work / easy work? Do you work at night? Is it a job in the entertainment field?"

#3 *Talk* "There is shift work so sometimes you have to work evenings. You have to be good at making decisions. What are the good points or bad points about this job? Do you need any special certificate or diploma to get this job? What special skill do you need? You need to have a driver's license. Would you like to do this job? Yes, because I enjoy driving. I'd like to do this because I'm interested in working with children. No; I don't like working nights. I wouldn't want to do this because I'm not good at math."

#4 *A Day in the Life* "What time do you get up on workdays? How many hours do you work a day? When do you eat lunch? Where do you work? How do you get to work? I get up at 6:00. He gets up at 6:00. I work from 9 to 5 usually. He works from 9 to 5."

#5 *Arrangements* medical, office, factory, entertainment, transportation, shop, seasonal, fictional/obsolete/rare.

**Title: Objects**

#2 *What Am I? 20 Questions* "Can I use you in the kitchen / garden / office / in school? Are you electric? Can I wear / eat you? Can I make something with you? Are you used for cleaning/ repairing / digging/ painting/ writing / measuring/ keeping warm/ keeping cool/

moving something? Are you sharp/ wet/ hard/ soft? Are you made of metal / plastic / glass / wood / paper? Do you have a handle?"

Title: **Food**

#3 *Talk* "I like it. I eat it sometimes. I love them. I could eat them everyday. How about you? What about you? How do you feel about them? Did you eat any recently? Me, too. So do I. I like it too. I don't. If you eat too much, you'll get fat! They have a lot of vitamin C. They are grown in tropical countries. You eat a lot of this, too, don't you?"

Title: **Famous Faces**

#2 *Who Am I?* "Are you a real person? Are you living now? Were you a politician/ a literary character/ a movie star? Are you in horror movies? Are you American?"

### ( III ) STORYLINE CARDS

These cards have no text written on them, so they are an opportunity and a challenge for students to think of something to say by themselves. Some students become quite engrossed and spend a long time talking, up to a full class period of 90 minutes. The Storyline Cards are perhaps better called activities instead of games, but what they have in common with the Battle Cards and to an extent with the Q&A Cards is that they can be used with no written text or a minimum of written text.

**Material:** Each page has 24 pictures of scenes relating to Childhood, School Days, Home, Office, Medical, Danger, Holidays & Events, Emotions, Travel in Italy, Travel in Japan, Things Japanese, and Fairy Tales. Each set has 1-2 pages. Individual cards can be sliced up and put into envelopes, or the sheets can be left as full pages.

**Classroom Organization:** Students work in groups of 2-4 and arrange cards to make a story including as many of the scenes as possible. Or, each student chooses one card that he or she has something interesting to talk about. *Written Work:* Students write a story, or at least one sentence, using as many of the scenes as possible.

For example, with the "Travel in Italy" sheet, students could make a story using past tense and again with future tense. If a student comes up with something clever along the lines of, "We went to Italy and rented a car but a policeman stopped us for speeding and put us in jail for twenty years. The End." that student could be encouraged to continue with, "So we didn't get to see the Tower of Pisa, and we didn't meet a famous movie director, ..."

## References

Similar to these games in that they use no written text are the 66 picture sequences for describing everyday actions in the textbook *Action English Pictures: Activities for Total Physical Response* by N. Takahashi & M. Frauman-Pickel (Hayward CA: Alemany Press, 1985 ISBN0130090778). Other picture-based books are *Explain Yourself! An English Conversation Book for Japan* by P. Nicholson & R. Sakuno (Kyoto: PAL Ltd., 1982, distributed by Yohan), and *Max in America: Interplay ESL Communication in the Culture* by O. Mesa & R. Clark (Brattleboro VT: Prolingua, 1987 ISBN0866470255).

There are several Internet sites where clipart can be found, such as at *The ClipArt Connection*, at <http://clipartconnection.com>. *The Clip Art Collection for Foreign/Second Language Instruction* under project director Kazumi Hatasa of the Department of Foreign Languages and Literatures at Purdue University, at <http://www.sla.purdue.edu/fl/JapanProj/FLClipart/default.html>, has some line drawings with permission granted for use in not-for-profit educational purposes.

*Frank Schaffer Publications* (<http://www.frankschaffer.com/>) puts out several boxes of picture flashcards for children, each set containing 100 cards. Booklets of 26 cards including Community Helpers, Personal Safety, and Famous Places are available from *Trend Enterprises* (<http://www.alonghorizon.com/trend.htm>). Packs of some 56 cards including animals and arithmetic games, also aimed at children, are produced by *School Zone* (<http://www.schoolzone.com/html/cards.html>).

*Kumon Publishing Co.* (<http://www.kumonshop.com/>) has several boxed sets of cards including specialized sets like insects and dinosaurs. お店カード (くもん出版、ISBN4-7743-0228-7) is one set of 32 cards showing shops and public institutions, which could be combine with some of the above-mentioned Q&A Object cards to make a full-class game of “Find the Shop,” where players with Object cards try to find who has the appropriate Shop card by asking questions like “I want to borrow a book. Do you know where the library is? I want to buy some shoes. Is there a shoe store near here?”

*Musashi Publishing* (<http://www.musashishobo.co.jp/>) makes two boxed sets of cards and games, aimed at children learning English but which could be modified to suit older and more advanced learners. おもしろ英語カードゲーム (Osaka:むさし書房 ISBN4-8385-7310-3) by Atsuko Sugimoto has assorted picture cards with suggestions for 67 games to play. N H K 英語いろいろゲーム (Osaka: むさし書房 ISBN4-8385-0852-2) is a

collection of trump cards including actions, and board games including World Travel, Bingo, Treasure Hunt, One Day Game, Shopping Game, etc.

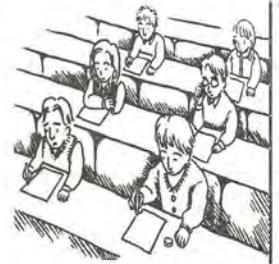
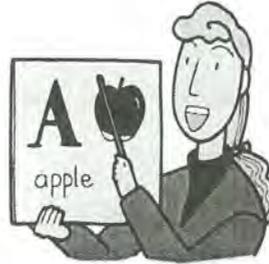
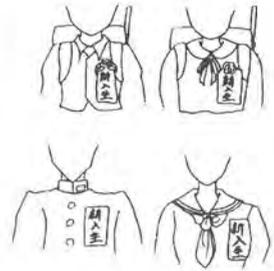
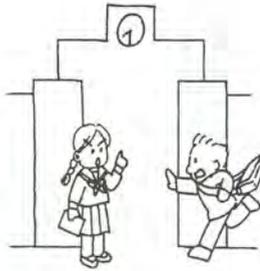
I prepared about a dozen pages, each with 16 pictures of readily recognizable actions, using clipart from the CD-ROM *イラストワート 3000* by Nichigai Associates (Tokyo: 日外アソシエーツ, ISBN4-8169-8040-7 <http://www.nichigai.co.jp/>). Students in pairs or small groups are given one or two pages, and together discuss and write down what the people in the pictures might be saying or thinking. The teacher then can ask each group to read their sentences aloud to the class, and the class decides whose is the best answer.

Other CD-ROMs I have used for their selections of clipart include the following:

- ◎ *イラスト・コレクション for スクール* (Tokyo: 日外アソシエーツ  
ISBN4-8169-8060-1 <http://www.nichigai.co.jp/>)
  - ◎ *スクールイラスト集* (Tokyo: エム・ピー・シー  
ISBN4-87197-267-4 <http://www.mpc-world.co.jp/html/clipart/267.html>)
  - ◎ *Clip Arts 2400* (Tokyo: 西東社 ISBN4-7916-0633-7 <http://www.seitosh.co.jp/>)
  - ◎ *IMSI MasterClips 75,000 Vector Clip Art* (Tokyo: H 2 Soft Rock International Corp.  
<http://www.masterclips.com/>)
  - ◎ *具・満タン series* (Tokyo: A&P Coordinator Japan Co. Ltd.  
<http://shop.aplix.co.jp/shops/apjapan/clipart/index.html>)
  - ◎ *スゴ超ネタ series* (Tokyo: グラパックジャパン  
<http://net.grapac.co.jp/sugoneta/index.shtml>)
  - ◎ *Free Art series* (Tokyo: Part One Digital Design Office <http://www.iiynet.or.jp/PRT1/>)
  - ◎ *Microsoft Publisher* (<http://www.microsoft.com/japan/office/publisher/>)
- MS Publisher is also the art software program I used to design my games.

This article and separate instruction pages for the games may be freely downloaded from my home page at <http://www2.ice.usp.ac.jp/wklinger/>.

On the following pages are examples of games I have made with CD-ROM clipart. Full-size pages are available for teachers who would like to try out the games in their classes and participate in a brief survey on their effectiveness.



What happened in History class yesterday?



We studied about Cleopatra.



Did you ever get bullied in elementary school?



The big boys used to tease me and make me cry.



Our English teacher is so MEAN! She gives us so much homework!



Well, she is strict, but she just wants us to do our best, don't you think?!



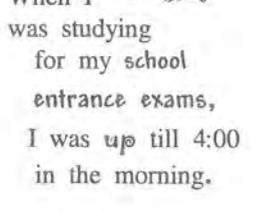
What was the best school trip you ever went on?



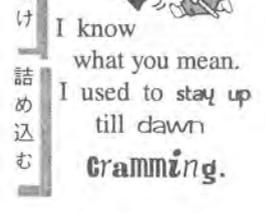
One time we went to NARA. That was really great!



When I was studying for my school entrance exams, I was up till 4:00 in the morning.



I know what you mean. I used to stay up till dawn cramming.



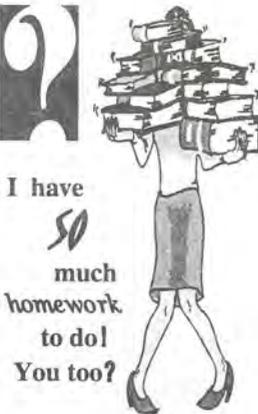
I was really worried about the math exam,



For me, I found it more difficult than I had expected!



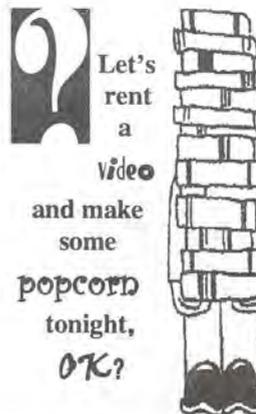
I have so much homework to do! You too?



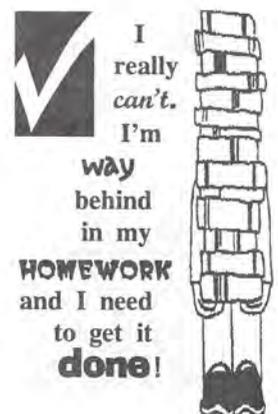
Me too! All this work is killing me!



Let's rent a video and make some popcorn tonight, OK?



I really can't. I'm way behind in my HOMEWORK and I need to get it done!



**Q** Hi, Morgan!  
Can I  
join you?



**A** Hi, Erin!  
Sure! Please,  
sit down!



**Q** You were GREAT  
in the Snow  
White show!



**A** THANKS! I  
hope you will  
come join the  
drama club!



**Q** Oh, no!  
Where's my  
homework?



**A** Here, I found  
it in the  
library.



**Q** Do you know  
the words to  
the school song?



**A** Sure, I do!  
You want me  
to sing it for  
you?



**Q** For how long  
can I borrow  
books  
from  
the  
library?



**A** For two  
weeks!



**Q** COME ON! Buy  
this shirt!  
Only ¥1,000!



**A** OK, I'll give  
you ¥500!  
How's that?



**Q** Did you  
memorize your  
speech yet for  
the presentation?



**A** "Ask not what  
your country  
can do for you,  
ask what you  
can do for your country."



**Q** Do you listen to  
the radio while  
you **STUDY**?



**A** Heavy  
metal  
HELPS ME  
CONCENTRATE!



? Can you help me paint **MY HOUSE** this weekend?



! Sounds like fun! What **COLOR** are you gonna paint it?



? Do you have time to go **grocery** shopping with me?

食料品類



! OK. What do you need to get? A lot of things?



? Why are you always **shouting** at me?!



! I'm *sorry*. I won't do it again.



? Let's order a couple of **pizzas** for dinner, OK?



! Yum! I want **pepperoni** and **double cheese** on mine!



spicy Italian sausage

? Did you ever think you'd like to be a **police officer**?



! Well, it must be nice to drive through **red lights** and not get a **ticket!**



違反

? Did you ever play **COPS & ROBBERS** when you were a *child*?



! Sometimes we played **Cowboys & Indians**. I liked to be the **Indian!**



? Tonight I want to **party** all night. Want to **GO OUT** with me?



! Let's hit the **disco** and **dance** till **dawn!**



? Gosh, we're really **high up**, aren't we! What do we do **NOW?**



! **NOW** we go **back down!**



? How about going **swimming** with me?



o Alright. But I'm not a very good **swimmer**.



? This morning I heard a wonderful piece by *Mozart* on the radio.



o I love classical music, too, especially **Beethoven** and **Bach**.



? Well, I got to *get going* now! See you later! Have a nice **weekend**!



o Okay! You have a good weekend too! *Take care!* See you **Monday**!



? I can't find my **teddy bear**! Do you know where he *is*? I've looked every-where!



o Hmmmm. .... Did you try looking **UNDER YOUR BED**? That's where he was the **last time** you lost him.



? **Taking care** of a baby is **hard work**, isn't it!



o But you can have a lot of **fun** with them, **too!**



? What do you do with a **CRYING BABY**? This guy just won't **stop CRYING!**



o Maybe you could pick it up first, and see if it'll **stop!**



? Which tie should I wear? What do you think? I can't decide!



o The **green one** looks good on you! Put that **on!**



? Which sunglasses shall I buy? I can't **make up my mind!**



o Go for the red ones! They're the **COOLEST!** Put those **on!**





*I was trying to call you all day yesterday, but there was no answer!*



**Sorry, I left my phone off the hook by mistake!**



Hi, Debbie.  
It's John.  
Are you *doing anything* tonight?



**OH, HI, JOHN. NO, NOT MUCH. WHY? WHAT'S UP?**



Hi,  
*this is Judy. Is David there, please?*



**JUST a MOMENT. I'LL GET HIM.**



Just a minute. I have another call coming in. Let me put you on hold for a sec!



Oh!  
You've got "Call Waiting!"  
Yes, I'll hold.  
Hurry back!



**SORRY, we got disconnected. THAT SOMETIMES HAPPENS WITH MY CELL PHONE.**



Yes, it happens to me a lot, too! It's a real **NUISANCE!**

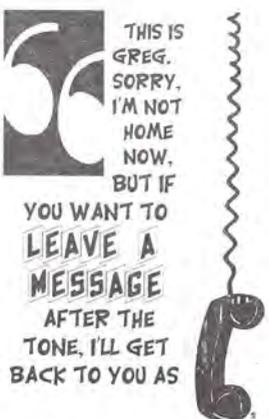


*I think I better turn my beeper off before we go into the movie theater.*



*Good idea. We don't want to bother other people with the noise.*

迷惑



THIS IS GREG. SORRY. I'M NOT HOME NOW. BUT IF YOU WANT TO **LEAVE A MESSAGE** AFTER THE TONE, I'LL GET BACK TO YOU AS



Hi, Greg. This is Cat. Please call me back when you get home. I want to check with you about tomorrow's schedule.



This is Cat. Sorry, I can't come to the phone now. Please leave a message after the beep and I'll call you back!



HI, CAT. THIS IS GREG. IT LOOKS LIKE WE **KEEP missing EACH OTHER!** IT'S NICE TO HEAR YOUR VOICE, THOUGH!



**HELLO, MAY I  
SPEAK TO  
Mr. Heaume,  
PLEASE.**



Sorry, there's no  
Mr. Heaume here.  
You must have dialed  
the wrong number.



**Hi, HIROKO.  
CAN YOU  
guess  
WHO THIS IS?**



Yes, I can!  
Hi, Norisuke.  
I can see your  
number on  
"Call Display!"



Hello.  
It's **Chris** calling.  
May I speak to  
**Linda**, please.



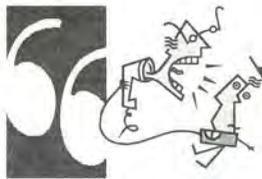
I'm sorry, she  
isn't here now.  
Can I take a  
message?



Would you have her call  
me **back**, please?  
I want to ask her if  
she wants to go see a  
movie with me tonight.



**Alright. I'm  
sure she'd  
love to go!**



Hello, I'm calling from  
**XYZ Cable TV**.  
We are offering a  
free first month of  
**50** cable channels  
if you join **today**...



**I'M SORRY. I'M A  
musician AND  
I don't watch  
MUCH TV.**



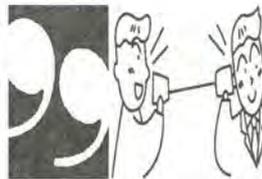
Hello, I'm calling  
from **YYZ International Telephone  
Company**. We have a  
**special discount  
service plan** I'd  
like to tell you  
about if you have a



**I ALREADY HAVE TWO  
PHONE LINES AND  
TWO PORTABLES.  
IT WOULD BE TOO  
DIFFICULT TO CHANGE  
PHONE COMPANIES  
NOW, I'M SURE!**



I have to  
**hang up** now.  
My **mother**  
wants to use  
the phone.



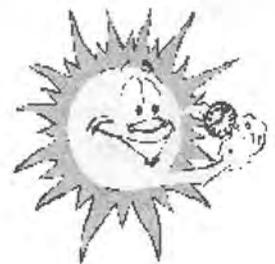
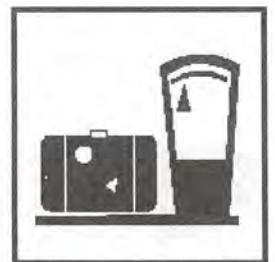
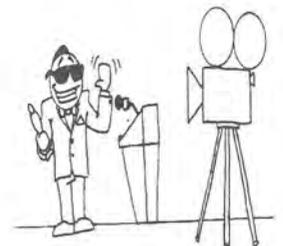
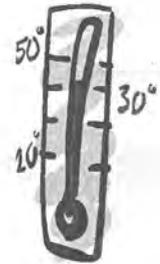
**OH, OK, SO.  
WHEN ARE YOU  
GOING TO GET  
YOUR OWN  
PHONE?**



**Well, I better  
get off the phone  
now. It was  
nice talking with  
you! Talk with  
you again soon!**



**Nice talking with  
you too. Let's  
have another nice  
long chat again  
soon! Bye-bye!**



## リスニング向上に効果のあるいくつかの要素 2

著しい伸びを示した学生にみられる動機づけ

### Factors for Improving Listening Comprehension 2

小栗裕子

Yuko OGURI

#### 1 はじめに

言語習得に影響を与える要因は多数あるが（例えば Carroll, 1977 によれば、学習者の言語適性や知力など）、学習者の動機づけは、その主要なものの一つになっている (Dörnyei, 1994 ; Gardner & Tremblay, 1994 ; Oxford & Shearin, 1996 ; van Lier, 1996)。これは、学習者が習得に必要な学習時間を意欲的に作り、積極的に学習ストラテジーを編み出し、そして目標言語での練習を多く試みるからである。それでは、いったいこのような学習意欲はどこから来るのであろうか。そして、どのような動機づけを持つ学習者が、言語習得に効果をあげているのであろうか。

第二言語 (second language) については、カナダにおけるフランス語習得に関する Gardner らの研究が多数あり (Gardner & Lambert, 1959 ; 詳しくは Au, 1998 の Appendix を参照)、社会心理学的観点から動機づけを統合的動機づけ (integrative motivation) と道具的動機づけ (instrumental motivation) に分け、前者が後者より第二言語習得には勝っているという結果が発表されている。統合的動機づけとは、一般に目標言語集団に対する融合や同化願望のことを言い、道具的動機づけは、実用目的のための言語使用願望をいう。目標言語やその集団に対する好意的態度が言語習得には有利だというこの主張は、モントリオールのような二言語・二文化環境においては当てはまるかもしれないが、その他の状況（例えば、フィリピンやインド）では一般化がむずかしいとされている (Skehan, 1989)。

それでは、目標言語と接する機会の少ない、外国語としての言語習得における動機づけはどうであらうか。過去 25 年近くに渡る動機づけ理論は、習得背景にかかわらず Gardner らの社会心理学的観点からの究明が主であったが、最近になってその理論の拡張が試みられるようになってきた。例えば、Oxford & Shearin (1994:12) によれば、米国で日本語を学んでいる高校生の動機づけには、統合的目的や道具的目的以外に、知的刺激を受けるため、自分への挑戦のため、難しい言葉を習得する優

越感、そして友達に自分の能力を誇示するため等があり、彼女らは、かつては第二言語習得の分野にあまり応用されなかった一般心理学、産業心理学、教育心理学、認知発達心理学（例えば、Maslowの動機づけの基本的欲求階層説や Bandura の自己効力理論等）の観点から動機づけを説明している。また、米国でスペイン語を学んでいる大学生には、統合的／道具的動機づけ以外に卒業単位に必要なだからと言う理由で言語を学んでいる学習者がおり、そのような動機づけで受講している学生の動機づけは弱いという結果が、発表されている (Ely, 1986)。

Dörnyei (1990) も、ハンガリーにおける 10 代後半の英語学習者 134 名についての動機づけの調査を行い、Gardner らの社会心理学的モデルでは、外国語学習のあらゆる動機づけは説明できないことを指摘した。調査の結果、彼は外発的に動機づけられた (extrinsic motivation)、「仕事に必要」のような道具的動機づけの範疇に入る動機づけと、統合的動機づけの範疇に入る次のような四つの動機づけを確認している。それらは、(1) 外国語、外国文化そして外国人に対する興味、(2) 個々の見識を広め、偏狭さをさけるため、(3) 新しい刺激と挑戦、(4) 英国圏への旅行のためである。Dörnyei (1994) は、予想した以上に広範囲な指向 (orientation) が習得背景や L1 と L2 の関係等に存在し、第二言語習得の社会的、実用的動機づけには、「誰がどの言語をどこで」(p.275) 習得するかに依るところが大きいと述べている。彼の動機づけ研究は、その実態調査にとどまらず、教育的見地から学習者をいかにして動機づけるかにも重点をおいている。そして、学習者の動機づけを言語、学習者、学習環境の三つのレベルから具体的に解説し、学習意欲を喚起させる多数の方法を提案している。

次に、日本における英語学習者の動機づけ研究には、どのようなものがみられるであろうか。芳賀 (1988:258-59) は、大学生 30 人の英語に対する興味と動機づけを調べているが、その調査では、「興味」と「必要性」が高いのに対して、「外国人と積極的に話してみたい」や「外国語で新聞を読んで見たい、テレビを見たい」という動機づけはやや低いという結果を得ている。また、必修として英語を受講している中国及び日本の大学生各 40 名を比較した Teweles (1996:219) の動機づけ研究では、アンケート調査の結果中国人学習者は道具的動機づけが強く、日本人学生は統合的動機づけがより顕著であるということが報告されている。さらに、中国、韓国、日本の大学生についての英語学習実態を調査した宮原ほか (1997:233) によれば、日本人大学生（英語・英文学専攻を含む 752 名）の学習動機づけで高かったものとして、就職や資格取得のためなどの「道具的言語使用」、次に文化の相互理解のための「文化的相互理解」、そして総合的技能の養成を目的とする「総合的運用の養成」などが挙げられている。ここで、宮原ほかも、道具性と統合性の二分法的な動機の捉え方のみでは、上記三ヶ国のような比較的単一な言語社会での動機づけが説明できないことを強調し、EFL や ESL における動機づけを研究する場合、その社会的・文化的背景への考慮の大切さを訴えている (p.242)。

## 2 目的

同じように授業を受け、同じような環境で外国語を学習していても、時々飛躍的に上達する学生がいる。本稿では、リスニングに顕著な伸びを示した（その定義については3.3を参照）英語を必修として学んでいる学習者が、どのような動機づけでそうした特徴を示したのかその要因について探り、「リスニングと動機づけ」の関係について考察したい。

1996年4月から12月の間に、リスニング能力が顕著に伸びた学生について、次の二点について調査した。

- (1) その主な学習目的（動機づけ）は何か
- (2) 学生自身が考える向上した理由は何か

## 3 方法

### 3.1 被験者

滋賀県立大学2年生4クラス 計170名

・40分のみリスニングを行ったクラス

Aクラス（理系）：41名、 Bクラス（人文系）：42名、 Cクラス（理系）：36名

・90分リスニングを行ったクラス

Dクラス（理系）：51名

被験者は基礎科目としての英語を週二回取っており、他の一時間はリーディングに重点を置いたクラスを受講した。この英語はI・II・III・IVの「英語IV」に当り、当校での修得目標は、「入学以前に修得した知識を実際のコミュニケーションの場で使用させる活動的な状態に充実させ、さらに発展させること」にあり、この4科目は必修となっている。90分リスニングを中心に行ったDクラスについては、学生数が50名を超えることを考慮して、大人数でもある程度効果のあるリスニングに決めた。

### 3.2 手順

#### (1) 「教材」及び「授業内容」

A、B、Cクラスについては、毎回30分から40分リスニングの副教材（市販のものでA、Bクラスでは、*Listening Journey to America* (SEIBIDO) を、Cクラスでは *Puzzle It Out* (MACMILAN) を使用) やポピュラーソングの空所補充練習のワークシート（筆者作成）を用いてのリスニング授業を行った。後半の50分から60分はリーディングに当て、各クラスとも教科書は違うが、主に異文化理解の内容を要約することに重点をおいて指導した。副教材は、できるだけ学生の身近な題材があるものを選び、時間の関係で主にポストリスニング (post-listening) に力を入れた。例えば、単に答え合わせで終わるのではなく、もう一度「どうして間違えたのか、どこを見落としたか注意して聞くように」と指示しながら聴かせたこと、難解な内容についてはその概要を学生に質問したこと、本文中でお

もしろい、使えそうな表現についての聞き取りを行ったことがあげられる。また、年に2、3回テキストの内容と関連して、学生が将来必要だと思われる電話での会話やレストランでの会話についてのリスニング教材も準備した。

Dクラスについては、90分すべてリスニングの教科書を使用するのは、集中力等で難しいと判断し、過去学生が良かったとアンケートで記述していたポピュラーソングの空所補充（詳細は、小栗、1996a; 1996bを参照）を30分から40分行い、その後テキスト（*Basics in Listening*, LINGUALHOUSE）をTeacher's Manualを参考にしながら行った。各クラスとも教室にスピーカーはついているが、LL教室等は使用しなかった。また、年に1、2回楽しみを兼ねて各クラスの性格に合わせ、映画（たとえば『レナードの朝』や『刑事ジョン・ブック／目撃者』）を鑑賞させた。この場合も「映画の中で聞き取れるおもしろい、使えそうな表現を5つ以上あげなさい」というリスニングの課題を与えながら行い、学生が意識して英語を聞くように指導した。

## (2) 「調査方法」

### i. 聴解力テスト

大学英語教育学会 (JACET) の BASIC を使用した。これは、日本の大学生の基礎的な英語の聴解力を試すために開発されたもので、今日の大学生の実態を踏まえた上で難易度が設定されている。時間的にも約40分で終了可能であり、年2回春と秋に実施されているので、学生の習熟度が測定できることが選択理由である。テストは4つの部分から構成されており（各10問ずつ）、全問4肢選択となっている。内容については以下のとおりである。

Part 1: 絵や写真を見ながら、内容の一致するものを選ぶ問題

Part 2: 質問を聞いて、その答を選ぶ問題

Part 3: 二人の対話を聞いて、それに関する質問に答える問題

Part 4: 少し長めの説明文を聞いて、その内容に関する質問に答える問題

### ii. 実施

事前テスト: Form Aを1996年4月中旬（学期が始まって2回目の授業中）

事後テスト: Form Bを1996年12月初旬（4月から数えてクラスによって20から21回目の授業中）

### iii. アンケート及び面接調査

一年終了時にJACET事前テスト及び事後テストの結果、顕著に伸びた学生を研究室に呼び、上記目的に照らしたアンケートと面接を実施し、どのような動機づけで英語を勉強しているのか、このように伸びたのはなぜだと思いか等について詳しく記述させた。

## 3.3 JACET 事前テスト及び事後テストの結果

表1、2は、2回のテスト結果を示す。得点は、開拓社JACET係より返送されてきた標準点を使用している。4月と12月のテスト結果の差の検定は、対応のあるt検定で行った。2回のテスト

間の相関関係は、N=119のグループが .71、N=51のグループが .61 で、前者には強い相関が、そして後者には中程度の相関が認められた。表3は、2回のテスト間の得点差の平均値とその標準偏差である。これより計算して、顕著に伸びた学生は、評定尺度法に従い得点差が大きい上位7%の学生とし、N=119では14点以上伸びた8名を、N=51では18点以上伸びた4名を抽出した。尚、この12名の事前テストの平均は35.5点、事後テストのそれは54.1点であった。

表1

(N=119) リスニングとリーディングのクラス

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	12月-4月の平均差	p値(t検定)
4月	46.63	8.43	24	70		
12月	50.97	8.13	32	74	4.34	< .001

表2

(N=51) リスニングのみのクラス

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	12月-4月の平均差	p値(t検定)
4月	42.33	7.67	25	64		
12月	48.84	9.74	33	72	6.51	< .001

表3

事後テストの点数から事前テストの点数を引いた得点差の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
N = 119	4.34	6.29	-16	25
N = 51	6.51	7.74	-10	22

#### 4 アンケート結果と考察

アンケートは、小池 (1988:179) や Ely (1986:29) を参考にしながら、その対象が少ないこと、詳細は個々に聞けることを考慮に入れ、できるだけわかり易く学生が容易に答えられるよう配慮した。顕著に伸びた学生の JACET による事前テスト及び事後テストの得点は次のようになる。アルファベットは個々の学生を示し、次にくる数字は事前テストと事後テストの点数を表わし、事前テストの得点の高い順に並べてある。括弧内のM/Fは男性/女性を示している。JACETによる評定S、A、B、C、Dの内訳はS(上位7%)、A(上位24%)、B(38%)、C(下位24%)、D(下位7%)になり、点数の下にそれが表示してある。

A 45 — 66 (M)	B 45 — 60 (F)	C 42 — 67 (M)	D 40 — 61 (F)
B → S	B → A	C → S	C → A
E 38 — 58 (M)	F 34 — 50 (F)	G 34 — 49 (F)	H 34 — 48 (M)
C → A	D → B	D → B	D → B
I 33 — 47 (M)	J 32 — 47 (M)	K 25 — 47 (F)	L 24 — 49 (M)
D → B	D → B	D → B	D → B

## (1) 主な動機づけは何か

アンケートは9項目あり、項目の後にそれを選んだ学生 (A~L) が示してある。

「あなたはどのような目的を持って、英語を勉強していますか。次のすべての項目について、それぞれ該当するものを選んでください」に対する返答である。

- 1 大学の授業として必修だから B E F G I J K L (67%)
- 2 将来英語を使う職業につきたいから C H J (25%)
- 3 就職に有利だから H L (17%)
- 4 将来留学したいから D G (17%)
- 5 将来海外旅行をしたいから C D F H J K L (58%)
- 6 教養として英語くらい知っておきたいから A B E F I (42%)
- 7 英米の文化や文学、またはそこに住んでいる人に興味があるから D G (17%)
- 8 英語でいろいろな国の人と話したいから C H J K L (42%)
- 9 原書を読みたいから
- 10 その他 (自由記述式) やるからにはがんばりたい。 B
- 11 建築家の仕事を海外でやってみたい。それもかなりの期間を9カ国で過ごしてみたいという夢があります。 G

まず気付くことは、Aを除いてすべての学生が二つ以上の目的を持って英語を学習していることである。そして、「大学の必修だから」のみで学習している学生はひとりもおらず、各々他に何らかの目的で学習していることがわかる (例えばGやJは必修以外に三つの項目を選択している)。

次に、「大学の授業として必修だから」のみで学習しているのではないにしろ、この項目を全体の67%、8名の学生が選択している点があげられる。被験者が英語・英文学専攻以外の学生なので、この結果は当然予想される。そのなかで、この項目を選ばなかった学生4名中Hを除くA、C、Dの3名はどちらかといえば最初から平均点相当の実力があり、あまり苦手意識もなく、外発的動機づけ (extrinsic motivation) である「取らされている」という意識がなかったのかもしれない。これに対して、この項目を選んだ学生8名中JACETによる評定の中位B、Eを除き、下位に属する学生F、G、

I, J, K, Lは、「やらなければいけない」という強制感が伴っていたのかもしれない。

また、「将来海外旅行をしたいから」や「英語でいろいろな国の人と話しをしたいから」という項目を選んだ学生が多いことも挙げられる。そして、「いろいろな国の人と話したい」を選択した全員が「将来海外旅行をしたい」を選択しているのは、日本のような社会的背景では充分予測できる。これらの学生は、「いろいろな国の人と話したい」という希望が海外旅行で実現すると考えているのであろう。さらに、「将来英語を使う職業につきたい」を選択した3名 (CHJ) 全員が「海外旅行」と「いろいろな国の人と話したい」の両方とも選択しており、これは興味深い。そして、「就職に有利だから」を選んだ2名 (HL) も「海外旅行」と「いろいろな国の人と話したい」の両方を選択していることから、このような道具的動機づけ目的を選んだ学生は全員「海外旅行」と「いろいろな国の人と話したい」を選んだことになる。

知的目的の「教養として英語ぐらい知っておきたいから」を選んでいる学生 (ABEFI) も5名と比較的多く、Aを除く全員が「大学の授業として必修だから」も選んでいる。この学生達は、「必修だから」と思うと同時に「教養」としても英語は必要だと考えているのであろう。これに対して実利目的の「将来英語を使う職業につきたいから」、「就職に有利だから」、「将来留学したい」のような道具的動機づけに属する項目を選択した学生の少ないことや「原書を読みみたいから」を誰も選んでいないことは意外な結果である。

最後に「英米の文化や文学、そこに住んでいる人に興味があるから」の統合的動機づけを選択した学生の究めて少ないこと、この項目を選んだ学生DとGは「将来留学をしたいから」も選択しており、この学生達にとっては英米の文化やそこに住んでいる人に興味があることが、留学の一つの目的になっているのかもしれない。

## (2) 学生自身が考える伸びた理由

アンケートには、記述式で次のように質問した。「あなたがこのように伸びたのは、どうしてだと思いますか。できるだけその理由と思われるものを具体的に書いてください。」アンケートから学生が個々に聴解力が伸びた理由に気付いているように思われるので、以下できるだけそれらを忠実に報告する。

A: 「授業を楽しんで聞けたのが一番の理由だと思います。それと、英語に興味を持って授業を受けていたから。」

B: 「以前は邦楽ばかり聞いていたけれど、2回生になって洋楽の方が好きになって、7:3ぐらいの割合で洋楽を聞いているからだと思う。歌詞の内容は、ほとんどつかめないけれど、メロディーが耳に心地よくて繰り返し聞くので、英語が以前よりたくさん耳に入ってきていると思う。また意識して、英語を聞く機会を作っていた。」

C: 「もともと英語には興味があり、大学に入って大学受験のための勉強をするのではなく、自分のためになるような英語(日常会話など)を授業で勉強していくうち、ますます英語が好きに

なったから。」

- D: 「今まで授業以外で英語に触れることがなかったが、英語の歌だけでも聴くようになったことが、もし理由といえは理由といえるかもしれない。」
- E: 「毎回の授業によって、聞き慣れしてきたから。授業や教科書によってヒアリングのポイントやパターンを習得することができたから。」
- F: 「今まであまり英語というものを聞いていなかったけれど、週1回でも継続して聞いたのが良かったと思う。また洋画にも興味を持ち、初めてよく見たのが少しは影響していると思う。」
- G: 「リスニングのテキストですごく集中して、耳に全神経を集中して聞いていたのもあるし、答え合わせをするので、恥ずかしくないような点数を取りたかったということもある。また洋楽を聴いて穴埋めするのは、リスニングの苦手な私にとっては唯一の救いでした。音楽を聞いたり、歌を歌うことは、すごく好きなので、この時間は楽しみで、楽しかったです。」
- H: 「洋画をよく見ていた。また、将来になりたいものがあって、それになれた時に英語が話せる日より広い世界を見れると思っていたからかもしれない。」
- I: 「たぶんリスニングに対して、英語を聴くことに慣れたためだと思う。また今まではほとんど字面だけで勉強していたため、単語が発音されるとその単語が浮かんでこなかったが、週一回ではあるがリスニングテストにより、発音が理解でき、理解できるという安心から、落ち着いて聴くことができたから伸びたのだと思う。」
- J: 「毎週行っていたヒアリングで、少しずつ英語が耳に慣れていったからだと思う。ヒアリングの時間を毎週とっていたことが効果的だったと思う。」
- K: 「授業中、隣の人と相談しながら、ポピュラーソングを楽しくリスニングできたから。また、何回も同じ問題をリスニングしたことが良かった。」
- L: 「自分が興味を持てること（映画や洋楽など）を通して、英語を聞くようにしたし、授業中集中して聴いた。」

上記から「興味」、「楽しい」、「継続」、「集中」のようなキーワードが抽出できよう。van Lier (1996:105) は、動機づけを過去、現在、未来に分け、Csikszentmihalyi & Rathunde (1993) を引用して、今までのほとんどの動機づけ説が過去と未来にのみ焦点を当て、現在を疎かにしているとしながら、「現在」の大切さを訴えている。(instrumental/integrative はどちらも目的なので未来の範疇に入る。) この「現在」には、できれば (performance) の楽しさ、内発的動機づけ (intrinsic motivation) 及び新興の動機づけ (emergent motivation) が含まれており、この学生達の多くに当てはめることができよう。つまり、授業中の「楽しさ」や自分に「興味」の持てる学習がうまく学習意欲と結びついたと言える。「あなたはなぜ授業以外に勉強したのですか」の質問にも、G は「英語に興味があるから」と答え、H は「好きだから」と答えている。(この質問には5名が回答してお

り、他の3名は、Bが「リスニングで悪い点をとるのでコンプレックスを抱いていたから」、Cは「実用英語検定に合格するため」、Lは「英語に慣れるため」と書いている。尚、回答していない学生は、授業以外に特別リスニングの勉強をしていなかった。) また、週一回の授業でも、毎回集中して続ければ、ある程度リスニング向上に効果があることもこのアンケート結果は示している。

## 5 おわりに

本稿は、リスニングと動機づけとの関係を顕著に伸びた学生のアンケート結果から考察した。この学生達の言語学習の目的については、「必修だから」(67%)、「海外旅行をしたいから」(58%)、「いろいろな国の人と話したいから」(42%)、「教養として英語ぐらい知っておきたいから」(42%)が比較的多いこと、実利目的の道具的動機づけや同化指向の統合的動機づけのみを目的としている学生はひとりもないことがわかった。また、「必修だから」のみで英語を学習している学生も皆無で、12名中11名までが複数の目的で学習していること、「必修だから」と「教養として英語は必要」との間に、「海外旅行」と「いろいろな国の人と話したい」との間に、そして、「留学したい」と「英米の文化に興味」との間に相関がありそうなこともわかり、これらの点に関しては、今後詳しく見ていきたい。さらに、GやHのように将来の「夢」があることも意欲的に勉強した理由だと言えよう。

「現在」に重点をおいた内発的動機づけ及び教室内での動機づけの大切さに関しては、学生達の記述した「伸びた理由」からある程度共通点が見い出せた。宮原ほか(1997:242)が強調するように、「学生の興味や関心の対象を教師が充分把握」することにより、学習者の動機づけをより強いものにし、そしてそれが成果として現われることにより、学習者はその達成にさらに動機づけられていくのではないだろうか。また、学生の中には「やるからには頑張りたい」や「コンプレックスを克服したい」という動機づけで伸びている者もいる。これは、道具的動機づけや統合的動機づけでは説明できない、学習者の内面的な達成欲求や自尊心であり、これに他の動機づけが加わることにより、著しい伸びが見られたと言えるかもしれないが、外国語としての言語習得の動機づけはさらなる解明が必要である。

必修科目の学習については、新井ほか(1995)や van Lier(1996)も、ある程度外発的動機づけの「必修である」という必要性を認めている。これは、最初は外発的動機づけであっても、それを次第に内発的動機づけに変容させることが可能だからである。被験者の多くがある程度外発的に動機づけられていながら、興味や楽しさから飛躍的にリスニングが伸びた場合がこれに該当すると考えられる。

本研究は、同じ指導法でもなぜ顕著に伸びる学生がいるのか、彼らの動機づけは何かという疑問から始まった。被験者が伸びた学生に限られ、普通に伸びた学生、あまり伸びなかった学生と動機づけの比較ができなかったことや、伸びた学生の動機づけの強さと各項目の相関まで詳細に渡り調査できなかったことについては、今後の課題としたい。

本稿は平成9年5月25日、京都教育大学で開催された関西英語教育学会第一回春期研究大会で筆者が発表した「リスニングと動機づけ」に加筆訂正したものである。

### 参考文献

新井邦二郎（編）（1995）『教室の動機づけの理論と実践』金子書房

Au, S.Y. (1988). A critical appraisal of Gardner's social-psychological theory of second-language (L2) learning. *Language Learning*, 38, 75-100.

Carroll, J.B. (1977). Characteristics of successful second language learners. In M.Burt, H.Duly, & M. Finocchiaro (Eds.), *Viewpoints on English as a Second Language* (pp.1-7). New York: Regents Publishing Company.

Dörnyei, Z. (1990). Conceptualizing motivation in foreign language learning. *Language Learning*, 40, 45-78.

Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 78, 273-284.

Ely, C. (1986). Language learning motivation: A descriptive and causal analysis. *Modern Language Journal*, 70, 28-35.

Gardner, R.C., & Lambert, W.E. (1959). Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.

Gardner, R.C., & Tremblay, P.F. (1994). On motivation, research agendas, and theoretical frameworks. *Modern Language Journal*, 78, 359-368.

芳賀純（1988）『言語心理学入門』有斐閣双書

小池直己（1987）『英語教育の実践研究』南雲堂

宮原文夫ほか（1997）『このままでよいのか大学英語教育』松柏社

小栗裕子（1996a）「ポピュラーソングの空所補充練習はリスニング向上に有効か」『英語教育研究』9, 122-127.

小栗裕子（1996b）「リスニング向上に効果のあるいくつかの要素1—著しい伸びを示した学生とそのクラスにみる特質と指導法」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』1, 79-93.

Oxford, R.L. (1996). New pathways of language learning motivation. In R.L. Oxford (Ed.), *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century* (pp.1-8). Honolulu: University of Hawaii.

Oxford, R.L., & Shearin, J. (1994). Language learning motivation: Expanding the theoretical framework. *Modern Language Journal*, 78, 12-28.

Oxford, R.L., & Shearin, J. (1996). Language learning in a new key. In R.L. Oxford (Ed.), *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century* (pp.105-121). Honolulu: University of Hawaii.

Skehan, P. (1989). *Individual Differences in Second Language Learning*. London: Edward Arnold.

Teweles, B. (1996). Motivational differences between Chinese and Japanese learners of English as a foreign

language. *JALT Journal*, 18 (2), 211-228.

van Lier, L. (1996). *Interaction in the Language Curriculum*. London: Longman.

### **Abstract**

Motivation is one of the most important factors in determining success in language learning. This paper examines what motivates students in a foreign language learning context. The research was conducted to find out which motivation is effective for learners to improve their listening comprehension. Twelve students (out of 170), who had improved their listening ability significantly after taking a once-a-week English class, were chosen to analyze what motivated them to improve their listening ability. Questionnaires and interviews with students were done by the researcher. Results showed that the lower level students have a feeling of taking English as a requirement, while the intermediate students have no such obligatory feeling toward the subject. Seven students (58%) answered that visiting foreign countries in the future (travel orientation) is one of their purposes in studying English.



## C. F. マイアーの『聖者』について

### On Conrad Ferdinand Meyer's *Der Heilige*

深見 茂

Shigeru FUKAMI

以下の小論は、十九世紀スイスのドイツ語作家、コンラート・フェルディナント・マイアー Conrad Ferdinand Meyer (1825-1898)の典型的粋小説の一つ『聖者』*Der Heilige* (1879)を例として、スケッチ風ながら、彼の文学の持つ現代的意味の模索と、その立場からのアプローチの可能性とその方法、すなわちあるべき研究の方向性を探ることを目的としている。

#### 1 梗概

上で触れたようにこの短篇は典型的な粋小説の形式をとっている。すなわち、まず1191年末、シュヴァーベン出身のいしゆみ師のハンスが例年のごとく武具販売の掛け金取り立てのため、スイスのチューリヒ市を訪れる。彼は夙に英国へ渡り、英国王ヘンリー二世専属のいしゆみ師として長年にわたり殆ど四六時中、王の側近として仕えていた人物であった（実在ではなく、マイアーの創作である）。さて、折しもチューリヒの町の大衆は、新しく聖者に列せられた(1172)トマス・ベケット(1118-1170)の命日のためのミサに出席すべく、老若男女大挙して、リンマット河口に湖畔に向って建つ、聖マリーア寺院の方へと雪崩るように進んでいた。この有様に驚くハンスを、旧知の僧侶ブルクハルト師は自分の僧院へ招き入れ、夕食をごちそうして、この話題の聖人の生前の話の詳細を聞き出す。というのも、トマス・ベケットこそは、英国宰相、のちにはカンタベリー大主教として、ヘンリー二世が最も重用した家臣であり、国王側近のハンスは、トマスをめぐる一連の事件をほぼ全てつぶさに見聞していたはずだったからである。かくていしゆみ師ハンスを語り手とし、ブルクハルト師を聞き手として設定された粋内の物語がはじまる。

すなわち、サクソニア人の父と、アラブの女性との間に生まれたトマス・ベケット（歴史的事実としては、トマスはノルマン人の血統とされている）は、ヘンリー二世の部下として武勇、知力ともに勝れた戦士として名をなし、ついには宰相の地位を与えられ(1155)、当時、教会が特権として保有する宗教界内部事件一切についての独立裁判権を剥奪すべく英国が争っていた相手であるローマ教皇を頭とするカトリック勢力に対し、国王の意を体してその辣腕を揮うことにより、益々王の信頼を勝ち得、ついにはヘンリー二世はトマスをちょうど空席となったカンタベリー大主教に任命しようとする。

ところが、その間に一つの深刻な悲劇が二人をめぐって発生していた。すなわち、ヘンリー二世はいしゆみ師ハンスを引き連れての狩猟中、とある山奥にトマス所有の秘密の城を発見、そこに住む一人の美少女を見初め、これと通じてしまう。王はその少女がトマスの愛人であると思い込んでおり、あの賢明な家臣をせめて女性関係で出し抜くことができた、という程度に理解して、ひそかにほくそ笑んで満足し、ハンスを連れてしばしば密会のため城を訪れていた。しかるに、王妃エレノールの腹心にこの情事を嗅ぎ付けられたと思われる事態となり、ある夜、王の命令によってハンスは少女を城から連れ出すこととなる。他方、城の状況に不穏を感じたトマスも側近の兵を警護に派遣する。かくて、森の中に待機させてある乗馬めがけ、少女を抱いて暗闇の中を疾走するハンスの姿を月光が夜目にも白々と照らした瞬間、一本の矢がハンスではなく、少女の喉を射抜き、少女は彼の腕の中で息絶える。ところが、この少女が、実はトマスの愛人ではなく、彼があるサラセンの王女との間にもうけ、掌中の珠のごとく慈しんで育てていた一人娘であることが判明し、ここに、王とトマスとの間に、消しがたい怨恨関係の傷が残ることとなる。つまり、有名な「麗わしのロザムンデ」モチーフ<sup>1</sup>が、ここでは伝統とは全く異なった形姿で登場するわけである。

さて、カンタベリー大主教の地位をトマスは固辞するが、ヘンリー二世は強引に自分の意志を通して任命する(1162)。すると、ここで驚くべき変身がトマスをめぐって生ずる。すなわち、ひとたび大主教の地位に着くやトマスは今までの政治姿勢を一変させ、ローマ教皇の走狗のごとく成り果てて、国王の宗教界改革にことごとく抵抗するのみならず、相貌服装までも変容させて、荒野の洗礼者ヨハネのごとく素衣素足の修行者然とした風貌と化した上、被征服民族であるサクソニア人の群衆を周りに集めて、征服者たるノルマン民族とその王、ヘンリー二世自身にもことごとく楯突くにいたる。あまつさえ、王に反旗を翻した王子たちや、王妃エレノールに味方するかのごとき態度をとる。いくつかの紆余曲折ののち(この過程はほぼ年代記が伝える歴史的事実を追っている)、大陸亡命(1164)の身から、カンタベリー大寺院に強行復帰した(1170)トマス・ベケットが、国王が任命した英国の高僧たちを次々と罷免追放したため、ついに、王の意向を体した四人のノルマン貴族の手にかかって、大寺院の伽藍内で暗殺される。歴史的には、1170年12月29日のことである。<sup>2</sup>

## 2 テーマ

多くの人物が登場し、また、それぞれが独立しても十分一つのバラッドや短篇小説を形成できるような起承転結を持ったいくつものエピソードが挿入されて展開する<sup>3</sup>この複雑な物語のテーマ自体はしかし、ごく単純に、ひたすら唯一点にのみ集中している。すなわちそれは、表題の人物「聖者」たるトマス・ベケットとは一体何者であり、その変節はなにゆえであったのか、の問題である。この英国史上の一挿話が、ひろくヨーロッパ文学の歴史において、中世末期から近代にいたるまで、無数の作品のなかに取り上げられてきた主題でありながら、二十世紀の今日も尚、文学の素材としての吸引力を失っていない(たとえば、エリオット、アヌイ、フライ等)所以は、トマスの行動が、極めて明確な劇的変節を示しているにもかかわらず、その原因が歴史的に不明であるところにある。そしてC. F. マイアーの創作の意図も、その小説技法の活用も、挙げてこの問題解明描写に捧げられている。

すなわち、マイアーは枠物語の語り手である、いしゆみ師ハンスの目を通し、トマスの行動の原因を、国王ヘンリー二世の理解から見る視点（そしてそれは同時に、ほとんど語り手ハンスの視点と同化している）と、語り手ハンスが理解しているかどうかは別としても、とにかく注目し報告する視点（そしてそれは同時に、当時の読者が期待し、かつ最も知りたい視点でもある）と、主人公トマス自身が、二三度述べる、自己解釈の視点、の三点から追求しようとする。ところで、では、巧妙に語り手の後にひそみながら、これら三つの視点を展開して見せる作者マイアー自身の究極的創作意図は、そのうちのどれに向けられていたのだろうか。

これを解明することが本小論の目的でもあるのだが、まず以下に、この三視点がすべて出揃い、しかも作品のクライマックスをもなす場面を、一部はテキストをそのまま日本語に訳して引用しつつ提示して話を進めよう。すなわち、その場面とは、物語も終盤に近い第11章の終り、ヘンリー二世と亡命中のトマスとが、荒野において（歴史上は、中部フランスのフレトヴァルとなっている）会見し、和解しようとするところである。ヘンリー二世が求める和解の接吻を嫌悪の叫びをあげて拒否したトマスは（年代記は逆に、トマスの求める接吻を王が拒否したと伝えている）、しかし直ぐ平常心を取り戻して語る。

「殿は昔よりそれがしの本性をようく御承知でございましょう、おお殿、それは、より偉大なる存在の足跡をたどらずにはおれぬ本性でございます [第三の視点＝トマスが自己解釈する視点]。それがしの主にして、その範に従いたいと願っておりますナザレ人イエスでさえ、殿の厭うべき唇に接吻する決心ができたかどうか、それがしは疑っております。なるほどイエスは、無垢と愛そのものであった主を死に売り渡した、裏切り者ユダに接吻されました。しかし、おのれの子供の魂を毒し、その無垢の肉体を汚した男の口にも接吻されたかどうか、それがしは疑わざるを得ません。それに、教会の教えるところでは、主はまた神でもあられるのだから、神はおのれの小羊が殺害されたことに対しては、厳しく全たき贖罪なくしてはお許しになることはありません。と申すのも、主が自己自身を、すなわちおのれの本質である正義そのものを滅ぼすことはあり得ないからでございます。ましてや、異教徒の血をひき、見かけほどその性、実は沈着ならぬそれがしめが、どうしてわが主にも為し得なかったであろうことを決意し得ましようぞ。しかし、敢えていたしましよう。ただし、身の代金と引き替えでございますぞ。一つの魂の代償として多くの魂を頂きたい。よく心を集中して、王よ、それがしの申し上げることをお聞きくださり、お考え下され。

よろしゅうございますか。それがしにはまだ他に子供たちがございます。それは殿の支配下にあるサクソニア人たちで、殿ご自身がかつてその魂をそれがしめの守護のもとに委ねられました。

しかしながら、追放された牧者には彼等に草をはませることは出来ませぬ。また彼等の肉体が殿の、飽くことなき狼のごとき貴族どもの所有物である限り、彼等の魂が栄えることはございません。殿の御先祖の征服王が、これら幾千人もの被征服民たるサクソニア人を一握りの冷酷なノルマン人に隷属せしめられてより、財を奪われたサクソニア人らはもはや住むべきおのれの土地がございません。……」

(Meyer, Bd.1, S.667)

そしてトマスは国王に、奴隷と化した被征服民たるサクソニア民族の解放をせまるのである [第二の視点

＝語り手が注目し、当時の読者が期待する視点]。国王は一時、心動かされるが、この会見が息子リチャードの懇請によるとの言葉を聞いたとたんに再び猜疑心と怒りとに我を忘れて叫ぶ。

「余になにを迫ろうというのか、トマスよ」と王は口を開き始めました。「余のノルマン人どもを怒らせろというのか。なにを考えておるのじゃ……余のサクソニア人どもを解放せよだと……善意で申しておるのか……それとも余を破滅させようというのか……」王は考えようとするかのように額に皺を寄せましたが、突然狂ったような怒りの思いに襲われました。「判ったぞ」と王は叫びました。「おぬしは余と余の王国を滅ぼそうとしておるのじゃな……あの呪わしいグレース[トマスの娘]が死んで以来おぬしは余の破滅を昼も夜も考えてきおったのじゃな、この偽善者め、この疫病神め、この復讐に飢えた異教徒め[第一の視点＝語り手の視点が密着する、国王の視点]。」

トマス様のお顔はしかし、まるで天使のように輝いておりました。そしてトマス様は目を輝かせて申しました。「グレースの死も、殿の罵りも、お許しいたしましょうぞ、もし殿がそれがしの兄弟たるサクソニア人どもを解放下され、今後は神の定め給うた人の道を正しく歩まれますならば。ヘンリー王よ、さていかに……」

(Meyer, Bd.1, S.669)

かくて両者は和解することなく相別れて行くのである。

### 3 復讐（語り手の視点が密着する、国王の視点）

マイアー自身も有力な見解として認め、かつ、「語り手」自らも繰り返して強調するこの視点は、極めて単純素朴でありながら、最も説得力のある解釈であり、且つ、たとえばドイツ文学の分野で見れば、『ニーベルンゲンの災厄』のような壮大な例がすぐ思い浮かぶように、最も中世にふさわしモチーフであろう。トマスの、娘グレースに対する溺愛、そのグレースの死骸を前にしてのトマスの悲痛な嘆き、父親トマスの苦しみに劣らぬ情人ヘンリー二世の苦しみと後悔、そして贖罪のための前にもましてのトマスへの厚遇、更に、「語り手」である、いしゆみ師ハンスによって繰り返して言及されるこの事件の深刻な影響等々、冗長になるためいちいち例証を引用することはしないが、全篇を動かす動因力が、王に対するトマスの報復にあることの論証にはこと欠かない。国王自身は、その豪放磊落な性格からして、この動因力の奥深さをすぐに忘れ果ててしまうが、第2章に引例した場面にいたって遂にその総体像を決定的に想起せしめられるのである。それゆえ、論者がこれをあえて「語り手の視点」とのみせず、「国王の視点」としたことは許されるであろう。

しかしながら、この作品自身は中世文学ではない。主人公トマスも『ニーベルンゲンの災厄』に登場するクリームヒルトやハーゲンではもはやないのである。人格というものが人間社会の中であって、一つの独立した自律性と個性と徳義とを身につけた存在として位置付けられ、幾百万の同胞に立ち交じっても見まごうことのない唯一無二の個人として、歴史と社会の持つ巨大な運命の力に対等に立ち向かって、その独立を主張し、たとえ敗れ去る場合にも、明晰な自覚と洞察力とをもって、おのれの立場と存在意義とを認識しつつ、納得して滅び行くことが出来ることが要請された、かのヨーロッパ近代個人主義最盛期の夢

未だ醒めやらぬ十九世紀の文学なのである。読者（「聞き手」）も「語り手」も、復讐物語のモチベーションのみではもはや納得しない。

#### 4 近代人的葛藤（読者の期待する視点）

第2章に引例した場面から判るように、失った最愛の娘グレース一人の代りに、幾万人ものサクソニア人を娘とも息子とも考えることにより、憎悪を博愛へと昇華しようとするトマスの姿に、我々は、苦悩と葛藤を経て自己克服へと到った宗教人の血みどろな変転が描かれているのを見た。

ところで、こうした愛児の喪失という家庭的悲劇の克服のみならず、元来、この短篇小説には、およそ近代個人ならば必ず遭遇するであろうような、あらゆる葛藤には事欠かぬ仕掛けが各所に組み込まれている。すなわちまず、サクソニア人でありながらノルマンの王に仕えてサクソニア民族を支配しなければならぬ民族的ジレンマ。その体内にはアラブの血が半分流れ、身につけた教養も、言語も、生活様式も、信仰も、本質的には回教文化に出自を持つ者が、当時カトリック王国であったイギリスの王に仕え、あまつさえカンタベリー大主教の地位にまで登りつめた、という宗教的志操的ジレンマ、等々、自立せる近代個人がおよそ抱えられる限りの内的葛藤で満腹状態の人物塑像が、原木の状態のまま、名工の鏤刻の鑿を待つ姿でそこに現出しているからである。まさに十九世紀インテリ読者層がこれ以上望むべくもないほどのお膳立ては出来上がっていた。人々はわくわくして、そこに近代心理小説特有の内的葛藤の壮大にして模範的な展開を期待したのも無理からぬことであった。そして、人々は失望したのである。批評史的に見てこの短篇小説の欠点とされるものの殆どがこの点に集中していることは誠に興味深い。以下にその典型的なものを二例挙げることによって、この視点の問題点を浮き彫りにしておこう。

その一つは、この短篇小説解釈の古典とされるヴァルター・シルツ Walter Silz の見解である。

この二人の対立人物 [ヘンリー二世とトマス] の間にマイアーは自分で創作したひとりの人物を据えた、それがベケットのうら若い娘である。彼女がモチベーションの要となるのである。すなわち、我々読者は、国王が、彼女を誘拐したことが原因で、遂にはその王冠と、生命と、魂の救いまでも失ってしまう、という物語を聞かされる羽目になる。間違いなくこのグレース・ストーリーが、マイアーにとっては、トマス・ベケットという歴史的謎解明の中心的貢献のつもりであったようだ。だが、こんなことをしてマイアーは、ベケットの謎を果たして解明し得たのか、かえって深めてしまったのか、問題であろう。こんなモチベーションを過剰に付加したことでマイアーは、物語を複雑化し、せっかくの典型的短篇小説のスマートなプロポーシオンを台無しにしてしまったのではないか。本当の「転視点」は、うまくしつらえられているように見えるが、実はこんなグレースの死などではなくて、カンタベリー大主教という新しい職務によってベケットが陥ることとなる精神的危機がそれなのだ。著者も、主人公のサラセン出自というあの伝説を取り込んだからには、問題をその一点に絞るべきであったのではないか。なんといってもそれが中心問題なのだから。すなわちその問題とは、異民族の出自を持ち、異教徒でありながら、他民族の政治的利害のためではあるが、同時に自己内部の深い点で共感を抱いて、高僧の地位に押し上げられ、その職務をば、王の胸算用通りではなく、

「本気で」遂行しようと決心した男の問題である。これこそが壮大なる問題であり、この問題だけでも、女の誘拐なんぞといったメロドラマ風のモチーフごときを導入せずとも十二分なものであったのに。<sup>4</sup>

もはや、論者が付け加えるべき言葉も不要なほどの達意の論述であろう。

今一つは、ヨーゼフ・クンツ Joseph Kunz の、これは作品論ではなく、マイアーに関する一般的作家論的論述の中の結論部分である。彼は、マイアー文学にはいわば実存的葛藤がなく、物事が、一方から他方へと簡単に急転することを嘆き、近代文学が持つ、生き生きとした直截さに欠けていると指摘したのち、

マイアーが枠部分の物語を担う語り手として、精神的人間の水準が低いため、事件に対し生命力のかよった真の関係を持つことが出来ないような人物をよく選ぶのも、これに関係がある。短篇小説『聖者』のいしゆみ師の形姿は、その典型例だ。このようにC. F. マイアーの小説技法の特殊な諸欠点は多方面から明確化せられ得る。この短篇小説の形式上の技法は非常に高く評価され、感嘆されているけれども、だからといって、こうした諸欠点を見過ごすことは許されるまい。<sup>5</sup>

つまり、いしゆみ師ハンスという聡明ながら、職人的教養しか身につけていない素朴な野人に過ぎぬ「語り手」に、複雑にして繊細、深刻にして高踏的な近代個人の内的葛藤の洞察など出来るわけがない、そのような人物を枠小説の「語り手」に設定したところにマイアーの失敗と限界とがあった、というわけである。果たしてそうであろうか。果たしてマイアーの真の目的が、当時の読者、そして二十世紀前半の読者や批評家が期待したように、近代個人の自律性とそれ故の実存的苦悩とジレンマと、そして克服の描写にあったのであろうか。そこで今、この第二の視点が中心でないと仮定して、いしゆみ師ハンスが、この第二の視点と並んで、きわめて共感を抱いて叙述している第一の視点（つまり、まさにクンツが「知的水準低し」と軽蔑して見下している視点であり、ジルツが余計な「メロドラマ風モチーフ」としている視点であるが）に再度立ち戻ってみよう。それは、第二の視点（近代人的葛藤）からの叙述が誰の目にも不十分なのなら、やはり第一の視点（復讐）が、クンツやジルツの軽蔑にもかかわらず、というか、彼等の軽蔑した通り、結局はマイアーの本当の意図であったのかの再吟味である。

## 5 構造主義的人間像（トマスの視点）

すると、我々はこの視点にも実は明晰な根拠が欠けていることに思い至るのである。

まずグレース射殺の次第を想起して見よう。すなわち、彼女を射殺した矢はどの陣営から飛来したのか、また、その射手はハンスとグレースとを識別して矢を放ったのか、そしてその場合、射手はハンスを狙ったが、謝ってグレースを射殺してしまったのか、それとも当初からグレースを狙ったのか、それとも、単に不審な人影として射ったに過ぎなかったのであろうか。

いずれにせよ、王がグレースと関係し、城から誘拐し去ろうとしたことから全てが発して生起した事件なのだから、王に全責任があるとする大まかな判断をもってこの問題の最終結論とし、トマスの怒りも当然と考えて納得してしまおうとする受容態度は、この短篇小説のように「語り」に作品価値の全てがかか

っており、しかも「語り手」ハンスの報告のように、「語り」の内容に極めて強いバイアス（トマスの復讐譚としての視点）がかかっている場合、読者としては怠慢に過ぎよう。とりわけ、著者が自作の創作意図について行なったコメントに対する評価を極めて限定的なものに見做すことが、研究姿勢の一般的状況である今日においては。

さて、この場面について、1958年発表というから、40年も以前に遡る論文ではあるが、『C. F. マイアーの『聖者』—その短編技法についての試み—』（『ドイツ文学』21 1958 日本獨文学會編、32ページ以下）において、渋谷寿一は、「娘はすぐに王妃の刺客に刺され、この時、ベケットの心に復讐の青白い火が点ぜられる」（32ページ）と断定している。果たしてそうであろうか。大筋を追ってみよう。なるほど確かに、「語り手」ハンスはグレースが住む秘密の城への使いの帰途、城の方向を睨みながら、かつてハンスが王と立ち寄ったことのある農場の管理人と何やら話をしているマレルブという騎士を目撃し、王に注進したことから、王によるグレースのノルマンディー移送計画が急遽始まったことになっている。このマレルブとは、嫉妬する王妃エレノールの腹心であり、且つ、ハンスの恋人を犯して廃人としてしまった人物である。しかし、マレルブがグレースの城に目をつけたとの情報は、城の門番エッシャーの口からトマスの耳にも入り、よりによって、まさに今夜、王とハンスとがグレース移送計画を実行しようという日に、偶然トマス自らが十名余りの武装騎兵を連れて城に到着し、同じくグレースを大陸へ、二、三日中に移送する計画を彼女に打ち明けている。（なお、王がグレースをトマスの実の娘と知ったのは、事件後であるが、ハンスは、これも事件直前ながら、彼女を初めて見たときの印象からそのことを確信していたことになっている。また、トマスは娘をグレースと名付けていたが、「語り手」は王にこの恋人をグナーデと呼ばせている。このドイツ語は、英語の訳語として、ほぼ同義と思われるが、ニュアンスにおいて重要な相違があると考えられている。すなわち、英語のグレースには、神の恩寵という意味の他に、人間俗世の優雅の意義をも包含しているけれども、ドイツ語のグナーデのコノテーションには、このニュアンスはない。）

そして、その夜の脱出に際し、「語り手」ハンスがグレースを連れ、門の外へ忍び出て、上方の気配を窺うと、「城壁の上で弓の弦が引き絞られる音が聞こえたような気がしました」（*Meyer*, Bd.1, S.619）とある。「語り手」はこれを聞き違いと判断して、グレースを腕に抱き、馬を待機させてある森めがけて闇のなかを全速で疾走するが、「偶然、あたりが次第に明るくなってきました」（*ibd.*）という。雲が切れて月光が漏れ出てしまったのである。すると、「矢の発射音、ひゅうという風を切る音」（*ibd.*）、そしてグレースの喉を一本の矢が貫いていたという。残念ながら、仕様やネームなど、その矢の特徴についての叙述は一切ない。そこで、物証の吟味は捨て、状況証拠の検証にかかると、ハンスの「語り」に従う限り、この矢は、城壁を警護すべく今日の昼間にトマス・ベケットに率いられて入城した、それゆえトマスがたの陣営に属する番兵が、自分たちが防衛する城から脱出しつつある何者かを予測し、相手に悟られて逃げられぬよう沈黙のうちに、あらかじめ矢をつがえて待機し、目標が月光にさらされて、捕捉可能となった瞬間にかねてつがえてあった矢の狙いを定めて発射した、という、明らかに計画的攻撃であったと読みとれるのである。（尚、これについてはジルツも同意見と判断される。\*) それゆえ、グレースを殺したのは、彼女の父親がたの兵士であって、渋谷寿一の解釈は、余りにも有名な「麗わしのロザムンデ」伝承の結末に影響されての、一方的エレノール陣営犯行説であると、論者には思えてならないのである。

そして、本章のはじめに既述の諸疑点についてであるが、矢を放った兵士の戦闘行為は、ハンスとグレースの区別はおろか、逃亡者たちが何者であるのかも識別できず、ただ、「命にかけて何人をもここに入りさせてはならぬ (Meyer, Bd.1, S.617)」とのトマスの厳命に忠実に従ったに過ぎぬ行動と判断し得る。つまり、皮肉にもグレースを殺したのは、トマス自身 (の厳命) であったとも極論し得るのではなからうか。かつ、そのように考えてこそ、グレースを英国へ呼び寄せてしまったこと、王子の一人リチャードとの婚姻を通じて彼女の栄達と安定とを図ろうとのプランを抱いたこと、等々のモチーフが、深刻な重みをもってトマス自身を苛み圧迫する要素となることを想定し得るのであり、単なる王への復讐劇、とは割り切れぬ複雑さの伏線ともなるのである。つまり、黑白主義、二者択一主義のハンスの視野からさえも、トマスの行動の原因が単一に特定しがたくなるように、しつらえてあるのである。事実、ハンス自身も、事件発生直前の感想を語るせりふながら、「更に今一つの疑問は、トマス様がグレースに自分のお気に入り入りのリチャードのことを語り、それゆえ、おそらく一時は、娘をヘンリー王の宮廷にデヴェューさせ、王妃になる榮譽を得させようなどという、罪深い野心に耽った、という事実でありました (Meyer, Bd.1, S.618)」と述べ、グレースの死の責任をトマス自身に転嫁しかねないほどの心境に陥っていたこととなっている。更に、娘をトマスの当時の部下マレルブに凌辱されたサクソニア人の父親 (ハンスの親方) が、路上において、多くの部下を従え、きらびやかに行進して行く馬上の英国宰相トマス・ベケットに向かい、「坊主め、貴様にはノルマン人に強姦されるような娘がなくて残念じゃわい (Meyer, Bd.1, S.594)」とわめかしている場面は、およそグレースの凌辱と死の責が、一にかかって父親トマスの肩にあるらしい、との想定を象徴的に保障するかのごとくではなからうか。

こうして復讐の動因が、トマスの主観はともかく、少なくとも事実の上からと、「語り手」の立場からは八割かた否定され弱体化され、トマスの行動が、報復のためであることが極めて理不尽であるとされる状況が設定されてみると、それでもなお且つ彼の行動を説明するための、客観的に残る動因は、今や、他ならぬトマス自身が、第2章に引用した会見の場面で語った、「より偉大なる存在の足跡を辿らずにはおれぬそれがしの本性」しか残らぬこととなる。尚、歴史上のトマスも根拠はやや異なるが、類似の言葉で国王に対し警告を発している (註2参照)。さて、この見解を我々の短篇小説の主人公トマスが、別の箇所でもっと詳細に述べているので見ておこう。

「……」と申しますのも、それがしめの不完全な性格と、へり下って御奉仕申し上げるように造られた本性とは、よく御存じの通りだからでございます。幼少からの宮仕えの習性からでございますか、それとも、それがしめの素性にひそむ血統の本性の為せる業でございますか、それがしは、王者の油注がれしみ頭と高貴な御眉には抵抗いたすことができません。——今ちょうど御機嫌いというわしく、それがしめを愛い奴と思召してございますので、この聞く者として他にない、打ち解けた時を利用して頂き、一つ御忠言を取らせて頂きますことを何卒お許し下さいませ。どうか、それがしめを手放し、殿よりも力あるお方の手に、決してお渡しなさいませ。——と申しますのも、優柔不断のそれがしめは、みじめにも必ずやそのお方に屈従いたし、おお、英国の王者よ、殿に叛いて迄も、そのお方の命に服してしまうこととなりましょうぞ [……]

(Meyer, Bd.1, S.631)

「語り手」はこの直後に例によって、これを神の手による復讐を暗示するものと解説しているが、既に述べ来たところから、それをしもマイアーの韜晦であると判断すれば、もはやトマスの行動を、すなわち、あの変身を根拠付ける最大最有力な動因は、トマスの内面には、彼が他者との関係において置かれるその都度の位置価値と、彼を支配するより強い権力との関係以外、なにも存在しなかった、ということとなるであろう。つまり、人格の内実とは、元来は虚空に過ぎず、他者との接触のたびにその都度発生し、その場合の内実は強弱の位置価値によって決定されるが、構図が変化するやたちまち消滅し、新たな他者との接触によって、全く新たな別個の位置価値と方向性とを得て再生するものである、との人間像が、最後に最も説得力ある視点として忽然と残ってしまうのである。そしてこの視点こそが、究極においてマイアーの創作意図ではなかったか、と考えられるのである。

## 6 結語

つまり、マイアーは、素朴にして実直な「語り手」いしゆみ師ハンスの口を通して、まず、伝統的なロザムンデ・モティーフという、よく知られた一種の文学的トポスないし象徴を利用しつつ、復讐の視点をもっともらしく強力に打ち出して、当時の一般的読者を説得し且つ納得させ楽しませて、ニヤリと笑い、次に近代人好みの葛藤を山盛り提供することにより、当時のインテリ読者層の期待感を満足させながら、結局は失望させてはくそ笑んだのち、再度、素朴な復讐動因説に立ち返った読者に、このモティーフの疑わしさに気付かせつつ「語り手」の口を通して一見素朴に報告されるトマス自身の言葉に再注目させ、そこに忽然と暗黒の深淵を開いて見せたのである。すなわち、近代人たちが信頼して止まぬはずの人間人格が実は傀儡的性格の存在に過ぎないことが暴露され、その結果やがて彼等を待ち受けるであろう時代が、虚無的世界像の支配する世紀であることへの予感が提示されたのであり、おそらく当時の読者は、こうした暗黒深淵を前にした時、不吉な予感と戦慄とをもって佇立し尽くすとともに、言い知れぬ不快感と不満とをこの作品に対して感じたことであろう。第4章に引用した二つの批評文はそのことを雄弁に物語っている。このことは逆に見れば、ここまで読者をいざなってきたみせる複雑な「語り」こそが、マイアー文学の魅力であり、また彼の技巧の真骨頂であったとも言い得るのではなからうか。

それゆえ、トマス・ベケットとは何者であったのか、の答としての、この最後の視点は、当時の読者にとってはいかにも最も信じがたく、受け容れがたい動因であったであろうが、この回答が二十世紀も終わろうとする今日の我々にとっては逆に、極めて説得力ある視点であることもまた明らかであろう。これこそがマイアー文学の現代的魅力に他ならない。

マイアー研究の主流は、その叙情詩を中心として進められ、彼の作家的展開は一般に、客観的叙述より叙情詩的自我の主観性へ、硬直的より情熱的へ、未経験、未熟性より対象内実の確実な把握へ、と進歩して行った、と解説されるけれども、他方において、それは、象徴的より体験的へ、二十世紀的より十九世紀的へ、構造主義的人間把握より個人主義的人間像への退歩であったとも言い得るのではなからうか。叙情詩の展開や改作の原理も、叙情的自我の不在から介在へ、諸象徴の並置型から絡み型へ、相矛盾するものの無関係配置から解釈的融合へ、無機性より有機性へ、といった十九世紀的美学や世界像への逆行が賛美されてきたのではなかったか。研究は、これをしもマイアーの発展成長と見、事実、その意味でのフォ

ルムの完成度と洗練度とは否定出来ないけれども、それのみを以てマイアーを語り尽くすことは出来ぬのではなからうか。むしろ、ほぼ完全に二十世紀的世界像と人格とを持って出発したマイアーが、同時代的、すなわち十九世紀的世界像と人間像への逆行的融合和解を生涯にわたる努力によって求め、しかも、そうして得た近代個人主義的フォルムの底に、彼の原初的、つまり二十世紀的世界像と分裂的人格とを巧妙に糊塗してひそませようとした、この技法（我々はまさにその技法を、『聖者』の「語り」分析を通じてつぶさに見てきたではないか）を、彼の全作品から読み解くことが大切であろう。『ローマの泉』の水盤の水が、いつまでも同じにみえて、実は常に他者に突き動かされ、かつ他者を突き動かすことによって瞬時も留まらぬがごとく、同一人間と見えて、その実コミュニケーション如何によって一瞬後には、全く別個の人格の持ち主となっていくさまを、密かに描いて見せた名人芸のからくりを。

テキスト：Conrad Ferdinand Meyer, *Sämtliche Werke in 2 Bden*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt o.J. (Copyright 1996 Artemis und Winkler)(Zitiert: Meyer)

## 註

- 1) 以下、この素材の歴史を、Elisabeth Frenzel, *Stoffe der Weltliteratur. Ein Lexikon dichtungsgeschichtlicher Längschnitte*. 3.Aufl. o.J. (Copyright 1970) Alfred Kröner Verlag, Stuttgart (=Kröners Taschenausgabe, Bd.300); Artikel: Rosamond, Fair. に従い、当論文及び当該作品との関連にのみ留意しつつ略記する。エレオノーレ（当小説ではエレノール）という妃を持つヘンリー二世には「麗わしのロザムンデ（またはロザモンド）」として歌われてきた愛人があった、との伝承は既に当時の年代記に記載されている由である。すなわち、名前を Rosamunde de Clifford といい、Woodstock 城内の迷路に置かれていたが、ヘンリー二世は、息子たちの反乱に関与したとして妻エレオノーレを 1173 年逮捕させてからは、公然と彼女との関係を続けたという。しかしロザムンデは 1176 年死去し、Godstow 尼僧院に葬られたとされている。以後、三百余年を経た十六世紀のエリザベス朝時代にいたって、この伝承は多彩なモチーフに粉飾され、一つの著名な文学素材として定着した。すなわち、変装して登場する誘惑者としての国王、ロザムンデを愛する第二の男の出現、エレオノーレ妃の嫉妬、妃によるロザムンデの殺害、そして Woodstock 城に住むボディガードの形姿、等々のモチーフは、この時代に既に現れていたようである。さて、この素材が、トマス・ベケットと結合せしめられたのは十七世紀以後になってからの由で、殺されたベケットの配下の者たち、ないしベケット自身、がエレオノーレと通じてロザムンデ殺害に関与する筋書きを中心に、ヴァリエーションとして、全く逆に、ベケットがロザムンデの味方として彼女を守護するという筋書きのものまで、さまざまに扱われて今日に及んでいる。さらに、このベケット・モチーフの登場は、やがてロザムンデ—ヘンリー二世—エレオノーレという三角関係よりも、ヘンリー二世—トマス・ベケットという両巨人の対決へと作家たちの関心を移らせるにいたった由で、我々の短篇小説『聖者』もまさにこの伝統線上から生まれた作品と見る事が出来よう。尚、「麗わしのロザムンデ」モチーフは、ドイツ文学においても多々扱われ、たとえば、M.Wieland, Theodor Körner, Franz Grillparzer, Theodor Fontane らが著名である。また、オペラの題材としても好ん

で取り上げられた。

- 2) マイアー自身が利用した資料は、Augustin Thierry, *Histoire de la Conquête de L'Angleterre par les Normands*. Tome troisième, onzième éd. Paris 1866 であるが、この一件全体の歴史的事実、論者自身が解説するよりも、伊藤武雄がその訳書（マイエル作・伊藤武雄訳 『聖者』 岩波書店 東京 昭和17年）の「解説」160ページ以下において引用しているモーロアの『英国史』からの抜粋を、やや長文ながら借用するのが妥当と思う。（一部、当用漢字に変更した所のあることをお断りしておく。）

若いヘンリ二世が即位するや否や、カンタベリーの大司教テオバルトは、君主の側近に一人のしつかりした人物を置きたいと思ひ、その書記の一人トマス ベケットを推薦したが、この書記はヘンリ二世の気に入つて、国璽尚書に任命された。……ベケットは三十八歳で、生粋のノルマン人で、ロンドンの富裕な商人の息子であつた。……彼の資質は僧侶よりも寧ろ行政官に向いてゐるやうに見えた。……忽ちのうちにこの君とこの臣は、水魚の交りをするやうになつた。王は、高尚な冗談の応酬でも王の相手を勤めうるし、また仕事にかけても、素晴らしく有能なこの若き大臣、立派な騎士を重用した。イギリスの秩序が非常に早く回復したのは、大部分ベケットのお蔭であつた。この成功はこの国璽尚書を傲慢な権勢家にした。……

大司教テオバルトの死んだ時、ヘンリ二世は、カンタベリーの大司教職をベケットに与へることにした。大司教の選挙権をもつてゐる修道士や司教達はいささか不平だつた。といふのは、ベケットは修道士ではなかつたし、それに僧侶よりも武人らしく見えたからであつた。いや、国璽尚書自身も……その役をひきうけた時にかう言つた。『まもなく陛下には、私を愛していらつしやるのと同じくらゐ私を憎むやうにおなりでせう、と申しますのは……カンタベリーの大司教は、神か、王か、そのいづれかに逆らはざるを得ないのです』と。この俗界の大領主が大司教になるや否や、一個の苦行者に早変わりしたことは、注目すべき事実である。爾來、彼はその余生を宗務と祈祷とに捧げるであらう。彼がこの世を去つた際、人々はその屍の上に苦行帯と自家修行の鞭の痕とを見出すであらう。カンタベリー大司教職は、以前にもあの柔和はアンゼラムを戦闘的な大司教にしたが、今また王の奉仕者たる国璽尚書ベケットを謀反人とし、ついでこれを聖者にしたのである。……彼は先づ、最もうるさい見物人から見ても非の打ちどころのないほど完全な大臣にならうと、そして次には、やはりそれくらゐ完全無欠な聖職者にならうと、次々に努力したやうに見える。細心さと尊大さとの混淆——それが彼の態度だつたのである。王と教会との間の論争題目は……宗教裁判所の問題に變つた。さきに征服王とランフランクの二人が俗人裁判所と教会裁判所とを分離した時、彼等は、後者には良心の問題だけを取扱はせようとした。ところが、教会は徐々に、すべての訴訟事件を、宗教上の事件にしてしまつた。……教会裁判所は、王の裁判所よりも寛大で、死刑や四肢の切断といった酷刑はもとよりのこと、場所がないために投獄さへ稀で、悔改めや罰金だけで、事が済んだ。……聖職者たちは彼等の教団の裁判所だけで審理された。それ故、聖職者は人殺しをしても殆どいつも大した罪にならないで済んだ。……聖フランチェスコ教団にはひつて国法からのがれることは、悪漢にとつて何よりもたやすいことであつた。加ふるに、ローマ法王の法廷は、あらゆる宗教事件の移審権を保留してゐた。……もしも俗界の事件へのかうした干渉が阻止されなかつたならば、まもなくイギリス国王は自国の主人たり得

なくなつたことであらう。ヘンリ二世は、教会裁判所によつて有罪と認められた聖職者の官位褫奪を要求した。……トマスは……これを拒絶した。王は怒つて、クラレンドンに教議會を召集した。……ベケットは……「クラレンドン法規」(僧侶/権利特権/制限/法規)に署名した。しかし、この大司教は、強制によつてなされたこの誓約に拘束される必要はいささかもないといふ態度をとつた。法王アレクサンデル三世はその誓約から彼を解放した。大司教は、貴族たちの法廷によつて有罪を宣告されたが、毅然として屈する色なく……笏杖を手にしたままイギリスを立ち去つた。そして亡命先のヴェズレーの町から、仇敵に対する破門を公表し始めた。

ヘンリ二世が、いかに有力であつたにせよ、それは、破門をうけても痛痒を感じないほど強力なものではなかつたし、また、自分の王国が法王から聖務禁止の処分をうける、つまり人民が聖礼典(サクラメント)を奪はれるやうになるといふ危険を冒してもよいほど強力なものでもなかつた。なにぶんにも世を挙げて信心深かつた時代のことだし、人民の反動が王統を絶滅させるといふことも、あり得ないことではなかつた。……遂にヘンリ二世は、中部フランスのフレトヴァルに於てベケットと会見し、表面上、彼と和睦した。そして、爾後、王国への慣習を尊重すべき旨を誓ふやうにと、それだけを彼に要求した。然るにベケットがイギリスに上陸すると殆ど同時に、かねがね彼が求めてゐた法王の書状——この大司教が国王の寵を失つてゐた際にこれを裏切つた司教たちの免職を命ずる法王の書状が、彼の手にはひつた。ところで、征服王が作つた法律の一つに、臣下は何人と雖も王の許可なくして法王と通信するを得ず、といふのがあつた。王は、北フランスのリジューの近くでクリスマスを祝つてゐた時、この報告を聞いた。彼は非常に激怒して、かう叫んだ、『余の家来たちは揃ひも揃つた腑抜け共ぢや。彼等は主君に対する誓約を守らず、素性卑しき一介の僧侶が余を笑ひ草にするのを傍観してをるわい』と。これを聞くと、四人の騎士は、物も言はずに出発した。そして最初の船便で海峡を渡り、カンタベリーに着くや否や、『司教たちを赦免せよ』と言つて、大司教を脅迫した。僧侶にして武人を兼ねたベケットは、勇気と軽蔑とをもつてこれに答へた。一瞬の後、祭壇の踏段は、彼等の剣であたりに撒き散されたベケットの脳漿で汚されてゐた。

王はこの犯罪を聞いて非常に絶望し、五週間も閉ぢ籠つてしまつた。彼は非常に聡明であつたので、ベケットの死がローマにとつて偉大な精神的勝利を意味することを悟つた。これまで、存命中の大司教と王とのいづれに味方しようかと躊躇してゐた人民は、決然として殉教者に味方した。……王の敵はみな元気づいて起ちあがつた。……妻や子供たちさへも彼に叛いた。……王子ヘンリとリチャードとは、王妃エレオノールに使喚されて、父に弓を引く貴族党の首領となつた。……この危急存亡の秋に當つて、ヘンリ二世はその精力ぶりを発揮した。折しも彼は大陸にゐたが、その大陸から、反乱を鎮圧するためイギリスに馳せ戻つた。上陸すると、その足でカンタベリーに立ち寄り、馬をすてて徒歩で、トマスの墓に詣でた。そして長いこと祈りを捧げた後、衣服を脱ぎすて、七十名の修道士に命じて、肌を鞭をあてさせた。この事があつて以来、彼は到る処で勝利を得た。貴族は屈服し、息子たちは彼に臣事の礼をとつた。すべてが秩序に立ちかへつた時、教会裁判所の問題は平和裡に解決された。……だが、そのためには、当時に於ける最も著名な二人の人物が、二つの生命と一つの友情とを台なしにしたのであつた。

- 3) こうしたエピソードとは、たとえば、サラセン少女が、自分の元から去つた男を求めて単身ロンドン

に現れ、英語は全く理解出来ぬまま、唯一の手がかりである男の名前を呼びわりつつ街中を彷徨し、市民たちの手助けもあって、遂に相手を捜し当てる物語を、事実マイアー自身が、一篇のバラッドとして作品化している。また同時にこのエピソードは、十字軍に参加して、回教徒側に捕えられるが、敵城主の娘を誘惑してその手引きにより脱獄、妻のもとに帰郷した男が、後年、はるか東方の地より尋ね来たったあのサラセンの王女を迎える、という重婚をテーマとする著名な伝説に由来する『グライヒェン伯』・モチーフをも暗示している。他に、「月光王子」の物語や、「金髪のアムルデ」の悲惨な運命の物語もある。そして特に「語り手」のいしゆみ師ハンスが借金をしていたユダヤ人マナッセを殺害するエピソードは、我々にアンネッテ・フォン・ドロステーヒュルスホフの代表作『ユダヤ人のブナの木』という短篇小説の中心モチーフを想起させる。このように、マイアーの『聖者』には、多くの文学的残像がちりばめられているのである。

- 4) Walter Silz, Meyer: ‚Der Heilige‘ In: *Interpretationen*. Hrsg. von Jost Schillemeit. Fischer Bücherei, Frankfurt am Main und Hamburg. Bd. IV: *Deutsche Erzähler von Wieland bis Kafka* (=Fischer Bücherei 721. 1966), S.272f.
- 5) Josef Kunz, *Die deutsche Novelle im 19. Jahrhundert*. Erich Schmidt Verlag, Berlin o.J. (Copyright 1970) (=Grundlagen der Germanistik. Hrsg. von Hugo Moser. Mitbegründet von Wolfgang Stammer.10),S.130.
- 6) Vgl. Silz, *aaO.*, S.278.

## Abstract

In his masterful “Der Heilige”(1879), Swiss novelist Conrad Ferdinand Meyer(1825-98) shows the character of the protagonist Thomas Becket from three perspectives; the first, the perspective of King Henry II, which is given credence through the repetition of the narrator cross-bowman Hans (the King and Narrator Perspective); the second, the perspective presented by the narrator seen clearly enough but understood hesitatingly, as a stimulus for the reader to investigate further (the Narrator and Reader Perspective); and the last, the perspective of the protagonist, Thomas Becket, himself (the Thomas Perspective).

Through the first perspective emerges the form of Thomas Becket as a dreadful avenger, through the second, that of a modern person with complicated inner conflicts, and through the third, the astonishing appearance of Thomas as a frail and unstable personality who forever “must tread in the footsteps of a greater”. Revealed in this last perspective is a protagonist whose only worldly possession is his status; that is a structuralistically shaped picture of a person who is completely empty inside and can transform himself without conflict or scruples according to outside conditions.

This last, understated but adequate portrayal of subconscious judgement of personality, a well-known perspective for us children of the 20th century, is a reflection of Meyer’s own painful character traits.



**Le Problème de la Narration**  
**dans**  
***Monsieur Ouine* de Georges Bernanos**

— en comparaison avec *The Unicorn* d'Iris Murdoch —

**Ritsuko NAGASHIMA**

**INTRODUCTION**

De nombreuses remarques ont été faites à propos du narrateur des romans à la troisième personne de Georges Bernanos: G. Turbet-Delof trouve dans *Sous le soleil de Satan* «auteur» et ses deux doubles, «narrateur» et «historien»<sup>1</sup>, et D-R. Leclercq des «multiples narrateurs» dans la deuxième partie du même roman<sup>2</sup> ainsi que dans *Monsieur Ouine*<sup>3</sup>; Albert Béguin parle du «style de la tendresse» à propos de la *Nouvelle Histoire de Mouchette*<sup>4</sup>, et P. Fitting dit que la narration de celui-ci a une «conscience sélective» qui révèle tantôt les connaissances complètes, tantôt l'expérience limitée de l'héroïne<sup>5</sup>. Autant de remarques qui montrent le caractère complexe et variable de la narration bernanosienne.

Nous nous proposons dans cette étude d'analyser la narration de *Monsieur Ouine*, et d'essayer de comprendre la nécessité interne de la modalité adoptée par l'auteur, en le comparant à un autre roman du XX<sup>ème</sup> siècle, *The Unicorn* d'Iris Murdoch.

Exception faite du Journal d'un curé de campagne, Bernanos a écrit tous ses romans à la troisième personne: *Sous le soleil de Satan*(1926), *L'Imposture*(1927), *La Joie*(1929), *Un Crime*(1935), *Nouvelle histoire de Mouchette*(1937), *Monsieur Ouine*(1943), *Un Mauvais rêve*(1950). Et parmi eux, *Monsieur Ouine* est le dernier qu'il ait terminé, puisque, *Un Mauvais rêve* a été rédigé entre 1931 et 1934, tandis que la rédaction de *Monsieur Ouine* commençant en 1931 s'étend jusqu'en 1940. Nous savons aussi que l'écrivain s'est donné beaucoup de mal pour achever ce roman. Il note dans sa lettre à Robert Vallery-Radot datée du 29 mars 1934 : «Mon fameux roman est un lugubre urinoir. Je commence d'en avoir assez de pisser si tristement contre le même mur. L'achèverai-je jamais?»<sup>6</sup>

Cependant il considère que «*Monsieur Ouine* est ce qu'[il a] fait de mieux, de plus complet<sup>7</sup>.»

Nous sommes amenés à croire, de tous ces constats que fait l'écrivain à propos de *Monsieur Ouine*, que c'est le plus élaboré de ses romans, et que sa narration sera le meilleur exemple de ses romans à la troisième personne. Ceci est la première raison qui nous a fait choisir ce roman.

La deuxième raison est que la présence des énigmes, d'ailleurs remarquable dans tous ses romans, est particulièrement frappante ici. Et cette présence des énigmes, à notre avis, n'est pas sans rapport avec la modalité de la narration.

Quant à *The Unicorn*, outre qu'il est écrit à la troisième personne, nous pouvons remarquer dans ce roman quelques points communs avec *Monsieur Ouine* dans son contenu : la présence des énigmes, et l'ambiance de rêve. La comparaison des deux romans nous permettra de discerner la spécificité de chacun.

### Grille de l'analyse: focalisation

Nous nous servons comme grille d'analyse de la classification proposée par Pouillon et reprise par Todorov et Genette<sup>8</sup>:

(A) la vision «par derrière» (Pouillon)

narrateur > personnage (Todorov)

Le récit non-focalisé ou à focalisation zéro. (Genette)

(Le cas où le narrateur en sait plus que le personnage, ou plus précisément en dit plus que n'en sait aucun des personnages.)

(B) la «vision avec» (Pouillon)

narrateur = personnage (Todorov)

Le récit à focalisation interne. Elle peut être fixe, variable, ou multiple. (Genette)

(Le cas où le narrateur ne dit que ce que sait tel personnage.)

(C) la vision «du dehors» (Pouillon)

narrateur < personnage (Todorov)

Le récit à focalisation externe. (Genette)

(Le cas où le narrateur en dit moins que n'en sait le personnage.)

## I. L'ANALYSE DE LA NARRATION

### 1-1. la narration de *Monsieur Ouine*

L'application de cette classification nous permet de remarquer la spécificité de la narration de ce roman. Les trois types de récit peuvent être constatés, et ils sont entretissés étroitement.

Nous allons relever quelques exemples pour chacun de ces types.

Pour le type(A), nous pouvons citer des passages de présentation des personnages, présentations qui résument la personnalité, et qui remontent souvent jusqu'aux ancêtres, à leur origine. La première est celle de «Maman». (voir le document 1) Ici, sans aucun doute, le point de vue du narrateur n'est celui d'aucun des personnages. On peut dire que la narration est celle des romans traditionnels, du type balzacien, à ceci près qu'il s'y trouvent beaucoup d'interjections et de phrases interrogatives. (Nous reviendrons à ce problème plus tard.)

L'autre exemple que nous citons est la présentation du vieux Devendome, de sa fille Hélène et de son gendre, suivie de l'épisode du mystérieux petit homme vert. (Voir le document 2.)

Dans ces deux cas, le narrateur quitte la scène qui se déroule «à présent» pour résumer le passé des personnages et ainsi faire connaître leur personnalité. Dans le deuxième exemple, le personnage que le narrateur présente (le vieux Devendome) n'est même pas présent sur la scène.

Pour le type(B) au contraire, de nombreux exemples peuvent être trouvés dans les scènes qui se situent «à présent».

Dans le chapitre où a lieu le double suicide d'Hélène et d'Eugène, la narration est très souvent focalisée sur Hélène. (Voir le document 3.) La focalisation est accentuée par l'emploi fréquent du style indirect libre appliqué aux monologues intérieurs d'Hélène.

Pour une fois, cependant, dans ce chapitre, la narration est focalisée sur Eugène. La phrase «Elle lui tourne le dos et il peut la regarder à son aise, ...» marque le changement de la focalisation, et à partir de «Elle hausse les épaules, indifférente.» (p.1478), la narration est de nouveau focalisée sur Hélène. Le changement du foyer a souvent lieu, comme dans cet exemple, à la suite d'une indication concernant un acte de tel personnage.

Il ne s'agit peut-être pas ici, de la focalisation interne stricte, qui est, d'ailleurs, «rarement appliqué de façon rigoureuse»<sup>9</sup>, puisque les personnages focalisés sont décrits. Mais en ce sens que le narrateur ne raconte que ce que sait le personnage, nous pouvons nous permettre de le classer parmi les narrations de type(B).

Il se trouve aussi des passages où le point de vue de la narration s'extériorise tellement que l'on croit presque au type(C). C'est souvent le cas avec les scènes de dialogue, comme celui

de Monsieur Ouine et du curé de Fenouille. (Voir le document 4.)

Il est remarquable que des mots et des expressions liés à l'apparence soient très nombreux. En effet, dans cette scène d'entretien (pp. 1462-69), «paraître» figure trois fois, «faire le geste» deux fois, «prendre une expression» une fois, sans compter les nombreuses indications sur le geste ou le ton phonétique des personnages. A quelques exceptions près, le narrateur semble ici vouloir décrire des personnages de l'extérieur dans la mesure du possible.

Ainsi, en appliquant une pareille classification, nous pouvons constater qu'il existe dans ce roman les trois types de narration. Mais on a l'impression qu'aucun d'eux n'apparaît d'une manière très pure, parce que les changements se font d'une grande subtilité et à la moindre occasion. C'est aussi la raison du sentiment d'unité qui domine toute la narration de *Monsieur Ouine*, malgré la diversité de point de vue.

A propos du sentiment de l'unité, nous pouvons aussi signaler que les phrases interrogatives et exclamatives telles que les interjections remarquées notamment dans le type(A) et le type(B), contribuent à le soutenir. Dans le type(B), elles peuvent le plus souvent être comprises comme monologues intérieures au style indirect libre. Mais dans le type(A) aussi, le narrateur se questionne, s'étonne de la même façon. Ce qui n'est pas tout à fait «logique», puisque il n'est focalisé sur personne. Cela donne cependant un accent humain à la voix narrative, et ainsi lui permet de former un tissu bien uni.

## 1-2. La narration de *The Unicorn*

La forme de la narration de *The Unicorn* fait contraste avec la diversité et la complexité de celle de *Monsieur Ouine*. Elle reste tout le long du roman au type(B).

La narration est focalisée soit sur Marian Taylor, soit sur Effingham Cooper. Le Changement du personnage focal se fait d'une façon très systématique. Jusqu'à la fin de la cinquième partie, un des deux, Marian ou Effingham se fait le personnage focal pour une partie toute entière, et ce, par roulement. Pour les deux dernières parties, le personnage focal ne reste inchangé que pendant un ou deux chapitres. (Voir le schéma.)

La narration de ce roman n'est pas perfectionniste, c'est-à-dire, parfaitement identifiée au personnage focal à tel point qu'elle ne décrit jamais ce personnage. Mais elle observe soigneusement ceci : que la connaissance du narrateur ne dépasse jamais celle du personnage focal, et qu'elle se borne toujours à offrir le point de vue ou l'interprétation personnelle des événements de ce personnage, quand il y en a plusieurs.

Partie	Chapitre	Personnage focal
I	1	Marian
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
II	8	Effingham
	9	
	10	
	11	
	12	
	13	
	14	
III	15	Marian
	16	
	17	
	18	
	19	
IV	20	Effingham
	21	
	22	
	23	
	24	
V	25	Marian
	26	
	27	
	28	
	29	
VI	30	Effingham
	31	Marian
	32	Marian
VII	33	Effingham
	34	Marian
	35	Marian

Le vocabulaire aussi est choisi de sorte qu'il convienne au personnage focal. Dans la scène de première rencontre de Marian Tailor et d'Effingham Cooper, où le personnage focal est ce dernier, celle-là est appelée par le narrateur «Miss Taylor»(p.84), bien qu'antérieurement dans la première partie où la narration est focalisée sur elle, elle soit présentée par son prénom «Marian».

Egalement, l'emploi de mots français(p.43) dans la narration focalisée sur Marian et de mots grecs(p.88) dans la narration focalisée sur Effingham sera justifié, ces mots faisant partie du vocabulaire de chacun : Marian connaît la langue française, et Effingham est ancien étudiant d'Oxford en philosophie classique.

Nous pouvons conclure que Murdoch a choisi très consciencieusement de raconter en

empruntant les points de vue de ces deux protagonistes.

## 2. NECESSITE INTERNE DE LA MODALITE DE NARRATION

### 2-1. Ce qui nécessite la modalité de *Monsieur Ouine*

*Monsieur Ouine* ressemble à un roman policier. Plusieurs énigmes sont présentées au lecteur, dont le plus grand est : qui a tué le valet? Mais on est amené à se demander aussi : Philippe (le père de Steeny) est-il mort? Arsène s'est-il suicidé? Pourquoi et comment Ginette a-t-elle été tuée? Autant de questions qui resteront inexplicées jusqu'à la fin du roman.

Dans les romans policiers orthodoxes, le point de vue est focalisé sur un personnage, et c'est à travers ce personnage que le lecteur découvre le criminel. Ce qui n'est nullement le cas de *Monsieur Ouine*. Le lecteur le comprend tout de suite. Il s'attend alors à ce que le narrateur lui-même éclaircisse les énigmes tôt ou tard. Mais quand on assiste à une scène où il s'agit de révéler la vérité, il n'est plus omniscient, il devient un narrateur du type(B) ou du type(C), et le lecteur n'a d'autre moyen de juger le «suspect» qu'à travers le regard de son interlocuteur, ou simplement par son apparence.

Ainsi, dans la scène de l'entretien du jeune couple avant le double suicide que nous avons citée, la narration, après s'être momentanément focalisée sur Eugène, ne le regarde qu'à travers le regard de sa femme au moment où il dit: «C'est drôle, t'es comme le vieux, tout pareil. T'as pas l'air de tenir à savoir si je l'ai tué ou non, le petit gars?»

Monsieur Ouine est un autre «suspect» du meurtre. Il est question de savoir s'il est sorti la nuit du crime. Mais justement en ce qui concerne cette question, le lecteur n'en sait pas plus que ce que raconte la narrateur identifié à Steeny ivre à tel point qu'il ne distingue plus Miss de Monsieur Ouine. (la fin du troisième chapitre. p. 1374-5.)

Par ailleurs, dans le chapitre cinq où les villageois se réunissent autour du corps de l'enfant, Ginette témoigne de la sortie de Monsieur Ouine en présentant les «pièces de conviction». Mais là non plus, la narration ne confirme ni démentit ce qu'elle raconte. Elle se contente de décrire les personnages de l'extérieur et de citer leurs paroles.

Enfin, en ce qui concerne les énigmes, la narration, loin de les éclaircir, ne fait qu'en augmenter l'obscurité. Ne cherche-t-elle pas au fond, à faire sentir perpétuellement au lecteur le manque du point de vue que posséderait un narrateur omniprésent et omniscient?

C'est là la question qui nous rappelle l'argument de Sartre vis-à-vis du procédé de narration mauriacienne<sup>10</sup>. Il reproche à Mauriac d'avoir fait du narrateur un Dieu omniscient qui détermine le destin des personnages de sorte qu'ils n'ont pas de liberté. Or, Mauriac considérait qu'il devait y avoir un point de vue de Dieu, pour décrire un monde théiste, un monde auquel

Dieu est présent. Et le romancier — pour lui, il s'identifie au narrateur — doit assumer ce rôle de Dieu dans le monde qu'il crée, son univers romanesque.<sup>11</sup>

C'est précisément à cette logique que Bernanos s'opposerait sur le plan de la création romanesque. Il veut, lui, qu'il n'y ait pas ce point de vue intégral. Mais cela ne veut pas dire qu'il décrit un monde athéistique.

C-E. Magny dit à ce propos que *Monsieur Ouine* «est l'allégorie d'un monde où rien ne saurait être clair, où tout doit nécessairement apparaître comme énigme, puisqu'en est absente la clé du mystère, la présence réelle de Dieu», et en conséquent, le monde bernanosien est «un monde en creux et non en relief»<sup>12</sup>. Soyons clair. Ce n'est pas parce que son remarque est très juste, que la proposition contraire l'est aussi. Si l'écrivain avait donné une explication aux énigmes, aurait-il pu décrire un monde positif auquel Dieu est présent? Certainement pas. L'explication des énigmes ne prouve pas la présence de Dieu. Bien qu'on appelle ce narrateur omniscient «Dieu»<sup>13</sup>, il est certain qu'il n'est pas le Dieu chrétien, Dieu personnel. Il a pour fonction d'expliquer pour qu'il n'y ait pas d'incohérence, ni de lacune dans l'univers romanesque. Il explique à partir d'un principe, qui est la principe de l'auteur, sa conception du monde à lui.

Bernanos refuse d'imposer sa propre conception du monde. Le mystère reste mystère, car il veut que son univers romanesque soit ouvert vers l'avenir, vers la vraie révélation.

## 2-2. Ce qui nécessite la modalité de *The Unicorn*.

*The Unicorn* est aussi imprégné d'un climat de mystère. La scène se déroule essentiellement dans un hôtel particulier Gaze Castle, qui pourrait être qualifié comme un lieu de sommeil. Les termes concernant le sommeil et le rêve apparaissent à plusieurs reprises.

L'héroïne Marian et un autre protagoniste Effingham viennent d'ailleurs dans ce lieu isolé, et vivent des événements. Leur principal intérêt est porté sur Hannah. Leur pensée tourne autour d'elle, et ils se font des images d'elle.

On dit que Hannah est enfermée dans l'hôtel par son mari pour expier son crime: la tentative de meurtre contre celui-ci. Mais rien n'assure que c'est la vérité. Son entourage est plutôt suspect. Il y a des relations sentimentales compliquées entre les habitants de Gaze Castle. Ce qui rend toutes hypothèses possibles. Il se peut qu'elle soit une victime innocente enfermée par un mari tyrannique, ou bien qu'elle y reste de sa propre volonté.

Le lecteur est introduit dans ce climat mystérieux en suivant les pensées de Marian et d'Effingham, qui sont d'ailleurs fort changeants et subjectifs, toujours influencés par les autres et leur propre passion.

Mais qui est cette Hannah au fond? Avant de se donner la mort, elle prononce ces mots qui peuvent être la clef de ce roman:

I have lived on my audience, on my worshippers. I have lived by their thoughts, by your thoughts [...], I lived in your gaze like a false God. But it is the punishment of a false God to become unreal. I have become unreal. You have made me unreal by thinking about me so much. You made me into an object of contemplation. (p. 219)

Hannah a été un objet de considération de son entourage, de Marian et d' Effingham entre autres. Mais cet objet ne pouvait être que non-substantiel, un «rêve», une «légende». Car, toutes leurs pensées, que ce soit en bien ou en mal, vraisemblables ou fantaisistes, ne sont rien de moins que des doxas au sens platonicien du terme. Condition des êtres humains qui vivent dans le monde définitivement coupé de l'idée.

Marian et Effingham se font des illusions, ils rêvent dans ce lieu favorisant les imaginations qu'est Gaze Castle, et leurs illusions se dissipent à la fin du roman quand ils quittent ce lieu. Mais les illusions sont les illusions justement parce qu'on ne se rend pas compte qu'elles le sont. L'individu illusionné se croit dans le vrai.

Or, pour vivre les mêmes illusions que les personnages, à savoir leur «vérité» à eux, le lecteur doit forcément être introduit dans leur point de vue personnel. D'où cette nécessité d'employer la narration intériorisée.

## CONCLUSION

Au cours de cette étude, nous avons vu des différences entre les narrations de ces deux romans : *Monsieur Quine* a une narration dont le point de vue est changeant, ayant toute une gamme entre la focalisation zéro et la focalisation externe; et *The Unicorn* n'a qu'une seule modalité de narration, celle de focalisation interne.

On sent dans les deux romans la présence des énigmes et le climat de rêve. Mais dans *The Unicorn*, à la fin du roman, on assiste, en quelque sorte, à un réveil ou à un désenchantement.

Au moment de quitter Gaze, Effingham a le sentiment de revenir au quotidien, en laissant derrière lui son rêve ou sa vision de l'autre monde:

If what was over had indeed been a fantasy of the spiritual life, it was its fantanstic and not its spiritual quality which had touched him. He had, through egoism, through being in some sense too small, too trivial to interest the powers of that world, escaped from

evil. But he had not either been touched by good. That vision, true or false, he would leave to Max, of the good forced into being as the object of desire, as if one should compel God to be. He himself would hurry back to his familiar ordinary world.(p.268)

Dans ce roman, le rêve n'a pas de place que dans les pensées des personnages. Il reste strictement dans le domaine individuel et subjectif. On éprouve le sentiment qu'il est impossible pour l'homme sujet aux préjugés et aux passions de connaître la vérité absolue. Enfin, c'est à une sorte d'agnosticisme que l'on aboutit, et la tragédie de ce roman y tient.

*The Unicorn* et *Monsieur Ouine* ont cela de commun que l'auteur n'impose pas sa «vérité» au lecteur par le moyen de la narration. Pourtant, *Monsieur Ouine* ne connaît pas cette individualisation épistémologique de *The Unicorn*.

La narration de *Monsieur Ouine* qui dépasse parfois le point de vue individuel et qui remonte même dans le temps, tout en réservant les énigmes et l'obscurité, fournit une toile de fond unie. Si un climat de rêve règne dans ce roman, il s'agit d'un rêve collectif de l'univers romanesque tout entier. Le lecteur voit le paysage estompé de *Monsieur Ouine* comme une image dans le miroir. Et c'est cette ambiguïté impliquant le lecteur qui ouvre ce roman à la vraie résolution des énigmes, résolution qui ne pourrait être apportée que par la «révélation» dans le sens chrétien.

A partir de l'analyse de la modalité de la narration, nous avons envisagé la nécessité qui fait prendre une telle modalité à chaque roman. Pour conclure, nous pouvons constater en effet que la forme que prend la narration d'un roman ne reste pas seulement une question structurale, mais elle trahit les idées de l'auteur sur les activités cognitives de l'homme, idées qui sont d'ailleurs parfois essentiellement liées au sujet du roman, comme dans ces deux cas que nous avons examinés.

## APPENDICE

### Document 1

Maman est une femme sensible, c'est-à-dire admirablement défendue contre les fortes déceptions de la vie, impénétrable. Aussi loin qu'elle: remonte, dit-elle, le cours des ans, sa mémoire ne lui présente qu'une succession monotone d'événements futiles, pareille au déroulement de la mer sur une pente unie: le flot la caresse sans l'user. A l'ancien curé de Fenouille qui s'étonnait courtoisement de la trouver toujours si résignée, si docile aux volontés d'une Providence qu'elle teint pourtant d'ignorer — non par malice assurément, peut-être par on ne sait quelle méfiance entêtée, bien féminine, hélas! à l'égard d'une philosophie spiritualiste souvent exigeante, avortons-le! — elle répondait simplement: «La douceur a raison de tout. — Chère dame, s'écriait le bonhomme, vous venez de parler comme une sainte!» Et c'est vrai que rien n'a résisté à cette douceur, jamais. A force d'en appeler sans cesse à ce témoin irrécusable — la douceur, ma douceur — il semble qu'elle soit prise elle-même à son jeu, ainsi qu'un enfant fait du tigre imaginaire dessiné par lui sur le mur. Pour tant de pauvres diables, la douceur

n'est qu'absence, absence de malice ou de malignité, qualité négative, abstraction pure. Au lieu que la sienne a fait ses preuves, prudente en ses desseins, hardie à prendre, vigilante à garder. Comment ne pas l'imaginer sous les espèces d'un animal familier? Entre elle et la vie, le rongeur industriel multiplie ses digues, fouille, creuse, déblaie, surveille jour et nuit le niveau de l'eau perfide. Douceur, douceur, douceur. [...] Elle songe à la force qui est en elle et dont le sort propice ne lui a pas permis de donner la mesure, cette expérience profonde des êtres, de leur faiblesse, de leur secrète fragilité — expérience dont elle serait bien incapable de faire profiter personne à peine contrôlée par l'esprit, — à peine distincte des obscurs pressentiments de l'instinct. «Je n'ai jamais rien compris à la vie, a-t-elle coutume de dire, sinon qu'elle m'a toujours portée au but que je voulais atteindre.» Et elle ajoutait non sans coquetterie, pour l'édification de l'ancien curé de Fenouille: «Toute petite, j'avais une peur affreuse des hommes, et puis j'ai connu un jour que cela qui gesticule n'est pas dangereux.» D'où lui vient ce souple génie, cette patience d'insecte, la clairvoyance inexorable qui lui permet d'attendre à coup sûr la lassitude de l'adversaire, le premier mouvement de faiblesse ou d'oubli? De son père, peut-être, mort très jeune, dont elle revoit le visage livide, les yeux au cerne bleu, la bouche nerveuse, inquiète, faite pour le mensonge et la caresse — jusqu'à ce geste qu'il avait, qu'elle a elle-même, le recul imperceptible de tout le buste à la moindre apparence de contradiction.

## Document 2

— Eh bien! lâche moi, mon vieux, je puis bien tomber tout seul.»

«Jamais, dit l'enfant d'une voix sourde, jamais!»

De qui, de quel ancêtre, de quel maître farouche tenait-il ce petit visage barbare, avec ses pommettes mongoles, la dépression profonde des orbites sous le double arc frontal, la bouche impérieuse, presque sauvage et ces crins noir? Mais plus étrange encore, ou plus effrayante, la paradoxale mobilité de ces traits, le frémissement perpétuel des faibles muscles sous la peau mate, l'appel incessant du regard ainsi qu'une flamme renversée par le vent.

Le vieux lui-même, l'aïeul aux épaules géantes, l'étranger venu quarante années plus tôt des plaines de Flandres, n'a jamais soutenu l'inconscient défi de ces yeux trop différents des siens, d'une autre espèce; il détourne un peu, juste assez son visage rose et glabre. Que leur répondre? Le fils est mort la bru aussi et il a permis au fond que sa fille épousât ce mauvais gars, cet ivrogne. De plus l'incurie du médecin de Fenouille a fait de son petit-fils un boiteux. Un boiteux! Plaise au ciel que l'autre ne s'avise un jour d'engrosser sa femme, le manant! Mais il faut dévorer sa honte en silence, s'asseoir à la table chaque soir bien droit, tête haute, luttant sournoisement contre les reins, la nuque, les jointures brûlantes, la hideuse vieillesse. D'ailleurs, le vieux prend sa part convenable de besogne, de soupe, d'eau-de-vie et il a dans sa cassette de quoi payer le curé, le docteur, acheter le cercueil, dédommager la fille pour les deux draps gâchés, le suaire. Nul ne sait mieux que lui saigner un cheval, désenfler d'un coup de trocart la bête bourrée de trèfles frais, ou les bras nus, engagé jusqu'à l'épaule, aider une génisse dans son premier travail. Au temps des mauvaises récoltes, jadis, on le payait d'un «merci à vous, monsieur Devandomme», la main à la haute casquette de soie noire car en dépit de son mariage avec Zéléda peu se fussent enhardis à le traiter en cousin, et il avait son banc à l'église. Mais il accepte maintenant son salaire, entasse les billets de dix francs, de vingt francs, bien dépliés au pouce, un par un, les serre ensemble avec un vieux lacet. Chaque premier jour du mois, il pose le paquet sur la table, sans un mot, retire de sa poche une main énorme pleine de monnaie: «Ici petit, dit-il de sa voix rauque, voilà pour tes livres.» La fille remplit de genièvre un grand verre.

Non plus que sa mère défunte, hélène n'aime guère son père, ce paysan orgueilleux; elle le redoute avec une nuance de moquerie obscure, inavouée, profonde. La famille paternelle lui reste inconnue, aussi fabuleuse qu'une tribu d'Afrique — le vieux n'a ni frère ni soeur et depuis quarante ans n'écrit jamais à personne... Alors quoi! elle appartient tout entière aux gens d'ici, à ces buveurs de bistouille, ces fanfarons avec leur belle chemise fraîche du dimanche sur leur peau brune, la casquette claire posée sur l'oreille, leur jolie bouche canaille, toujours humide et ce parler gras appris dans les bals d'Étaples. Certes, le père n'eût pas permis jadis qu'elle dansât aux

ducasses, et c'est un bien pauvre soulas pou une fille que le regard furtif jeté chaque dimanche, au sortir de la messe, sur les vitres de l'estaminet! Après quoi il faut qu'on aille sagement ourler du linge d'église dans la salle du presbytère à l'odeur aigrelette. Aussi quel coup sourd en pleine poitrine, quel grondement de tout son jeune sang lorsque voilà deux mois elle a vu un soir, à deux pas, derrière la haie, sa courte pipe au coin des lèvres et les yeux rieurs, le bel Eugène, Eugène Demenou, venu six mois plus tôt avec son équipe de bûcherons, ses chars et ses chevaux, pour exploiter la forêt de Gardanne, au compte du syndicat juif de l'Ardenne... Ah! ah! dès le second jour, la tête pressée contre la veste de bure qui sent les bruyères et la mousse, elle a mordu son cou blanc!

A leur double stupeur le vieil homme répondit: «C'et bien, nous ferons la noce en août», absolument comme il eût dit: «Voilà le temps des pommes», avec un coup d'oeil au cadre doré où la grosse dame sourit toujours, d'un sourire mort depuis quinze années, placide, imperturbable sous la crasse et les chiures de mouches.

### Document 3

Elle ne l'a pas entendu, pauvre fille!... Est-elle encore capable de voir ou d'entendre? Et pourtant, bien avant que les feuilles mortes trempées d'eau aient fait sous son pas cet affreux bruit de suçoirs, bien avant que la haute et fine silhouette — ah! si jeune: on dirait d'un de ces dénicheurs de nids barbouillés de mûres, un compagnon des anciens dimanches, des beaux dimanches! — ait paru en haut du sentier, son cœur était déjà miraculeusement libre et léger dans sa poitrine, avec on ne sait quel espoir absurde, éblouissant.

«Ecoute, dit-elle, je croyais m'être trompée, il y a si longtemps que je suis là dans le noir.»

Comme d'habitude, elle se tenait à distance, sagement, sans aucun sourire même des yeux. Car c'est ainsi qu'il l'aime. Mais à sa grande surprise, voilà qu'il l'a prise cette fois violemment contre sa poitrine, en silence.

«Viens-t'en chez nous, fait-il d'une voix qu'elle reconnaît, qu'elle n'a entendue qu'une fois, le soir des noces.

— C'est que la nuit n'est pas fameuse, dit-elle, et j'ai gardé mes souliers troués. Comment veux-tu que j'aïlle comme ça jusqu'à la hutte? Il est passé dix heures, la jument n'a même pas son foin.

— Je te porterai, répond-il, quand tu seras lasse.»

Elle se mit aussitôt à marcher derrière lui sans un mot. Et dès ce moment, elle cessa de prévoir, de penser. Comme c'est donc bête de penser — car on pense seule, hélas! — alors que la première parole de l'amant dispense un oubli plus parfait que le sommeil, fond si délicieusement dans les veines, y change le sang en vin!

[...]

«Où allons-nous?

— Au Relais, dit-il. As-tu froid?

— Un peu», répond-elle timidement.

Car elle l'a vu déboutonner sa veste de velours et s'enchant à l'idée de sentir sur son cou, sur ses épaules, la suave chaleur du jeune corps fraternel. Mon Dieu! s'est-il jamais montré si prévenant, si tendre? Et elle baise au passage, bien vite, l'étoffe trempée de rosée.

«Nous y voilà, petite.»

C'est une porte toute neuve, aux gonds solides, fermée d'un cadenas. Et la cachette n'est pas reconnaissable non plus: les murs en sont tapissés de nattes qu'il a tissées lui-même, et il s'est construit un lit de planches bien rabotées, peintes d'un vert sombre et sylvestre. Son beau fusil est là, jeté en travers, le gros douze trapu luisant comme une bête. Elle a tout à coup envie de le toucher, glisse sournoisement sa petite main sur la batterie.

«Va donc, il ne te mordra pas!» fait-il d'une voix étrange.

Les yeux n'expriment rien, ni colère ni tendresse, rien qu'elle connaisse du moins, sinon peut-être une sorte d'attention profonde. Il l'enlève tout à coup, la plie contre sa poitrine, et déjà sa bouche violente cherche la sienne quand il la repose à terre, avec une fermeté douce.

«Vaut mieux pas», remarque-t-il pensif:

Il a rougi jusqu'aux oreilles et elle essaie de sourire.

«Ben quoi, dit-elle, pas prêt?

— Blague pas, fait-il, ne blague pas avant de savoir — Je te veux tout autant qu'avant, ma fille, et plus: il n'y a pas d'offense...»

Et aussitôt, il recula de deux pas, secoua les épaules en frissonnant.

«Dommage qu'on ne connaisse pas une autre manière de faire l'amour, reprit-il de la même voix presque indistincte, une autre manière, une vraie — je ne sais pas — une qui ne puisse servir qu'une fois par exemple — une seule fois avec une seule femme. Parce que des filles, j'en ai eu tout autant que j'ai voulu, parole, mais toi... toi, personne ne sait ce que t'es, avec ton gentil petit corps qui ne pèse pas plus qu'une brassée de joncs frais — vaillante comme un homme»

Elle a rougi de plaisir, sans lever les yeux.

«Eugène, fait-elle enfin, après un long silence, faut pas regarder aujourd'hui à me dire tout...»

C'est la phrase la plus hardie qu'elle ait sans doute jamais prononcée, car il ne souffre pas qu'on l'interroge, et même à ce moment il n'a pu réprimer une grimace de colère, une double ride au coin de ses lèvres rusées, qui d'ailleurs s'efface aussitôt.

«Le vieux est venu.

— Ici?

— Pas chez le pape, bien sûr.

— Hé quoi! dit-elle, d'une voix qu'elle s'efforce de raffermir, qu'est-ce qu'il te voulait?»

Mais il hausse les épaules et s'éloigne vers la porte. Tant pis: elle vient de poser sa petite main sur sa manche.

«La police?

— Fous-moi la paix, crois ce qui te plaira.

— Oh! dit-elle, je crois tout, je suis habituée.»

Les mots lui manquent et l'idée qu'elle ne peut plus se taire, qu'il lui faut rompre pour la première fois ce silence intérieur où elle a enfoncé son amour la fait trembler comme une feuille.

«Allons, t'impressionne pas" souffle-t-il, entre ses dents.

Le reproche l'a fait rougir de nouveau, mais elle n'a vraiment pas le temps de souffrir, elle rassemble ses forces. Toutes les forces de sa vie tournent autour de quelques pauvres mots trop simples, comme un vol d'immenses oiseaux.

«Si le père t'a manqué, dit-elle, je... je...»

Mais le tremblement l'a saisie encore, un grand froid qui fait le vide dans sa poitrine, et son cœur bondit contre ses côtes, à grands coups sourds.

Il l'a regardée, de ce même regard attentif, et elle tourne vers lui, docilement, son petit visage misérable, secoué de frissons.

«C'est pas qu'il m'ait manqué, dit-il, et moi je ne lui manquerai pas non plus.»

Il respire calmement, profondément, il gonfle d'air sa poitrine.

«Passe-moi le litre de rhum, petite, il est derrière toi, sur la planche. On crève de froid ici dedans, pas vrai?

Mais elle paraît ne pas entendre, immobile, les yeux mi-clos, la main posée contre le mur.

«A quoi que tu penses?

— Si tu bois, je boirai, dit-elle, mais j'aime mieux pas.»

Elle regarde ses souliers boueux, ses bas trempés, avec un sourire de détresse. Et ses doigts aux ongles usés lui font honte aussi. Elle les cache sous un pli de sa jupe.

«Le père n'a pas... n'a pas..., commence-t-elle.

— N'a pas quoi?

— Rien. Je suis folle,

— N'a pas quoi? C'est quand même pas le moment de jouer à la charade, ma fille.

— N'a pas parlé aux .. aux gens de la police?

— Non. Il paraît seulement que le mandat est lancé. Je peux être arrêté demain.

— Il ne faut pas!»

Elle a dit ça comme le vieux, de la même voix, très basse avec son accent farouche. Puis lentement, prudemment, sans lever la tête, elle laisse glisser vers son amant un regard lourd

«Des fois qu'on pourrait partir, s'en aller loin — je ne sais pas, sur les mers, quoi? dans des pays, nous deux...

— Pas de bêtises, dit-il durement.

— Je parlais de cela sans y croire, s'excuse-t-elle. Mais j'ai rêvé tous ces temps-ci d'une grande forêt très haute, rien que des troncs, des troncs comme des colonnes, tout droits, tout noirs, et je croyais voir la mer à travers, très loin, puisque je ne l'ai jamais vue.»

Les derniers mots s'étouffent au fond de sa gorge et comme elle recule un peu dans l'ombre pour renouer le lacet qui lui sert de jarretière, elle rencontre son regard et rougit jusqu'aux oreilles.

«J'allais retourner les litières, dit-elle, je suis venue telle que j'étais, tu penses.»

Mais son pauvre sourire n'en peut plus, et de grosses larmes roulent au bord de ses cils.

«Si j'avais su ne pas rentrer, j'aurais mis ma robe et mes bas.

— Tu ne rentres pas?

— Non, bien sûr, dit-elle simplement. Tu me crois donc si bête?»

Ses yeux se sont séchés d'un seul coup, brûlent dans le mince visage qu'elle tourne à présent vers la porte, plein d'une volonté implacable et douce, inexorable.

«Ils vont être bien attrapés, fait-elle, eux tous...»

Elle lui tourne le dos et il peut la regarder à son aise, avec une surprise naïve, mêlée de crainte et d'une sorte de rancune obscure. Certes l'image de mort est entrée maintenant trop avant dans sa cervelle et nulle force au monde ne l'en délogerait plus, mais c'est en vain qu'il serre sa ceinture avec le mouvement canaille des hanches dont on l'a vu tant de fois défier ses rivaux, là-bas dans les cafés de Meknès : il n'y a devant lui aucun ennemi, hélas! nulle force connue, familière, à laquelle il puisse mesurer la sienne, mais un sentiment simple et terrible dont il ignore le nom, un mur nu, lisse comme verre, où la terreur même ne saurait accrocher ses ongles, un orgueil plus limpide et plus dur que le diamant.

Il cherche, il cherche vainement la phrase qu'il faut dire, celle qu'il a toujours trouvée chaque fois qu'il a joué sa vie, couru sa chance, mais sa pensée tourne sur elle-même, ainsi qu'un rat dans une trappe. Et d'ailleurs la vie est jouée, la chance courue. Plus rien.

«Bon quoi, c'est le sort! » dit-il enfin comme à lui-même.

Elle hausse les épaules, indifférente. Peut-être eût-elle souhaité qu'il refusât son sacrifice, la-supplîât de vivre, de lui survivre, avec ces mots qu'on lit dans les livres, et pourtant il ne lui déplaît pas non plus qu'à ce moment solennel l'amour lui découvre une fois encore son vrai visage, car elle le connaît depuis longtemps pour un maître avide et dur; elle l'a servi comme tel, sans vaine pitié d'elle-même, avec une espèce d'opiniâtreté farouche. De la mort, elle n'a d'ailleurs nul souci. Elle lui paraît une chose de l'enfance, un conte de fées. Si peu réelle, que la pensée ne lui vint même pas alors d'enlacer de ses bras, de serrer sur sa poitrine le compagnon menacé qu'elle enveloppe de son regard tranquille. A peine a-t-elle conscience d'une crainte vague et presque voluptueuse, d'un mystérieux mouvement de tendresse pour son propre corps en péril, tandis qu'elle effleure distraitemment des doigts, sous son caraco, ses jeunes seins.

«Que veux-tu, dit-elle, nous n'aurons pas eu seulement un bon mois, un mois tranquille!...»

Elle s'approche de lui, pose doucement les lèvres au creux de son menton, avec un frisson de plaisir. Jamais elle ne s'est sentie plus molle, plus souple, toute docilité, toute caresse. Il lui semble qu'elle flotte sans pesanteur au fond d'une eau calme où nul remous ne peut l'atteindre. La pensée même de la fin prochaine ne lui parvient qu'amortie et décolorée à travers cette épaisseur limpide. Ah! faire vite ce qui doit être fait, glisser de cette

paix dans l'autre...

Elle s'écarte un peu, timidement, sans oser encore délier les deux mains qu'elle a croisées sur son épaule. Que fixe-t-il à présent de ce regard sauvage? Voici venir l'heure où toutes les haines levées contre leur humble destin retomberont sans force, et il a l'air de leur faire face, le front baissé, les muscles tendus. Que de temps ils auront ainsi perdu pour l'amour, lorsqu'il était encore un temps pour eux!... Et maintenant... Maintenant c'est vrai qu'elle ne comprend plus du tout, mais qu'importe! Elle ne désire que sa volonté chérie, elle est prête à lui sacrifier jusqu'à la consolation du dernier adieu.

«Écoute, Eugène, dit-elle enfin peut-être... peut-être qu'il vaut mieux...»

La voix d'une mère n'est pas plus douce, et elle referme les bras sur sa poitrine, retrouvant d'instinct le geste sacré des berceuses.

Il recule imperceptiblement, puis s'arrête, les mains tombant le long des cuisses, les épaules jetées en arrière, dans l'attitude d'un homme qui vient de recevoir le coup en pleine poitrine, reste une seconde immobile, avant de tomber face contre terre. Mais le corps seul a cette résignation tragique, cet abandon. Le creux des joues livides, le pli douloureux des lèvres marque encore l'entêtement et la ruse, et dans le délaissement même de toute espérance, au-delà de toute prévision, de toute crainte même, de toute pensée, non pas le refus de la mort, mais cet amour que la bête agonisante donne à la vie avec son dernier hoquet sanglant, l'amour inflexible de la vie.

«C'est drôle, dit-il, t'es comme le vieux, tout pareil. T'as pas l'air de tenir à savoir si je l'ai tué ou non, le petit gars?»

— Qu'est-ce que ça peut bien me faire, mon amour?»

Cette fois elle a bien saisi dans le sien le regard rebelle, il ne lui résiste plus, elle voit s'éclaircir par degré les yeux farouches. Dieu! le voilà tel qu'il lui est apparu jadis, derrière la haie, ses cheveux en broussaille, le cou nu, et son doux sourire effronté. De ses deux faibles mains, elle le recouvre doucement, elle fait au visage aimé un premier linceul de ses paumes fraîches, en détournant les yeux.

«N'y touche pas — ne touche pas à ta figure, mon chéri... jure-le-moi!»

En même temps elle écarte la chemise, pose sa bouche à la place du cœur. A-t-il compris? Peut-elle dire plus? Non, n'est-ce pas? Maintenant il faut faire vite. Vite! Vite! Sa main gauche maintient closes les paupières qu'elle sent battre un instant sous ses doigts. De l'autre, derrière son clos, à tâtons, elle attire vers elle, vers sa propre poitrine le noir hammerless aux canons courts, glisse miroitement la crosse entre les planches et la paille, pose la double bouche d'acier sous son sein, appuie de tout son poids, cherche la détente du pouce... Impossible de savoir si le coup est parti ou non, mais la cabane est pleine d'une fumée rouge, écarlate, qui s'assombrit en une seconde, clevient un pan de silence et de nuit.

#### Document 4

«Ma démarche semble indiscreète, je l'avoue, dit M.Ouine, mais elle ne sera pas tout à fait inutile, peut-être...»

Le curé de Fenouille proteste d'un haussement d'épaules, puis tourne vers la fenêtre aux persiennes closes un regard éperdu. La rougeur de ses joues, de son front, de ses oreilles, bien qu'à peine visible dans l'ombre, exagère l'expression un peu naïve du visage, en accentue les rondeurs puériles. Et plus puérile encore, la voix basse trop lente, trop accentuée, qui s'affole sur les dernières syllabes, s'étrangle.

«Nouveau venu flans cette paroisse, je ne puis que vous être reconnaissant... Un ministère si difficile... Notre vénéré prédécesseur...

— Votre vénéré prédécesseur, reprend M.Ouine avec calme, excusez-moi de parler avec une franchise cynique d'ailleurs bien moins éloignée de mes habitudes et de mon caractère qu'on le suppose, votre vénéré prédécesseur était un sot.»

Il tire de la poche son ridicule mouchoir de coton tout raide d'empois, y enfonce un moment sa face puis le remet dans son chapeau.

«Nos relations étaient cordiales, intimes même. Je pense qu'il me prenait pour un homme de lettres, ou

quelque chose d'approchant.

— Mais moi-même, monsieur Ouine, jusqu'ici.. je croyais...»

Le sourire de M.Ouine se fait si pitoyable, si doux que le jeune prêtre sent de nouveau flamber ses joues.

«Notre ami, poursuit l'ancien professeur de langues, appartenait à cette espèce d'innocents dont nous venions abondamment tous les maux. L'innocence, monsieur... L'innocence...»

Il aspire l'air bruyamment, comme s'il étouffait.

«L'inn... L'innocence, monsieur, est une maladie propre à l'âge mûr. Du moins n'atteint-elle qu'alors sa plénière et parfaite malfaisance.

— Et nos enfants, voyons, monsieur le professeur, nos chers petits enfants?

— Heu... Heu...», dit brusquement M.Ouine, puis il se tut.

Ses joues venaient de s'enflammer à leur tour, et les plis épais du cou sur le col dur passèrent du rouge vif à une espèce de bleu livide. Tout le visage parut s'enfler de colère tandis que plus promptes que le regard toujours placide les lèvres laissaient passer un sifflement d'impatience. Une minute, ils restèrent ainsi face à face, sans un mot.

«Permettez, reprit enfin M.Ouine (ses yeux s'étaient remplis de larmes), j'ai été jeune j'ai cru moi-même à l'enfance, je n'ai que trop souffert par elle.»

Il trotta de la paume le revers de sa veste, parut s'absorber dans la recherche d'une facile invisible.

«Nous rencontrons sans doute des enfants innocents. dit-il ceux-là le resteront jusqu'à la fin. L'innocence résiste à tout, elle est plus dure que la vie. Hélas ! j'ai connu, moi qui vous parle, quelques-uns de ces malheureux...

— Ne croyez-vous pas..., commença le pauvre prêtre, mais l'objection qu'il allait lui faire lui parut tout à coup si vaine qu'il n'osa pas achever.

— La société se défend contre de tels monstres, poursuivit l'ancien professeur, imperturbable. elle les repousse peu à peu hors de son sein, elle les isole. Voyez le sort fait à ces vieilles filles ingénues : la famille elle-même se ferme devant elles... Monsieur... Monsieur...

Sa voix déjà s'enflait. Il la contint cependant.

«Je ne prétends pas définir l'innocence, monsieur, elle est une chose très différente de ce que nous imaginons, de ce que le mot d'innocence suggère. Je sais seulement— l'expérience m'apprend— qu'un innocent est toujours le centre, le noyau d'une certaine fermentation. La terre fermente autour de l'innocent, monsieur, voilà le fait! »

## NOTES

(EB = Etudes Bernanosiennes, la revue des lettres modernes, Minard)

1. TURBET-DELOF, Guy, *L'Emploi des temps et les deux doubles de l'auteur* in EB 12, 1971.
2. LECLERCQ, Pierre-Robert, «*Le Saint de Lumbres*» ou la «*Fin manquée*» in EB 12, 1971.
3. LECLERCQ, Pierre-Robert, *Note sur le Récit, le mot et la métaphore* in EB 10, 1969.
4. BEGUIN, Albert, *Bernanos par lui-même*, Seuil, 1978, p.80.
5. FITTING, Peter, *Narrateur et Narration* in EB 9, 1968.
6. BERNANOS, Georges, *Correspondances I*, Plon, 1971, p.513.
7. BERNANOS, Georges, *Correspondances II*, Plon, 1971, p.33.

8. TODOROV, Tzvetan, *Les catégories du récit littéraire*, in *Communication* 8, 1966, «L'analyse structurale du récit» (réédition Seuil, 1981) pp.147-149.  
GENETTE, Gérard, *Figures III*, Seuil, 1972, pp.206-223.
9. *Ibid.* p.209.
10. cf. SARTRE, Jean-Paul, *M.François Mauriac et la Liberté*, in *Situations I*, Gallimard, 1947.
11. cf. MAURIAC, François, *Le Roman*, L'Artisan du livre, 1928, et *Le Romancier et ses personnages*, Corrèa, 1933.
12. MAGNY, Claude-Edmonde, *Monsieur Ouine, Le dernier roman de Bernanos*, in EB 5, 1964, p.11.
13. cf. ROBBE-GRILLET, Alain, *Pour un nouveau roman*, Les Editions de Minuit, 1963, p.118.

## TEXTES

BERNANOS, Georges, *Monsieur Ouine* in *Oeuvres romanesques*, bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1961

MURDOCH, Iris, *The Unicorn*, Penguin Books, 1966

## Abstract

Narations called "of third person" can be classified, say Genette, Pouillon, Todorov and other critics, in three types according the point of view they adopt: the case in which the narrator says more than any character knows, the case in which the narrator doesn't say more than a certain character knows, and the case in which the narrator says less than a certain character knows. We analyze the narrations of *Monsieur Ouine* and *The Unicorn* according to this method of classification to illustrate how the form of narration is related to the world vision of the author.

## 深層格フレームによる日本語動詞の意味記述

### The Description of Japanese Verbs Based on Deep Case Frame

呉 凌非

WU Lingfei

#### Abstract

To process the natural language with the computer, sometimes it is necessary to re-describe the meaning structure of the words, especially the verbs. In this paper, a set of deep case frames are defined and some concepts such as "phase", "static state", "dynamic state", "switch of state" are introduced to build the meaning structures for the Japanese verbs. As a result, 30 meaning structures are developed and about 1000 basic Japanese verbs are classified with these 30 meaning structures.

#### 1 はじめに

コンピュータによって自然言語を処理するためには、ときには自然言語の基本単位となる語とくに文の述語となりうるような語（本稿では述語と成りうる語をすべて動詞と見なす）を意味的に細かく記述する必要がある。本稿では、「深層格フレーム」、「局面(phase)」、「態」（動態([±teiru],[+phase-change])、静態([±teiru],[−phase-change])、状態の切り替え{([−teiru],[+phase-change])、([+teiru],[−phase-change])}）の三つの概念をベースに、1000あまりの日本語動詞を対象に、日本語動詞の意味の再記述を行う。

#### 2 深層格フレームの抽出

呉凌非(1997)では、行為者格、対象格、軌跡格、参照格、道具格、様態格、原因格、時間格、場所格の9つの深層格を定義した。この9つの深層格のなかに、様態格、時間格、場所格、原因格などはすべての動詞と共起することができるため、動詞の意味特徴を記述するにおいて、弁別性がなくオプション格と見なす。道具が常に行行為者にコントロールされるため、道具格の出現は行為者格の出現に伴う。つまり、道具格は独立性を持たず、動詞の意味特徴を記述するにおいて、オプション格と見なすことができる。一方、行為者格、対象格、軌跡格、参照格の4つの深層格は動詞の意味特徴を記述するに際し、もっとも基本的な深層格で、必須格と見なす。

深層格フレームとは、命題（呉凌非(1997)を参照されたい）を記述するために、動詞と最小限の必須格の組み合わせのことを言う。次は、深層格フレームになりうる組合せである。「\_」は動詞が挿入する場所である。

四つの深層格から構成する場合：[  A+O+T+R]

三つの深層格から構成する場合：[  A+O+T],[  A+O+R],[  A+T+R],[  O+T+R]

二つの深層格から構成する場合：[  A+O],[  A+R],[  T+R],[  O+T],[  O+R],[  A+T]

一つの深層格から構成する場合：[  A],[  R],[  T],[  O]

しかし、対象格の参入がない命題が存在しないため(Cook 1979)、[  A+T+R],[  A+R],[  T+R],[  A+T],[  A],[  R],[  T]などの組合せを除外しなければならない。さらに、[  A]は

(1) 子供が遊んでいる。

に対応しているように見えるが、後に述べるように、「遊ぶ」は「行為・現象」動詞であり、[  A+O]に対応している。また、軌跡格が現れる場合、動詞が移動あるいは状態変化を記述し、参照格が現れる場合、動詞が対象と参照物との静的相互関係を記述する。同一の動詞が同時にこの性格の異なる二つの場合を一つの命題において記述することは有り得ない。つまり、軌跡格と参照格とは排他的関係にあり、[  A+O+T+R]という深層格フレームが実在しないことがわかる。こうして、残りの可能な深層格フレームが[  O],[  O+R],[  O+T],[  A+O],[  A+O+T],[  A+O+R]の6つとなる。この6つの深層格フレームについて、相応な実例が見られれば、その深層格フレームが実在することになる。

(2) 星が輝く。

において、対象格「星が」は最小限に必要とする深層格である。この実例の命題は、[  O]の深層格フレームに対応している。

(3) 教室に生徒がいる。

において、対象格「生徒が」と参照格「教室に」は最小限に必要とする深層格である。この実例の命題は[  O+R]の深層格フレームに対応している。

(4) 部屋の温度が10度から30度まで上がった。

において、対象格「温度が」と変化の軌跡を表す軌跡格「10度から30度まで」は最小限に必要とする深層格である。この実例の命題は[  O+T]の深層格フレームに対応している。

(5) 太郎は次郎を虐める。

において、行為者格「太郎は」と対象格「次郎を」は最小限に必要とする深層格である。この実例の命題は[  A+O]の深層格フレームに対応している。

(6) 彼は荷物を駅まで運んだ。

において、行為者格「彼は」、対象格「荷物を」、軌跡格「駅まで」は最小限に必要とする深層格である(軌跡格の特殊性については呉凌非(1997)を参照されたい)。この実例の命題は[  A+O+T]の深層格フレームに対応している。

(7) みんなは彼を代表と決めた。

において、行為者格「みんなは」、対象格「彼を」、参照格「代表と」は最小限に必要とする深層格である。この実例の命題は[  A+O+R]の深層格フレームに対応している。

上記のように、6つの深層格フレームは、いずれも実例が見られ、実在する深層格フレームと見なすことができる。

次に、上記の6つの深層格フレームがそれぞれどのような動詞に対応しているのか、そしてそれらの動詞

はどのような特徴を持っているのか、整理してみたい。

### 3 深層格フレームによる動詞の分類

#### 3.1 [ \_O ]に対応する動詞

本項では、まず深層格フレームを構成する深層格である行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち、対象格しかとらない動詞を検討することにする。例えば、

(8) 太郎は焦っている。

(9) ベルが鳴る。

(10) 皿が割れる。

の下線部のような動詞は深層格として、対象格しかとらない。したがって、このような動詞は[ \_O ]のような深層格フレームに挿入できる。なお、大多数の形容詞、例えば、

(11) 彼女は美しい。

の「美しい」、大多数の形容動詞、例えば、

(12) 彼女の部屋はきれいだ。

の「きれいだ」、大多数の「名詞+だ」、例えば、

(13) 彼女は学生だ。

の「学生だ」はいずれも[ \_O ]に入る。[ \_O ]以外の深層格フレームに入る形容詞、形容動詞、「名詞+だ」もあるが、後の各節で述べることにする。

意味的には、[ \_O ]に入る動詞は、例(8)のような、対象の「状態」、例(9)のような、対象に現れる「現象」、例(10)のような、対象の「状態の切り替え」のいずれかを表すと考えられる。以下では、[ \_O ]に入る動詞をこの三つの場合に分けて具体的に見てみたい。

##### [1] [状態]

[ \_O ]に入る動詞の中に、「ている」が付くかどうかに関係なく、局面的変化が含み込まれていない、という特徴を持つ動詞がある。例えば、

(14) バラが薫る。

(15) バラが薫っている。

の二つの例では、「薫る」と「薫っている」はともに「バラ」の状態を表しており、いずれの場合も局面的変化が含み込まれていない。本稿ではこのような特徴を持つ動詞を「状態」を表す動詞と見なし、{*±teiru*}, [phase-change]}で表示する。なお、形容詞、形容動詞、名詞+だはいずれも「状態」を表す語であると考えられる。

上記の「状態」特徴を持つ動詞として、「焦る、安定する、生きる、痛む、うずく、うるむ、老いる、薫る、混む、茂る、静まる、湿る、しゃれる、尖る、悩む、難航する、臭う、老ける、…」などがあげられる。ただし、対応する深層格フレームにおける対象格に入る名詞の下位範疇が異なれば、状態の内容も異なってくる。例えば、

(16) この洗剤は臭う。

のような、[\_O]の対象格に「具体物」が入るものを見ると、動詞は対象の「物理的状态」を表す。上記にあげた動詞の中に、この種の動詞はほかに、「薫る、尖る、静まる、混む、茂る」などがあげられる。また、

(17) この馬は生きている。

のような、[\_O]の対象格に「有生物」が入るものを見ると、動詞は対象の「生理状态」を表す。上記にあげた動詞のなかに、この種の動詞はほかに、「老ける、老いる」などがあげられる。また、

(18) 彼は焦っている。

のような、[\_O]の対象格に「人間」が入るものを見ると、動詞は対象の「心理状态」を表す。「焦る」に類似する動詞として、「悩む」などもこの種の動詞として考えられる。また、

(19) 歯が痛む。

のような、対象が「身体の一部」である場合、動詞は対象の「身体状态」を表す。上記にあげた動詞のなかに、この種の動詞はほかに「うずく、潤む」などがあげられる。このほかに、

(20) 彼のジャケットはしゃれている。

あるいは、

(21) その言い方はしゃれている。

のように、対象が具体物である「ジャケット」であったり、抽象物である「言い方」であったりすることがある。つまり、「しゃれる」の場合は、対応する深層格フレームにおける対象格には、「具体物」と「抽象物」の上位に位置する意味範疇(obj)が入っていることがわかる。逆に言えば、「しゃれる」という動詞は意味的には一般性を持っているということが言える。また、[\_O]の対象格に抽象物が入るものを見ると、例えば、

(22) この国の政治は安定している。

のように、動詞は対象の「抽象状态」を表す。[\_O]の対象格に行為が入るものを見ると、例えば、

(23) 援助活動が難航する。

のように、動詞は「行為の状态」を表す。

以上は「状态」を表す動詞である。

## [2] [現象]

[\_O]に入る動詞の中に、「ている」が付くかどうかに関係なく、局面的変化が含み込まれている、という特徴を持つ動詞がある。例えば、

(24) 鐘が鳴る。

(25) 鐘が鳴っている。

の二つの例では、「ている」が付く場合と付かない場合、いずれも動的現象を表す。本稿ではこのような特徴を持つ動詞を「現象」を表す動詞と見なし、その特徴を{[±teiru],[+phase-change]}で表示する。

この「現象」特徴を持つ動詞として、「荒れる、続く、照る、鳴る、はやる、光る、震える、燃える、…」などがあげられる。

同様に、上記の「現象」を表す動詞は、対象格に入る名詞の下位範疇の違いによって、意味的にさらに具体的に分けられる。例えば、

(26) ベルが鳴る。

のような、[\_O]の対象格に「具体物」が入るものを見ると、動詞は具体物に現れる現象を表す。上記にあげた動詞のなかに、「鳴る」のほかに、「照る、震える」などもこの種の動詞であると考えられる。一方、「鳴る、照る、震える」と同様に、「荒れる、光る、燃える」などの動詞も、

(27) 海が荒れている。

(28) 星が光っている。

(29) 木が燃えている。

のように、具体物に現れる現象を表すことが可能であるが、

(30) 彼の心は荒れている。

(31) 彼の意見は光っている。

(32) 彼はいま非常に燃えている。

のような比喩的な使い方も見られる。このような場合に限って、「荒れる、光る、燃える」に対応する深層格フレームの「対象格」に入る名詞の下位範疇を「具体物」からその上位へと上昇させる必要があるだろう。

また、

(33) 会議は一週間続く。

あるいは、

(34) 地震が続いている。

のように、[\_O]の対象格に「行為」あるいは「事象」が入るものを見ると、動詞は行為あるいは事象の継続を表す。このほかに、「はやる」もこの種の動詞に属すると考えられる。

以上は「現象」を表す動詞である。

### [3] [状態の切り替え]

[\_O]に入る動詞の中に、局面的変化は瞬間的にしか見られない、という特徴を持つ動詞がある。例えば、

(35) 電気が点いた。

では、動詞は「点いていない状態」から「点いている状態」への切り替えを表す。それに対して、

(36) 電気が点いている。

のように、「ている」が付くと、点いたあとの状態を表す。本稿ではこのような特徴を持つ動詞を「状態の切り替え」を表す動詞と見なし、その特徴を  $\{[-teiru],[+phase-change],[+teiru],[-phase-change]\}$  で表示する。なお、「状態の切り替え」を表す動詞の場合、順序的には(35)が成立すれば、(36)も言えるが、「現象」の場合は、

(37) ベルが鳴った。

が成立した後で、

(38) ベルが鳴っている。

にはならない。

「状態の切り替え」の特徴を持つ動詞として、ほかに「空く、終わる、固まる、かなう、枯れる、乾く、切れる、腐る、崩れる、くだける、くたびれる、壊れる、咲く、死ぬ、閉まる、蒸発する、揃う、絶える、疲れる、尽きる、点く、つぶれる、解ける、整う、直る、治る、にごる、濡れる、始まる、冷える、塞がる、へこむ、滅びる、まとまる、乱れる、もうかる、焼ける、破れる、止む、歪む、緩む、よみがえる、沸く、

割れる……」などがある。同様に、[\_O]の対象格に入る名詞の下位範疇が異なれば、対応する動詞も異なる類に分けられる。例えば、[\_O]の対象格に「具体物」が入るものを見ると、

(39) ガラスが割れる。

のように、動詞は上記の「割れていない」状態から「割れている」への切り替えを表す。「割れる」に類似する動詞として、ほかに、「空く、固まる、枯れる、乾く、切れる、腐る、崩れる、くだける、くたびれる、壊れる、咲く、閉まる、点く、つぶれる、溶ける、にごる、滞れる、冷える、塞がる、へこむ、焼ける、歪む、緩む、沸く……」などもこの種に属していると考えられる。もちろん、「具体物」をさらに細かく分ければ、[\_O]に対応する動詞は、さらに小さい範囲に限定され、深層格フレームも動詞の意味にさらに近づいていくことになる。例えば、「固体」から「液体」あるいは「離散状態」への状態の切り替えを表す場合、動詞は「溶ける、蒸発する」に絞られ、逆に、「液体」あるいは「離散状態」から「固体」への状態の切り替えを表す場合、動詞は「固まる」に限られてくる。

[\_O]の対象格に「有生物」が入るものを見ると、例えば、

(40) 動物は死ぬ。

(41) 人は疲れる。

のように、対応する動詞は対象の生理状態の切り替えを表すことになる。この種の動詞はほかに、「くたびれる」などがある。

[\_O]の対象格に「抽象物」が入るものを見ると、例えば、

(42) 血縁が絶える。

(43) 夢がかなう。

のように、動詞は対象の抽象状態の切り替えを表す。上記にあげた動詞のなかに、「尽きる、滅びる、よみがえる、終わる、始まる、止む」などもこの種の動詞に属していると考えられる。

一方、上記の動詞とことなり、「揃う、整う、直る、治る、まとまる、乱れる、もうかる」などの動詞の場合は、対象格に入る名詞の下位範疇的には、「条件が揃う」のように、「抽象物」であったり、「品が揃う」のように、「具体物」であったりすることが可能であるため、[obj]という意味範疇を持っている。したがって、この種の動詞は意味的には一般性を持っているということが言える。

以上は「状態の切り替え」を表す動詞である。

これまで、[\_O]に入る動詞について見てきた。まとめて言うと、[\_O]に入る動詞は、動詞である場合、さらに、「状態」を表すもの、「現象」を表すもの、「状態の切り替え」を表すものの三種類に分けられる。

### 3.2 [\_O+R]に対応する動詞

本項では、深層格フレームを構成する深層格である行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち、対象格と参照格しかとらない動詞について検討してみたい。例えば、

(44) 記念碑は広場のまん中にそびえている。

(45) アパートは学校に近い。

(46) あの塔は南に面している。

(47) タバコは有害物を含んでいる。

(48) 次郎は太郎に似ている。

(49) 子供は積木遊びに飽きた。

における下線部のような動詞は深層格として、対象格と参照格しかとらない。つまり、このような動詞は[    O+R]という深層格フレームに対応している。

[    O+R]に対応する動詞は基本的には対象格と参照格との間の関係を表すが、その両者の関係を具体的に見ると、(44)のような「位置関係」、(45)のような「距離関係」、(46)のような「方向関係」、(47)のような「包含関係」、(48)のような「比較・相関関係」、(49)のような「感情・態度」の諸関係に分けられる。以下では、[    O+R]に入る動詞について上記の各場合に分けて検討して見たい。

#### [1] [位置関係]

「位置関係」を表す場合、[    O+R]に対応する動詞として「開く、ある、いる、浮かぶ、浮く、映る、起こる、隠れる、生じる、沿う、並ぶ、そびえる、漂う、勤める、生える、発生する、見える」があげられる。この中に、

(50) 庭に桜の木がある。

における「ある」のように、局面的変化を含み込んでおらず、静態を表す動詞がある。つまりこの種の動詞は、3.1 で述べたような状態特徴を持っている。本稿では、このような特徴を「位置関係—静態」と名付ける。上記にあげた動詞のなかに、この種の動詞として、ほかに「いる、沿う、並ぶ、浮かぶ、そびえる、漂う、勤める、見える」などがある。

上記の動詞に対応する深層格フレームにおける対象格および参照格に入る名詞の下位範疇を異なるレベルに分けると、それらの動詞はさらに小さい類に分けられる。例えば、対象格に「具体物」、参照格に「場所」が入るものを見ると、

(51) 遠くに、山がそびえている。

のように、動詞は典型的な「位置関係」を表す。上記の動詞のなかで、「そびえる」のほかに、「沿う、並ぶ、見える」もこの種の動詞である。対象格に「具体物」、参照格に「液体」あるいは「気体」が入るものを見ると、

(52) 川に廃棄物が浮かんでいる。

のように、動詞の表す「位置関係」はさらに個性的になってくる。このほかに、「漂う」もこの種の動詞に属していると考えられる。また、

対象格に「有生物」、参照格に「場所」が入るものを見ると、

(53) 部屋に犬がいる。

のように、有生物の存在を表す。このほかに、「勤める」もこの種の動詞に類似しているが、ただし、対象格に入る名詞は「人間」に限定されている。

このように、同じ「位置関係」を表す動詞であっても、対応する深層格フレームに入る名詞の下位範疇が異なれば、表す「位置関係」も異なってくる。逆に言えば、対象格および参照格に入る名詞の下位範疇を類ごとに指定すれば、深層格フレームは動詞の意味に近づいてくる。

上記のような特徴を持つ動詞のほかに、

(54) 壁に穴が開いた。

の下線部のような「開いていない」状態から「開いている」状態への切り替えを表す動詞も見られる。対象格である「穴が」と参照格である「壁に」との間に依然として、「位置関係」が成立している。本稿では、動詞の持つこの種の特徴を「位置関係－状態の切り替え」で示す。この種の動詞はほかに「隠れる、浮く、映る、起こる、生じる、生える、発生する……」などもあげられる。

この種の特徴を持つ動詞について、対象格および参照格に入る名詞の下位範疇を類ごとに見ると、次のような意味的な違いが見られる。例えば、対象格及び参照格にともに「具体物」が入るものを見ると、

(55) 映像がスクリーンに映る。

のように、動詞は具体物のある場所に出現することを表す。この種の動詞として、「生える、浮く」などもあげられる。

参照格に入る名詞が「具体物」、対象格に入る名詞が「出来事」であるものを見ると、

(56) 学校で事件が起こる。

のように、動詞は事件の発生を表す。この種の動詞として、ほかに「起きる、生じる、発生する」などがある。

## [2] [距離関係]

対象と参照物との間の「距離関係」を表す動詞として、「遠い、疎い、疎遠だ、近い、つながる、隣接する」などがある。このほかに、

(57) アパートは大学から離れている。

のように、「離れている」も「距離関係」を表すことができるが、「離れる」は「移動」を表す動詞であるため、「移動」の部分で述べることにする。

「距離関係」はすなわち対象と参照物との間の相対静止的關係で、対応する動詞は状態特徴を持っているはずである。動的特徴を持っていれば、それは「距離関係」ではなく、後で述べる「移動」を表すことになる。

次に対応する深層格フレームにおける深層格に入る名詞の下位範疇について見てみたい。

対象格および参照格に入る名詞がともに「具体物」である場合、

(58) このアパートは学校に近い。

のように、動詞は典型的な「距離関係」を表す。このほかに、上記の「遠い、つながる、隣接する」もこの種の動詞である。しかし、対象格および参照格に入る名詞が抽象的になってくると、動詞が表す「距離関係」も異なってくる。例えば、対象格にイベントのような「抽象物」、参照格に「時間」が入ると、

(59) 祭りは開催の日に近い。

のように、「時空」的な距離を表す。また、対象格に「人間」、参照格に「抽象物」が入ると、

(60) 彼は他人のことに疎い。

のように、動詞は感覚上の「距離関係」を表す。また、対象格と参照格に入る名詞がともに「人間」である場合、

(61) 彼はみんなと疎遠だ。

のように、動詞は人間関係上の「距離関係」を表す。

## [3] [方向関係]

対象と参照物との間の「方向関係」を表す動詞として、「向く、面する」があげられる。このほかに、「南に傾く」の「傾く」も「方向関係」を表すことができるが、「移動」の類に入れるべきである。この点については、後の「移動」の部分で改めて述べることにする。「方向関係」も「距離関係」と同様に相対静止の関係で、対応する動詞は状態特徴を持っている。動的特徴を持っているとすれば、動詞は「移動」を表すことになる。

対象格および参照格に入る名詞が「具体物」である場合、

(62) この建物は西に向いている。

のように、動詞は典型的な「方向関係」を表す。が、対象格あるいは参照格に入る名詞が抽象的になると、

(63) 彼はこの仕事に向いている。

のように、動詞はより抽象的な「方向関係」を表すことも可能である。

## [4] [包含関係]

対象と参照物との間の「包含関係」を表すものとして、「含む、有する、持つ、反映する、属する、余る、溢れる、足りる、富む、欠く、欠ける、不足する、明るい（彼は結論に明るい）、詳しい（彼は歴史に詳しい）、わかる、……」などがあげられる。このなかに、「明るい、詳しい」は形容詞で、言うまでもなく状態特徴を持っている。本稿では、このような特徴を持つ「包含関係」を「包含関係-状態」と名付ける。形容詞のほかに、「含む、有する、持つ、反映する、属する、富む」などの動詞もこのような状態特徴を持っていると考えられる。一方、

(64) このクラスでは人数が余った。

(65) このクラスは人数が余っている。

のように、(64)は局面の変化を表し、(65)はその後の状態を表す。このように、「包含関係」においても、「状態の切り替え」が見られる。本稿ではこれを「包含関係-状態切り替え」と名付ける。上記にあげた動詞の中に、「足りる、不足する、欠く、欠ける、わかる」などもこのような「包含関係-状態切り替え」を表すと考えられる。

次にまず「包含関係-状態」を表す動詞について見てみたい。

これまでの通り、対象格と参照格に入る名詞の下位範疇を類ごとに分けて見ることにする。例えば、対象格と参照格に「具体物」が入るものを見ると、

(66) 果物が水分を含む。

のように、動詞は典型的な「包含関係」を表す。

対象格あるいは参照格に入る名詞が「抽象物」であれば、動詞はより抽象的な「包含関係」を表すことになる。例えば、対象格に入る名詞が「人間」、参照格に入る名詞が「抽象物」であるものを見ると、

(67) 彼は生物学に詳しい。

のように、知識の把握の状態を表す。このほかに、「明るい」もこの種の動詞である。

対象と参照物がともに「抽象物」であるものを見ると、

(68) この詩は作者の思想を反映している。

のように、動詞は抽象的な「包含関係」を表す。

このほかに、

(69) 彼は車を持っている。

(70) この概念は特別な意味を持っている。

のように、(69)において、対象格と参照格に入る名詞は「具体物」であるが、(70)において、対象格と参照格に入る名詞は「抽象物」である。つまり、この種の動詞が対応する深層格フレームにおける深層格に入る名詞の意味範疇は最上位に統一されていることになる。このような深層格フレームに対応しているということは、動詞は意味的には一般性を持っているということが言える。なお、上記の「属する、有する、含む」もこの種の動詞として捉えられる。

「包含関係－状態切り替え」を表す動詞に対応する深層格フレームの深層格に入る名詞の下位範疇を見ると、例えば、対象格に入る名詞が「抽象物」、参照格に入る名詞が「人間」である場合、

(71) 彼には生物学のことがよくわかる。

のように、動詞は知識の把握状態を表す。

このほかに

(72) この地域には水が欠けている。

(73) 彼のデザインには特色が欠けている。

のように、深層格に「具体物」である「水」あるいは「抽象物」である「特色」のいずれも入ることが可能である。同様なことは、「余る、溢れる、足りる、不足する」にも見られる。

#### [5] [比較・相関関係]

対象と参照物との間の「比較・相関関係」を表す動詞として、「かかわる、絡む、利く、因る、決まる、兼ねる、対立する、値する、意味する、当たる、一致する、遅れる、劣る、優れる、そっくりだ、違う、ひとしい、ふさわしい、ぴったりだ、基づく、勝つ、負ける、似る……」などがある。中には、「ひとしい、ふさわしい、そっくりだ、ぴったりだ」は形容詞あるいは形容動詞であり、状態特徴を持っている。このほかに「因る、当たる（相当する）、意味する、値する、劣る、優れる、基づく、似る、違う、兼ねる」などの動詞にも局面的変化が見られず、「状態」の特徴を持っている。本稿ではこの特徴を「比較・相関関係－静態」と名付ける。このような特徴を持つ動詞について、対応する深層格フレームにおける深層格に入る名詞の下位範疇を見てみると、それらの動詞にはさらに次のような区別が見られる。例えば、対象格と参照格に入る名詞が「抽象物」であるものを見ると、

(74) 学問は分類に基づく。

のように、動詞は対象と参照物との「比較・相関関係」を表す。このほかに、「因る、当たる、等しい、値する、意味する」もこの種の動詞に属している。また、対象格および参照格に「具体物」あるいは「抽象物」の両方が入るものを見ると、

(75) 太郎はお父さんに似ている。

のように、動詞はより具体的な「比較・相関関係」を表しており、

(76) 太郎のやり方はお父さんのやり方に似ている。

のように、動詞はより抽象的な「比較・相関関係」を表す。同様に、この種の動詞も使われる範囲が広く、

一般性を持っていると考えられる。なお、この種の動詞として、「そっくりだ、ぴったりだ、ふさわしい、違う、劣る、優れる、兼ねる」などもあげられる。

このほかに、「勝つ」も対象と参照物との間の「比較・相関関係」を表すと考えられるが、

(77) 太郎が次郎に勝った。

は「比較・相関関係」の成立を表し、それに対して、

(78) 太郎が次郎に勝っている。

はその後の状態を表すため、動詞「勝つ」は「状態の切り替え」という特徴を持っていることがわかる。本稿では、このような「比較・相関関係」を「比較・相関関係—状態の切り替え」と名付ける。なお、この種の特徴を持つ動詞として、ほかに「かかわる、絡む、利く、決まる、対立する、一致する、遅れる、負ける……」などがある。同様に、深層格フレームにおける深層格に異なる下位範疇の名詞が入れば、その深層格フレームが異なる動詞に対応してくる。例えば、対象格と参照格に入る名詞がともに「人間」であるものを見ると、(77)のように、動詞は一種の人間どうしの「比較・相関関係」上の状態の切り替えを表す。「負ける」もこの種の動詞であると考えられるが、「勝つ」とは逆の意味を持っている。

残りの動詞は、いずれも次のように、

(79) 彼は悪い友人にかかわっている。

対象格と参照格に入る名詞が「具体物」であったり、

(80) この決定は勝敗にかかわっている。

のように、対象格と参照格に入る名詞が「抽象物」であったりする。つまり、これらの動詞も意味的には一般性を持っていることがわかる。

#### [6] [感情・態度]

対象と参照物との間に、感情・態度を表す動詞（形容詞、形容動詞）として、「飽きる、あきれる、驚く、好きだ、嫌いだ、不満だ、親しい、親しむ、親切だ、親密だ、やさしい、厳しい、丁寧だ、積極的だ、不熱心だ、平気だ、うるさい、消極的だ、熱心だ、酔う、夢中だ……」のようなものがある。このなかに、「好きだ、嫌いだ、不満だ、親しい、親しむ、親切だ、親密だ、やさしい、厳しい、丁寧だ、積極的だ、不熱心だ、平気だ、消極的だ、熱心だ」は形容詞あるいは形容動詞で、明らかに状態の特徴を持っている。このほかに、「夢中だ」にも局面的変化は見られず、状態を表すと考えられる。本稿では、この特徴を「感情・態度—静態」と名付ける。こういう「感情・態度—静態」を表す動詞について、対応する深層格フレームの深層格に入る名詞の下位範疇を見てみると、さらに次のような各類に分けられる。

「感情・態度」を表す際、対象は典型的には「人間」であるが、参照格に入る名詞の下位範疇を見ると、例えば、参照格に入る名詞が「人間」である場合、

(81) 太郎は彼女にやさしい。

のように、動詞は人間に対する「感情・態度」を表す。この種の動詞として、ほかに「不満だ、厳しい、丁寧だ、親切だ、親しい、親しむ、親密だ」などがある。また、参照格に入る名詞が「抽象物」であるものを見ると、

(82) 太郎は政治に熱心だ。

のように、動詞は対象（人間）の態度を表す。上記にあげた動詞のなかに、この種の動詞として、ほかに「積

極的だ、不熱心だ、うるさい、平気だ、消極的だ、熱心だ、夢中だ」などがある。また、

(83) 太郎はりんごが好きだ。

のように、参照格に入る名詞が「具体物」であったり、

(84) 太郎は哲学が好きだ。

のように、参照格に入る名詞が「抽象物」であったりすることも可能である。つまり、この種の動詞は、対応する深層格フレームにおける深層格に異なる下位範疇の名詞が入ることが可能で、意味的には一般性をもっている。この種の動詞として、ほかに「嫌いだ」があげられる。

上記の「感情・態度－静態」を表す動詞のほかに、「感情・態度」上の状態の切り替えを表す動詞も見られる。例えば、

(85) 子供は積木遊びに飽きた。

は状態の切り替えを表し、

(86) 子供は積木遊びに飽きている。

はその後の状態を表す。このほかに、「あきれる、驚く、酔う」などもこの種の動詞として捉えられる。

「感情・態度－静態」を表す動詞と同様に、「感情・態度－状態切り替え」を表す動詞に対応する深層格フレームにおける対象格に入る名詞も「人間」ひいては「動物」である。参照格に入る名詞の下位範疇を見ると、(85)のように、抽象物「積木遊び」であったり、

(87) 子供は野菜に飽きている。

のように、具体物の「野菜」であったりする。つまり、参照格に入る名詞は意味範疇的には最上位に統一されている。上記の「あきれる、驚く、酔う」などもこのような特徴をもっている。

以上は[\_O+R]に入る動詞について見てきた。[\_O]の場合、動詞は対象そのものの特徴を表すが、[\_O+R]の場合では、参照物と関係において対象の特徴を表す。本稿では、対象と参照物との関係を「位置関係」、「距離関係」、「方向関係」、「包含関係」、「比較・相関関係」、「感情・態度」の6種類に分けている。動詞の特徴から見れば、[\_O]に入る動詞に見られる「状態」、「現象」、「状態の切り替え」の3つの特徴の中で、「状態」、「状態の切り替え」の二つの特徴はこの部分の動詞にも見られる。

### 3.3 [\_O+T]に対応する動詞

本項では、行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち対象格と軌跡格しかとらない動詞について検討することにする。例えば、

(88) 物が階上から床に落ちた。

(89) このニュースは大使館から本国に伝わった。

(90) 風船は10センチ膨らんだ。

(91) 彼は課長から部長に昇進した。

における下線部のような動詞は深層格として、対象格と軌跡格しかとらない。

したがって、このような動詞は[\_O+T]という深層格フレームに対応していることになる。[\_O+T]にはいる動詞は(88)と(89)のような移動を表す動詞、(90)と(91)のような変化を表す動詞の2種類に分けられる。

移動を表す動詞として、「当たる、現れる、いたる、収まる、落ちる、重なる、かぶさる、消える、転がる、下降する、上昇する、過ぎる、滑る、倒れる、発つ、溜る、散る、通じる、着く、付く、くつつく、つまる、伝わる、的中する、転ずる、到着する、届く、とどまる、にじむ、浸る、ぶつかる、流れる、経る、抜ける、昇る、はずむ、外れる、離れる、広まる、吹く、降る、漏れる、揺れる、……」などがあげられる。

上記の動詞はいずれも移動を表すが、一部の動詞は

(92) お客さんが着いている。

のように、「ている」をつけることにより、「移動」ではなく、移動の終了を表す。つまり、この種の動詞は前述の「状態の切り替え」の特徴を持っている。本稿では、この特徴を「非継続移動」と名付ける。この特徴を持つ動詞として、ほかに「当たる、現れる、いたる、収まる、落ちる、重なる、かぶさる、消える、過ぎる、倒れる、発つ、溜る、散る、通じる、着く、付く、くつつく、つまる、伝わる、的中する、到着する、届く、とどまる、にじむ、浸る、沈む、ぶつかる、経る、抜ける、外れる、離れる」などがあげられる。以下では、このような「非継続移動」特徴を持つ動詞について、対応する深層格フレームに入る名詞の下位範疇の類ごとに見てみることにする。

まず、移動の軌跡上の特徴を見る。

移動の軌跡の始点に焦点を当てる動詞を見ると、例えば、

(93) 飛行機は成田空港を発った。

のように、動詞はもっぱら移動の開始の場面を表す。この種の動詞として、ほかに「外れる、離れる、抜ける」などがある。なお、これらの動詞は、

(94) 飛行機はパリへ発った。

(95) 窓は外へ外れた。

(96) 遠くへ離れた。

(97) 外へ抜けた。

のように、軌跡の終点を表す成分とも共起することができるが、移動の終了の場面ではなく、むしろ移動の方向を表す。

移動の軌跡の中間点に焦点を当てる動詞を見ると、例えば、

(98) 電車は大阪駅を過ぎた。

のように、動詞は移動の軌跡の中の任意の一つの場面に焦点を当てている。この種の動詞として、ほかに「通る、経る」などがある。

移動の軌跡の終点に焦点を当てる動詞を見ると、例えば、

(99) 車が店の前に止まった。

のように、動詞はもっぱら移動の終了の場面を表す。上記にあげた動詞のなかに、この種の動詞として、ほかに「当たる、ぶつかる、的中する、収まる、かぶさる、沈む、溜る、散る、つまる、とどまる、にじむ、浸る、くつつく、付く、重なる、倒れる、伝わる、届く」などがある。このほかに、「着く、現れる、届く、到着する」も終点に焦点を当てる動詞として考えられるが、

(100) 荷物は大阪から東京に着いた。

のように、移動の軌跡の始点を表す成分とも共起することが可能である。ただし、このような共起があっても、

動詞は移動の終了の場面に焦点を当てている点において変わらないようである。

上記の例の中で、対象格に入る名詞はいずれも「具体物」で、動詞も典型的な移動を表すが、対象格に入る名詞が抽象的になってくると、

(101) 予想が当たる。

のように、動詞も抽象的な「移動」を表す。

続いて、「継続移動」の場合について見てみたい。

「非継続移動」を表す動詞と異なり、「継続移動」を表す動詞は、「ている」を付けた場合、状態を表すのではなく、移動の進行を表す。例えば、

(102) 水が海に流れる。

(103) 水が海に流れている。

はともに移動を表しており、「ている」が付く場合と付かない場合、いずれも局面的変化が見られる。すなわち動詞は{[±teiru],[+phase-change]}という特徴を持っている。この種の動詞として、「通る、転がる、上昇する、下降する、流れる、昇る、広まる、吹く、漏れる、転ずる、揺れる、降る、滑る」などがある。

上記の「継続移動」を表す動詞について、対応する深層格フレームにおける深層格の下位範疇を見てみると、次のような違いが見られる。

まず、軌跡格について見てみよう。例えば、軌跡がある点を軸に上下左右の往復運動を表すものを見ると、

(104) 木が大きく左右に揺れている。

のように、動詞は「揺れる」などに限られてくる。

また、軌跡が、高所から低所への移動を表すものを見ると、

(105) 雨が降っている。

のように、動詞は上下の移動を表す。このほかに、「下降する」もこの種の動詞である。「倒れる」も基本的には「高所から低所へ」の移動であるが、「低所」を軸としている。

軌跡が、低所から高所への移動を表すものを見ると、

(106) 水位が1メートルから3メートルに上昇した。

のように、動詞も上下の移動を表す。このほかに、「昇る」この種の動詞である。

始点が一つ、終点が複数のような軌跡の場合、動詞は「広まる、発散する」などに限られてくる。「集まる、集中する」はその逆の軌跡を持っているが、[\_A+O+T]に入る動詞を検討する際に述べることにする。

また、軌跡が円あるいは弧である場合、動詞は「転ずる」に限られてくる。

のこりの「流れる、吹く、漏れる、転がる、はずむ、滑る」などは、軌跡上の特徴では区別しにくいですが、対象格に入る名詞の下位範疇を見ると、例えば、対象格に「液体」あるいは「気体」が入るものを見ると、

(107) ガスがかんから漏れる。

(108) 風が西に吹く。

(109) 水が流れる。

のように、動詞は「流れる、吹く、漏れる」などに限られてくる。それに対して、「転がる、はずむ、滑る」はいずれも対象格に入る名詞として「固体」を要求する。

上記の例に見られるように、対象格に入る名詞が「具体物」である場合、動詞は典型的な移動を表すが、

名詞が「抽象物」である場合、

(110) 物価が上昇する。

(111) インフレの情報が国中に広まった。

のように、動詞は抽象物の移動を表すことができる。

続いて、変化を表す動詞について見てみたい。

変化を表す動詞として、「積もる、伸びる、広がる、縮む、縮小する、減る、太る、痩せる、腫れる、ふくらむ、拡大する、増加する、増える、高まる、染まる、広がった、昇進する、成る、育つ、発展する……」などがある。これらの変化を表す動詞に対応する深層格フレームにおける対象格に「具体物」が入るものを見ると、

(112) 風船が膨らんでいる。

のように、動詞はもっぱら物理的状态変化を表すが、軌跡格に入る名詞の下位範疇を見ると、さらに具体的な状態変化が記述されていることがわかる。例えば、軌跡が量的変化を表すものを見ると、

(113) 雪が10センチ積もった。

のように、「積もる」という動詞が対応している。この種の動詞として、ほかに「減る、高まる、増加する、増える」などがある。ただし、「積もる、高まる、増加する、増える」などは[+量]的变化を表すのに対し、「減る」は[-量]的变化を表す。

軌跡が「形」的变化を表すものを見ると、

(114) 身長が5センチ伸びた。

のように、「伸びる」という動詞が対応している。この種の動詞として、ほかに「広がる、縮む、縮小する、太る、痩せる、腫れる、ふくらむ、拡大する」などがある。ただし、「伸びる、広がる、太る、痩せる、腫れる、ふくらむ、拡大する」はいずれも[+形]的变化を表すのに対し、「縮む、縮小する、痩せる」などはその逆の変化を表す。このほかに、軌跡が色の変化を表すものを見ると、

(115) 野原が緑に染まった。

のように、「染まる」という動詞が対応している。

一方、対象格あるいは軌跡格に「抽象物」が入れば、対応する動詞はもっぱら抽象的状态変化を表す。例えば、対象格に「抽象物」が入るものを見ると、

(116) 経済の規模は相当高いレベルまで発展した。

のように、動詞は抽象的な変化を表す。このほかに、「昇進する、成る、育つ」などもこの種のもっぱら抽象的状态変化を表す動詞に属する。

上記の変化を表す動詞に比べ、「変わる、なる、変化する」は個性が少なく、対象格及び軌跡格に入る名詞の下位範疇を具体的に指定することにより、変化という意味において、上記の動詞と同様な働きをする。

例えば、(114)を

(117) 野原が緑の色に変わった。

のように言い換えれば、同様に色の変化を表すことができる。

また、(116)を

(118) 経済の規模は相当高いレベルに変わった。

のように言い換えれば、同様に抽象的变化を表すことができる。

なお、変化を表す場合、変化の中間点を表す成分が動詞と共起する例は見られない。

以上は[\_O+T]に入る動詞について、移動と変化の二つの場合に分けて述べた。いずれの場合でも、[\_O+T]における対象格と軌跡格に下位的意味範疇を代入することにより、深層格フレームは移動あるいは変化という概念を具体化し、具体的な動詞に対応してくる。

### 3.4 [\_A+O]に対応する動詞

本項では、行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち行為者格と対象格しかとらない動詞について検討することにする。例えば、

(119) 彼は弟を殴った。

における下線部のような動詞は深層格として、行為者格と対象格しかとらない。したがって、このような動詞は[\_A+O]という深層格フレームに対応していることになる。なお、本稿では、「笑う」のような動詞も[\_A+O]に入る動詞として捉えている。一見、

(120) 人が笑う。

は3.1で述べた「現象」を表す文、例えば、

(121) ベルが鳴る。

とよく似ている。つまり、(120)のような場合の「が格」は(121)の場合の「が格」と同様に、「現象」の表出主体であり、対象格の役割を果たしている。すなわち、(120)と(121)のいずれの場合も、対象格は顕在的に存在している。一方、「笑う」は意識的に行える行為でもあるため、その際、「が格」は行為を引き起こす行為者となり、行為者格の役割を果たすことになる。すなわち、「笑う」のような動詞の場合は、行為者格は潜在的な要素として考えられる。本稿では、この種の動詞に対応する深層格フレームを他の[\_A+O]と区別するために、[\_(A)+O]で示す。また、この種の動詞を「潜在行為者・現象」動詞と呼ぶことにする。

本稿で考察した動詞のなかでは、上記の「笑う」のほかに、「暴れる、生活する、努力する、騒ぐ、休む、黙る、躍る、泣く、遊ぶ、粘る、働く、寝る、暮らす、過ごす」なども「潜在行為者・現象」動詞としてあげられる。「潜在行為者・現象」動詞の場合は、行為者が自主的に行為を遂行する能力を備えていなければならないため、意味範疇の上では、行為者は「人間」あるいは「動物」に限られる。また、対象は行為者と同じものであるため、当然、行為者と同様な意味範疇を持っている。

動詞の特徴としては、上記の「潜在行為者・現象」動詞はいずれも動態を表すと考えられるが、「ている」が付いている場合、「遊び、暴れる、生活する、努力する、騒ぐ、躍る、泣く、笑う、粘る、働く、暮らす、過ごす、」などは、依然局面的変化が見られるのに対し、「黙っている」、「寝ている」、「休んでいる」は局面的変化が見られず、静態を表すと考えられる。このように、「遊び、暴れる、生活する、努力する、騒ぐ、躍る、泣く、笑う、粘る、働く、暮らす、過ごす」などの動詞は  $\{[\pm teiru],[+phase-change]\}$ 、という特徴を持っているのに対して、「黙る」、「寝る」、「休む」は  $\{[-teiru],[+phase-change]\}$ 、 $\{[+teiru],[ - phase-change]\}$  という特徴を持っていることがわかる。

続いて、「潜在行為者・現象」動詞以外の場合について見てみたい。

まず、[\_A+O]における行為者格に入る名詞が「人間」で、対象格に入る名詞が「具体物」であるものを見てみたい。例えば、

(122) 太郎がテーブルを壊す。

(123) 太郎がテーブルを叩く。

(124) 太郎が本を探す。

はそういう例である。上記の例における動詞について、対象に対する影響が直接的なのかあるいは非直接的なのかによって、二分することができる。直接影響であるか否かの判断基準として、「～をどうしたのか」という質問文が使えると考えられる。例えば、(122)と(123)に対して、

(125) テーブルをどうしたのか。

と質問すれば、それぞれ

(126) テーブルを壊した。

と

(127) テーブルを叩いた。

のように答えることができる。つまり、(122)と(123)において、対象に対する直接影響が認められる。(124)に対して、

(128) 本をどうしたのか。

と質問した場合、

(129) ?本を探した。

のように答えることはやや不自然である。つまり、(124)において、対象に対する直接影響は見られない。本稿では、この種の直接影響が見られない動詞を「間接影響」動詞と呼ぶことにする。

対象に対して、直接影響があった場合、動詞はさらに(122)のような状態の変化があるものと状態の変化がないものとに分けられる。本稿では、この二種類の動詞をそれぞれ「直接影響・変化」動詞と「直接影響・無変化」動詞で表示する。

ところが、

(130a) 太郎は木を彫る。

(130b) 太郎は人形を彫る。

(131a) 花子は毛糸を編む。

(131b) 花子はセーターを編む。

(132a) 太郎は水を沸かす。

(132b) 太郎はお湯を沸かす。

(133a) 太郎は米を炊く。

(133b) 太郎はご飯を炊く。

のような例において、「を格」が材料である場合、対象が直接影響を受けて、変化し、したがって動詞は「直接影響・変化」動詞の特徴を持っている。それに対して、「を格」が完成品である場合、

(134) 人形をどうしたのか。

(135) ?人形を彫った。

のような問答は不自然であり、動詞は「間接影響」動詞の特徴を持っている。本稿では、このような、「直接影響・変化」動詞の特徴と「間接影響」動詞の特徴を合わせ持つ動詞を「生産動詞」と呼ぶ。

上記のように、対象が「具体物」である場合、[\_A+O]に対応する動詞は、直接影響がある場合の「直接影響・変化」、「直接影響・無変化」の二種類、そして直接影響がない場合の「間接影響」、「生産」の4種類に分けられる。

「変化」を表す動詞として、上記の「壊す」のほかに、「空かす、固める、乾かす、切る、崩す、くだく、点ける、直す、食べる、……」といった動詞もあげられる。これらの動詞はいずれも[\_A+O]に対応しているが、Aを取り除いた場合の[\_O]が3.1の部分で述べた「沸く、空く、固まる、乾く、切れる、崩れる、くだける、壊れる、点く、直す……」のような「状態の切り替え」を表す動詞に対応してくる。すなわち、この部分の「変化」動詞は、行為者が対象に「直接影響」を与えることにより、対象に「状態の切り替え」が起こる、ということを表す。

「無変化」を表す動詞として、上記の「叩く」のほかに、「洗う、踏む、煮る、囲む、飾る、着る、弾く、蹴る、触る、突く、……」などの動詞をあげることができる。

「生産」を表す動詞として、上記の「彫る」のほかに、「編む、書く、炊く、開発する、作る、製造する……」などをあげることができる。

「間接影響」を表す動詞として、上記の「探す」のほかに、「見る、追う、観察する、……」などがあげられる。

以上は、行為者が「人間」、対象が「具体物」であるものを見てきた。本稿で考察した動詞のなかに、この種の動詞はもっとも多い。

行為者と対象がともに「有生物」である場合、例えば、

(136) 猫が子を5匹産んだ。

のように、「産む」という動詞があげられる。この種の動詞として、ほかに、「殺す、捕まる……」などもあげられる。ただし、「産む、捕まる」は上記の「直接影響」の類、「殺す」は上記の「変化」の類に属していると考えられる。また、行為者が「人間」で、対象が「動物」である場合、例えば、

(137) 彼は犬を飼っている。

のように、動詞は「飼う」に限られてくる。「飼う」も上記の「無変化」の類に属していると考えられる。

行為者と対象がともに「人間」である場合、例えば、

(138) 太郎が次郎に会う。

のように、「会う」という動詞が見られる。この種の動詞として、ほかに、「会う、あしらう、会見する、訪問する、募集する、恋する、励む、伴う、殴る、襲う、驚かす、脅かす、批判する、いじめる、だます、攻撃する、逮捕する、捕まえる、慰める、救う、手伝う、養う、雇う、かばう、歓迎する、優遇する、助ける、慰める、いたわる、評価する、ほめる、たたえる、指導する、ごまかす、採用する、裏切る、非難する、励ます、対抗する、演ずる、代表する、誘う、連れる、頼る、尋ねる……」などもあげられる。ただし、このなかで「驚かす、脅かす」は「変化」の類に属し、「会う、会見する、訪問する、恋する、伴う、頼る、尋ねる」は「間接影響」の類に属し、残りはいずれも「無変化」の類に属していると考えられる。

続いて、対象が「抽象物」である場合について見てみたい。例えば、

- (139) 課長は計画を中止した。
- (140) 彼は毎日各種のデータを処理している。
- (141) 新しい技術を開発する。
- (142) 事件の真相を究明する。
- (143) 彼は辞職を考えている。
- (144) 彼は歴史を勉強する。

はいずれもそういう例である。ただし、(139)における「中止する」は対象の変化を表し、上記の「変化」の類に属している。この種の動詞として、ほかに「解散する、済ませる、延期する、終える、起こす、始める、開始する、再開する、中断する、やめる、禁止する、禁じる……」などがある。(140)では、対象は直接影響を受けていると見られるが、変化はない。つまり、「処理する」は上記の「無変化」の類に属している。この種の動詞として、「あきらめる、うながす、協議する、否定する、強調する、計画する、審議する、推進する、準備する、促進する、対処する、展開する、遂げる、怠る、行う、決定する、開催する、実行する、実施する、急ぐ、やる、予想する、計る、予定する、ためらう、続ける、つつしむ、討議する、確かめる、確認する、承認する、提唱する、適用する、解決する、解する、判断する、掲載する、検討する、達成する、調印する、担当する、担う、発揮する、論ずる、記す、つぶやく、勉強する、応じる、研究する、検討する、はたす、維持する、惜しむ、約束する、規制する、規定する、保証する、尊重する、主張する、見込む……」などがある。(141)における「開発する」は上記の「生産」の類に属していると考えられる。この種の動詞として、ほかに「考案する、発明する」などがある。(142)において、「究明する」は上記の「間接影響」の類に属していると考えられる。この種の動詞としてほかに「望む、追求する」などがある。

こうして、上記の「変化」、「無変化」、「生産」、「間接影響」の類における対象格の下位範疇を「抽象物」にまで拡大すれば、(139)~(142)のような動詞もこの四つの類に納められる。

(143)における動詞「考える」は、これまで見てきた概念とは異なり、心理的活動を表すと考えられる。このような動詞はほかに「思う、予想する、反省する、嫌う、喜ぶ……」などがある。

(144)において、動詞「勉強する」もこれまで見てきた概念とは異なり、学習活動を表す。この種の動詞として、ほかに「習う、学ぶ、学習する……」などがある。

以上は対象格に入る名詞の下位範疇類ごとに動詞を見てきた。しかし、

- (145) 彼は自分の考え(abs)をまとめた。
- (146) 彼は荷物(con)をまとめた。

のように、対象格に入る名詞は、「具体物」(荷物)であることもあれば、「抽象物」(考え方)であることもある。つまり、対象格に入る名詞の意味範疇「具体物」と「抽象物」の上位(obj)に統一されている。本稿で考察した動詞のなかでは、この種の動詞として、ほかに「浴びる、争う、生かす、察する、数える、かまう、競う、完成する、組む、調べる、比べる、絞る、まとめる、選ぶ、探る、まぬかれる、削る、指す、避ける、使う、使用する、整理する、照らす、通す、解く、突破する、整える、交換する、凌ぐ、営む、捉える、眺める、比較する、結ぶ、引く、ふるう、覆う、磨く、犯す、試す、継ぐ、調査する、つつく、なめる、鳴らす、にらむ、ふれる、怒る、狙う、練る、はらむ、はる、儲ける、用いる、焼く、ゆるす、用意する、止す、読む、利用する、理解する、愛する、疑う、恐れる、確保する、確立する、期待する、警戒する、

憎む、反する、反対する、好む、堪える、従う、占める、注目する、重視する、心配する、防ぐ、待つ、満たす、無視する、信じる……」などがある。ただし、これらの動詞を類的に分けるとすれば、「解く、突破する、止す、焼く、満たす」は「変化」の類に属し、「浴びる、争う、生かす、察する、数える、かまう、選ぶ、組む、調べる、比べる、絞る、まとめる、まぬかれる、削る、避ける、使う、使用する、整理する、照らす、通す、整える、交換する、凌ぐ、営む、捉える、比較する、結ぶ、引く、ふるう、覆う、磨く、犯す、試す、継ぐ、調査する、つつく、なめる、鳴らす、ふれる、練る、はらむ、はる、儲ける、用いる、焼く、ゆるす、用意する、利用する、確保する、確立する、警戒する、堪える、占める、防ぐ、反する、反対する」は「無変化」の概念に属し、「期待する、従う、待つ、無視する、注目する、重視する、競う、探る、指す、眺める、にらむ、狙う」は「間接影響」の類に属し、「憎む、好む、怒る、愛する、疑う、恐れる、心配する、信じる」は「心理活動」の類に属し、「読む、理解する」は「学習概念」に属していると考えられる。

以上では[\_A+O]に対応する動詞について述べた。「潜在行為者・現象」動詞の場合、一部の動詞、例えば「休む、黙る」の「ている」形は静態を表し、{[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}という特徴を持つが、それ以外の場合は、動詞はいずれも動態を表し、{[±teiru],[+phase-change]}という特徴を持っていると考えられる。

### 3.5 [\_A+O+T]に対応する動詞

本項では、行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち行為者格、対象格、軌跡格しかとらない動詞について検討することにする。例えば、

(147) 彼は荷物を駅まで運んだ。

(148) 彼は髪を金色に染めた。

における下線部のような動詞は深層格として、行為者格、対象格、軌跡格の三つしかとらない。したがって、このような動詞は[\_A+O+T]という深層格フレームに対応していることになる。

[\_A+O+T]に対応している場合、動詞は(147)のように移動、あるいは(148)のように変化を表すが、3.4で見られたように、[\_O+T]に対応する動詞も移動あるいは変化を表す。ただし、[\_A+O+T]に対応する動詞は行為者によって引き起こした移動あるいは変化を表すのに対して、[\_O+T]に対応する動詞は行為者の参入のない対象の移動あるいは変化を表す。

(147)と(148)のほかに、

(149) 彼が海外へ行った。

のような例も見られる。顕在的には、(149)における「彼が」及び「海外へ」は

(150) 飛行機が海に落ちた。

における「飛行機が」及び「海に」と同様に、それぞれ対象格、軌跡格を表す。しかし、「行く」は意識的に行える行為であるため、その際、「が格」は対象である同時に、行為を引き起こす行為者でもある。すなわち、「が格」行為者格の役割として、潜在的に存在していると考えられる。本稿では、この種の動詞に対応する深層格フレームを他の[\_A+O+T]から区別するために、[\_(A)+O+T]で示す。また、この種の動詞を

「潜在行為者・移動」動詞と呼ぶ。

[1] 潜在行為者・移動

「潜在行為者・移動」を表す動詞として、「集まる、集中する、行く、帰る、発つ、入る、もどる、出る、加わる、登場する、現れる、消える、帰国する、来る、遠ざかる、遠のく、抜ける、去る、参加する、乗る、あがる、通る、下がる、移動する、移る、まわる、登る、寄り添う、寄る、わたる、歩む、歩く、駆ける、泳ぐ、降りる、通う、避難する、飛ぶ、逃げる、巡る、向く、動く、訪れる、赴く、昇る」などがあげられる。このなかで、「集まる、集中する、行く、帰る、発つ、入る、もどる、出る、加わる、登場する、現れる、消える、帰国する、来る、遠ざかる、遠のく、抜ける、去る、参加する、乗る」は、

(151) 彼は故里に帰っている。

のように、「ている」形は移動の進行ではなく、移動が完成した後の状態を表す。すなわちこの種の動詞は  $\{[-teiru],[+phase-change]\},\{[+teiru],[ -phase-change]\}$  という特徴を持っている。本稿では、このような特徴を持つ動詞を「非継続潜在行為者・移動」動詞と名付ける。

一方、深層格に入る名詞の下位範疇を見ると、「非継続潜在行為者・移動」動詞の場合は、行為者格は対象格と同様な下位範疇を持ち、典型的には「人間」に限られている。軌跡格に入る名詞の下位範疇は「場所」に限られているが、移動の軌跡の特徴は、3.4で述べた「非継続移動」の場合と属していると考えられる。

上記の「非継続潜在行為者・移動」動詞とことなり、「歩む、歩く、駆ける、泳ぐ、降りる、通う、避難する、飛ぶ、逃げる、巡る、向く、動く、訪れる、赴く、昇る」などの動詞の「ている」形は、移動の完了ではなく、

(152) 鳥が飛んでいる。

のように、「移動中」という意味を表す。このような動詞が表し移動を継続移動と見なされる。

継続潜在行為者・移動を表す動詞の場合、(152)のように、行為者格と対象格に入る名詞の下位範疇は非潜在行為者・移動動詞の場合と同様な特徴を持つが、軌跡格に入る名詞の下位範疇は場所に限られ、移動の軌跡は3.4で述べた継続移動動詞の場合に属していると考えられる。

上記の潜在行為者・移動を表す動詞のほかに、

(153) 彼は石を川に投げた。

(154) 彼は荷物を駅まで運んだ。

における「投げる」、「運ぶ」のような、行為者が自身以外の対象に作用を与え、その対象が移動するということを表す動詞も見られる。3.4節で述べたように、 $[_O+T]$ に対応する動詞も移動を表すが、その移動はもっぱら自発的な移動である。それに対して、 $[_A+O+T]$ に対応する動詞の場合は、(153)と(154)のように、「彼」は「石」あるいは「荷物」に作用を与え、「石」あるいは「荷物」が移動するという作用・移動の二つの過程が含まれている。つまり、 $[_A+O+T]$ に対応する動詞は $[_A+O]$ の場合の「直接影響」と $[_O+T]$ の場合の「移動」の二つの概念を合わせ持っている。ただし、この「作用」と「移動」との間に、(153)のような作用が停止しても、対象の移動は必ずしも停止しない「一時作用」と(154)のような作用が停止すれば、対象の移動も停止する「継続作用」という様態上の区別がある。この種の「作用・移動」を表す動詞としてほかに、「あげる、預ける、与える、集める、あてはめる、あてる、いただく、入れる、降ろす、返す、帰す、獲得する、重ねる、課する、稼ぐ、担ぐ、かぶせる、被る、供する、くださる、配る、汲む、進める、

くるめかす、くれる、加える、請う、こぼす、費やす、通じる、付ける、浸ける、積む、提供する、提出する、呈する、転ずる、投資する、投ずる、導入する、届ける、飛ばす、取る、ながす、なくす、抜く、盗む、施す、任せる、蒔く、混ぜる、招く、回す、導く、もたらす、もどす、受ける、動かす、移す、奪う、得る、負う、追う、補う、送る、納める、収める、押す、落とす、下げる、捧げる、支給する、敷く、沈める、収容する、出品する、吸う、捨てる、陶る、添える、供える、そらす、倒す、足す、出す、頼む、散らす、除く、除ける、吐く、乗せる、派遣する、運ぶ、はずす、放す、離す、放つ、はめる、払う、はらう、引き受ける、引く、ひたす、ぶつける、捨う、広げる、拭く、経る、求める、もらう、もらす、盛る、やる、譲る、要求する、要請する、よこす、寄せる、売る、贈る、買う、貸す、借りる、装う、渡す、尽くす、挨拶する、表す、言う、うかがう、訴える、教える、思い出す、語る、記録する、警告する、公表する、答える、示唆する、指示する、勧める、尋ねる、通知する、伝える、問う、述べる、知らせる、発言する、発表する、しゃべる、話す、報告する、報ずる、放送する、叫ぶ、聞く……」などがあげられる。

対応する深層格フレームにおける深層格に入る名詞の下位範疇は、行為者格の場合は、[  A+O]に対応する動詞と同様に、典型的には「有生物」ひいては「人間」である。上記のように、[  A+O+T]に対応する動詞は「作用」及び「移動」の二つの過程を持っているが、移動の部分を表す対象格と軌跡格は3.4で述べた[  O+T]における対象格および軌跡格と同様な特徴を持っているはずである。例えば、「集める」と「集まる」、そして「外す」と「外れる」のように、対象格と軌跡格は同様な特徴を持っていると考えられる。

以上は、行為者が対象に作用を与え、対象が移動するという場合の動詞について述べた。このほかに、  
(155) 彼は髪毛を金色に染めた。

のように、行為者が対象に作用を与え、対象が変化するということを表す動詞も見られる。本稿では、このような動詞を「作用・変化」動詞と名付ける。この種の動詞として、「染める」のほかに、「あたためる、改める、拡大する、高める、縮める、熱する、のばす、早める、深める、減らす、増やす、曲げる、…」などもあげられる。

上記の「作用・変化」動詞も同様に、「作用」と「変化」の二つの過程をもっていると考えられる。対応する深層格フレームにおける深層格に入る名詞の下位範疇について、行為者格の場合は、[  A+O]に対応する動詞と同様に、典型的には「有生物」強いては「人間」であるが、対象格および軌跡格の場合は、変化を表す動詞に対応する[  O+T]における対象格および軌跡格と同様な特徴を持っているはずである。例えば、「染める」に対応する深層格フレームにおける対象格及び軌跡格と「染まる」における対象格及び軌跡格と同様な下位範疇を持っていると考えられる。なお、[  A+O]に対応する動詞の中でも変化を表す動詞が見られるが、その場合の変化は「状態の切り替え」で、変化を表す成分が動詞と共起しない。それに対して、「作用・変化」の場合では、(154)のように、変化の終状態「金色」を表す成分が動詞と共起する。

### 3.6 [  A+O+R]に対応する動詞

本項では、行為者格、対象格、軌跡格、参照格のうち行為者格、対象格、参照格しかとらない動詞について検討することにする。例えば、

(156) あの子は蜜柑を手握る。

(157) 彼はAをBと名付ける。

における下線部のような動詞は深層格として、行為者格、対象格、参照格の三つしかとらない。したがって、このような動詞は[  A+O+R]という深層格フレームに対応していることになる。このほかに、[  A+O+R]に対応する動詞として、「会わず、合わせる、掛ける、置く、放置する、植える、埋める、構える、立てる、包む、浮かす、泊める、はさむ、ひかえる、含む、設ける、押さえる、浮かべる、残す、握る、並べる、及ぼす、抱える、隠す、配置する、さらす、秘める、綴じる、据える、掲げる、たたずむ、持つ、とどめる、伏せる、へだてる、止める、呼ぶ、決める、保つ、限定する、守る、賭ける、強いる、備える、扮する、見なす、認める、ひそむ、伏す、座る、住む、泊まる……」などがあげられる。

上記の[  A+O+R]に対応する動詞は、行為者が対象に作用を与え、その結果として、対象と参照物との間にある種の静態関係が成立する、ということを表すと考えられる。すなわち、[  A+O+R]に対応する動詞は[  A+O]の場合の「作用」と[  O+R]の場合の「関係」の二つの概念に分解することができる。3.2で述べたように、[  O+R]に対応する動詞が「位置関係」、「距離関係」、「方向関係」、「包含関係」、「比較・相関」、「感情・態度」の6種類を表すことができるが、本稿で考察した[  A+O+R]に対応する動詞の場合は、[  O+R]が表す「関係」は「位置関係」と「相関関係」に集中している。例えば、上記の動詞のなかで、「掛ける、置く、放置する、植える、埋める、構える、立てる、包む、浮かす、泊める、はさむ、ひかえる、含む、設ける、押さえる、浮かべる、残す、握る、並べる、抱える、隠す、配置する、さらす、秘める、綴じる、据える、掲げる、たたずむ、持つ、とどめる、伏せる、へだてる、止める、保つ、限定する、守る、賭ける、強いる、備える、ひそむ、隠れる、伏す、座る、住む、泊まる」は(155)のように、「作用」の結果として、「位置関係」が成立するということを表す。また、「会わず、合わせる、呼ぶ、決める、扮する、見なす、認める」は(156)のように、作用の結果として、「相関関係」が成立する、ということを表す。このほかに、[  A+O+R]の[  O+R]部分は「位置関係」を表す動詞の中に、

(158) 彼は椅子に座る。

のような例も見られる。「歩く」というような「潜在行為者・移動」を分析する際と同様な考え方で、本稿では、この種の動詞を「潜在行為者・位置関係」動詞と名付ける。この種の動詞として、ほかに「ひそむ、隠れる、伏す、座る、住む、泊まる」などがある。このように、[  A+O+R]に対応する動詞は「潜在行為者・位置関係」を表す動詞、「作用・位置関係」、「作用・相関関係」の三種類に分けられる。

[  A+O+R]における深層格に入る名詞の下位範疇について、行為者格は典型的には「有生物」あるいは「人間」であるが、対象格および参照格は、3.2で述べた[  O+R]に対応する動詞の場合と同様な特徴を持っていると考えられる。

#### 4 まとめ

本稿では、まず[  O]、[  O+R]、[  O+T]、[  A+O]、[  A+O+T]、[  A+O+R]の6つの深層格フレームを抽出し、そしてそれらの深層格フレームにどのような動詞に対応しているかを整理した。各深層格フレームに対応する動詞について、さらに概念的に分け、深層格フレームにおける深層格に入る名詞の下位範疇別に考察し、具体的にどのような動詞に対応しているのかについて述べた。また、本稿で考察した動詞は、

[1] { $\pm$ teiru},[-phase-change]}

[2] { $\pm$ teiru},[+phase-change]}

[3] {[-teiru],[+phase-change]},{+teiru},[-phase-change]}

のいずれかの特徴を持っているということもわかった。以上で分類した動詞を次のようにまとめてみる。

概念1—状態

状態 (対象格[下位範疇]) { $\pm$ teiru},[-phase-change]}
---

例：

対象格[下位範疇]=obj

しゃれる……

対象格[下位範疇]=con

臭う、薫る、尖る、静まる、混む、茂る……

対象格[下位範疇]=ani

生きる、老ける、老いる……

対象格[下位範疇]=hum

焦る、悩む……

対象格[下位範疇]=orgn

痛む、うずく、潤む……

対象格[下位範疇]=abs

安定する……

対象格[下位範疇]=act

難航する……

概念2—現象

現象 (対象格[下位範疇]) { $\pm$ teiru},[+phase-change]}
---

例：

対象格[下位範疇]=con

鳴る、照る、震える、荒れる、光る、燃える……

対象格[下位範疇]=act

続く……

概念3—状態の切り替え

状態の切り替え (対象格[下位範疇]) {[-teiru],[+phase-change]},{+teiru},[-phase-change]}
---

例：

対象格[下位範疇]=obj

揃う、整う、直る、治る、まとまる、乱れる、もうかる……

対象格[下位範疇]=con

割れる、空く、固まる、枯れる、乾く、切れる、腐る、崩れる、くだける、くたびれる、壊れる、咲く、閉まる、点く、つぶれる、溶ける、にごる、濡れる、冷える、塞がる、へこむ、焼ける、歪む、緩む、沸く、溶ける、蒸発する、固まる……

対象格[下位範疇]=ani

死ぬ、疲れる、くたびれる……

対象格[下位範疇]=abs

絶える、かなう、尽きる、減びる、よみがえる、終わる、始まる、止む……

概念4—位置関係—静態

位置関係—静態 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
{[±teiru],[-phase-change]}

例：

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=loc

そびえる、沿う、並ぶ、見える……

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=liq or gas

浮かぶ、漂う……

対象格[下位範疇]=ani,参照格[下位範疇]=loc

いる……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=loc

勤める……

概念5—位置関係—状態の切り替え

位置関係—状態の切り替え (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
{[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}

例：

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=loc

映る、生える、浮く……

対象格[下位範疇]=act,参照格[下位範疇]=loc

起こる、生じる、発生する……

概念6—距離関係

距離関係 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {{±teiru],[-phase-change]}}

例:

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=loc

近い、遠い、つながる、隣接する……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=abs

疎い……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=hum

疎遠だ……

概念7—方向関係

方向関係 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {{±teiru],[-phase-change]}}

例:

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=con

面する……

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=obj

向く……

概念8—包含関係—静態

包含関係—静態 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {{±teiru],[-phase-change]}}

例:

対象格[下位範疇]=con,参照格[下位範疇]=con

含む……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=abs

詳しい、明るい……

対象格[下位範疇]=bas,参照格[下位範疇]=abs

反映する……

対象格[下位範疇]=obj,参照格[下位範疇]=obj

持つ、属する、有する、富む……

概念9—包含関係—状態の切り替え

包含関係—状態の切り替え (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {[- teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[- phase-change]}

例:

対象格[下位範疇]=abs,参照格[下位範疇]=hum

わかる……

対象格[下位範疇]=obj,参照格[下位範疇]=obj

欠ける、余る、溢れる、足りる、不足する、欠く……

概念10—比較・相関関係—静態

比較・相関関係—静態 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {[±teiru],[-phase-change]}

例:

対象格[下位範疇]=obj,参照格[下位範疇]=obj

似る、そっくりだ、ぴったりだ、ふさわしい、違う、劣る、優れる、兼ねる……

対象格[下位範疇]=abs,参照格[下位範疇]=abs

基づく、因る、当たる、等しい、値する、意味する……

概念11—比較・相関関係—状態の切り替え

比較・相関関係—状態の切り替え (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {[- teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[- phase-change]}

例:

対象格[下位範疇]=obj,参照格[下位範疇]=obj

かかわる……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=hum

勝つ、負ける……

概念12—感情・態度—静態

感情・態度—静態 (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇])  
 {[±teiru],[-phase-change]}

例:

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=hum

やさしい、不満だ、厳しい、丁寧だ、親切だ、親しい、親しむ、親密だ……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=abs

熱心だ、積極的だ、不熱心だ、うるさい、平気だ、消極的だ、熱心だ、夢中だ……

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=abs

好きだ、嫌いだ……

概念13—感情・態度—状態の切り替え

感情・態度—状態の切り替え (対象格[下位範疇], 参照格[下位範疇]  
 {[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]})

例:

対象格[下位範疇]=hum,参照格[下位範疇]=obj

飽きる、あきれ、驚く、酔う……

概念14—非継続移動

非継続移動 (対象格 , 軌跡格 ↔ |中間点| )  
 [下位範疇] [下位範疇] or  
 始点  
 or  
 終点  
 {[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}

(orは軌跡は非連続的であることを意味する)

例:

対象格[下位範疇]=obj,参照格[下位範疇]=obj

当たる……

対象格[下位範疇]=con,軌跡格[下位範疇]=loc

現れる、いたる、収まる、落ちる、重なる、かぶさる、消える、過ぎる、倒れる、発つ、溜る、散る、通じる、着く、付く、くつつく、つまる、伝わる、的中する、到着する、届く、とどまる、にじむ、浸る、ぶつかる、経る、抜ける、外れる、離れる……

概念15—継続移動

継続移動 (対象格 , 軌跡格 ↔ |中間点| )  
 [下位範疇] [下位範疇] ↓  
 始点  
 ↓  
 終点  
 {[±teiru],[+phase-change]}

(↓は軌跡は連続的であることを意味する)

例:

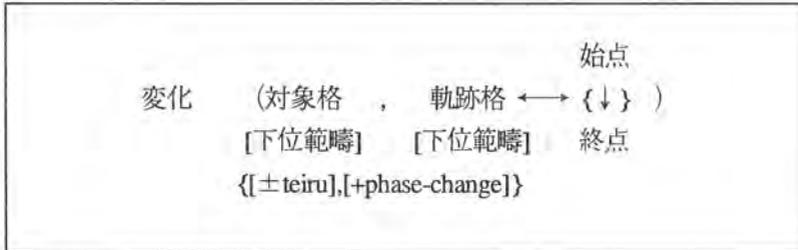
対象格[下位範疇]=con,軌跡格[下位範疇]=loc

通る、転がる、上昇する、下降する、流れる、昇る、広まる、吹く、漏れる、転ずる、揺れる、降る、滑る……

対象格[下位範疇]=abs,軌跡格[下位範疇]=loc

広まる……

概念16—変化



例：

対象格[下位範疇]=obj,軌跡格[下位範疇]=obj

発展する……

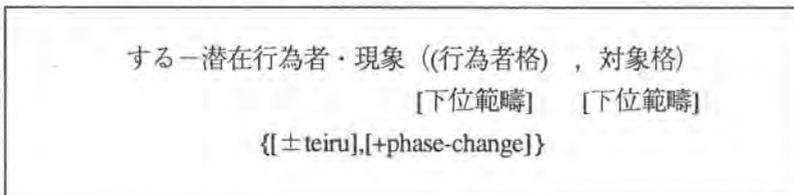
対象格[下位範疇]=hum,軌跡格[下位範疇]=obj

昇進する、成る、育つ……

対象格[下位範疇]=con,軌跡格[下位範疇]=sta

積もる、伸びる、広がる、縮む、縮小する、減る、太る、痩せる、腫れる、ふくらむ、拡大する、増加する、増える、高まる、染まる、広がった……

概念17—潜在行為者・現象(1)

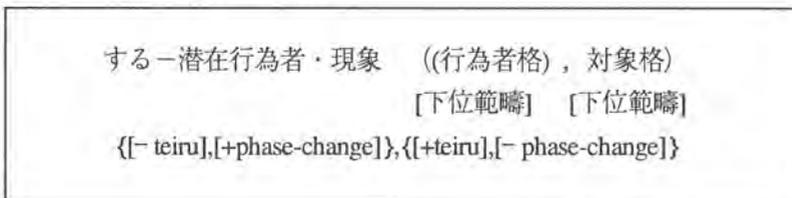


例：

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum

遊び、暴れる、生活する、努力する、騒ぐ、躍る、泣く、笑う、粘る、働く、暮らす、過ごす……

概念17—潜在行為者・現象(2)



例：

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum

黙る、寝る、休む……

概念18—直接影響—変化

する—変化 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
 {[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj

解く、突破する、止す、焼く、満たす……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=con

空かす、固める、乾かす、切る、崩す、くだく、点ける、直す、食べる、……

行為者格[下位範疇]=ani, 対象格[下位範疇]=ani

殺す……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum

驚かす、脅かす……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=abs

中止する、解散する、済ませる、延期する、終える、起こす、始める、開始する、再開する、中断する、やめる、禁止する、禁じる……

概念19—直接影響・作用

する—作用 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
 {[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj

浴びる、争う、生かす、察する、数える、かまう、選ぶ、組む、調べる、比べる、絞る、まとめる、まぬかれる、削る、避ける、使う、使用する、整理する、照らす、通す、整える、交換する、凌ぐ、営む、捉える、比較する、結ぶ、引く、ふるう、覆う、磨く、犯す、試す、継ぐ、調査する、つつく、なめる、鳴らす、ふれる、練る、はらむ、はる、儲ける、用いる、ゆるす、用意する、利用する、確保する、確立する、警戒する、堪える、占める、防ぐ、反する、反対する……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=con

叩く、洗う、踏む、煮る、囲む、飾る、着る、弾く、蹴る、触る、突く、……

行為者格[下位範疇]=ani, 対象格[下位範疇]=ani

産む、捕まる……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=ani

飼う……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum

殴る、襲う、批判する、いじめる、だます、攻撃する、逮捕する、捕まえる、慰める、救う、手伝う、養う、雇う、かばう、歓迎する、優遇する、助ける、慰める、いたわる、評価する、ほめる、たたえる、指導する、ごまかす、採用する、裏切る、非難する、励ます、対抗する、演ずる、代表する、誘う、連れる、

頼る、尋ねる……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=abs

処理する、あきらめる、うながす、協議する、否定する、強調する、計画する、審議する、推進する、準備する、促進する、対処する、展開する、逃げる、怠る、行う、決定する、開催する、実行する、実施する、急ぐ、やる、予想する、計る、予定する、ためらう、続ける、つつしむ、討議する、確かめる、確認する、承認する、提唱する、適用する、解決する、解する、判断する、掲載する、検討する、達成する、調印する、担当する、担う、発揮する、論ずる、記す、つぶやく、勉強する、応じる、研究する、検討する、はたす、維持する、惜しむ、約束する、規制する、規定する、保証する、尊重する、主張する、見込む……

概念20—生産

する—生産 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
 {[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj

作る、編む、書く、炊く、開発する、製造する、考案する、発明する……

概念21—間接影響

する—間接 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
 {[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj

期待する、従う、待つ、無視する、注目する、重視する、競う、探る、指す、眺める、にらむ、狙う…

…

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=con

探す、見る、追う、観察する……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum

会う、会見する、訪問する、恋する、伴う、頼る、尋ねる……

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=abs

究明する、望む、追求する……

概念22—心理活動

する—心理活動 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
 {[−teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj

考える、思う、予想する、反省する、嫌う、喜ぶ、憎む、好む、怒る、愛する、疑う、恐れる、心配す

る、信じる……

概念 2 3—学習活動

する—学習活動 (行為者格[下位範疇], 対象格[下位範疇])  
{[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=abs

勉強する、習う、学ぶ、学習する、読む、理解する……

概念 2 4—非継続潜在行為者移動

非継続潜在行為者移動 ((行為者格), 対象格, 軌跡格 ↔ [中間点])  
[下位範疇][下位範疇][下位範疇]      始点  
or  
[中間点]      or  
終点  
{[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum, 軌跡格[下位範疇]=loc

集まる、集中する、行く、帰る、発つ、入る、もどる、出る、加わる、登場する、現れる、消える、帰国する、来る、遠ざかる、遠のく、抜ける、去る、参加する、乗る……

概念 2 5—継続潜在行為者移動

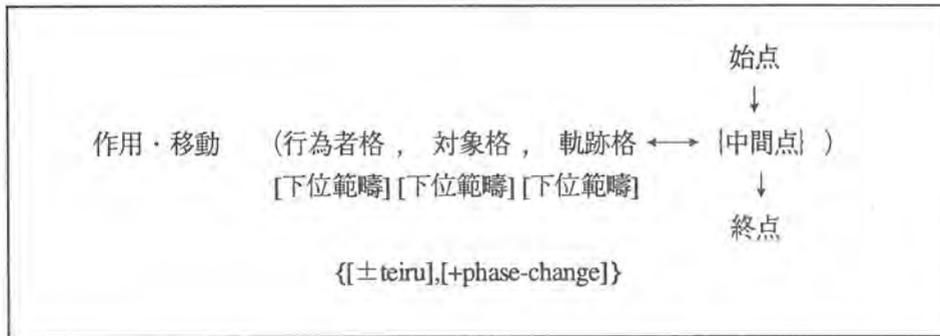
継続潜在行為者移動 ((行為者格), 対象格, 軌跡格 ↔ [中間点])  
[下位範疇][下位範疇][下位範疇]      始点  
↓  
[中間点]      ↓  
終点  
{[±teiru],[+phase-change]}

例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum, 軌跡格[下位範疇]=loc

歩む、歩く、駆ける、泳ぐ、降りる、通う、避難する、飛ぶ、逃げる、巡る、向く、動く、訪れる、赴く、昇る……

概念 2 6—作用・移動

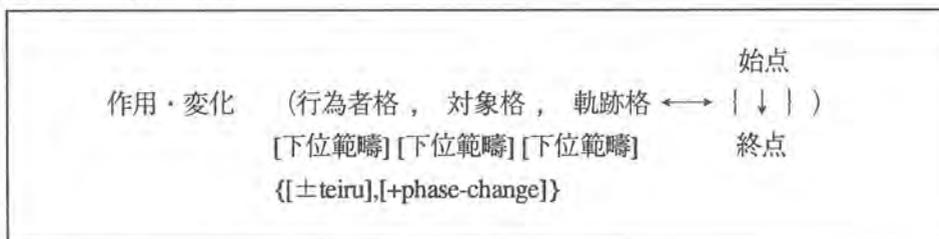


例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj, 軌跡格[下位範疇]=obj

あげる、預ける、与える、集める、あてはめる、あてる、いただく、入れる、降ろす、返す、帰す、獲得する、重ねる、課する、稼ぐ、担ぐ、かぶせる、被る、供する、くださる、配る、汲む、進める、くるめかす、くれる、加える、請う、こぼす、費やす、通じる、付ける、浸ける、積む、提供する、提出する、呈する、転ずる、投資する、投ずる、導入する、届ける、飛ばす、取る、ながす、なくす、抜く、盗む、施す、任せる、蒔く、混ぜる、招く、回す、導く、もたらす、もどす、受ける、動かす、移す、奪う、得る、負う、追う、補う、送る、納める、収める、押す、落とす、下げる、捧げる、支給する、敷く、沈める、収容する、出品する、吸う、捨てる、陶る、添える、供える、そらす、倒す、足す、出す、頼む、散らす、除く、除ける、吐く、乗せる、派遣する、運ぶ、はずす、放す、離す、放つ、はめる、払う、引き受ける、引く、ひたす、ぶつける、拾う、広げる、拭く、経る、求める、もらう、もらす、盛る、やる、譲る、要求する、要請する、よこす、寄せる、売る、贈る、買う、貸す、借りる、装う、渡す、尽くす、挨拶する、表す、言う、うかがう、訴える、教える、思い出す、語る、記録する、警告する、公表する、答える、示唆する、指示する、勧める、尋ねる、通知する、伝える、問う、述べる、知らせる、発言する、発表する、しゃべる、話す、報告する、報ずる、放送する、叫ぶ、聞く……

概念 27—作用・変化

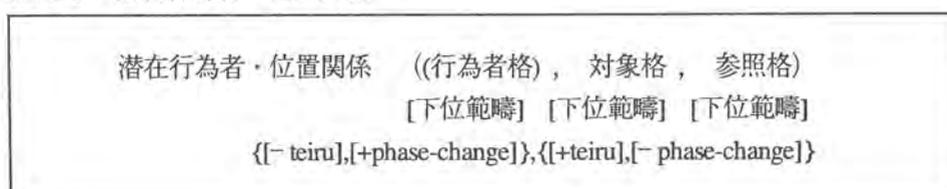


例:

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj, 軌跡格[下位範疇]=obj

染める、あたためる、改める、拡大する、高める、縮める、熱する、のぼす、早める、深める、減らす、増やす、曲げる……

概念 28—潜在行為者・位置関係



例：

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=hum, 参照格[下位範疇]=loc

座る、ひそむ、隠れる、伏す、住む、泊まる……

概念29—作用・位置関係

<p>作用・位置関係 (行為者格, 対象格, 参照格)          [下位範疇] [下位範疇] [下位範疇]          {[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}</p>
--

例：

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=con, 参照格[下位範疇]=loc

掛ける、置く、放置する、植える、埋める、構える、立てる、包む、浮かす、泊める、はさむ、ひかえる、含む、設ける、押さえる、浮かべる、残す、握る、並べる、抱える、隠す、配置する、さらす、秘める、綴じる、据える、掲げる、たたずむ、持つ、とどめる、伏せる、へだてる、止める、……

概念30—作用・相関関係

<p>作用・相関関係 (行為者格, 対象格, 参照格)          [下位範疇] [下位範疇] [下位範疇]          {[-teiru],[+phase-change]},{[+teiru],[-phase-change]}</p>
--

例：

行為者格[下位範疇]=hum, 対象格[下位範疇]=obj, 参照格[下位範疇]=obj

会わず、合わせる、呼ぶ、決める、扮する、見なす、認める……

## 5 参考文献

- Comrie, B. 1976. Aspect. Cambridge University Press.  
 Cook, W.A. 1979. Case Grammar. Development of the Matrix Model. Georgetown University Press.  
 草薙 裕 1983. テンス・アスペクトの文法 文法と意味 朝倉書店 pp166-208  
 呉 凌非 1997. 深層格について 滋賀県立大学国際教育センター研究紀要第2号 pp111-123

# ランダム表面の相反定理と後方強調散乱

## Reciprocal Theorem and Backscattering Enhancement in Random Surface Scattering

高橋 信行・小倉 久直\*

Nobuyuki TAKAHASHI and Hisanao OGURA\*

### Abstract

The object of this paper is to study the backscattering enhancement through dealing with the scalar wave scattering from a perfectly conductive, random surface by means of the stochastic functional approach. The treatment is based on the stochastic functional theory where the random field is the scalar wave represented in terms of a Wiener-Hermite functional of the homogeneous Gaussian random surface. We first establish the reciprocal theorem for scalar Wiener kernels which describe the stochastic functional representation of the scalar wave. Solutions for the scalar wave Wiener kernels up to the second term are obtained so precisely as to satisfy the reciprocal relations and are expressed in terms of generating matrices. Compact operator representations are introduced to reformulate the hierarchical kernel equations, the mass operator equation and higher-order kernel solutions. It is shown that the second scalar Wiener kernel physically describes a ‘dressed double-scattering’ process, which involves anomalous scattering in the intermediate scattering processes, and creates the backscattering enhancement.

### 1 まえがき

確率汎関数法によるランダム表面の散乱問題の解析<sup>1-5)</sup>においては、散乱波動場をランダム表面の汎関数として Wiener-Itô 展開<sup>6)</sup>の形に表現し、ランダム境界条件を解いて Wiener 核  $A_n$ ,  $n = 0, 1, 2, \dots$  を求め、これらから各種の散乱統計量を計算する。ここでは 2 次元ランダム表面のスカラ波散乱を取り扱い、通常

---

\*近畿大学 (Kinki University)

の散乱問題と同様にランダム表面に対しても相反定理が成り立つことを示す。そのために、Wiener 核の相反定理を導いた後、それを用いてインコヒーレント散乱角度分布の相反定理を導く。ランダム表面の粗さが小さい場合、低次の Wiener 核で多重散乱効果を内蔵する良い近似がえられる。ここでは従来の結果より精度を上げた近似解として  $A_0, A_1, A_2$  を求め、これからコヒーレント散乱振幅、インコヒーレント散乱角度分布などを求めた。これらの結果は相反定理を満たすのみならず、ノイマン・ランダム表面においてはいわゆる後方強調散乱<sup>8,9)</sup> が現れる。これは数学的には2次の Wiener 核  $A_2$  からの寄与であるが、物理的には、2つの“着物を着た”2重散乱過程の干渉による強調がノイマン表面の異常散乱を中間状態として生じたものであることが示される。

## 2 ランダム表面のスペクトル表現

2次元(2D)平面を  $R_2$ 、位置ベクトルを  $\mathbf{x} = (x, y)$ 、( $\Omega$ : 見本空間、 $\omega \in \Omega$ : 見本点、 $\langle \cdot \rangle$ : 平均) で表す。 $R_2$ 上のランダム表面を Gauss 一様確率場として、スペクトル表現を

$$z = f(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega) = \int_{R_2} e^{i\boldsymbol{\lambda} \cdot \mathbf{x}} F(\boldsymbol{\lambda}) dB(\boldsymbol{\lambda}, \omega), \quad \overline{F(\boldsymbol{\lambda})} = F(-\boldsymbol{\lambda}) \quad (1)$$

で表す。ここでシフト変換  $\mathbf{T}^{\mathbf{x}}$  は一様性すなわち  $R_2$ 上の移動に関する確率測度の不変性を表し、エルゴード的であるとする。 $dB(\boldsymbol{\lambda})$  は2D 複素 Gauss ランダム測度:  $\langle dB(\boldsymbol{\lambda}) dB(\boldsymbol{\lambda}') \rangle = \delta(\boldsymbol{\lambda} - \boldsymbol{\lambda}') d\boldsymbol{\lambda} d\boldsymbol{\lambda}'$  で、相関関数は

$$R(\mathbf{x}) = \langle \overline{f(\omega)} f(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega) \rangle = \int_{R_2} e^{i\boldsymbol{\lambda} \cdot \mathbf{x}} |F(\boldsymbol{\lambda})|^2 d\boldsymbol{\lambda}, \quad \mathbf{x} \in R_2 \quad (2)$$

$$\sigma^2 \equiv R(0) = \int_{R_2} |F(\boldsymbol{\lambda})|^2 d\boldsymbol{\lambda} \quad (3)$$

$|F(\boldsymbol{\lambda})|^2$  はスペクトル密度、 $\sigma^2$  は分散すなわち表面粗さを表す。数値計算のためにスペクトル密度として等方 Gauss 型スペクトル ( $\ell$  は相関距離) を用いる:

$$R(\rho) = \sigma^2 e^{-\rho^2/(4\ell^2)}, 0 \leq \rho < \infty, \quad |F(\boldsymbol{\lambda})|^2 = \sigma^2 \frac{\ell^2}{\pi} e^{-\ell^2 \lambda^2}, \quad 0 \leq \lambda < \infty \quad (4)$$

## 3 平面入射波に対する確率波動場の表現

座標系と波動ベクトル 3D 位置ベクトル  $\mathbf{r}$ 、波動ベクトル  $\mathbf{k}$  を極座標および円筒座標でそれぞれ

$$\mathbf{r} = (r, \theta, \varphi)_{\text{pol}} = (x, z)_{\text{cyl}}, \quad \mathbf{x} = (\rho, \phi)_{\text{cyl}}, \quad \rho = r \sin \theta, \quad z = r \cos \theta \quad (5)$$

$$\mathbf{k} = (k, \alpha, \beta)_{\text{pol}} = (\lambda, S(\lambda))_{\text{cyl}}, \quad \lambda = (k, \beta)_{\text{cyl}}, \quad \lambda = k \sin \alpha, \quad S(\lambda) \equiv \sqrt{k^2 - \lambda^2} = k \cos \alpha \quad (6)$$

入射、鏡面反射ベクトルを ( $\theta_0$ : 入射角、 $\varphi_0$ : 方位角) により、 $\mathbf{k}_0 = (k, \pi - \theta_0, \varphi_0)_{\text{pol}} = (\lambda_0, -S(\lambda_0))_{\text{cyl}}$  (入射)、 $\mathbf{k}'_0 = (k, \theta_0, \varphi_0)_{\text{pol}} = (\lambda_0, S(\lambda_0))_{\text{cyl}}$  (反射) で表す。

平面入射に対する確率的 Floquet 定理 波動ベクトル  $\mathbf{k}'_0$  の平面波が入射する時の波動場を  $\psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0)$

と書けば

$$(\nabla^2 + k^2)\psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0) = 0, \quad z > f(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega), \quad \mathbf{x} \in R_2 \quad (7)$$

$$\psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0) = 0, \quad z = f(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega) \quad (\text{Dirichlet}) \quad (8)$$

$$\partial\psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0)/\partial n = 0, \quad z = f(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega) \quad (\text{Neumann}) \quad (9)$$

ならびに放射条件を満たす。平面波入射の場合、1次波(無摂動波)を

$$\psi_\iota(\mathbf{x}, z | \lambda_0) = e^{i\lambda_0 \cdot \mathbf{x}} \left[ e^{-iS(\lambda_0)z} \mp e^{iS(\lambda_0)z} \right], \quad \iota = \text{D, N} \quad (10)$$

と書く。ランダム表面の一様性を用いると全波動場は次の形に書けることが示される<sup>1)</sup>:

$$\psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0) = e^{i\lambda_0 \cdot \mathbf{x}} \left[ e^{-iS(\lambda_0)z} \mp e^{iS(\lambda_0)z} \mp U(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0) \right] \quad (11)$$

ここで  $\psi_s \equiv \mp e^{i\lambda_0 \cdot \mathbf{x}} U(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0)$  はランダム表面による散乱波を表す。この形の解は一様ランダム表面に対する“確率的な Floquet 定理”を表し、 $U$  は 1 つの一様確率場である。

**波動場の Wiener-Itô 展開** 散乱波動場は Gauss ランダム表面の確率汎関数であり、一様確率場  $U(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0)$  は Wiener-Itô 展開<sup>6)</sup> の形に表現できる:

$$U(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0) = \sum_{n=0}^{\infty} U_n(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0) \quad (12)$$

$$U_n(\mathbf{T}^{\mathbf{x}}\omega, z | \lambda_0) \equiv \int \cdots \int_{R_2} e^{i(\lambda_1 + \cdots + \lambda_n) \cdot \mathbf{x} + iS(\lambda_0 + \cdots + \lambda_n)z} \times A_n(\lambda_1, \cdots, \lambda_n | \lambda_0) \hat{h}_n [dB(\lambda_1), \cdots, dB(\lambda_n)], \quad n = 0, 1, 2, \cdots \quad (13)$$

$A_n(\lambda_1, \cdots, \lambda_n | \lambda_0)$  は  $n$ -次の対称 Wiener 核、 $h_n$  は  $n$  次 Wiener-Hermite 微分式を表し、 $U_n$  は互いに直交する。

**Wiener 核の相反定理** 異なる入射角に対する 2 つの解を  $\psi_1 = \psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda_0)$ 、 $\psi_2 = \psi(\mathbf{x}, z; \omega | \lambda'_0)$  とおく。恒等式  $\nabla \cdot [\psi_1 \nabla \psi_2 - \psi_2 \nabla \psi_1] / k = 0$  をランダム表面上においた円筒領域について積分すると、殆んどすべての  $\omega$  にたいして次の等式がえられる:

$$\frac{1}{k} \int_{S_t + S_c} \left[ \psi_1 \frac{\partial \psi_2}{\partial n} - \psi_2 \frac{\partial \psi_1}{\partial n} \right] dS = 0 \quad (14)$$

ここで  $S_t$  は高さ  $z$  半径  $\rho$  の円筒の頂面を、 $S_c$  は側面を表す。円筒底面からの積分への寄与は境界条件 (8) または (9) により消える。頂面、側面の面積はそれぞれ  $\rho^2$ 、 $\rho$  に比例するから、殆んどすべての  $\omega$  に対して  $\rho \rightarrow \infty$  の極限で次の等式が成立する:

$$\lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{\pi \rho^2 k} \int_{S_t} \left[ \psi_1 \frac{\partial \psi_2}{\partial z} - \psi_2 \frac{\partial \psi_1}{\partial z} \right] d\mathbf{x} = 0 \quad (15)$$

ここで  $\pi \rho^2$  は  $S_t$  の面積である。この等式を用いると Wiener 核に対する 次の相反定理がえられる:

$$A_0(\lambda_0) = A_0(-\lambda_0) \quad (16)$$

$$a_1(\lambda_1 | \lambda_0) = a_1(\lambda_1 | -\lambda_0 - \lambda_1) \quad (17)$$

$$a_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | \lambda_0) = a_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | -\lambda) \quad (18)$$

$$\lambda \equiv \lambda_0 + \lambda_1 + \dots + \lambda_n, \quad n = 1, 2, \dots \quad (19)$$

ここで  $A_n, n \geq 1$  は次の形に置くことができる:

$$A_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | \lambda_0) \equiv S(\lambda_0) a_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | \lambda_0), \quad n = 1, 2, \dots \quad (20)$$

これらの相反関係式の導出は多少煩雑であるが、概略は次の様である: まず (15) に  $\psi_1 = \psi(x, z; \omega | \lambda_0)$  と  $\psi_2 = \psi(x, z; \omega | \lambda'_0)$  の Wiener-Itô 展開 (11)-(13) を代入する。その時  $[\ ]$  内は  $m$ -重 および  $n$ -重 Wiener 積分の積からなる、次の形の項の  $(m, n)$  についての和が得られる:

$$[\ ]_{mn} \equiv [\psi_1]_m [\psi_2]_n - [\psi_1]_n [\psi_2]_m, \quad m, n = 0, 1, 2, \dots \quad (21)$$

ここで  $[\ ]_n$  は Wiener-Itô 展開の  $n$ -次直交空間の成分を意味する。 $x$  に関して項別に積分し、次の関係

$$\lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{\pi \rho^2} \int_{S_\rho} e^{i(\lambda - \lambda') \cdot x} dx = \delta_{\lambda \lambda'} \quad (22)$$

を用いると、 $\lambda_0 + \lambda_1 + \dots + \lambda_m + \lambda'_0 + \lambda'_1 + \dots + \lambda'_n = 0$  が満たされる時に 0 とならない項がえられる。その時、 $[\ ]_{mn} + [\ ]_{nm}, m \geq 1, n \geq 1$ , である全ての項は恒等的に 0 となり、 $[\ ]_{00}$  の項が  $A_0$  の相反性 (16) を与え、 $[\ ]_{0n} + [\ ]_{n0}$  の項は Wiener-Hermite 微分式の直交性によって

$$S(\lambda_0) A_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | \lambda'_0) - S(\lambda'_0) A_n(\lambda_1, \dots, \lambda_n | \lambda_0) = 0 \quad (23)$$

$$\lambda'_0 + \lambda_0 + \lambda_1 + \dots + \lambda_n = 0 \quad (24)$$

を与える。これは  $A_n$  の相反定理 (18) を意味する。以上によって、相反性が  $\lambda'_0 = -\lambda \equiv -(\lambda_0 + \dots + \lambda_n)$ , に対して成り立つことが分かったが、(13) によれば  $\lambda$  は入射方向  $\lambda_0$  に対する部分波の散乱方向を与える。従って相反定理 (18) の意味するところは、散乱過程  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda\}$  に対する部分波の振幅は、散乱過程  $\{-\lambda \rightarrow -\lambda_0\}$  のそれに等しい。すなわち  $-\lambda$  は相反入射方向、 $-\lambda_0$  は相反散乱方向を与える。

#### 4 散乱波動場の統計量

一旦 Wiener 核が求めれば、ランダム波動場の各種の統計量は以下のように容易に平均操作により計算できる。

コヒーレント散乱振幅 (11) の平均を計算すればコヒーレント波動場

$$\langle \psi(x, z; \omega | \lambda_0) \rangle = e^{i\lambda_0 \cdot x} \left[ e^{-iS(\lambda_0)z} \mp (1 + A_0(\lambda_0)) e^{iS(\lambda_0)z} \right] \quad (25)$$

がえられる。 $A_0(\lambda_0)$  は 0 次 Wiener 核、 $(1 + A_0)$  はランダム表面の反射係数をあたえる。

インコヒーレント散乱角度分布 入射角  $\theta_0 \equiv (\theta_0, \varphi_0)_{\text{pol}}$  に対するインコヒーレント散乱の角度分布  $P(\theta | \theta_0)$

を、単位面積から散乱方向  $\theta \equiv (\theta, \varphi)_{pol}$  の単位立体角あたりに散乱されるインコヒーレント電力の平均値、として定義する。単位面積当たりの  $z$  方向へのインコヒーレント電力流は

$$P_{ic} = \int_{2\pi} P(\theta | \theta_0) d\theta$$

$$= \frac{1}{k} \sum_{n=1}^{\infty} n! \int \cdots \int_{(\lambda_0 + \lambda_1 + \cdots + \lambda_n)^2 < k^2} S(\lambda_0 + \lambda_1 + \cdots + \lambda_n) |A_n(\lambda_1, \cdots, \lambda_n | \lambda_0)|^2 d\lambda_1 \cdots d\lambda_n \quad (26)$$

の関係が成り立つ。ただし、 $d\theta \equiv \sin\theta d\theta d\phi$  であり、 $\lambda = \lambda_0 + \lambda_1 + \cdots + \lambda_n = (k \sin\theta, \varphi)_{cyl}$  は散乱ベクトルである。従って、 $d\lambda = \lambda d\lambda d\phi = k^2 \cos\theta d\theta$ ,  $S(\lambda) \equiv k \cos\theta$ ,  $\lambda_0 = (k \sin\theta_0, \varphi_0)_{cyl}$ , と置いて

$$P(\theta | \theta_0) = \sum_{n=1}^{\infty} P_n(\theta | \theta_0)$$

$$= k^4 \cos^2\theta \cos^2\theta_0 \left[ |a_1(\lambda - \lambda_0 | \lambda_0)|^2 + 2! \int_{R^2} |a_2(\lambda - \lambda_0 - \lambda_2, \lambda_2 | \lambda_0)|^2 d\lambda_2 + \cdots \right] \quad (27)$$

ここで  $P_n(\theta | \theta_0)$  は  $A_n$  からの寄与を表す。散乱角度分布が角度  $\theta$  で散乱表面方向に向けた一定開口のレンズまたはパラボラで測定される場合、観測表面は  $1/\cos\theta$  倍に拡大されるから、その様な散乱角度分布<sup>1, 2)</sup> との関係式は  $S(\theta | \theta_0) \equiv P(\theta | \theta_0)/\cos\theta$  で与えられる。

**散乱角度分布の相反定理** 前に述べたように境界条件 (8), (9) のもとでは  $a_n$  に対する相反定理 (19) が成り立つから、散乱過程  $\{\lambda_0, \lambda\}$  の部分波の振幅は相反散乱過程  $\{-\lambda, -\lambda_0\}$  の部分波振幅に等しい (図(a) 参照)。従って (27), (19) より  $P(\theta | \theta_0)$  も次の相反性を持つことが分かる:

$$P(\theta | \theta_0) = P(\theta_0 | \theta) \quad (28)$$

## 5 Wiener 核の近似解

ランダム表面の粗さが小さい場合に具体的に境界条件を解けば Wiener 核の近似解は以下の形にまとめられる。

### Dirichlet 条件

$$A_0(\lambda) \equiv S(\lambda)a_0(\lambda) = -\frac{2Z_D(\lambda)}{1 + Z_D(\lambda)} \quad (29)$$

$$A_1(\lambda_1 | \lambda) \equiv S(\lambda)a_1(\lambda_1 | \lambda) \quad (30)$$

$$A_2(\lambda_1, \lambda_2 | \lambda) \equiv S(\lambda)a_2(\lambda_1, \lambda_2 | \lambda) \quad (31)$$

$$Z_D(\lambda) \equiv S(\lambda)\xi(\lambda) \quad (32)$$

$$a_0(\lambda) = -\frac{2\xi(\lambda)}{1 + S(\lambda)\xi(\lambda)} \quad (33)$$

$$a_1(\lambda_1 | \lambda) = \frac{-2iF(\lambda_1)[1 - \xi^*(\lambda + \lambda_1, \lambda)]}{[1 + S(\lambda)\xi(\lambda)][1 + S(\lambda + \lambda_1)\xi(\lambda + \lambda_1)]} \quad (34)$$

$$a_2(\lambda_1, \lambda_2 | \lambda) \simeq -\frac{i}{2} \frac{S(\lambda + \lambda_1)a_1(\lambda_1 | \lambda)F(\lambda_2) + S(\lambda + \lambda_2)a_1(\lambda_2 | \lambda)F(\lambda_1)}{1 + S(\lambda + \lambda_1 + \lambda_2)\xi(\lambda + \lambda_1 + \lambda_2)} \quad (35)$$

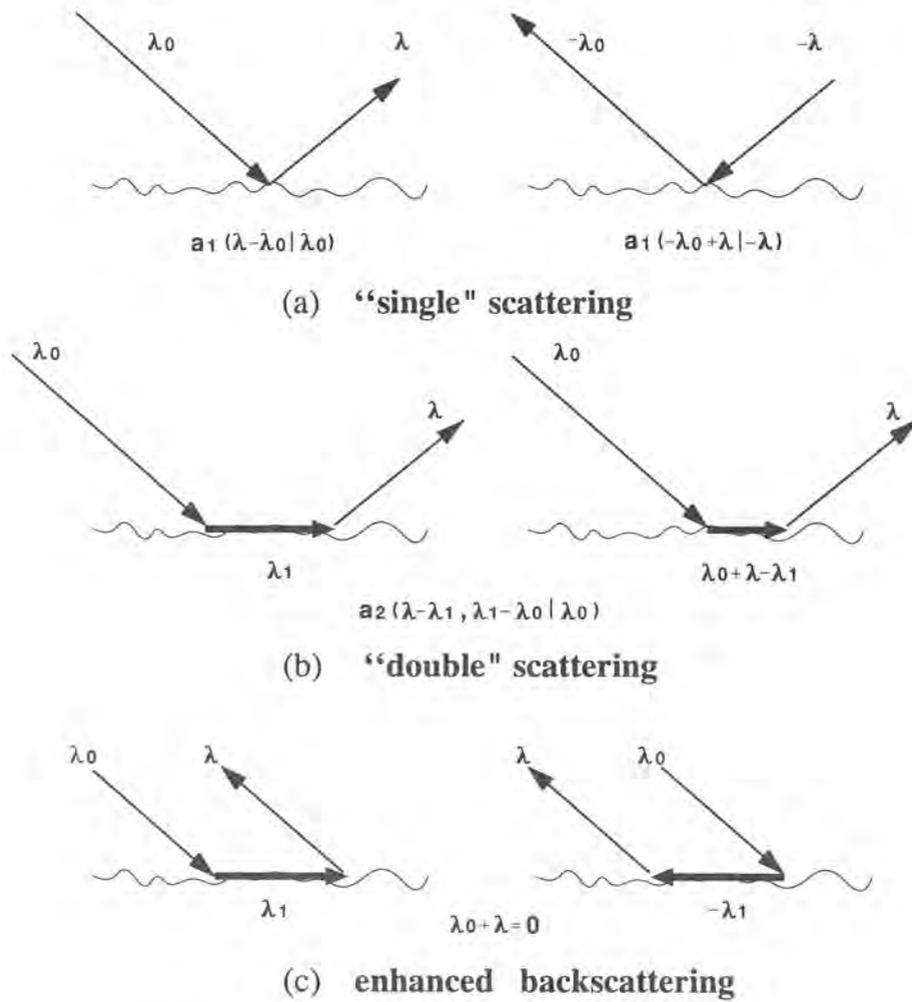


図 1: “着物を着た” 単一散乱ならびに 2 重散乱の散乱過程のダイアグラム

(a)  $a_1$  で記述される “単一散乱過程”  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda\}$  と逆向きの散乱過程  $\{-\lambda \rightarrow -\lambda_0\}$ 。 (b)  $a_2$  で表される 2 種類の “2 重散乱過程”。太い矢印が中間状態。 (c) 2 重散乱による入射方向と逆方向 ( $\lambda_0 + \lambda = 0$ ) への後方強調散乱過程。

$$\xi(\lambda) \equiv \int_{R_2} \frac{S(\lambda_1)|F(\lambda_1 - \lambda)|^2}{1 + S(\lambda_1)\xi(\lambda_1)} d\lambda_1 \quad (36)$$

$$\simeq \int_{R_2} S(\lambda_1)|F(\lambda_1 - \lambda)|^2 d\lambda_1 \quad (37)$$

$$\xi^*(\lambda, \lambda_0) \simeq \int_{R_2} S(\lambda + \lambda_1)S(\lambda_0 + \lambda_1)|F(\lambda_1)|^2 d\lambda_1 \quad (38)$$

## Neumann 条件

$$A_0(\lambda) \equiv -2 + S(\lambda)a_0(\lambda) = -\frac{2Z_N(\lambda)}{1 + Z_N(\lambda)} \quad (39)$$

$$A_1(\lambda_1|\lambda) \equiv S(\lambda)a_1(\lambda_1|\lambda) \quad (40)$$

$$A_2(\lambda_1, \lambda_2|\lambda) \equiv S(\lambda)a_2(\lambda_1, \lambda_2|\lambda) \quad (41)$$

$$Z_N(\lambda) \equiv \frac{\eta(\lambda)}{S(\lambda)} \quad (42)$$

$$a_0(\lambda) = \frac{2}{S(\lambda) + \eta(\lambda)} \quad (43)$$

$$a_1(\lambda_1|\lambda) = \frac{-2iF(\lambda_1) [k^2 - (\lambda + \lambda_1) \cdot \lambda - \eta^*(\lambda + \lambda_1, \lambda)]}{[S(\lambda) + \eta(\lambda)][S(\lambda + \lambda_1) + \eta(\lambda + \lambda_1)]} \quad (44)$$

$$a_2(\lambda_1, \lambda_2|\lambda) = \frac{i}{2} \frac{[(\lambda + \lambda_2) \cdot (\lambda + \lambda_1 + \lambda_2) - k^2]a_1(\lambda_2|\lambda)F(\lambda_1) + [(\lambda + \lambda_1) \cdot (\lambda + \lambda_1 + \lambda_2) - k^2]a_1(\lambda_1|\lambda)F(\lambda_2)}{S(\lambda + \lambda_1 + \lambda_2) + \eta(\lambda + \lambda_1 + \lambda_2)} \quad (45)$$

$$\eta(\lambda) \equiv \int_{R_2} \frac{[k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda]^2 |F(\lambda_1 - \lambda)|^2}{S(\lambda_1) + \eta(\lambda_1)} d\lambda_1 \quad (46)$$

$$\simeq \int_{R_2} \frac{[k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda]^2 |F(\lambda_1 - \lambda)|^2}{S(\lambda_1)} d\lambda_1 \quad (47)$$

$$\eta^*(\lambda, \lambda_0) = \int_{R_2} \frac{[k^2 - (\lambda + \lambda_1) \cdot \lambda] [k^2 - (\lambda_0 + \lambda_1) \cdot \lambda_0]}{[S(\lambda + \lambda_1) + \eta(\lambda + \lambda_1)][S(\lambda_0 + \lambda_1) + \eta(\lambda_0 + \lambda_1)]} \times [k^2 - (\lambda + \lambda_1) \cdot (\lambda_0 + \lambda_1)] |F(\lambda_1)|^2 d\lambda_1 \quad (48)$$

$$(49)$$

(43),(44) の分母に現れる $\eta$ は $A_0, A_1$ 等を有限にする決定的な役割をするが、(44)の分子に現れる $\eta^*$ は補正項であって実際の計算で無視することも可能である。これらの量 $\xi(\lambda)$ および $\eta(\lambda)$ は多重散乱の効果を表し、多重散乱理論などの手法でも得られる項である。

平均表面インピーダンス (29),(39)の右辺は、 $Z$ について同形でつぎの関係を満たす:

$$1 + A_0(\lambda) = \frac{1 - Z_\iota(\lambda)}{1 + Z_\iota(\lambda)}, \quad \iota = D, N \quad (50)$$

(25)により $1 + A_0$ は鏡面反射方向に生ずるコヒーレント反射振幅を表す。従って、(50)によって $Z_\iota, \iota = D, N$ はそれぞれの境界条件に対するランダム表面の平均表面インピーダンスと解釈することができる。(36),(46)

は表面インピーダンスの積分方程式の形に書き直される:

$$Z_D(\lambda) = S(\lambda) \int_{R_2} \frac{S(\lambda') |F(\lambda' - \lambda)|^2}{1 + Z_D(\lambda')} d\lambda' \quad (\text{Dirichlet}) \quad (51)$$

$$Z_N(\lambda) = \frac{1}{S(\lambda)} \int_{R_2} \frac{[k^2 - \lambda' \cdot \lambda]^2 |F(\lambda' - \lambda)|^2}{S(\lambda') [1 + Z_N(\lambda')]} d\lambda' \quad (\text{Neumann}) \quad (52)$$

これらの  $Z_i$  の積分方程式は、(37), (47) を初期解として逐次代入法により解くことができる。

## 6 散乱特性と後方強調散乱

コヒーレント散乱振幅　コヒーレント散乱振幅は 0-次 Wiener 核  $A_0$ ,

$$A_0(\lambda) = -\frac{2Z_i(\lambda)}{1 + Z_i(\lambda)}, \quad i = D, N \quad (53)$$

ここに  $Z_i$  は (51), (52) で与えられる表面インピーダンスである。

インコヒーレント散乱の角度分布　Wiener 核  $A_1, A_2$  の近似解 (30), (31), (40), (41) を (27) に代入してインコヒーレント散乱の角度分布  $P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0)$  を次のように計算することができる:

$$\begin{aligned} P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) &= P_1(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) + P_2(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) \\ &\equiv k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0 \left[ |a_1(\lambda - \lambda_0 | \lambda_0)|^2 + 2 \int_{R^2} |a_2(\lambda - \lambda_1, \lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0)|^2 d\lambda_1 \right] \end{aligned} \quad (54)$$

ここで  $P_1$  は  $A_1$  からの寄与を表し、

$$P_1(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) = \frac{4k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0 |1 - \xi^*(\lambda, \lambda_0)|^2 |F(\lambda - \lambda_0)|^2}{|[1 + S(\lambda_0)\xi(\lambda_0)][1 + S(\lambda)\xi(\lambda)]|^2}, \quad (\text{Dirichlet}) \quad (55)$$

$$= \frac{4k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0 |k^2 - \lambda \cdot \lambda_0 - \eta^*(\lambda, \lambda_0)|^2 |F(\lambda - \lambda_0)|^2}{|[S(\lambda_0) + \eta(\lambda_0)][S(\lambda) + \eta(\lambda)]|^2}, \quad (\text{Neumann}) \quad (56)$$

で与えられる: ただし  $\lambda = (\lambda, \phi)_{\text{cyl}}$ ,  $\lambda_0 = (\lambda_0, \phi_0)_{\text{cyl}}$  であって

$$\lambda = k \sin \theta, \quad S(\lambda) = k \cos \theta, \quad \lambda_0 = k \sin \theta_0, \quad S(\lambda_0) = k \cos \theta_0 \quad (57)$$

$$|\lambda - \lambda_0| = k \sqrt{\sin^2 \theta + \sin^2 \theta_0 - 2 \sin \theta \sin \theta_0 \cos(\phi - \phi_0)} \quad (58)$$

また  $P_2$  は  $A_2$  からの寄与を表し、近似的に次のように表される:

$$\begin{aligned} P_2(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) &= \frac{k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0}{2 |1 + S(\lambda)\xi(\lambda)|^2} \int_{R_2} |S(\lambda_1) a_1(\lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) F(\lambda - \lambda_1) \\ &\quad + S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) a_1(\lambda - \lambda_1 | \lambda_0) F(\lambda_1 - \lambda_0)|^2 d\lambda_1 \end{aligned} \quad (59)$$

$$\begin{aligned} &= \frac{4k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0}{|[1 + S(\lambda_0)\xi(\lambda_0)][1 + S(\lambda)\xi(\lambda)]|^2} \int_{R_2} \left\{ \left| \frac{S(\lambda_1)}{1 + S(\lambda_1)\xi(\lambda_1)} \right|^2 \right. \\ &\quad \left. + \text{Re} \left[ \frac{\overline{S(\lambda_1)}}{1 + S(\lambda_1)\xi(\lambda_1)} \frac{S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)}{1 + S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)\xi(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)} \right] \right\} \\ &\quad \times |F(\lambda_1 - \lambda_0) F(\lambda - \lambda_1)|^2 d\lambda_1 \quad (\text{Dirichlet}) \end{aligned} \quad (60)$$

$$\begin{aligned}
 P_2(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) &= \frac{k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0}{2 |S(\lambda) + \eta(\lambda)|^2} \int_{R_2} | [k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda] a_1(\lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) F(\lambda - \lambda_1) \\
 &\quad + [k^2 - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) \cdot \lambda] a_1(\lambda - \lambda_1 | \lambda_0) F(\lambda_1 - \lambda_0) |^2 d\lambda_1 \quad (61) \\
 &= \frac{4k^4 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0}{|[S(\lambda_0) + \eta(\lambda_0)][S(\lambda) + \eta(\lambda)]|^2} \int_{R_2} \left\{ \left| \frac{[k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda][k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda_0]}{S(\lambda_1) + \eta(\lambda_1)} \right|^2 \right. \\
 &\quad \left. + \text{Re} \left[ \frac{[k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda][k^2 - \lambda_1 \cdot \lambda_0]}{S(\lambda_1) + \eta(\lambda_1)} \frac{[k^2 - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) \cdot \lambda][k^2 - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) \cdot \lambda_0]}{S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) + \eta(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)} \right] \right\} \\
 &\quad \times |F(\lambda_1 - \lambda_0) F(\lambda - \lambda_1)|^2 d\lambda_1 \quad (\text{Neumann}) \quad (62)
 \end{aligned}$$

ただし上の  $P_2$  の表式では簡単のため  $\xi^*$ ,  $\eta^*$  は無視した。  $P(\theta | \theta_0)$  の近似解は相反定理 (28) を満たす。なお、上式を特殊化した 1 次元ランダム表面  $z = f(T^x \omega)$  による散乱公式は

$$\begin{aligned}
 P(\theta | \theta_0) &= P_1(\theta | \theta_0) + P_2(\theta | \theta_0) \\
 &\equiv k^3 \cos^2 \theta \cos^2 \theta_0 \left[ |a_1(\lambda - \lambda_0 | \lambda_0)|^2 + 2 \int_{-\infty}^{\infty} |a_2(\lambda - \lambda_1, \lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0)|^2 d\lambda_1 \right] \quad (63)
 \end{aligned}$$

に従って計算すればよい。ただし、 $\lambda = k \sin \theta$ ,  $\lambda_0 = k \sin \theta_0$ ,  $S(\lambda) = k \cos \theta$ ,  $S(\lambda_0) = k \cos \theta_0$ ,  $d\lambda = k \cos \theta d\theta$  等である。

図 2(Dirichlet)、図 3(Neumann) は  $P(\theta | \theta_0)$  の  $\theta$ -分布を、3 つの入射角  $\theta_0 = 0^\circ, 30^\circ, 60^\circ$ ,  $\phi_0 = 0^\circ$  に対し、入射平面上  $\phi = 0^\circ, 180^\circ$ , およびそれに直角な平面上  $\phi = 90^\circ, 270^\circ$  に示したものである。図 4、図 5 は (63) による 1 次元ランダム表面 (Neumann) の散乱角度分布  $P(\theta | \theta_0)$  を  $kl = 0.5, 1.0$  の場合に示した。

上式から明らかなように Neumann 表面の場合、 $S(\lambda_0)$  or  $S(\lambda) \simeq 0$ 、すなわち入射角  $\theta_0$  または散乱角  $\theta$  が  $90^\circ$  に近い場合に異常散乱が起きる<sup>2, 3)</sup>。この現象は格子散乱の場合の Wood anomaly に相当するものである。図 2-図 5 に示した  $P(\theta | \theta_0)$  のパターンではそのような異常散乱は因子  $\cos^2 \theta_0 \cos^2 \theta$  に打ち消されて明確に見えないが、上に述べた実際に観測される散乱分布  $S(\theta | \theta_0)$  では、表面に近い方向に鋭い異常散乱が生じる。

## 7 後方強調散乱

Neumann 表面の場合、図 3-図 5 に示したパラメタに対しては、広い角度分布の上に小さいピークが突き出た形の散乱角度分布を示し、ピークは  $kl$  と  $k\sigma$  の比が適当な値の場合に強く現れる。このピークは次式を満たす後方散乱の方向に現れる:

$$\lambda + \lambda_0 = 0 \quad (64)$$

これが僅かに粗な Neumann ランダム表面のいわゆる後方強調散乱 (backscattering enhancement) であるが、Neumann 表面とは異なり、図 2 の示すように僅かに粗な Dirichlet ランダム表面の場合にはこのような強調散乱は殆んど見られない。

図 4、図 5 は 1 次元ランダム表面 (Neumann) による散乱角度分布 (63) を示すが、一般的に言って、後方強調散乱は 1 次元ランダム表面の方が 2 次元表面の場合よりも著しく現れる。

Dirichlet  $P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) \quad kl=0.5, k\sigma=\pi/10$

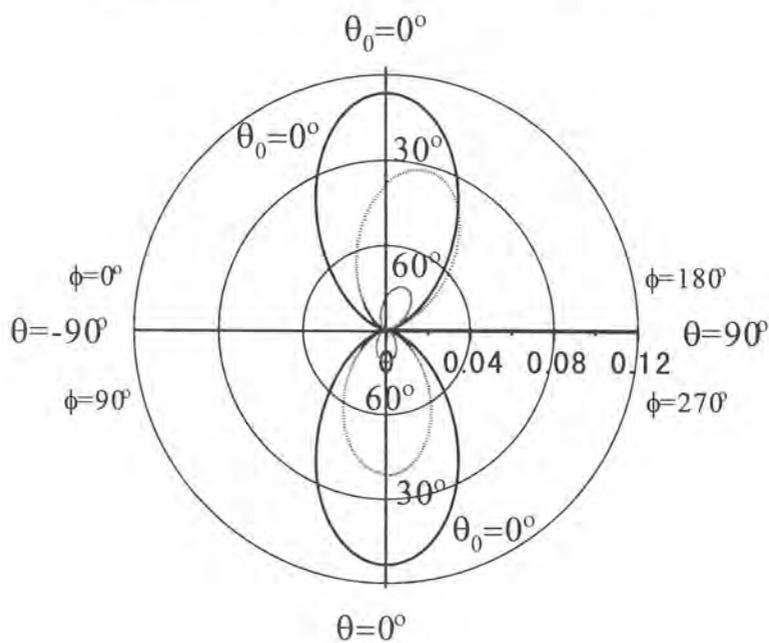


図2:  $P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0)$  の  $\theta, \phi$ -分布 (Dirichlet, 2次元表面)

Neumann  $P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0) \quad kl=0.5, k\sigma=\pi/10$

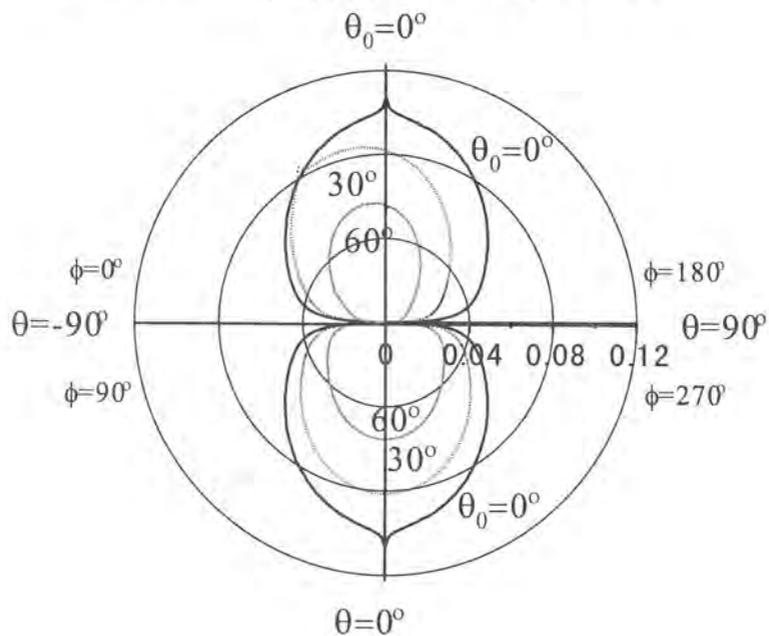


図3:  $P(\theta, \phi | \theta_0, \phi_0)$  の  $\theta, \phi$ -分布 (Neumann, 2次元表面)

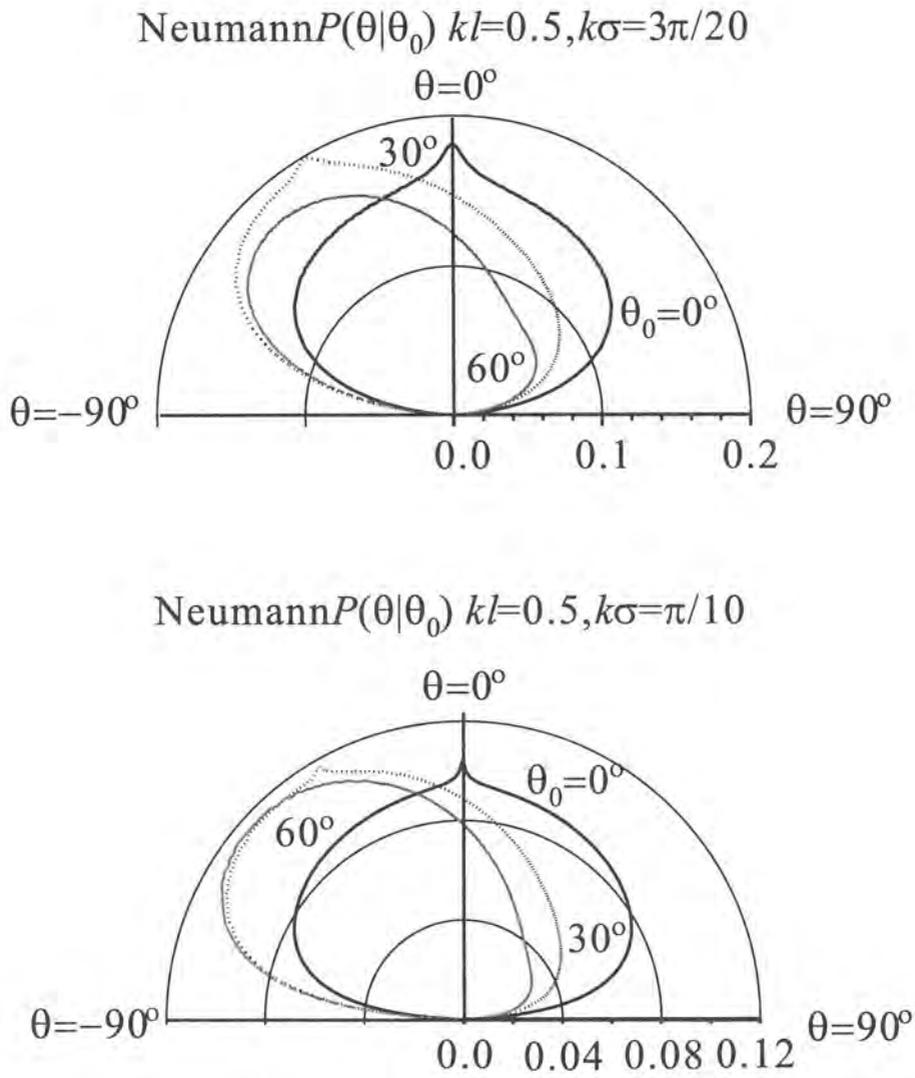


図4:  $P(\theta | \theta_0)$  の $\theta$ -分布 I (Neumann, 1次元表面)

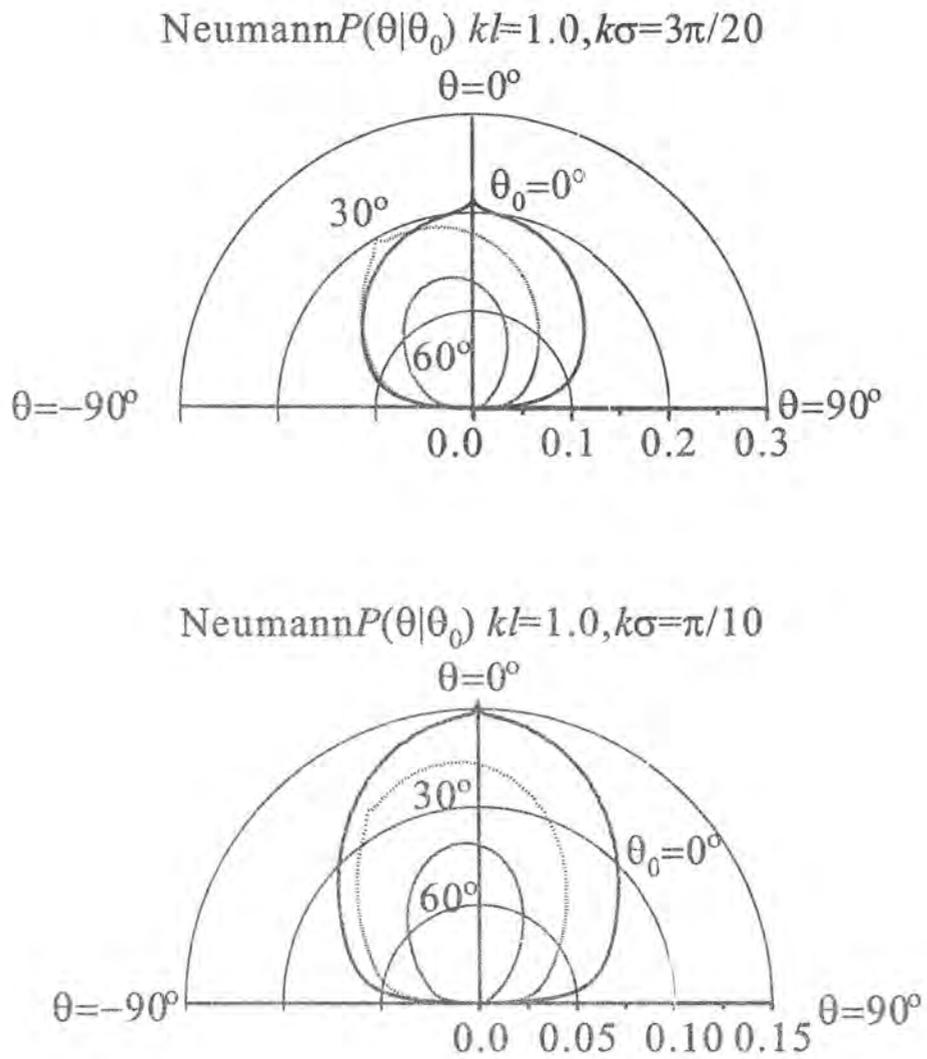


図5:  $P(\theta|\theta_0)$  の  $\theta$ -分布 II (Neumann, 1次元表面)

この興味ある現象は次のように説明することができる。先ず第一に、(54) で与えられる  $P_1$  を次のように解釈することができる: 1 次 Wiener 核  $a_1(\lambda - \lambda_0 | \lambda_0)$  を “繰り込まれた” あるいは “着物を着た” 単一散乱過程とみなし、記号的に  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda\}$  で表す (図 1 (a) 参照)。第二に、その様な強調散乱は 2 次 Wiener 核  $a_2$  の積分として与えられる  $P_2$  から生じていることに注意する。(59), (61) が示すように、 $a_2$  は  $a_1$  を含む 2 つの項の和からなっている。(34), (44) を用いて、(54) に現れる  $a_2$  を  $a_1$  の項で次のように書き直す:

$$\begin{aligned} & a_2(\lambda - \lambda_1, \lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) \\ &= \frac{1}{4} \{ S(\lambda_1)[1 + S(\lambda_1)\xi(\lambda_1)]a_1(\lambda - \lambda_1 | \lambda_1)a_1(\lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) \\ & \quad + S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)[1 + S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)\xi(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)]a_1(\lambda - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) | \lambda_0 + \lambda - \lambda_1) \\ & \quad \times a_1((\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) - \lambda_0 | \lambda_0) \} \quad (\text{Dirichlet}) \end{aligned} \tag{65}$$

$$\begin{aligned} &= \frac{1}{4} \{ [S(\lambda_1) + \eta(\lambda_1)]a_1(\lambda - \lambda_1 | \lambda_1)a_1(\lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) \\ & \quad + [S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) + \eta(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)]a_1(\lambda - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) | \lambda_0 + \lambda - \lambda_1) \\ & \quad \times a_1((\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) - \lambda_0 | \lambda_0) \} \quad (\text{Neumann}) \end{aligned} \tag{66}$$

ただし補正項  $\xi^*, \eta^*$  は無視した。あるいはこれらは次のもっと簡潔な近似式に書き直すこともできる:

$$\begin{aligned} & a_2(\lambda - \lambda_1, \lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) \\ & \simeq \frac{1}{4} [S(\lambda_1)a_1(\lambda - \lambda_1 | \lambda_1)a_1(\lambda_1 - \lambda_0 | \lambda_0) \\ & \quad + S(\lambda_0 + \lambda - \lambda_1)a_1(\lambda - (\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) | \lambda_0 + \lambda - \lambda_1)a_1((\lambda_0 + \lambda - \lambda_1) - \lambda_0 | \lambda_0)] \end{aligned} \tag{67}$$

さて最初の  $a_1$  の解釈を用いて、上式のように 2 つの  $a_1$  の積に分解された  $a_2$  が記述する散乱過程は次のように解釈することができる:  $a_2$  の記述する過程は 2 つの “2 重散乱” 過程からなっており、上式の第 1 項は “2 重散乱” 過程  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda_1 \rightarrow \lambda\}$  を、第 2 項は “2 重散乱” 過程  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda + \lambda_0 - \lambda_1 \rightarrow \lambda\}$  を表す (図 1 (b) 参照)。それらの 2 つの “2 重散乱” 過程は和をとるとき互いに干渉しうる。従って、(54) で与えられる  $P_2$  はその様な中間状態にわたる積分で与えられることになる。

しかしながら、後方散乱、すなわち  $\lambda + \lambda_0 = 0$  が成り立つ場合は、2 つの “2 重散乱” 過程  $\{\lambda_0 \rightarrow \lambda_1 \rightarrow \lambda\}$  および  $\{\lambda_0 \rightarrow -\lambda_1 \rightarrow \lambda\}$  は互いに干渉して後方散乱振幅を強め合うことになる (図 1 (c) 参照)。Dirichlet の場合よりも Neumann 表面の後方強調散乱が著しい理由は、上に述べた入射・散乱角が表面に沿う角度で生ずる異常散乱の存在に帰着される。実際、異常散乱すなわちランダム表面に沿う伝搬モード<sup>4)</sup> を中間状態とする上の様な “2 重散乱” 過程に対してはかなり大きい振幅を生ずる。従って、その様な中間状態にわたって積分すれば、その積分の大きな寄与は  $\lambda_1 \simeq k$  となる異常散乱あるいは伝搬モードから生じ、結果として  $\lambda + \lambda_0 = 0$  を満たす後方散乱方向に干渉による強め合いが生ずるのである。初めに述べたように 1 次元ランダム表面の後方強調散乱は 2 次元の場合より著しく現れるが、それは干渉項の積分のさいに積分次元の低い方が干渉が強くなることにより説明することができる。異常散乱は表面に沿う不安定な伝搬モードの励起であるが、金属表面のように表面プラズモンモード<sup>7)</sup> が存在する場合にも同様な理由で後方強調散乱が生ずる<sup>9)</sup>。

通常、後方強調散乱は、波長に比して緩く粗いランダム平面上の逆方向の 2 つの 2 重散乱の強調干渉として説明され、Kirchhoff 近似による数値計算がなされているが<sup>8)</sup>、本論文の結果により、僅かなランダム

なノイマン平面でも逆方向の2つの“着物を着た”2重散乱過程の強調干渉による後方強調散乱が起きることが理論的に示された。また後方強調散乱がスペクトル形あるいは相関距離  $l$  にかなり依存すること<sup>8)</sup>、およびそのパラメタ依存性なども干渉項積分 (62) の被積分関数の  $\lambda_0 + \lambda = 0$  における振舞いにより容易に説明できる。この様な干渉項積分の2次元数値積分は一様な精度を保つことが難しいが、1次元の場合には、(64) の1次元積分の数値積分は容易である。

## 参考文献

- 1) J.Nakayama, H.Ogura, and M.Sakata, *J. Math. Phys.* Vol.22, 471-477, 1981.
- 2) J.Nakayama, *Radio Sci.* Vol.17, 558-564, 1982.
- 3) J. Nakayama, H.Ogura and M.Sakata, *Radio Sci.* Vol.16, 831-847, 847-853, 1981.
- 4) H.Ogura and N.Takahashi, *J. Opt. Soc. Amer.* Vol.A2, 2208-2224, 1985.
- 5) H.Ogura and H.Nakayama, *J. Math. Phys.* Vol.29, 851-860, 1988.
- 6) H.Ogura, 確率過程論, コロナ社, 1978.
- 7) J.Nakayama, K.Mizutani, H.Ogura and S.Hayashi, *J. Appl. Phys.* Vol.56, 1465-1472, 1984.
- 8) A.Ishimaru, J.S.Chen, P.Phu and K.Yoshitomi, *Waves in Random Media*, Vol. 1, 91-107, 1991.
- 9) V.Celli, A.A.Maradudin, A.M.Marvin and A.R.McGurn, *J. Opt. Soc. Am. A* Vol.2, 2225-2239, 1985.

## 複式簿記の論理構造と会計情報システム

# Logical Structure of Double Entry Bookkeeping and Account Information Systems

亀田 彰喜・吉田 勝廣\*

Akiyoshi KAMEDA and Katsuhiko YOSHIDA

### Abstract

There are depressed conditions in the Japanese economy at present. Recently, many enterprises have been on the verge of bankruptcy. Because of the depressed economic condition, the situation of many enterprises has grown worse. To make a better situation, managers of enterprises have to manage more efficiently and to understand accurately the conditions of enterprises. For enterprises to grow, it is necessary to administrate property and to make a large profit. Therefore it is the best method to administrate with double entry bookkeeping. It is most important to administrate profit and loss statement (income statement) and balance sheet in double entry bookkeeping with account information systems.

### 1 はじめに

我が国の経済は、現在、かつてないような不況に直面している。そして、この不況はいまだ回復の兆しが見えてこない。また、最近では企業の不祥事、金融機関の相次ぐ破綻を契機に、我が国における金融システムに対する内外の不安観が高まっている。

今般のこのような不況下で、企業にとって資金繰りに対する判断が一段と厳しくなっている。現在、資金繰りの苦しい金融機関、あるいは企業は早急に対策を講じなければ切り抜けることができないであろう。もし、対応策が遅れた企業は存続することができず、倒産という最悪の事態になることも有り得る。このような状況下において、企業の経営成績（損益計算書）および財政状態（貸借対照表）に関する会計情報が重要視されるのは当然のことである。

一般に財務会計に関しては、今世紀初頭まで、債権者に対する財産在高の報告である「財産計算」、あるいは「貸借対照表」の報告が重要視されていたが、とくに1929年に始まった世界的な大恐慌を境にして、

---

\* 秋田経済法科大学短期大学部

会計の中心的な地位であった「貸借対照表」から株主に対する収益性の報告に重点が移行し、「損益計算」あるいは「損益計算書」が中心的な地位を占めるようになってきた。なぜなら、一般的に企業が巨大化するにつれて、企業は株主から資金を調達する必要がある。したがって、株主に対する配当金の問題、すなわち配当の基礎となる利益額がますます重視され、収益を獲得する能力こそが、企業の経営を判断するのに基本的な要素であることが認識されるようになってきた。言うまでもなく、企業を存続、成長発展させるためには、少なくとも、ある一定以上の利益をあげなければならない。そのうえ企業は、本来、利潤の獲得を目的として経営活動を行っているわけであるから、その活動の成功あるいは不成功は利益の大きさをもって測定される。

この利益の測定法には財産法と損益法があるが、本稿では、複式簿記の論理構造を把握したうえで、財産法と損益法とのそれぞれの特徴をも明確に把握し、期間損益計算を主体とした会計情報システムおよび棚卸法と誘導法による貸借対照表についての会計情報システムの構築と活用を考察していくこととする。

## 2 簿記の論理

### 2. 1 複式簿記に関する諸学説

複式簿記に対する認識を明確にしておくために、簿記の成立について代表的な研究者の各文献において示されている複式簿記の定義を中心に簡潔に取り上げてみる。

今日みられるような複式簿記は、13世紀から14世紀に至る間に、イタリアの商業都市において発達し、15世紀の末に複式簿記の原型が完成された。それは1494年にイタリアの数学者ルカス・パチオーリ (Lucus Pacioli) によって書かれた著書『算術・幾何・比および比例総覧 (Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita)』が複式簿記の起源とされている。この著書の最後の一章に掲げられている簿記が、そのころすでに、ベニスの商人の間で商事慣行として普及していた複式簿記を解説したものであり、世界最初の文献であり、会計史上、画期的なものであるといわれている。

我が国における最初の簿記の著書は、明治6年6月に慶応義塾出版局から出版された福沢諭吉訳の『帳合之法』である。これはアメリカで広く使われていた教科書 (H.B. Bryant and H.D. Stratton 共著の “Common School Bookkeeping” 1871) を翻訳したものである。しかし、これは単式簿記であった。また、我が国における複式簿記の最初の著書は、『銀行簿記精法』で、大蔵省がスコットランド人アラン・シャンド (Alexander Allan Shand) の草案を基にして、大蔵省で翻訳補正して明治6年12月に出版したものである。

その後、簿記会計に対する研究が進むにつれ、実践的な改善がなされると共に多くの会計学者によって複式簿記に対し、その機能および目的について論じられるようになった。

アメリカの会計学者リトルトン (A.C. Littleton) は、その著『リトルトン会計発達史』の中で、「完全な複式簿記が成立するためには、均衡性と二重性以外にさらに別の要素が加わらなければならない。この追加されるべき要素としては、いうまでもなく、資本主関係である。この要素を欠くときは、勘定記入 (帳簿記入) は、単に相互に対応する記入の内容を要約して、これを適切な形式にまとめるというだけのことにはすぎなくなる。利潤計算こそが完全な体系的な簿記の職分であったのである」と述べている。ゆえに、複式簿記の特質として同氏は、「二重性」と「均衡性」の二つをあげることができる。「二重性」とは、

①仕訳帳と元帳の帳簿の二重性、②借方と貸方の二重性、③記入の二重性の3つであり、「均衡性」とは、借方（左側）と貸方（右側）という勘定の二つの面という性質を利用した二重に記帳が行われた結果、常に勘定あるいは諸表において、借方側と貸方側とが均衡するというのである。したがって、同氏の見解は、「完全簿記の形式は初期における記録手続きから由来する二重性と均衡性にあるが、その実質は投下資本に生じた損益の資本主的計算にあるといわねばならぬ」と述べている。

これに対し、ペイトン（W.P.Paton）は、その著『会計理論』の中で、「簿記と会計とを明確に区別しようとする試みは、まったく無意味なことである」、さらに「簿記を可能な限り広く定義すれば、その2つの用語は、実質的に同義語になってしまう」と述べている。また、「広義には、複式記入システムは、営利企業の財産および持分に関するすべての事実を明らかにし、少なくとも定期的にそれらの変動を記録する会計的枠組みを意味する。狭義には、複式記入は複記式勘定の試用を通じてかかる目的を遂行する機構を意味する」と述べている。

また、コーラー（E.L.Kohler）は彼の会計学辞典（A Dictionary for Accountants,1973）において、「簿記は、企業を秩序正しく管理しうる手段を提供し、かつ企業の財政状態と経営成績を記録し報告するための基礎を確立するために、予め考えた計画にしたがって、取引を分析・分類・記録するプロセスである」と述べている。

我が国においては、吉田良三は、「複式簿記は一定の記帳原理を有し、之に拠って一切の取引が仕訳記帳され、其財政状態が明かにされるのみならず、尚又其期間の営業成績につき純損益金の外之が発生原因たる収益費用の内容をも明らかにするものなり」と述べている。

また、太田哲三は、「複式簿記は、金銭だけでなく一般の財貨をすべて貨幣額で計算し、財産の変動だけでなく、元入を表す資本金および損失や利益の発生原因や由来をも詳細に記録する」と述べている。

以上のように各研究者の学説から明らかなように、複式簿記についての定義や解釈については、論者の説くところ必ずしも一致しないが、敢えて複式簿記の共通点をまとめてみると、次のようになる。

- ①複式簿記は、営利企業の財産と資本主関係を計算するシステムである。
- ②複式簿記は、継続する経済活動の会計事象（取引）を発生順に継続的に記録する。
- ③複式簿記は、勘定記入の借方と貸方の二面が常にバランスしていることである。

以上を要約すると、複式簿記とは、資本主の財産と損益の計算および企業の経営活動の成果を判断することを目的とし、貸借平均の原則にしたがって二面的記録計算を用いることによって、損益が自動的に算出されるとともに、その記録計算が正確に行われたかを自己検証することができる計算技術機構であるといえる。

## 2. 2 複式簿記の論理構造

企業は、利潤の獲得という目的を達成するために営まれる経営活動の組織体であるが、株主への安定的な高い配当、従業員の安定、福祉などにも注視している。企業経営の要素は、「人」、「物」、「金」、そして「情報」などでこれらを活用して、社会が必要とする製品やサービスを提供することによって、社会から得られた報酬、すなわち、収益から諸経費を差し引いた残額が利潤である。ゆえに、企業が存続・

発展を続けていくためには、少なくとも、一定率以上の利潤を獲得しておかなければならない。もし仮に、経営者が着実な経営計画のもとに経営活動を行わなければ、現在のような不況下で、先行き不透明な時代に消費の低迷により企業経営を圧迫し、資金繰りが苦しくなり、内部留保の利益も食いつぶし、最悪の状態になれば倒産に追い込まれることになる。このような状態に陥らないように、企業の経営活動の良否を判断するためには、人為的に一定の期間を区切って、その期間における企業の業績や現状を判断する必要がある。そして、将来の企業運営上に役立たせることも必要である。そこで、企業の業績や現状、あるいは将来の資金計画を立てるためには、経営者あるいは経営管理者の経験やカンなどに頼らず、実務面で利潤獲得の手段として提供してくれるものが複式簿記である。

さて、企業にとって利潤獲得が最大の目的であることは周知のとおりである。そこで、継続企業を前提とする企業の経営活動の記録および計算にあたっては、利潤の計算を第一に考えなければならないのである。すなわち、損益計算である。

ところで、複式簿記は、周知のように、企業の財産状態や経営成績を求めるためのプロセスとして、取引を帳簿に記入し、資産・負債・資本・収益・費用の増減変化を明らかにするために、勘定（帳簿上に設けられた計算単位）と呼ばれるところで記録計算が行われる。勘定を記録する形式は、借方（左側）と貸方（右側）との対立的計算機構を構成している。元来、勘定は、帳簿の左右を見開きにした形で、イタリア語ではこれをラチオ（Ratio）と言う。ラチオの意味は、「計算する」という意味であるが、本来の語源からすると、「分ける」とか「区分する」というようなことである。したがって、勘定は、複式簿記の基本的な計算形式で、左右に並列する二つの欄（借方と貸方）から成り立っており、その一方の側には増加量（発生）を記入し、反対側には減少量（消滅）を記入するのである。最後に、借方の合計と貸方の合計を比較することによって現在の残高を知ることができる。

勘定には、それぞれの性質によって名称（名称を勘定科目または単に科目という）がつけられ、資産の勘定（現金、建物、土地など）・負債の勘定（借入金、買掛金など）・資本の勘定（資本金など）・収益の勘定（受取利息、受取手数料など）・費用の勘定（給料、交通費など）の5つに大別することができるのである。この5つのうち資産と負債および資本から貸借対照表が作成され、収益と費用から損益計算書が作成される。

勘定の記入の仕方は、財産（資産）＝資本（投下資本：調達された源泉）が基本になっている。さらに、資本は、その源泉および所有形態から区別して、自己資本と他人資本（負債）とに分けることができる。

以上の関係を等式で示すと、次のようになる。

$$\text{財産（資産）} = \text{資本}$$

$$\text{財産（資産）} = \text{自己資本（資本）} + \text{他人資本（負債）}$$

$$\text{資産} = \text{資本} + \text{負債} \cdots \cdots \text{貸借対照表等式}$$

一方、損益計算書においては、収益が発生すれば資本の増加をもたらすものであるから、貸方（右側）に記入し、費用が発生すれば資本の減少をもたらすものであるから、借方（左側）に記入される。

複式簿記では、企業の資産・負債・資本・収益および費用に増減変化を引き起こした場合は、必ず、あ

る勘定の借方に記入された金額は、必ず他の勘定の貸方に記入される。したがって、すべての取引について、借方に記入された金額と貸方に記入された金額とは、どんなに複雑な取引であっても同一の金額が記入されることになるのである。これを貸借平均の原則といい、複式簿記の計算機構の基本原理を構成するものであることは周知のとおりである。

以上の関係を等式で示すと、下記のようになる。

$$\text{借方合計} = \text{貸方合計} \cdots \cdots \text{貸借平均の原則}$$

また、貸借対照表で算出された純利益（純損失）の金額と、損益計算書で算出された純利益（純損失）の金額とは必ず一致しなければならないのである。これも貸借平均の原則の表れであることはいうまでもない。

さらに、企業は長期間に渡って経営活動を継続するのが普通であるから、企業の財政状態あるいは経営成績を明らかにするためには、1年とか半年とかの期間を区切って、その期間ごとにおける経営成績および財政状態などを明らかにする必要がある。

この定められた期間（1会計期間）の純損益を計算することが簿記の最終的な目的である。一定期間に発生した純損益の計算方法には、基本的には「財産法」と「損益法」の2つがある。この「財産法」および「損益法」は、複式簿記における手法であって、そして両方の計算結果は貸借対照表の純利益（純損失）と損益計算書の純利益（純損失）において一致することになる。

「財産法」と「損益法」の計算構造について認識しておくことにする。

### 3 経営活動による利益の測定

#### 3.1 財産法による利益測定

貸借対照表は、一定時点（決算日現在）における企業の財政状態を明らかにするために、貸方側（右側：資本および負債）には株主や債権者から必要な資金の調達、つまりどのような源泉から調達したかを示し、借方側（左側：資産）には貸方側の調達された資金がどのような形で運用、つまり資金の運用形態を示したものである。

このように貸借対照表では、一般には、貸方側には資金調達の源泉を表示し、借方側には調達した資金の運用形態との関係を表示した報告書であるといえる。この関係を等式で示すと、次のようになる。

$$\text{調達した資金の運用形態} = \text{資金調達の源泉}$$

そこで、次の式が成立するのである。

$$\text{資 産} = \text{負 債} + \text{資 本} \cdots \cdots (\text{貸借対照表等式}) \text{①}$$

①の貸借対照表等式は、企業の資産と負債および資本を対比させることで、企業の財政状態を示すものとしてきわめて重要であり、簿記の出発点でもある。貸借対照表は、複式簿記による一定期間（会計期間）の期末（一定時点）における各勘定残高をまとめたものである。このような意味からすれば貸借対照表とは、決算時における「貸借対照表」を意味しているのであるから、企業の設立時（開業時）の「貸借対照表」については、厳密に言えば貸借対照表とはいえない。しかしながら、企業の設立時においては、企業における設立時の財産の状態を明確に把握し、以後の経営成績および財政状態を後日、比較するために帳簿記入の出発点として、設立時（開業時）の貸借対照表を作成しておく必要がある。

以上のように、会計期間における期首の貸借対照表と期末の貸借対照表が作成されることになる。この2つの貸借対照表の資本の額を比較して純損益を測定しようとする方法が、一般に財産法と呼ばれているものである。また、資本の金額を比較していることから、財産法と言わずに、資本比較法と言う説もある。したがって、財産法は、その会計期間の期首と期末の純財産額（この場合、資本等式が前提である。資産－負債＝資本の額）の差額をもって、その期間に発生した純利益（純損失）を決定する方法なのである。この財産法を等式で示すと次のようになる。

$$\text{期首資産合計} - \text{期首負債合計} = \text{期首純財産額（期首資本）} \cdots \cdots \text{②}$$

$$\text{期末資産合計} - \text{期末負債合計} = \text{期末純財産額（期末資本）} \cdots \cdots \text{③}$$

$$\text{期末純財産額} - \text{期首純財産額} = \text{純財産増加額（利益額であり、マイナスの場合は損失額）} \cdots \cdots \text{④}$$

この純財産増加額を利益と見るのであるが、もし仮に、期間中に追加投資（資本の増加）あるいは資本引出（資本の減少）などがあれば、それに応じて期首の正味財産の金額を修正し、これを期末の正味財産額と比較して純利益を決定する必要があるので、④の式は⑤の式のように修正されなければならない。

$$\text{期末純財産額（期末資本）} - \text{期首純財産額} + \text{期中追加投資額} - \text{期中資本引出額} = \text{利益額} \cdots \cdots \text{⑤}$$

ところで、財産法はもともと財産の計算を通して、その増加額として期間利益を計算しようとするものであるから、純財産の絶対額が非常に重要になってくる。すなわち、財産の計算は、その時点、その時点の計算での絶対額が問題となることから、その各時点で考えられた観点が異なったとしても、それぞれの観点に立って正しい評価で計算がなされているのであれば問題はない。財産法は、2時点における純財産額を比較計算し、その差額を問題としているので、少なくとも2時点での観点あるいは計算方法も同じでなければならないということは当然のことである。

### 3. 2 損益法による利益測定

すでに述べたように、財産法による損益計算は、一定期間の期首と期末の純財産額を比較計算して純損益を求める方法であるが、この方法によると利益をあげてきた過程（具体的な内容まで）を知ることができない、という致命的な欠陥を持っている。そこで、企業の経営活動を収益と費用という観点から把握し、

一定期間にどれほどの収益をあげ、どれほどの費用を費やしたかを算出し、双方の差額（収益総額－費用総額）として純利益（マイナス純損失）を測定しようとする方法が、一般に損益法と呼ばれているのである。すなわち、一定期間における収益総額と費用総額とを比較計算して純利益（マイナス純損失）を求める方法を損益法という。この方法は、損益計算書で利用されているのである。また、財産法と同様に考えるならば、収益費用比較法と言う説もある。いずれにしても、この損益法を等式で示すと次のようになる。

$$\text{収益総額} - \text{費用総額} = \text{純利益（マイナス純利益）} \cdots \cdots \text{⑥}$$

この⑥の等式は、次のように変形することができる。なぜなら、収益は資本の増加（貸方）の原因をもたらす計算項目であるから貸方に、費用は資本の減少（借方）の原因をもたらす項目であるから借方に記入する。

以上の関係を等式で示すと、下記のとおりとなる。

$$\text{費用総額} + \text{純利益} = \text{収益総額} \cdots \cdots \text{（損益計算書等式） ⑦}$$

この⑦の式を損益計算書等式という。損益計算書は、企業の経営成績を明らかにするために、会計期間に発生したすべての収益と、これに対応するすべての費用という計算項目を用いて、純利益（純損益）を算出し、どれだけの成績をあげたかを示すために作られた報告書である。

このような貸借対照表および損益計算書などの財務諸表を実務面で処理するためには、現代ではコンピュータの利用が必至である。そこで、次に財務会計を中心とした会計情報システムの構築について取り上げて見る。

## 4 会計情報システムの構築

### 4.1 財務会計情報システム

会計情報システムはEDPの初期においては、主として財務会計についてそのシステム化を図ってきた。財務会計は外部報告会計であることから、利害関係者に、企業会計原則に従って正確な財務諸表を提示しなければならない。このことから、財務会計のEDPにおいては、実務面での複式簿記のEDPによる処理の正確性が問われる。複式簿記の一連の処理は発生した一連の商取引を発生した順に記帳し、仕訳し、各種の財務諸表を作成する。複式簿記のEDPにおいては、最初取引データを手入力するだけで、通信回線による取引データのDBにより仕訳、転記、日次処理、月次処理、決算処理など可能にする。複式簿記のEDP処理は入力データに誤りがない限り、正確な財務会計の情報を利害関係者により早く提供することができる。

会計情報システムの構築にあたって、は会計情報の蓄積と信頼性の向上に留意しなければならない。特にEDP会計においては、日々の取引を入力し、会計情報を保存し、会計情報のDBをもとに、主として財務諸表を作成する。この財務会計システムのほかに、経営管理や意思決定に必要な管理会計情報システム

ムをも構築する場合は、財務会計のDBをも活用できるシステムの構築が求められる。会計情報システムを開発する場合は、その意図が財務会計を主とするのか、管理会計を主とするのかによって、大きくことなるので、開発の意図を明確にしておかねばならない。

財務会計情報システム開発の目標としては、決算処理の日程の短縮、信頼性の向上、会計データの蓄積、会計処理のトータル的な省力化などであり、これらの目標の達成のための手段として、自動振替や自動仕訳処理、DBの構築ファイルの標準化などが必要である。

財務会計情報システムを構築する場合は、会計情報DBは、勘定科目、科目コード、製造番号、商品番号、取引先などのファイルを設定し、勘定科目についてはマスターファイルとして各勘定科目をコード化し、記憶させて置き、取引情報や仕訳処理で活用する。コンピュータでの処理段階では勘定科目は全てコード番号で処理し、出力時にコード番号と勘定科目をマッチングさせる。

製造部門においては、製造部品の発注や管理および行程管理を行うとともに、製造業にとって最も重要なのは、原価計算である。

販売部門においては、損益計算の基礎となる商品番号を計算のためにコード化し、もファイルとして管理しておく必要がある。

また、管理会計情報システムを構築する場合は、金融、原価計算、固定費、変動費、需要予測などの情報をDBとして、これに財務会計のDBをも利用するようなシステム構築が求められる。

財務会計情報システムの設計に際しては、財務会計の機能面を考慮するとともに企業会計原則の概念のもとにシステムを構築しなければならない。企業会計原則は財務諸表として、損益計算書、貸借対照表、財務諸表付属明細書および利益処分計算書などを要求しており、また、商法においては営業報告書についても要求している。さらに、財務会計情報システムを設計するにあたっては、近年において、企業を取り巻く経済環境が非常に厳しいことから、外部報告のための損益計算書や貸借対照表を含む財務諸表のみならず、資金管理および資金運用に関するサブシステムも設計しておくことが必要不可欠である。

## 4. 2 会計情報と損益計算

会計情報システムで、財産法と損益法を取り扱う場合は、いずれか一方をシステム化するだけでは不十分であるといえるのである。なぜならば、期間損益計算が基本的に利益額を決定するだけでなく、その発生となる原因分析をも要求している以上、財産法と損益法を有機的に結びつけて併用する必要があるのである。つまり、財産法だけでは、利益額の計算については達成することができるのであるが、原因の記録に関することまではできないのである。また逆に、損益法について言えば、原因の記録については一応行うことができるのであるが、その利益額の結果については確実性を持たない。つまり、原因分析の記録に誤りがあったとしても、損益法では、これを確認する方法がない。

すなわち、財産法は利益の原因分析を行うことができないし、また損益法でも計算された利益額が確実性をもつことができないので、財産法と損益法のいずれの方法もそれぞれ致命的な欠陥を持っているといえるのである。

このようなことから、会計情報システムで処理する場合は両方法を結合することによって、その欠陥を

補正しあうような情報システムの構築が必要である。つまり、損益法に基づく計算上の利益額を財産法によって計算された実際上の利益と照合することによって、原因分析の記録の正確性を確認する必要がある。このように、期間利益の計算は、財産法と損益法を結合させるような会計情報システム構築することが、適正な利益額を算定するためには不可欠である。

#### 4. 3 棚卸法による貸借対照表と財務会計情報システム

これまでは、財産法と損益法についての会計情報システムの構築について論じてきたが、さらに財産法と損益法に関連するものとして、棚卸法による貸借対照表と誘導法による貸借対照表におけるシステムの構築についても論述しなければならない。

すでに述べたように、財産法と損益法は期間損益の計算方法であるのに対し、棚卸法と誘導法は貸借対照表を作成するための方法なのである。すなわち貸借対照表を作成する方法には、棚卸法と誘導法の2つの方法があり、どの方法によって作成されるかによって、貸借対照表の性格が異なってくる。

棚卸法は、企業が一定の時点に所有するすべての財産を実地調査（実地棚卸）して財産目録を作成し、これに基づいて貸借対照表を作成する方法を棚卸法という。この方法によれば、貸借対照表の作成方法は、組織的な簿記あるいは会計帳簿の有無や記録および計算に関係なく、企業の一定時点の財産の実地調査を行い、財産目録を作成してから貸借対照表を作成することになる。また、実地調査による財産評価の方法についていえば、組織的な簿記を前提条件としていないので、多くの場合は時価によって貸借対照表を作成することになる。また、この貸借対照表は、現在の財産の状態を明らかにした表であることから、財産貸借対照表とも呼ばれている。したがって、この貸借対照表は、開業貸借対照表（事業開始または会社設立の場合）および、一時的に作成される破産貸借対照表、清算貸借対照表（会社の解散または倒産の場合）などに用いられている。

これに対して誘導法は、企業が一定の時点に所有するすべての財産について、組織的な簿記を前提条件とし、会計帳簿の各勘定残高に基づいて貸借対照表を作成することから誘導法といわれる。したがって、通常は日常の取引記録を基にして貸借対照表を作成することになる。この貸借対照表は、開業後における各決算期末において作られることから、いわゆる決算貸借対照表といえる。普通に貸借対照表といえば、この決算貸借対照表をいう。

以上のように、貸借対照表は一定時点における企業の財政状態を示すものであるから、財産の評価額と貸借対照表は極めて関連性があるといえる。すなわち、財産評価において対象となる財産は資産ということになる。したがって、資産の評価額については、貸借対照表における正確度を左右する要因を所有しているものと考えられる。例えば、財産目録を作成する場合、資産の評価額を実際より低くすれば、利益額が少なくなり、逆に実際より高くすれば、それだけ利益額が多くなる。また、企業の規模が拡大することによって、財産の種類が多くなり、また量も増大するにつれて、毎決算において企業が所有するすべての財産に対して実地棚卸を行い、その評価をすることは次第に不可能になる。このようなことから、棚卸法では正確な貸借対照表を作成することができなくなる。しかし、誘導法だけでも、完全な貸借対照表を作成することができない。すなわち、誘導法は帳簿記録に基づいて作成されることから、帳簿記録から作

成された各勘定残高と実際在高（例えば、管理方法によっては盗難・損傷・破損、または時の経過によって価値が減少するなど）とが必ず一致するとは限らないことから、この方法においても、また正確に把握することはできない。ゆえに、帳簿記録に基づいて作成される貸借対照表においても実地棚卸を行い、帳簿残高と照合し、帳簿の記録を修正することが必要である。このようにして完全な貸借対照表が作成されるが、結局のところ、帳簿記録から作成された各勘定残高と実地棚卸による結果とがお互いに結合することにより、その欠陥を補正しあって、はじめて貸借対照表を作成することができるといえる。

したがって、財務会計情報システムによって、貸借対照表のシステムを開発する場合は、誘導法による帳簿記録の結果と棚卸法による実地棚卸の結果とを連携させるようなシステムを構築しておかなければ、適正な貸借対照表が作成されない。

## 5 おわりに

財務会計は、企業の永続的な経営活動の流れを、一定の期間に区切って、期間損益計算を行う。そこで企業の財政状態および経営成績を明らかにするために行われる財務会計、すなわち、複式簿記によって、取引を記録・計算・整理し、一定期間における企業の経営活動の結果、どれだけの利益をあげることができたかを計算すること、すなわち一定期間における損益の計算が最大の任務であることはいうまでもない。

そして、上述のごとく財産法と損益法の二つの方法は、お互いに欠陥を補正しあうものであり、どちらか一方だけでは不完全であり、誤った計算をしてもそれを立証する手段を欠くこととなる。結局、複式簿記の構造は財産法および損益法の二つの損益計算を同時に行うことができる計算機構を備えており、その結果として算出された純利益（純損益）の金額が一致することによって、計算の正しいことが自動的に証明される。また、棚卸法と誘導法の二つの方法は、財産法と損益法と同じようにお互いに欠陥を補正しあうものであり、どちらか一方だけでは不完全なため、二つの方法を同時に結合させることによって、適正な貸借対照表を作成することができる。したがって、損益法なくしては誘導法は成り立たないといえるのである。棚卸法と誘導法に関しては、単に貸借対照表を作成するという観点から付けられた名称である。それに対して、財産法と損益法に関しては、期間損益の純利益（純損益）を決定するという観点から付けられた名称である。

最後に、複式簿記は、今日の社会において重要な役割を果たしているのであるが、一部の企業では自己の利益のために複式簿記を歪めて利用することがある。例えば、インプットすべき会計情報の信頼性の問題（例えば、故意に偽造された会計情報）もあるが、経営の合理化、事務の合理化のためには財務会計情報システムを導入し、会計DBを構築し、財務諸表等を出力することは非常に有効な手法であるが、利益の過大または過小表示を正当化し、それによって税金対策や、あるいは労務対策等を有利にしようとするために会計情報システムを利用しようとする事実も見受けられる。本来、会計情報システムは会計情報の蓄積とデータの信頼性のもとに運用されなければならない。

## 引用・参考文献

- 1) Kohler, E.L., A Dictionary for Accountants, 1952.  
(染谷恭次郎訳, コーラー会計学辞典, 70, 1973)。
- 2) Paton, W.A., Accounting Theory, 4-5, 139, 1922.
- 3) Littleton, A.C., Accounting Evolution to 1900, New York, 1933.  
(片野一郎訳, リトルトン会計発達史, 同文館, 45, 1952)。
- 4) 稲垣富士男, 精説簿記, 同文館, 14-16, 1980.
- 5) 太田哲三, 簿記の研究, 旺文社, 18, 1962.
- 6) 黒澤清, 近代会計学, 春秋社, 295-296, 1968.
- 7) 阪本安一, 『現代財務諸表会計』, 中央経済社, 8-12, 1973.
- 8) 佐藤勘助, 精説簿記原理, 同文館, 14-23, 1970.
- 9) 佐藤康男, 簿記会計の基礎, 白桃書房, 39-41, 1976.
- 10) 寫村剛雄編, 企業会計の現状と展望, 白桃書房, 50-56, 1988.
- 11) 染谷恭次郎, 会計学, 中央経済社, 38-42, 1983.
- 12) 染谷恭次郎編, 会計学の学び方, 白桃書房, 36-39, 1971.
- 13) 武田隆二, 簿記 I 簿記の基礎, 税務経理協会, 35-73, 1997.
- 14) 田中茂次, 「財産法・損益法」の概念的跋行性—経済的利益概念の適用形態, (その1) (その2), 『会計』, 森山書店, 第101巻4月号・5月号, 1972.
- 15) 中村 忠, 新訂現代会計学, 白桃書房, 6-10, 1983.
- 16) 沼田嘉穂, 完全簿記教程 I, 中央経済社, 132-136, 1971.
- 17) 沼田嘉穂, 簿記論攻, 中央経済社, 10, 1967.
- 18) 守永誠治, 現代簿記精講, 税務経理協会, 472-473, 1970.
- 19) 横浜市立大学会計学研究室編, 新簿記事典, 同文館, 395-399, 1975.
- 20) 安平昭二, 精説簿記原理, 中央経済社, 244-246, 1979.
- 21) 山田一郎・市川深・篠原三郎, 現代会計学の理論, 新評論, 38-42, 1971.
- 22) 前川良博編, 経営情報管理, 日本規格協会, 103-116, 1982.・

大学ボート選手における模擬的漕力の変動に關与する

無氣のおよび有氣的能力の検討

**A Study of Anaerobic and Aerobic Capacities Concerning the Change of Simulated  
Rowing Power of Collegiate Oarsmen**

岡本 進・宮本 孝\*・佐藤尚武\*

**Susumu OKAMOTO, Takashi MIYAMOTO\* and Shobu SATO\***

**Abstract**

The object of this study was to clarify the effects of anaerobic and aerobic capacities concerning the change of simulated rowing power (RP) through one year training. The university boat club members include 13 male junior rowers aged  $19.4 \pm 0.9$  years as the beginner group and another 13 rowers aged  $20.1 \pm 0.8$  years as the experienced group. Their physical conditions were voluntarily examined at the end of autumn and around the same time in the following year. RP and peak oxygen intake ( $\dot{V}O_{2peak}$ ) were obtained from the 6-min allout test on a rowing ergometer. The maximal anaerobic power (MANP) was obtained from the 10-sec maximal pedaling test with 3 progressive intensity.

After one year of training, RP (watt) significantly improved from  $194 \pm 14$  to  $212 \pm 15$  for the beginner group and from  $205 \pm 15$  to  $216 \pm 14$  for the experienced group.  $\dot{V}O_{2peak}$  (l/min) for the beginner group significantly increased from  $3.41 \pm 0.32$  to  $3.63 \pm 0.37$  and MANP (watt) from  $883 \pm 92$  to  $988 \pm 85$ . These values for the experienced group did not significantly increase from  $3.63 \pm 0.47$  to  $3.69 \pm 0.46$  and from  $960 \pm 125$  to  $994 \pm 121$ , respectively. Although the change rate between RP (0-1min) and its MANP for both groups was not great, the significant positive correlations for between RP (1-6min) and its  $\dot{V}O_{2peak}$  for both groups were found in terms of change rate.

These results indicate that aerobic capacity may be an important factor for the improvement of RP during the middle to final periods for oarsmen.

---

\* 滋賀大学

Shiga University

## 1 緒 言

ボート競技は水上で競われることから、実漕中の出力エネルギーやそれに伴う生理的応答を知ることは困難である。そのために、漕運動の生理学的研究はローイングエルゴメータを用いてすすめられ、Secher<sup>15)</sup>やHagerman<sup>3)</sup>の報告にみられるように、近年にはその生理学的基盤が確立されている。著者らもローイングエルゴメータを用いた研究を進めるなかで、機械的出力値の安定性を確保するためにGamut型エルゴメータに改良を加え、機械的出力値と生理的パラメータを同時に測定する方法を開発した<sup>11)</sup>。この方法でレースをシミュレートさせた6分間の最大漕運動を負荷したところ、ここで得られる模擬的漕力は実漕の競技成績を反映することが明らかとなり<sup>12)</sup>、ボート選手の競技力を知る有効な指標に位置づけられた。

ところで、2,000mのレースを想定した最大ローイングテストにおいて、その競技におけるエネルギー需給関係からは、70%が有気的機構に依存し、残りの30%が無気的機構でまかなわれると見積もられている<sup>2)</sup>。著者らの同様のテストからは、酸素需要量に占める漕運動中の酸素摂取量は一流選手で69.7~72.4%の範囲にあることが明らかにされている<sup>13)</sup>。したがって、ボート選手に要求される能力としては高い有気的能力が重視されるのである。実際に、競技力の水準が高いクルーほど最大酸素摂取量の大きい選手で構成されている<sup>6,8)</sup>。一方、無気的能力についてみると、著者らは競技力の水準の高いクルーの選手ほど大きな最大無酸素性パワーを有していることを報告している<sup>10)</sup>。

漕運動はオールで水をキャッチし、それを引く動作と、オールを元の位置に戻す動作で構成されている。艇の推進力を増大させるためには、1回のストロークでオールを強くしかも長く引くことが求められるが、実際の競技ではオールを引く動作は必ずしも一様でない。2,000mのレースを大きく区分すると、スタートから500m近くまでの局面（初期）、その後の1,700mまでの局面（中期）、残りの300mの局面（後期）に分

けられ、それぞれの局面でオールを引く強さやオールを引く長さが異なってくる。このようなことから、ボートの競技力には高い有気的能力をベースに、無気的能力の大きさも関与することになる。

本研究では、ジュニアボート選手の実漕を反映する模擬的漕力に注目し、その漕力が1年間にわたるトレーニングによってどのように変動し、その変動に無気的および有気的能力がどのような関与をもたらすかを検討することにした。そこで、漕力に関わるローイングの技術的要素の影響をさけるために、大学のボート部でレース経験を有しないジュニア選手を選び、トレーニング経験による変動の特徴について明らかにすることにした。

## 2 方法

### 2.1 被検者

対象となったボート選手は、関西の大学ボート部に所属する男子26名である。これらの選手の年齢は18~21歳の範囲にあるが、いずれも大学の入学後にボート競技を始めた選手ばかりであり、1年目の選手13名（初心者群、19.4±0.9歳）と、2年目の選手13名（経験者群、20.1±0.8歳）とに分けられる。これらの選手は、乗艇シーズン終了後に最大ローイングテストおよび関連する体力テスト（Test-1）を受けた後、シーズンオフのトレーニングと、翌シーズンの陸上および乗艇トレーニングを経て、1年後の同時期に前回と同様のテスト（Test-2）を受けた。

### 2.2 実験方法

測定に先だって形態を計測した後、各選手にはウォーミングアップを充分とらせ、最大ローイングテストを実施した。このテストの終了後には休息を与え、多くの場合には90分後に最大無酸素パワーテストを実施した。

形態では、身長、体重、皮下脂肪厚および前腕囲を計測した。皮下脂肪厚は皮脂厚計（栄研式）を用いて上腕背部と肩胛骨下縁部を計測し、これらの値からBrožecら<sup>1)</sup>およびNagamineら<sup>5)</sup>の式によって体脂肪率を算出し、体脂肪率を用いて除脂肪体重を求めた。前腕囲は左右の最大

囲を計測し、その平均値を採用した。

最大ローイングテストでは、電磁式ブレーキに改良した Gamut型ローイングエルゴメータを用いた。ドラムにかかる負荷強度は2 kgに設定し、2,000mのレースを想定した6分間の模擬的漕運動を負荷した。このテスト中には回転数を1分ごとに計測し、パワー値に換算した。また、テスト中には採気マスクを装着させ、呼気ガスをエアロピックプロセッサ（日本電気三栄, 391）に導いて分析し、換気量、酸素摂取量および二酸化炭素排泄量を1分ごとに測定した。なお、これらの選手の多くは実漕の経験がないことから、6分間で全力が発揮できるよう、コックスからローイングレートが時間経過とともに告知された。

最大無酸素パワーテストでは、パワーマックスV（コンビ社）を用いて、異なる3段階の強度による全力ペダリングを120秒間の休息をはさんでそれぞれ10秒間負荷した。各段階でのペダル最高回転数と負荷強度との関係から、ピークパワーが演算された。

なお、これらの測定は、11月下旬から12月上旬にかけて実施された。Test-1の測定条件は、室温20～26℃、湿度60～74%であった。また、1年後のTest-2では、室温18～22℃、湿度53～74%であった。

### 2.3 統計処理

テスト間の各項目における平均値の差異には対応のあるt検定を用いた。また、各項目間の関係にはピアソンの相関係数を算出した。統計的有意水準は、いずれも危険率5%以下とした。

### 3 成績

表1には、形態および体組成を群別にテストごとの平均値と標準偏差で比較している。初心者群のTest-1とTest-2を比較すると、Test-2の体脂肪率は小さくなり、体重および除脂肪体重は有意に大きくなっている。経験者群の比較においては、Test-2の体脂肪率はやや小さくなり、体重および除脂肪体重はやや大きくなっているが、いずれも有意差はみられない。また、Test-2の前腕囲はいずれの群とも有意に大きくなっている。体重、除脂肪体重および前腕囲の増加率を求めると、初心者群では2.4%、2.6%および3.5%であり、経験者群では0.7%、1.6%および2.0%であった。

図1は最大ローイングテストにおけるドラム回転数の経時変化であり、群別にテストごとの平均値と標準偏差で示している。いずれの群においても、ドラム回転数は運動開始の1分目でピーク値を示し、その後は漸減して終末の6分目に維持あるいは増加する変化パターンを示している。初心者群におけるTest-1とTest-2の比較においては、Test-2の回転数がいずれの時間とも大きく上回っている。とくに2分から6分目にかけては有意な差となり、時間経過に伴ってテスト間の差が広がる傾向にある。経験者群の比較においては、両テストの回転数は1分目でほとんど変わらないが、2分から6分目にかけてはTest-2の回転数が有意に大きくなり、時間経過とともにその差が広がる傾向にある。

図2は最大ローイングテストにおける酸素摂取量の経時変化であり、群別にテストごとの

Table 1. Comparison of height, weight, body fat, lean body mass and forearm girth between Test-1 and Test-2.

	Beginner (n=13)			Experienced (n=13)		
	Test-1	Test-2	T1 vs T2	Test-1	Test-2	T1 vs T2
Height (cm)	178.4±5.8	178.5±5.7	ns	173.8±6.1	173.8±6.1	ns
Weight (kg)	68.2±5.6	69.8±5.8	p<0.01	69.7±5.4	70.1±4.9	ns
Body fat (%)	13.2±1.9	13.1±2.3	ns	13.5±2.5	12.7±2.2	ns
Lean body mass (kg)	59.2±4.9	60.6±4.9	p<0.01	60.3±4.6	61.2±4.5	ns
Forearm girth (cm)	25.7±1.0	26.6±1.1	p<0.001	27.0±1.0	27.5±1.0	p<0.05

Values are mean ± SD.

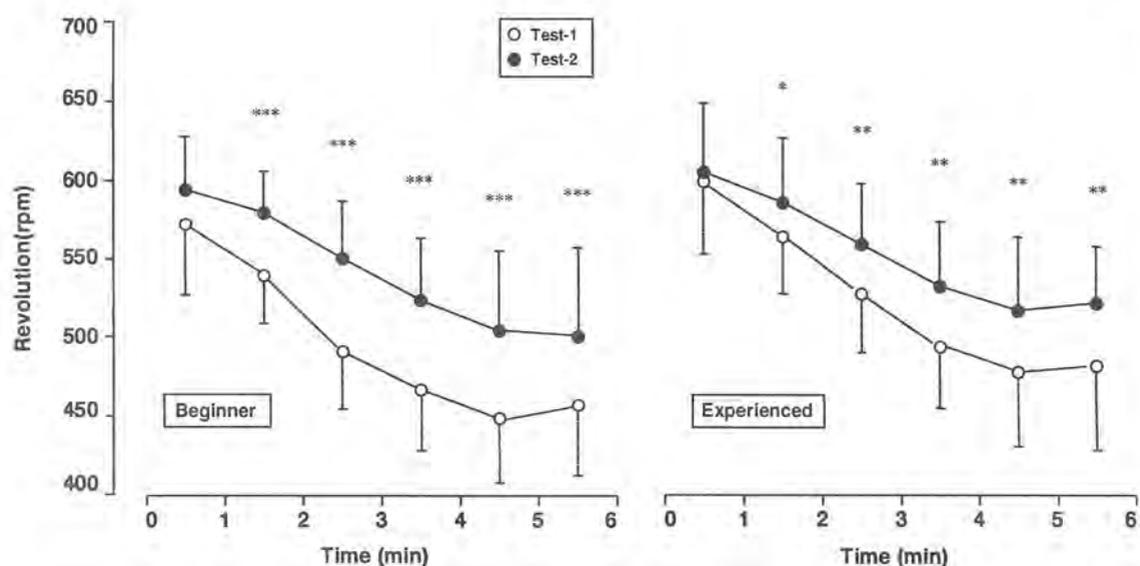


Fig.1. Temporal change of drum revolution. (Mean±SD, \*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001)

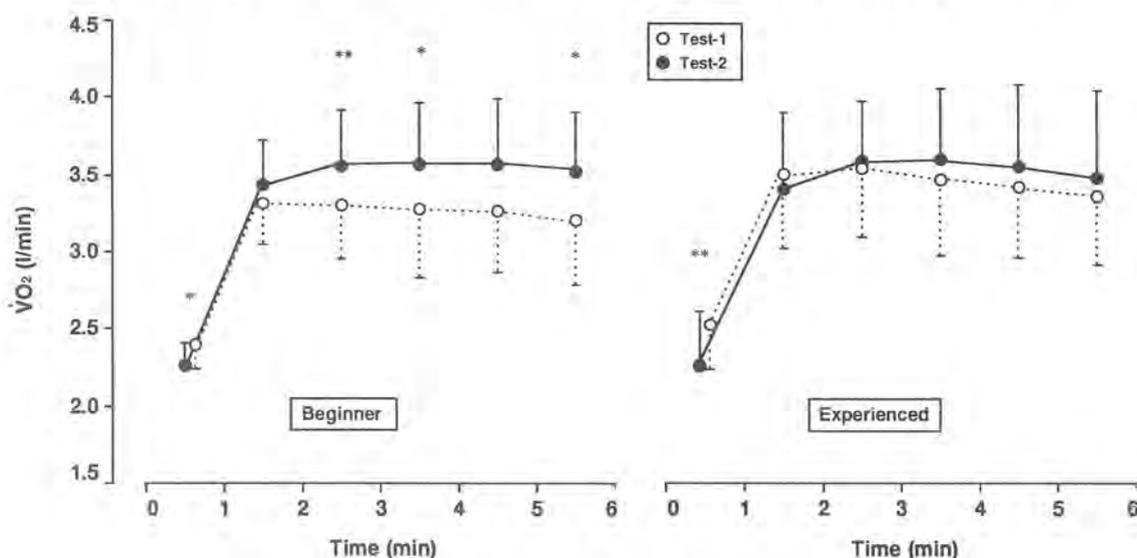


Fig.2. Temporal change of oxygen intake. (Mean±SD, \*:p<0.05, \*\*:p<0.01)

平均値と標準偏差で示している。いずれの群においても、酸素摂取量は運動開始1分から2分目にかけて急増し、その後はほぼ定常状態を示している。初心者群のTest-1とTest-2を比較すると、Test-2の酸素摂取量は1分目で有意に低いが、2分目以降は高くなり、3、4、6分目ではいずれも有意な差となっている。経験者群の比較においては、Test-2の酸素摂取量は1分から2分目にかけて低く、1分目ではその差が有意となっている。3分目以降では、Test-2の酸素摂取量は高くなっている。

表2には最大ローイングテストから得られた漕力と酸素摂取量を示しており、群別にテストごとの平均値と標準偏差で比較している。まず、総回転数から換算された6分間の漕力をみると、初心者群のTest-2では212wattとなり、Test-1(194watt)より有意に大きくなっている。経験者群においても同様に、Test-2の漕力(216watt)はTest-1(205watt)より有意に大きくなっている。漕力の増大率を求めると、初心者群では9.4%であり、経験者群では5.8%であった。6分間の漕力を初期1分と残り5分の中・後期に分画す

ると、初期漕力は両群ともTest-2でやや大きくなる程度であるが、中・後期の漕力は両群ともTest-2ではかなり大きくなっており、Test-1に比べて有意な差となっている。

総酸素摂取量をみると、初心者群のTest-2では19.9lが得られ、Test-1 (18.8l) より有意に大きくなっている。この増大は、6.4%に相当していた。経験者群のTest-2では19.9lであるが、この値はTest-1とほぼ同値となっている。模擬漕力と同様に、初期1分と残り5分に分画してみると、初期の酸素摂取量は両群ともTest-2では2.26lとなつて、Test-1より有意に小さくなっている。中・後期の酸素摂取量は両群ともTest-2では17.6lとなり、Test-1より大きくなっている。その差は初心者群では有意であるが、経験者群では有意でない。

表3には最大ローイングテストから得られたピーク酸素摂取量と最大無酸素パワーテストの結果を示しており、群別にテストごとの平均値と標準偏差で比較している。ピーク酸素摂取量

は、初心者群ではTest-2で3.63l/minとなり、Test-1 (3.41l/min) より有意に大きくなっている。経験者群ではTest-2で3.69l/minとなり、これはTest-1 (3.63l/min) とほとんど変わらない。ピーク酸素摂取量の増大率を求めると、初心者群では6.6%、経験者群では2.0%であった。この酸素摂取量を体重当たりでみると、Test-2では初心者群 (52.1ml/kg・min) および経験者群 (52.6ml/kg・min) とともにTest-1より大きくなっているが、その差は有意でない。

最大無酸素パワーをみると、初心者群のTest-2では988wattとなり、Test-1 (883watt) より有意に大きくなっている。これを体重当たりでも、Test-2では14.2wattとなり、Test-1 (12.9watt) より有意に大きくなっている。経験者群の最大無酸素パワーは、Test-2で994wattが得られ、Test-1 (960watt) より大きくなっているが、その差は有意でない。体重当たりでみると、Test-2では14.2watt/kgとなり、Test-1 (13.8watt/kg) よりや

Table 2. Comparison of rowing power and oxygen intake between Test-1 and Test-2.

	Beginner (n=13)			Experienced (n=13)		
	Test-1	Test-2	T1 vs T2	Test-1	Test-2	T1 vs T2
<b>Rowing power</b>						
0-1'power (watt)	223 ± 18	231 ± 13	ns	234 ± 18	237 ± 17	ns
1-6'power (watt)	188 ± 14	208 ± 16	p<0.001	199 ± 15	212 ± 15	p<0.01
0-6'power (watt)	194 ± 14	212 ± 15	p<0.001	205 ± 15	216 ± 14	p<0.01
<b>Oxygen intake</b>						
0-1'VO <sub>2</sub> (l/min)	2.40 ± 0.16	2.26 ± 0.14	p<0.05	2.53 ± 0.29	2.26 ± 0.35	p<0.01
1-6'VO <sub>2</sub> (l/5min)	16.4 ± 1.8	17.6 ± 1.8	p<0.01	17.3 ± 2.2	17.6 ± 2.4	ns
0-6'VO <sub>2</sub> (l/6min)	18.8 ± 1.9	19.9 ± 1.9	p<0.05	19.8 ± 2.5	19.9 ± 2.6	ns

Values are mean ± SD.

Table 3. Comparison of peak oxygen intake (VO<sub>2</sub> peak) and maximal anaerobic power (MANP) between Test-1 and Test-2.

	Beginner (n=13)			Experienced (n=13)		
	Test-1	Test-2	T1 vs T2	Test-1	Test-2	T1 vs T2
VO <sub>2</sub> peak (l/min)	3.41 ± 0.32	3.63 ± 0.37	p<0.01	3.63 ± 0.4	3.69 ± 0.46	ns
(ml/kg・min)	50.1 ± 3.7	52.1 ± 4.1	ns	52.1 ± 4.6	52.6 ± 5.0	ns
MANP (watt)	883 ± 92	988 ± 85	p<0.001	960 ± 125	994 ± 121	ns
(watt/kg)	12.9 ± 0.9	14.2 ± 0.9	p<0.01	13.8 ± 1.3	14.2 ± 1.0	ns

Values are mean ± SD.

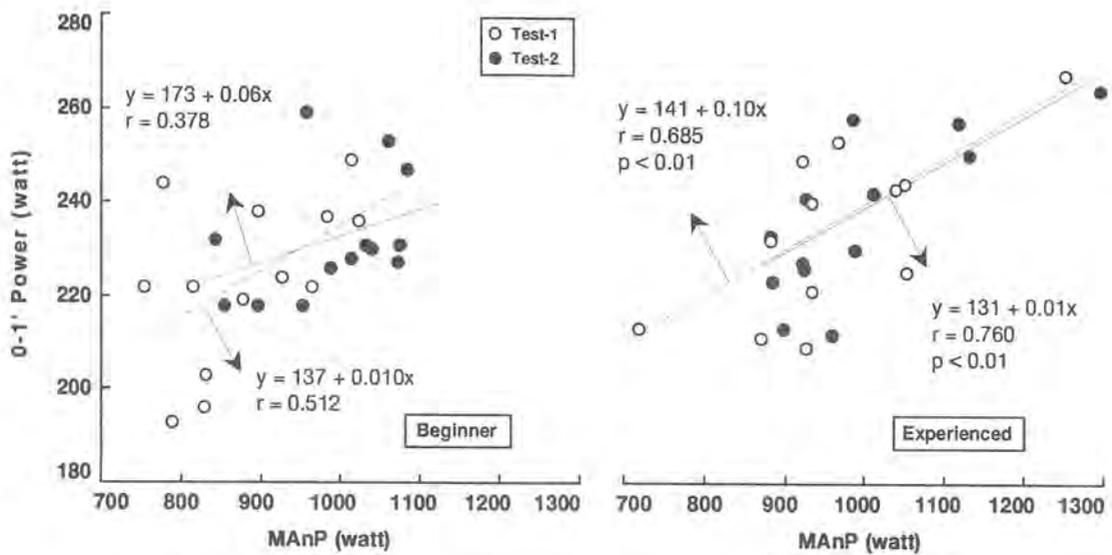


Fig.3. Relationship between 0-1 power and maximal anaerobic power (MANP).

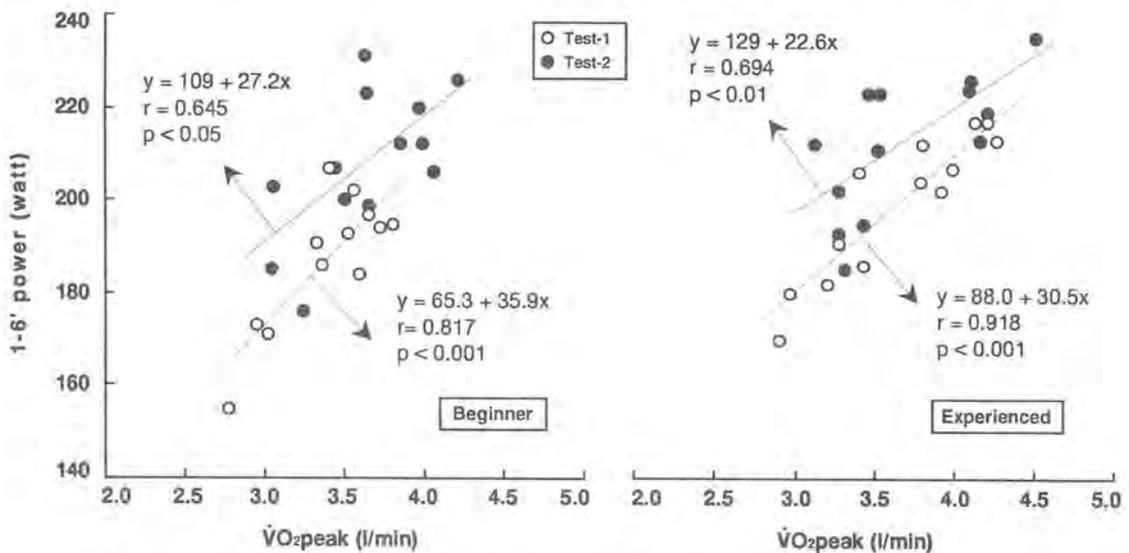


Fig.4. Relationship between 1-6 power and peak oxygen intake ( $\dot{V}O_2$  peak).

や大きい程度で、有意な差はない。最大無酸素パワーの増大率を求めると、初心者群では12.5%、経験者群では4.1%であり、体重当たりではそれぞれ9.8%および3.4%であった。

漕力と無酸素および有酸素パワーとの関係をみるために、図3には初期の漕力と最大無酸素パワーとの関係を、図4には中・後期の漕力とピーク酸素摂取量との関係を、それぞれ群別に示している。初期漕力と最大無酸素パワーの間には、初心者群では有意な関係がみられないが、経験者群ではTest-1で0.760、Test-2で0.685の

相関係数が得られ、いずれも有意な関係が認められる。中・後期漕力とピーク酸素摂取量の間には、初心者群、経験者群ともに漕力が大きい選手ほどピーク酸素摂取量が大きくなる関係がみられる。両者の相関係数は、初心者群のTest-1では0.817、Test-2では0.645であり、経験者群のTest-1では0.918、Test-2では0.694であり、いずれも有意な関係が認められる。

#### 4 考察

本研究では大学からボート競技を始めたジュ

ニア選手を対象として、實際の競技力を反映する模擬的漕力の変動に注目した。Test-1の時期は乗艇シーズン終了時であり、この段階において初心者群はほぼ半年のトレーニングを続けてきたが、ボート競技の本格的なトレーニングを積んでいない。しかし、経験者群は2シーズン目に入っており、本格的な乗艇トレーニングを重ねてきている。これら初心者群および経験者群が1年間にわたって共通的なトレーニングを継続することによって、漕力の変動に關与する無氣的小および有氣的能力を明らかにしようとした。

まず、形態および体組成にみられる変化であるが、両群とも1年後には体脂肪率の低下傾向を伴って、体重および除脂肪体重が初心者群では有意に増加し、経験者群では増加傾向を示した。これらの増加率は初心者群では2.4%および2.6%であり、経験者群では0.7%および1.6%となって、初心者群の増加率が大きかった。また、両群とも前腕囲に有意な増加がみられたが、初心者群では3.5%、経験者群では2.0%となり、初心者群の増加率が大きかった。このように、トレーニングによる体格や体組成の変化には筋肉の量的改善を伺うことができる。この場合の変化はトレーニング経験の少ない者に大きくなり、ボート選手を対象とした著者らの報告<sup>7)</sup>あるいは佐藤らの報告<sup>14)</sup>と一致している。

次に、最大ローイングテストによる変化であるが、ドラム回転数は運動の初期1分でピークとなり、その後は漸減しながら終末にやや増加する変化を示した。このような変化パターンは著者らのこれまでの報告<sup>6,9,13)</sup>と同様であり、レースをシミュレートした最大漕運動となっていることが伺える。この経時的変化における両群の特徴をみると、初心者群の1年後では初期1分から高い水準での変化となり、経験者群の1年後では初期1分でのピーク値は変わらないものの、その後の漸減過程では高い水準の変化となり、両群とも2分から6分にかけては有意に高くなっていた。このことは、中期から後期にかけての漕運動の低下を抑制できる変化パターンへの推移を示している。その結果、総回転数

からの漕力において、初心者群、経験者群ともに1年後には有意に大きくなり、初心者群では9.4%、経験者群では5.8%の増大となった。この場合、いずれの群とも初期の漕力にはあまり差がみられなかったが、中・後期の漕力には有意な増大がみられた。

このような機械的出力値の変化に対して、酸素摂取量は運動開始とともに急増した後、1～2分から定常状態を示す変化であった。この変化における両群の特徴は、1年後では初期1分値は有意に低くなって、2分以降は高い水準での定常状態となり、特に初心者群では著明であった。総酸素摂取量でみると、初心者群では1年後に有意な増大となっていた。この場合、初期の酸素摂取量は有意に低下し、中・後期の酸素摂取量は有意に増大した。このことから、初心者群の漕力の増大は酸素摂取量の増大によってもたらされることが推察される。一方、経験者群では両テストの総酸素摂取量は同値であった。この場合、1年後には初期酸素摂取量は有意に低下したが、中・後期の酸素摂取量はやや増大する程度であった。このことから、経験者群の漕力の増大は機械的効率の改善に依存していることが伺える。

ところで、ボート競技は艇を静止状態から一気に加速推進させる局面と、その後の加速した艇速を持続させる局面と、ラストスパートを含めてさらに艇速を引きあげる局面がある。本研究ではこれらの局面を考慮して、最大ローイングテスト成績を初期、中期、後期としているが、それぞれの局面ではエネルギー供給機構は異なってくる。すなわち、スタート局面では非乳酸系のエネルギー供給系に乳酸系のエネルギー供給系が加わり、その後は有酸素系のエネルギー供給に移行し、フィニッシュ局面では有酸素系に乳酸系のエネルギー供給が加わることになる。したがって、初期の漕力には無氣的能力の大きさが關与し、中期から後期の漕力には有氣的能力の大きさが關与すると考えられる。

本研究では、無氣的能力を知る指標として最大無酸素パワーを測定し、有氣的能力を示す指

標としては最大酸素摂取量に着目し、ここでは最大ローイングテストで得られるピーク酸素摂取量を採用した。初心者群では1年後の最大無酸素パワーは有意に大きくなり、12.5%の増大を示した。また、ピーク酸素摂取量も有意に大きくなり、6.6%の増大を示した。このことは、初心者群の無気的および有気的能力が明らかに改善されたことを示唆している。一方、経験者群の1年後では、最大無酸素パワーおよびピーク酸素摂取量の増大率は、それぞれ4.1%および2.0%であり、これらは有意な増大とはならなかった。

これらの無気的および有気的能力と漕力との関係をみたところ、最大無酸素パワーと初期漕力との間には、初心者群ではいずれのテストでも両者の関係は明らかではなかったが、経験者群では両テストで有意な相関関係が認められた。経験者群では、初期漕力に無気的能力の大きさが反映されるのに対し、初心者群では反映されず、レース経験の不足によるペース配分の不適切さが生じていた可能性が考えられる。また、ピーク酸素摂取量と中・後期漕力との間には、初心者群、経験者群ともに両テストで有意な相関関係が認められ、漕力に有気的能力の大きさが反映されることが明らかとなった。

そこで、漕力の変動に關与する無気的および有気的能力を明らかにするために、図5には初期漕力と最大無酸素パワーとの関係をTest-1に対するTest-2の変化率でみたところ、両群とも両者にはほとんど関係がみられない。図6には中・後期漕力とピーク酸素摂取量との関係を同様の变化率でみているが、ここでは図からも明らかのように、両群とも両者に有意な相関関係が認められる。

前述したように、初期漕力の大部分は非乳酸系および乳酸系の無気的エネルギー供給過程でまかなわれている。本研究ではその漕力に最大無酸素パワーを対応させたが、両者の関係を見いだせなかった。このことは、最大無酸素パワーが主としてATP-CP系を反映するパワーであり<sup>4)</sup>、乳酸性パワーを考慮できていないことに起因し

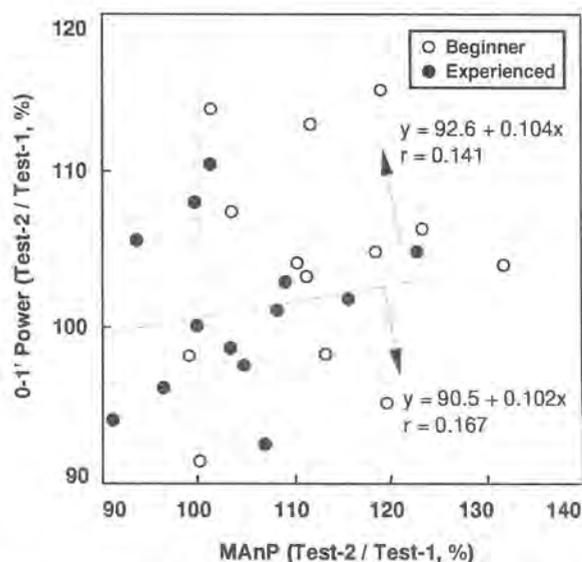


Fig.5. Relationship between 0-1' power and maximal anaerobic power (MANP) in the ratio of Test-1 to Test-2.

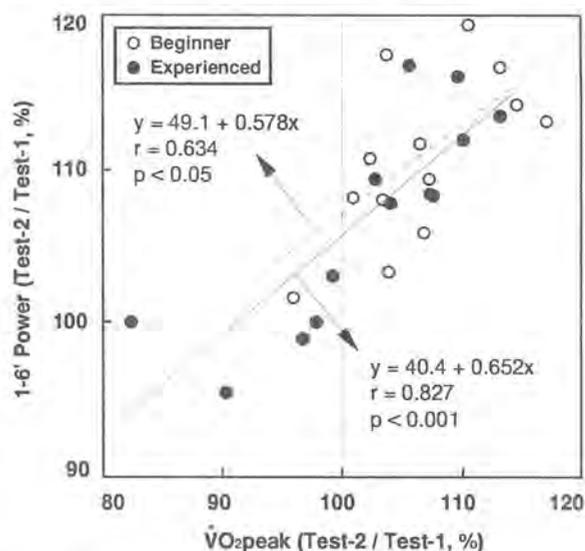


Fig.6. Relationship between 1-6' power and peak oxygen intake ( $\dot{V}O_{2peak}$ ) in the ratio of Test-1 to Test-2.

ているようである。最大無酸素パワーを用いる場合には、初期漕力をさらに区分する必要があるのかもしれない。一方、中期から後期にかけての主役は有気的エネルギー供給過程である。このエネルギー系の大きさは酸素摂取量の最大値から知ることができることから<sup>4)</sup>、本研究ではこの漕力にピーク酸素摂取量を対応させた。両者の変化率にみられる両群の有意な相関関係能

力が明らかに關与することを示唆している。

これらのことから、ボート競技では無氣的能力の大きさが關与する局面があるものの、漕力全体としては有氣的能量出力の持続能力が重要であつて、それを支える有氣的能力の改善が競技力を向上させる役割を担っていることが推察される。また、本研究の群間の比較において、1年間のトレーニングによる模擬漕力やそれに関与する有氣的能力の向上は初心者群では明らかであつたが、経験者群では有氣的能力の向上があまりみられなかつた。このことは、大学ボート選手ではより専門的トレーニングを進める過程において、有氣的能力の改善に寄与するトレーニングの比率を高める必要性を示唆しているように考えられる。

## 5 総括

大学のジュニアボート選手(26名)を対象に、1年間にわたるトレーニングによって変動する模擬的漕力に注目し、この漕力に及ぼす無氣のおよび有氣的能力の影響について検討した。初心者群(13名)および経験者群(13名)について、ローイングエルゴメータによる6分間の模擬的漕力運動から漕力およびピーク酸素摂取量を測定し、自転車エルゴメーターによる3段階の強度での10秒間の全力運動から最大無酸素パワーを測定した。これらは乗艇シーズン終了後に測定(Test-1)した後、1年を経過した翌年の同時期に再び測定(Test-2)した。得られた成績は、以下のとおりである。

- (1) 形態および体組成においては、1年後に両群とも体脂肪率の低下傾向を伴つて、体重および除脂肪体重が増加したが、初心者群ではその増加が有意であつた。前腕囲は両群ともに有意に増加したが、増加率は初心者群に大きかつた。
- (2) 1年後の漕力(0-6分)は、初心者群では $194 \pm 14$ wattから $212 \pm 15$ watt、経験者群では $205 \pm 15$ wattから $216 \pm 14$ wattと、それぞれ有意に増大した。この場合、初期漕力(0-1分)は初心者群で有意な増大を示し、中・後期漕力(1-6分)は両群とも有意な増大を示した。

- (3) 1年後のピーク酸素摂取量は、初心者群では $3.41 \pm 0.32$ l/minから $3.63 \pm 0.37$ l/minとなつて、有意に増大したが、経験者群では $3.63 \pm 0.47$ l/minから $3.69 \pm 0.46$ l/minとなつて、ほとんど変わらなかつた。
- (4) 1年後の最大無酸素パワーは、初心者群では $883 \pm 92$ wattから $988 \pm 85$ wattと有意に増大し、経験者群では $960 \pm 125$ wattから $994 \pm 121$ wattと増大したが、有意ではなかつた。
- (5) 初期漕力と最大無酸素パワーとの間には、初心者群では有意な關係がみられなかつたが、経験者群ではいずれのテストとも有意な相関關係が認められた。中・後期漕力とピーク酸素摂取量との間には、両群のいずれのテストでも有意な相関關係が認められた。
- (6) 初期漕力と最大無酸素パワーとの關係を変化率でみると、両群とも關係がみられなかつた。中・後期漕力とピーク酸素摂取量との關係を変化率でみると、両群とも有意な相関關係が認められた。これらのことから、トレーニングによる漕力の変動においては、中・後期漕力に有氣的能力の明らかな關与が示唆された。

## 文献

- 1) Brožec, J., Grande, F., Anderson, J. T. and Keys, A.: Densitometric analysis of body composition, Revision of some quantitative assumptions. Ann. N. Y. Acad. Sci., 110, 113-140, 1963.
- 2) Hagerman, F. C., Connors, M. C., Gault, J. A., Hagerman, G. R. and Polinski, W. J.: Energy expenditure during simulated rowing. J. Appl. Physiol., 45, 87-93, 1978.
- 3) Hagerman, F. C.: Applied physiology of rowing. Sports. Med., 1, 303-326, 1984.
- 4) 宮下充正:一般人・スポーツ選手のための体力診断システム, ソニー企業, 東京, 1986.
- 5) Nagamine, S. and Suzuki, S.: Anthropometry and body composition of Japanese youngmen and women. Human Biol., 36, 8-15, 1964.
- 6) 岡本進, 寄本明, 佐藤尚武, 宮本孝, 武部吉秀, 古川宗寿, 清水啓司, 玄田公子, 吉田瑞穂:ボート選手の競技力向上に關する生理

- 学的研究 (1)クルー別にみた体力特性, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No4, 59-72, 1984.
- 7) 岡本進, 寄本明, 玄田公子, 吉田瑞穂, 佐藤尚武, 宮本孝, 武部吉秀, 古川宗寿, 清水啓司, 宇部一: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (2)トレーニングに伴う1年間の体力推移, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No5, 94-102, 1985.
- 8) 岡本進, 寄本明, 佐藤尚武, 宮本孝, 武部吉秀, 清水啓司, 古川宗寿, 堀内哲, 玄田公子, 吉田瑞穂, 宇部一: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (3)東レエイトの体力について, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No6, 19-25, 1986.
- 9) 岡本進, 寄本明, 佐藤尚武, 宮本孝, 武部吉秀, 清水啓司, 古川宗寿, 堀内哲, 吉田瑞穂, 宇部一: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (4)日本の一流女子漕手の体力について, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No7, 14-22, 1987.
- 10) 佐藤尚武, 北村裕一, 八木佐知男, 辻延浩, 古川宗寿, 堀内哲, 岡本進, 武部吉秀: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (6)最大無酸素性パワーの競技水準別検討, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No8, 48-54, 1988.
- 11) 佐藤尚武, 岡本進, 古川宗寿, 武部吉秀: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (7)ローイングテストの改善, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No9, 61-64, 1989.
- 12) 佐藤尚武, 岡本進, 宮本孝, 寄本明, 古田瑞穂, 玄田公子, 古川宗寿, 萬俊一, 武部吉秀: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (8)男子6分漕におけるローイングパワーの評価基準, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No9, 65-71, 1989.
- 13) 佐藤尚武, 岡本進, 古川宗寿, 宮本孝, 寄本明, 武部吉秀: ボート選手の競技力向上に関する生理学的研究 (10)模擬的漕運動による漕力と体力の評価, 滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要, No13・14, 164-177, 1996.
- 14) 佐藤良子, 石河利寛, 山川純: ボート選手の体力の推移について, 昭和37年度日本体育協会スポーツ科学研究報告集, 1-18, 1962.
- 15) Secher, N. H.: The physiology of rowing. J. Sports Sci., 1, 23-53, 1983.

## 低周波超音波法からみた骨質と身体活動水準との関係

### Relationship between Ultrasound Measurements of the Os Calcis and Lifetime Physical Activity

寄本 明

Akira Yorimoto

#### Abstract

The purpose of the present study was to examine the influence of lifetime physical activity exercise and physical fitness level on bone structure and density by using ultrasound bone densitometry. The subjects were 415 women aged 35-59 years (mean  $\pm$  SD; 46.4  $\pm$  7.4). We measured the stiffness index (ST), speed of sound (SOS), and broadband ultrasound attenuation (BUA) by ultrasonometer. Closed eye foot balance, grip strength, and jumping reaction time were measured.

The stiffness index, SOS, and BUA decreased with age. They were found to be significantly lower in postmenopausal group than in premenopausal group. The stiffness index, SOS, and BUA were significantly higher in the exercise experienced group than in the exercise non-experienced group, but this difference was not found between the exercise group and the non-exercise group. Correlationship between the stiffness index and grip strength, closed eye foot balance, grip strength and jumping reaction time can be found.

In conclusion, these results suggest that the bone mass, structure, and density decrease with ageing and after menopause. However, the habit of exercise can improve osteoporosis.

#### 1 緒言

骨粗鬆症とは骨量または骨強度の低下により骨折を生じやすくなった状態と定義される。この骨粗鬆症による腰椎や大腿骨の骨折は寝たきりになる原因に結びつき高齢者の生活の質(QOL)に大きな影響を与える。ヒトの骨量は成長とともに増加し、成人以降に最大骨量に達し、それをし

ばらく維持した後、加齢とともに減少する。この加齢による骨量減少を老人性骨粗鬆症という。女性は男性に比べ最大骨量が小さくかつ閉経による急速なエストロゲン不足からくる急激な骨吸収の増加、加齢に伴う骨リモデリングの際の uncoupling の出現などが相俟ってさらに骨量が減少し、骨強度は低下する。この閉経後の急速な

骨量減少を閉経後骨粗鬆症という。老人性骨粗鬆症では骨折閾値以下に著しく低下した骨量は骨折閾値以上に改善することは薬剤を用いても難しい現状にあり<sup>14)</sup>、閉経後骨粗鬆症では閉経直後の急激な骨量減少がいったん起こると増加させるのは困難である<sup>11)</sup>。若い年代からの骨量減少の予防が両者に共通して必要であると考えられる。この骨量減少に対して、運動が効果的であることはよく知られている。

一方、骨粗鬆症の診断には骨量を評価することが必要であり、MD (microdensitometer)法、SPA(single photon absorptiometry)法、DPA (dual photon absorptiometry)法、QTC (quantitative computed tomography)法、DXA (dual energy X-ray absorptiometry)法などX線やγ線を使用する定量的評価法と超音波を利用した超音波骨密度測定法がある。この超音波法は他の骨量定量法と異なり、X線やγ線による被ばくがみられないことや骨質を評価できることが特徴であり、骨粗鬆症のスクリーニング検査として適している<sup>5)</sup>。

そこで、この非侵襲的に骨塩量や骨質が評価できる低周波超音波法を用いて骨粗鬆症スクリーニングを行い、生活習慣とくに運動習慣や運動歴との関係さらに体力水準との関係について検

討し、骨粗鬆症予防のための運動について考察を加えた。

## 2 方法

### 2.1 被検者

被験者は平成6および7年に滋賀県A町において骨粗鬆症検診を受診した35~59歳(46.4±7.4歳)の女性415名である。このうち閉経前の者は281名(43.0±5.9歳)、閉経後の者は134名(53.5±4.5歳)であった。

### 2.2 測定項目とその方法

骨検診は低周波超音波測定装置(Lunar社、Achilles)を用いて右足踵骨の超音波パラメーター(ST: stiffness)、超音波伝播速度(SOS: speed of sound)、広帯域超音波減衰計数(BUA: broadband ultrasound attenuation)を測定した。SOSは透過した超音波の伝播速度で、密度の高い物質ほど超音波は速く伝播する。BUAは広帯域超音波減衰計数で、骨密度および海綿骨の骨梁分布や弾性などに影響される。STはSOS、BUA値から求められる指標で、若年健常者の値に対する%で示され腰椎骨塩量との相関が高い。

問診は生理の状態、疾患・既往歴、仕事の内容、食生活の状況、運動習慣について行ったが、本論文では主として運動習慣について解析する。

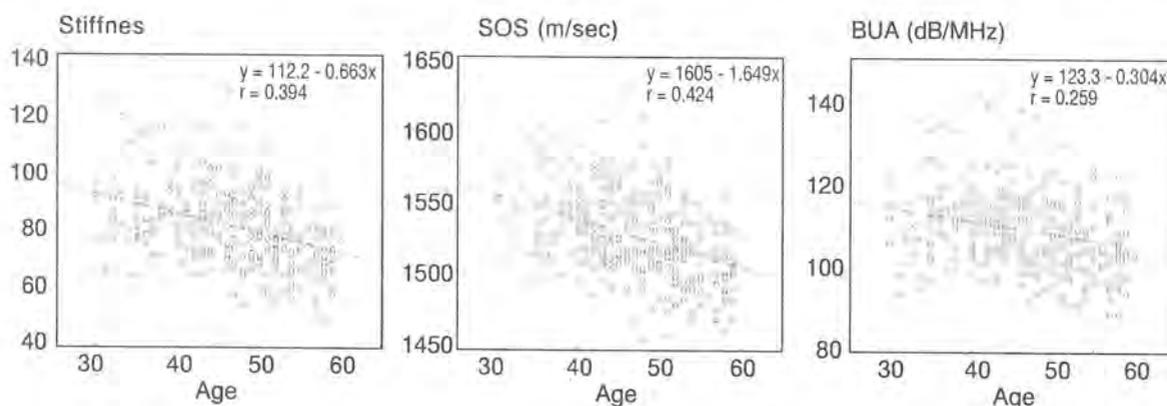


Fig. 1 Relationships between age and stiffness(ST), and speed of sound(SOS), and broadband ultrasound attenuation (BUA)

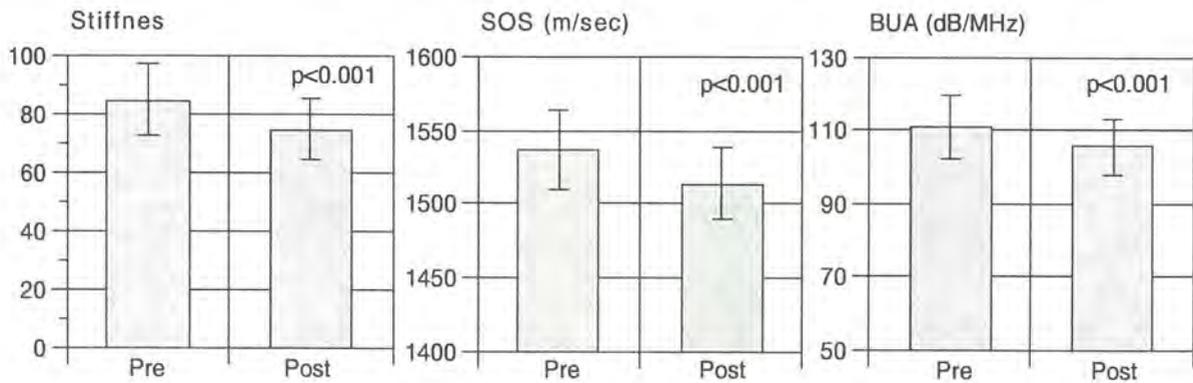


Fig. 2 A comparison of premenopausal group and postmenopausal group for stiffness, SOS, and BUA

体力測定は平成7年度受診者211名について、握力、閉眼片足立ち、光刺激に対する全身反応時間について測定した。

### 3 結果

年齢と ST、SOS および BUA の関係を図1に示した。ST、SOS および BUA は加齢に伴い低下を示した。年間の低下量は ST で 0.66%、SOS で 1.6m/sec、BUA で 0.3dB/MHz であり、いずれも 0.1%水準で有意な負の直線関係であった。

閉経前後におけるこれらの比較を示したものが図2である。閉経後群の ST は 74.7%で閉経前群の 84.6%に比べ低値を示し、その差は有意であった ( $p < 0.001$ )。同様に SOS では閉経前群が 1536m/s で閉経後群が 1514m/sec、BUA では閉経

前群が 110.9dB/MHz で閉経後群が 105.6dB/MHz といずれも閉経後群で有意に低値を示した。

現在の日常生活の中での運動実施の有無および運動実施者についてはその内容、運動頻度、運動時間を問診した。日常生活の中で運動を実施している運動実施群と実施していない非実施群の ST、SOS、BUA を図3に示した。運動実施群と非実施群の ST、SOS および BUA 値にはいずれも差は認められなかった。また、運動実施者の運動内容、運動頻度、運動時間についても ST、SOS および BUA 値に差は見られなかった。

過去の運動経験と ST、SOS および BUA について図4に示した。過去に運動経験のある運動経験群の各値が 82.8%、1531.8m/sec、110.2dB/MHz

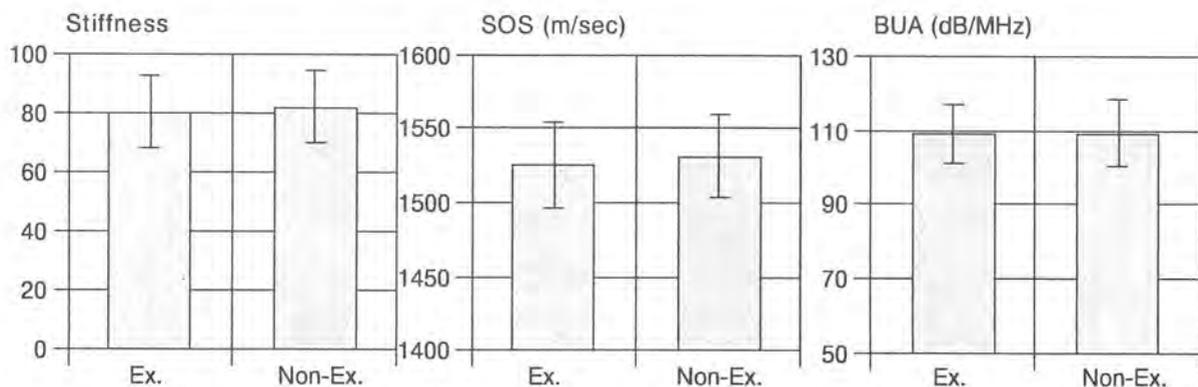


Fig. 3 A comparison of exercise group and non-exercise group for stiffness, SOS, and BUA

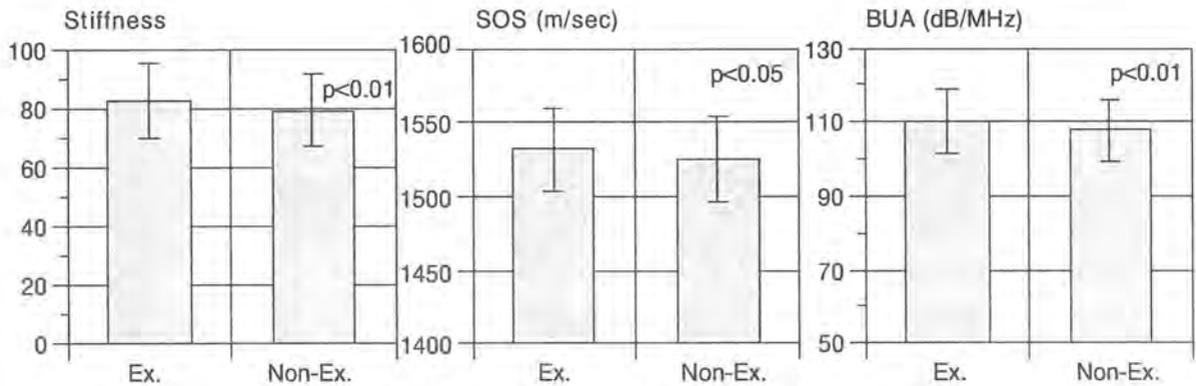


Fig. 4 A comparison of exercise experienced group and exercise non-experienced group for stiffness, SOS, and BUA

であるのに対し、運動経験のない運動未経験群のそれは 79.4%、1525.3m/sec、107.8dB/MHz といずれも低値を示し、その差は有意であった。

図5にはSTと体力測定値との関係を示した。閉眼片足立ちは最低値の1秒から最高値の167秒とそのばらつきは大きい、STとの間には1%水準で有意な正の相関関係が認められた。握力は左右の平均値を各被験者の値とし、STとの間には1%水準で有意な正の相関関係が認められた。光刺激に対する全身反応時間とSTとの間については1%水準で有意な負の相関関係が認められた。

#### 4 考察

骨の強度は硬度、弾性、骨梁の三次元分布によって規定される。骨粗鬆症により生ずる骨折にはこの三因子のうち、硬度つまり骨塩量の低下がもっとも大きな因子と考えられる。しかし、骨塩量のみで骨折の危険性を予知することは十分でなく、骨質も考慮すべきだといわれている。骨質は骨梁の三次元分布により決定されるので、これを非侵襲的に評価することが望まれている<sup>5)</sup>。現在、骨塩量および骨質を評価する方法として、X線やγ線を使用する方法と低周波超音波を利用する方法がある。この超音波法は他の骨量定量

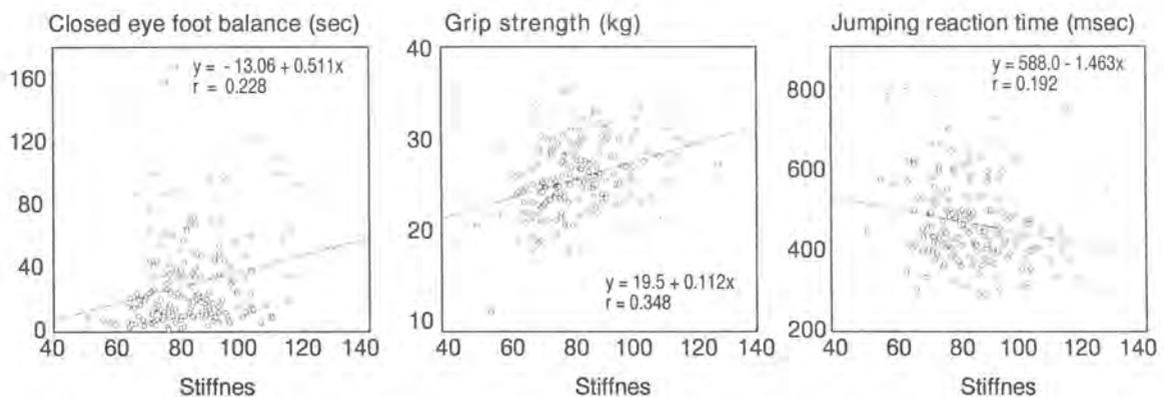


Fig. 5 Relationships between stiffness and closed eye foot balance, and grip strength, and jumping reaction time

法と異なり、X線などによる被ばくのリスクが伴わないことと多数例を対象とする検診に適しているという特徴を持つ。一方、厚生省の評価基準の指針においても超音波法の有用性が示されている。これらのことより今回 Lunar 社の低周波超音波測定装置 Achilles による超音波法を用いた。

ヒトの骨塩量は骨格の成長が完了する思春期以後も増加し、個人差はあるものの女性では 30 歳代後半から 40 歳代前半で、男性では 20 歳代から 30 歳代に骨量が最大となり、以後減少している。この骨塩量の推移から骨の老化は壮年期からすではじまっている<sup>14)</sup>と指摘されている。本研究の 35 歳から 59 歳の被験者においても 1 年間に ST で 0.66%、SOS で 1.6m/sec、BUA で 0.3dB/MHz の低下を示した。ST 値は大腿や腰椎の骨密度と相関があり、超音波伝播速度である SOS は密度の高い物質ほど超音波は速く伝播するという性質からこの値は骨塩量との相関が高く、BUA は骨密度のみならず海綿骨の骨梁分布や弾性などとも関係が深い。すなわち、加齢に伴い骨量および骨質のいずれにおいても退行現象が認められた。

閉経後の女性の骨量減少の割合に関しては多くの報告があり、閉経直後とくに 1～3 年以内の減少率は大きく年間 5～10% 減少すると言われている<sup>11)</sup>。閉経後群の ST は 74.7% で閉経前群の 84.6% に比べ有意に低値を示し、同様に SOS、BUA でも閉経後群が閉経前群より有意に低値であった。閉経後のエストロゲン分泌減少による骨量変化は海綿質骨から起こることが知られている。この超音波法での測定部位である踵骨は 90% が海綿質骨からできており、この変化を反映しやすい<sup>6)</sup>。このことは明らかに閉経後のエストロゲン不足からくる骨吸収の増加により骨量の低下および骨質の変化を示唆している。

運動が骨代謝に与える影響は筋肉量の増加と

ともに骨髄内の血流が増加して骨の代謝回転が亢進し、骨芽細胞が活性化さら、骨形成が生じるといわれている<sup>13)</sup>。過去に運動経験のある者はない者に比べ、ST、SOS および BUA で有意に高い値を示していた。このことは成長期に最大骨量をもつ必要があることを示唆している。高齢者の運動においては、ゲートボールを実施している 60～70 歳代の男性は非実施者に比べ 20～30% 橈骨骨塩量が高く、経時的な変化においても毎日練習している群は骨塩量が増加傾向にあり、練習をよく休む群は低下した<sup>2)</sup>と述べている。運動は最大骨量をもつだけでなく、その後の骨量にも影響を与えている。本研究では現在の日常生活の中での運動実施の有無および運動実施者についてはその内容、運動頻度、運動時間を問診したが、運動実施群と非実施群の ST、SOS および BUA 値にはいずれも差は認められず、運動実施者の運動内容、運動頻度、運動時間についてもそれぞれの値に差は見られなかった。これは運動の種類、運動の強度、頻度、持続期間が多様であり、その影響を受けたものと思われる。

閉眼片足立ちおよび握力と ST の間には 0.1% 水準で有意な正の相関関係が認められ、全身反応時間と ST の間には 0.1% 水準で有意な負の相関関係が認められた。相関係数では、握力の 0.348 がもっとも高く、次いで閉眼片足立ちの 0.228、全身反応時間の 0.192 であった。握力と腰椎骨塩量の関係については東野ら<sup>4)</sup>は高い相関関係を認めており、さらに握力が体幹筋力や下肢筋力との高い相関関係から全身の筋力の指標となるとしている。他方、運動量が急に低下したときには廃用性筋萎縮による筋肉量の減少とともに骨吸収が生じ、骨量が減少する<sup>13)</sup>。すなわち、骨粗鬆症における骨量減少は筋力低下で推測でき、両者の関係は密接であることが推察される。また、Reid<sup>12)</sup>によれば高齢者の運動は筋力や平衡性を改善し、骨量減少を予防するとしている。

骨粗鬆症予防のための運動は年齢によってその内容を考慮する必要があると考えられる。無酸素運動であるウェイトリフティングを行っている者は、有酸素運動である長距離走者より骨密度が高いことから、成人では最大骨量を高めるため、無酸素性の要素の強い運動が有酸素運動より効果的であるといわれている<sup>9)</sup>。これは運動刺激に対する骨の反応は加えられた力学的負荷量を反映しているためであろう。しかし、中高年者にとっては骨への圧力を重視したウェイトトレーニングを主運動種目とする運動プログラムは負荷が強すぎ、しかも運動が単調であるため運動実践の継続性を考慮すればさけるべきである<sup>10)</sup>とされている。特に老年期では強い運動負荷による脊柱圧迫骨折や転倒の危険性があり<sup>13)</sup>、注意が必要である。これらのことより、中高年者における骨粗鬆症を予防のための運動はウォーキングのような極端に大きな体重負荷がなく、適度に呼吸循環系を刺激する運動が骨量の維持に適していると考える。Ebrahim ら<sup>1)</sup>や Jones ら<sup>7)</sup>は高齢者においてウォーキングなどの運動は骨量減少の予防効果があると報告している。さらにウォーキングにおいては多くの生活習慣病の予防・改善効果が認められており<sup>15)</sup>、健康維持のための運動として勧められる。さらに、日常立位姿勢をとることが多い者は歩行運動だけでなくストレッチやウェイトリフティングなどを追加したほうがよいという指摘もある<sup>8)</sup>。また、柔軟性や平衡性の低下による転倒が骨折を招く危険性が高く、ストレッチなどの柔軟運動もウォーキングと併せて重要であると考えられる。

## 5 要約

超音波法による骨測定は、X線やγ線による方法と異なり被ばくすることなく、非侵襲的に骨塩量や骨質が評価できる。この波超音波法を用いて35~59歳の女性415名を対象に骨粗鬆症スク

リーニングを行い、生活習慣とくに運動習慣や運動歴との関係、さらに体力水準との関係について検討した。得られた結果を要約すると以下のとおりである。

- (1) 1年間にSTでは0.66%、SOSでは1.6m/sec、BUAでは0.3dB/MHzの低下を示し、加齢に伴い骨量および骨質のいずれにおいても退行現象が認められた。
- (2) 閉経後群のST、SOSおよびBUA値は閉経前群のそれらの値に比べて有意に低かった。このことは閉経後のエストロゲン不足からくる骨吸収の増加により骨量の低下および骨質の変化を示唆している。
- (3) 現在の日常生活での運動実施群と非実施群のST、SOSおよびBUA値はいずれも両者の間に差は認められなかった。
- (4) 過去に運動経験のある運動経験群のST、SOSおよびBUA値は運動経験のない運動未経験群のそれに比べいずれも高値を示し、その差は有意であった。
- (5) 閉眼片足立ちおよび握力とSTの間は0.1%水準で有意な正の相関関係が認められ、全身反応時間とSTの間には0.1%水準で有意な負の相関関係が認められた。

## 文 献

- 1) Ebrahim, S., Thompson, P.W., Baskaran, V., Evans, K.; Randomized placebo-controlled trial of brisk walking in the prevention of postmenopausal osteoporosis, *Age Ageing*, 26, 253-260 (1997).
- 2) Hayashi, Y.; Osteoporosis in the elderly, *The Olympic Book of Sports Medicine* (ed. by Dirix, A. et al.), Blackwell, Oxford, 355-359 (1988).
- 3) 林泰史; 骨粗鬆症と運動, *体力科学*, 43, 195-199 (1994).

- 4) 東野十三雄, 山崎節正, 澤井一彦, 林一成, 小林章雄, 渡辺丈真, 中田昌敏, 山本正都, 丹羽滋郎; 中高年女性における骨塩量と筋力との関係について, 臨床スポーツ医学, 8(8), 875-881 (1991).
- 5) 福永仁夫, 武田直人; 骨粗鬆症と超音波診断, 医学のあゆみ, 165(9), 625-628 (1993).
- 6) 伊東一郎; 高齢者の生活の質(QOL)と骨粗鬆症, 日本運動生理学雑誌, 4(2), 157-160 (1997).
- 7) Jones, P.R.M., Hardman, A.E., Hudson, A., and Norgan, N.G.; Influence of brisk walking on the broadband ultrasonic attenuation of the calcaneus in previously sedentary women aged 30-61 years, *Calcif. Tissue Int.*, 49, 112-115 (1991).
- 8) 町田晃, 井上哲朗; 高齢者の骨組織に対する運動の影響, *J. J. Sports Sci.*, 10(11), 734-739 (1991).
- 9) 町田晃, 串田一博, 井上哲朗; 運動療法による骨粗鬆症の治療, 医学のあゆみ, 165(9), 641-644 (1993).
- 10) 宮下充正; 女性のための骨粗鬆症予防のための運動プログラム, *J. J. Sports Sci.*, 12(12), 805-810 (1993).
- 11) 水口弘司, 五来逸雄; 閉経後骨粗鬆症—その定義と概念—, 医学のあゆみ, 165(9), 504-507 (1993).
- 12) Reid, I.R.; Therapy of osteoporosis: calcium, vitamin D, and exercise, *Am. J. Med. Sci.* 312, 278-286 (1996).
- 13) 佐藤哲也, 小池達也; 運動と骨粗鬆症, 医学のあゆみ, 165(9), 581-584 (1993).
- 14) 山崎薫, 井上哲朗; 老人性骨粗鬆症—その定義と概念—, 医学のあゆみ, 165(9), 508-511 (1993).
- 15) 寄本明; ウォーキング運動が中高年女性の生活習慣病危険因子に及ぼす影響, 滋賀県立大学国際教育センター研究紀要, 2, 153-161(1997).

## 「国際教育センター内活動」の紹介

## 国際教育センター主催のセミナー

### 1998年度 第1回セミナー

- 題 目: "Take the Risk"  
講 師: Wendy JACKSON  
(NHK ラジオ英会話講師 【基礎英語3】)  
日 時: 1998年 6月26日 (金)  
13:00~14:30  
場 所: 滋賀県立大学 A3-301 講義室

#### 講師紹介:

ウェンディ・ジャクソンさんはアメリカ、ミシガン州出身です。大学では国際関係を学ぶ一方、1996年に滋賀県での海外研修に参加されました。1997年に、この海外研修プログラムのスーパーバイザー（アドバイザー、通訳）として再び来日されました。その後一時帰国されましたが、今年の4月に三度目の来日をされ、NHKラジオ英会話講師として基礎英語3のストーリーの中では白崎玲の声を担当しておられます。セミナーでは、まず "Take the Risk" という題でお話をしていただき、その後簡単な質疑応答の時間を持ちました。お話の内容は、"risk-taking" がウェンディさんにとってどのような役割を果たしたかということに関してで、「危険を冒して」チャレンジするウェンディさんの体験をお話して頂きました。



#### 概 要:

"Not only did 'risk-taking' bring me to Japan in the first place, but it helped me enjoy my experience to the fullest, allowed me to quickly advance in Japanese conversation, and finally, was the key element in attaining my job at NHK. I believe that the element of 'risk-taking' plays an important role in improving English conversation skills among Japanese students. After all, it is a risk to just **try** to communicate in a foreign language — especially at first."



## 国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

(前号以降)

### 【著書】

藤平シルヴィ、ラマール・ジャン、宮崎ゆり、長島律子、横山 理：『ミニ・ドゥ・コンセール』、朝日出版社、1998年4月1日、85

### 【発表論文】

栗山 稔：「ジョン・キーツと政治＝宗教的想像力」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、1-19

大谷泰照：「日本人と異文化理解」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、21-37

大谷泰照：「キリスト教主義学校と英語」、『桃山学院年史紀要』、桃山学院年史委員会、第17号、1998年2月、3-20

大谷泰照：「TEFLの限界」、『現代英語教育』、研究社出版、第35巻第3号、1998年6月、11-3

Kiyohiko Okumura : Some Effects of Summary Writing on Reading and Writing, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 2, December 1997, 39-55

Kiyohiko Okumura : Summary Writing in the Listening Classroom, 『ライティング指導研究会紀要』、大学英語教育学会 (JACET) 関西支部ライティング指導研究会、第3号、1998年、1-10

Hoyu Ishida : The Buddha Nature in the *Mahāparinirvāṇaūtra*, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 2, December 1997, 57-66

Walter Klinger : Hollywood Movies, America Stereotyped, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 2, December 1997, 67-82

深見 茂：「短篇『マッテオ』より戯曲『ユーディット』ヘーヘッベルの転機 (1840年頃) について」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、83-94

Ritsuko Nagashima : La Renaissance selon Bernanos, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 2, December 1996, 95-110

- 呉 凌非：「深層格について」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、111-23
- 高橋信行：「ナノレベルの周期構造を持つ誘電体格子表面のSNOM像の電磁界解析」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、125-33
- 亀田彰喜・吉田勝廣：「経営情報システムにおける意思決定支援システム」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、135-42
- 岡本 進：「山岳選手のリュックサック装備による漸増運動負荷テストの検討」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、143-52
- 岡本 進・宮本 孝・佐藤尚武：「山岳競技に対する科学的サポート(3)－少年山岳競技選手の持久性トレーニングに伴う有酸素性作業能力の変化」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、No. 17・18、1998年
- 岡本 進・宮本 孝・佐藤尚武：「山岳競技に対する科学的サポート(4)－少年男子山岳選手における縦走中の心拍数による運動強度の推定」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、No. 17・18、1998年
- 寄本明：「ウォーキング運動が中高年女性の生活習慣病危険因子に及ぼす影響」、滋賀県立大学国際教育センター、第2号、1997年12月、153-61
- T. Yoshida, K. Nagashima, S. Nakai, A. Yorimoto, T. Kawabata, and T. Morimoto: Nonshivering Thermoregulatory Responses in Trained Athletes: Effects of Physical Fitness and Body Fat, *Jpn. J. Physiol.*, Vol. 48, No. 2, 1998, 143-8

## 【その他】

(印刷物<翻訳、辞典、一般雑誌など>、口頭発表、講演、社会活動、地域社会への参加など)

- 大谷泰照：シンポジウム「21世紀の外国語教育への提言」、大学英語教育学会関西支部公開シンポジウム、同志社女子大学、1997年11月8日
- 大谷泰照：講演「異言語教育と異文化理解」、大学英語教育学会関西支部談話会、大谷大学、1997年12月6日
- 大谷泰照：時評「この人に賞をあげたい」、『現代英語教育』、研究社出版、第34巻第11号、1998年2月、20-1
- 大谷泰照：報告「新入学生は、外国語についてどう考えているか」、『はっさか』、滋賀県立大学後援会、第6号、1998年2月、3
- 大谷泰照：講演「わが国の英語教育に未来はあるか」、大学英語教育学会春期英語教育セミナー、上

## 国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

智大学、1998年3月26日

大谷泰照：英語教育時評「21世紀の尺度」「異文化理解の姿勢」「ウチの目とソトの目」「学生の言語意識」「ココロの国際化」「21世紀の学校教育」「教育科学技術省」の発想」「英語教師のモラル」、『英語教育』、大修館書店、第47巻第1,2,3,4,5,6,8,9号、1998年4,5,6,7,8,9,10,11月、37

大谷泰照：講演「20世紀とはどんな時代であったのか」、東京女子大学同窓会愛知支部総会、ホテルプラセオ名古屋、1998年6月20日

大谷泰照：シンポジウム「21世紀の外国語教育を考える」、大学英語教育学会関西支部英語教育セミナー、大谷大学、1998年7月31日

大谷泰照：講演「英語教育で考えたいこと」、滋賀県英語教育改善講座、滋賀県総合教育センター、1998年8月6日

大谷泰照：論説「クラス編成の弾力的運用はできるか」、『朝日新聞』、1998年8月7日夕刊、7

大谷泰照：講演「日本人の国際理解」、滋賀県小・中学校教頭会平成10年度夏季宿泊研修会、大津市勤労福祉センター、1998年8月11日

大谷泰照：シンポジウム「大学入試における英語の是非」、全国英語教育学会全国大会、松山大学、1998年8月20日

大谷泰照：対談「中央教育審議会答申をどうみるか」、NHKラジオ「ネットワークにっぽん」、木津川計氏との対談、1998年8月26日午後2時30分～3時

大谷泰照：講演「英語帝国主義」と日本の異言語教育」、名古屋大学大学院国際開発研究科ワークショップ、名古屋大学、1998年8月27日

大谷泰照：講演「21世紀と日本人」、宇陀郡英語教育研究会、曾爾村立曾爾中学校、1998年9月8日

大谷泰照：講演「20世紀の教訓」、大学英語教育学会全国大会、就実女子大学、1998年9月13日

大谷泰照：シンポジウム「国際的にみた言語政策の動向」、言語政策学会設立準備会、奈良大学、1998年10月18日

奥村清彦：発表「聴く力と書く力を同時に伸ばす授業の試み」、大学英語教育学会全国大会、就実女子大学、1998年9月12日

石田法雄：発表「Nietzsche: Within and Beyond Saṃsāra」、IASBS European District Conference、オックスフォード大学、1998年8月8日

石田法雄：滋賀県TOEIC推進協議会委員

石田法雄：財団法人滋賀県国際友好親善協会評議員

石田法雄：財団法人国際仏教文化協会 (The International Association of Buddhist Culture) 評議員

小栗裕子：発表「リスニングの評定別にみた動機づけの違い」、関西英語教育学会第2回研究大会、京都府立大学、1998年6月7日

- 深見 茂：講演「ドイツ短篇小説理論と鴎外の『雁』」、平成10年度滋賀県立大学公開講座、滋賀県立大学、1998年5月23日
- 深見 茂：講演「ゲーテの『ノヴェレ』（1827）ードイツ短篇小説の原像と命運」、社団法人日本ゲーテ協会主催「ゲーテ生誕の夕べー第249回誕生日記念ー講演と音楽」、大阪倶楽部、1998年8月28日
- 深見 茂：財団法人祇園祭山鉾連合会理事長
- 呉 凌非：講演「中国語及び中国事情」、第19回近畿青年洋上大学府県別事前研修会、長浜ドーム宿泊研修館、1998年6月14日
- 呉 凌非：発表「大学生の中国語簡体字の認識度」、計量国語学会、国立国語研究所、1998年9月26日
- 高橋信行：Sublocal committee member、The 5th International Conference on Near Field Optics and Related Techniques (NFO-5)、1998年1月23日就任
- 高橋信行：滋賀県平成10年度教育メディア利用促進委員会委員、1998年4月9日就任
- 高橋信行：シンポジウム「いつでもどこでもだれでもが学習できる環境とは」、滋賀県教育委員会「マルチメディア研修会」、てんびんの里学習センター、1998年6月26日
- 高橋信行：滋賀県情報化推進懇話会委員、1998年9月21日就任
- 高橋信行：発表「The Electromagnetic Field Analysis of the Fiber Probe in the Collection Mode NSOM」、The 5th International Conference on Near Field Optics and Related Techniques (NFO-5)、Shirahama、1998年12月7日
- 亀田彰喜：講演「マルチメディアと情報ネットワークーこれからの情報流通ー」、滋賀県教育委員会、滋賀職業能力開発短期大学校、1998年7月29日
- 亀田彰喜：社会教育施設情報化・活性化推進事業実行委員会副委員長
- 岡本 進：講演「健康・体力づくり」、滋賀県障害者スポーツ指導者養成講習会、県立スポーツ会館、1998年1月24日
- 岡本 進：講演「体力テストの方法と活用」、滋賀県大津市運動普及リーダー研修会、皇子が丘公園体育館、1998年6月22日
- 岡本 進：講演「運動生理学」、滋賀県大津市健康推進員養成講座、大津市健康管理課、1998年9月14日
- 岡本秀己・灘本知憲・寄本 明・杉本悦郎：発表「トウガラシ摂取がヒト運動中の心拍に与える影響」、第52回日本栄養・食糧学会大会、沖縄コンベンションセンター、1998年4月17日
- 芳田哲也・中井誠一・寄本 明・森本武利：発表「持久的運動能力を低下させる脱水量閾値の検討」、第53回日本体力医学会大会、パシフィコ横浜会議センター、1998年9月18日

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

寄本 明：「20分以上の歩きを週3回行うだけでコレステロール値が確実に下がることを証明」、ゆほびか、1998年7月号、72-3

寄本 明・岡本秀巳：「薬味のトウガラシをとってから歩くと腹部肥満の解消に驚くほど効果が大」、ゆほびか、1998年8月号、104-5

寄本 明：講演「呼吸循環機能測定の実際・データの活用法」、平成9年度専門測定診断講座—呼吸循環系—、県立スポーツ会館、1997年6月1日

寄本 明：講演「運動生理とその実際」、健康推進員養成講座、安土町社会福祉協議会会議室、1997年8月20日

寄本 明：講演「運動生理とその実際」、能登川町健康づくり推進員養成講座、能登川町保健センター、1997年8月22日

寄本 明：講演「健康づくりと運動」、健康推進員養成講座、甲賀町共同福祉センター、1997年9月18日

寄本 明：講演「運動生理学」、健康推進員養成講座、サントピア水口、1997年11月6日

寄本 明：講演「健康と運動」、八日市市健康推進員養成講座、八日市市保健センター、1997年12月8日

寄本 明：講演・実技「ウォーキング講座」、八日市市ウォーキング講座、八日市市保健センター、1998年3月2日

寄本 明：講演「健康づくりとしての運動」、京都府京北地方振興局管内健康セミナー、京北総合庁舎会議室、1998年3月18日

## 国際教育センターに対する研究費交付一覧

### 滋賀県立大学特別研究費交付一覧

- 平成10年度 (3件、合計3,796千円)

区分	氏名	研究課題	金額 (千円)
特別	石田法雄	歴史学観点と実践者からみた禅の系譜	800
特別	小栗裕子	効果的なリスニング習得法	500
重点	高橋信行	超音波を用いた流砂量連続計測システムの高精度化	2,496

### 滋賀県立大学在外研修費交付一覧

- 平成10年度

種類	氏名	研修先	研修期間	研修内容	支給額 (円)
短期	長島律子	フランス・パリ	平成10年7月15日 ～7月27日	国立図書館で今世紀初頭の歴史教科書を閲覧し、ベルナノスが用いた可能性の高いカトリック系教育機関の教科書と一般教育機関のものを資料としてコピーと写真で持ち帰った。さらに、パリ第十大学に於いてベルナノス関連の最近の論文を閲覧した。	413,085
短期	石田法雄	イギリス・オックスフォード大学、ロンドン大学	平成10年8月1日 ～8月14日	ロンドン大学に於いて、発表準備のための資料収集を行い、オックスフォード大学で開催された国際真宗学会(IASBS)に出席して論文発表を行った。	406,937
短期	寄本 明	イギリス・オックスフォード大学	平成10年9月8日 ～9月21日	生理学研究所のピーター・ロビンズ博士の Human Respiratory and Exercise Physiology Research Group で人体の安静時および運動時の呼吸・循環を中心とした生理学的研究およびこのグループが行っている新しい分析法を研修した。	428,575

文部省科学研究費補助金交付一覧

- 平成10年度 (2件、合計2,100千円)

区分	氏名	研究課題	金額 (千円)
特定 A	高橋信行	走査型近接場光学顕微鏡の金属コーティングプローブの電磁界解析	1,500
基盤 C	寄本 明	長期間の習慣的な運動が中高年者の成人病危険因子および体温調節能に及ぼす影響	600

## 平成 9 年度在外研修報告

大谷泰照

研修課題：連合王国の National Curriculum における異言語教育の動向

研修目的：上記課題に関する調査

研修地：連合王国（ロンドン、ヨーク、エディンバラ）

研修期間：平成 9 年 7 月 21 日～8 月 5 日（16 日間）

研修内容：

1992 年発足の National Curriculum による言語教育に関する調査・研究と、その企画・立案担当者との意見交換を主たる目的とした。

そのために、教育雇用省、同省言語教育研究所 (CILT)、National Curriculum 本部（以上ロンドン、なお National Curriculum 本部は、前年、ヨークからロンドンに移転）、ヨーク大学、エディンバラ大学を研修場所とした。

今回の現地調査の結果、明確に指摘できることは、1) 英国では、従来の伝統的な地方分権の教育体制から、中央集権的な全国統一教育体制への大転換が、一般の予想をはるかにこえて着実に進行しているといえること、2) 従来、外国語教育に熱意を示すことの少なかった英国が、初等・中等教育段階で外国語の必修化にふみきったこと自体が一種の歴史的イベントとさえいえるが、今日ではさらにすすんで、第二外国語の必修化の動きさえ強まっていると考えられることである。

これは、教育の画一化から多様化へ、そして外国語教育の削減・縮小へとすすむわが国の動向とはきわめて対照的な動きであり、日本の外国語教育にとって、多くの示唆をあたえる注目すべき「実験」であると考えられる。



## 平成9年度在外研修報告

### 小栗裕子

研修課題：「言語習得と心理学との関係について」

研修地：University of Minnesota, Twin Cities Campus, U.S.A.

研修期間：平成9年7月2日～平成9年9月28日（89日間）

#### 研修内容：

平成9年7月2日より約3ヵ月間、米国ミネソタ州立ミネソタ大学に学んだ。この大学を研修先にした理由は、まず外国語教育と教育心理学の両方の分野で高い水準にあること、次に図書館が非常に充実していること（全米で蔵書数17位）、そして大学所在地の気候がこの時期比較的過ごし易いことである。ミネソタ大学は1851年に創立された総合大学で、ツインシティズ校はキャンパスがミネアポリスにあり、学生数約4万人を有する。ツインシティズ(Twin Cities)とは、ミネアポリス市(Minneapolis)とそれに隣接するセントポール市(Saint Paul)の愛称で、両市が良く似た街並なのでこのような呼び名が付いている。

この大学には「協同学習」(Cooperative Learning)の提唱者 Roger Johnson と David Johnson の兄弟が教鞭を執っており、同大学協同学習センター長も兼務している。「協同学習」とは、小グループ(2～6名)を活用した教育方法であり、ここでは、生徒達が一緒に取り組むことによって、自分の学習と互いの学習を最大に高めようとする学習法である。「協同学習」の利点は ①学習者中心の教育と学習ストラテジーの訓練を兼ねていること ②クラスでの積極的参加時間が増えること ③ゲームの要素を多く持っていることなどがあげられる。この学習法を外国語教育に生かせないかと考え、「協同学習」の基礎理論コースを受講した。

アメリカは一般的に競争社会だと言われるが、学校教育では協同学習法がかなり取り入れられており、特に小学校や大学で多く用いられている。筆者もこの基礎理論のクラスを協同学習法で学んだ。小グループなので英語を母語としない学生には大変だが、グループ内でそれぞれが独自の役割を与えられるために、その責任を果たそうと努力し、共通の目標に向かってグループ全体が達成感を味わうことができる。また、グループが「浮き沈みを共にする」ため、対人関係が積極的になり(英語が外国語の場合はつい消極的になりがちだが)、効果的にコミュニケーションをはかろうとするようになる。もっともこれが、留学生や学力の低い学生には圧力となることもあると思うのだが、そんな時には教師が各グループを注意し観察していて、援助の手を差し伸べてくれる。

「協同学習」を有効に実践しようとするれば、教師は専門的な知識や技術の獲得に多大な時間を要し、熟練するには何年もかかるかもしれない。しかし学習者の立場に立てば、グループの一員として各自が責任を持ちながらお互いに助け合い、一つの課題を完成するので、競争学習や個別学習と比較すると参加する喜びや学ぶ楽しみが増すように思われる。

ところで、ミネソタ大学は夏期になると、経験を積んだ現職の教師向けに多くの講座が開講され、夏休みを利用して全米から小・中・高校や大学の先生が一週間単位で色々な講座を受講している。例えば次のようなコースが提供されている。

"Best Practices in Assessment and Instruction for Educators"

"Serving the Diverse Academic and Social Needs of Students"

"Human Resource Development: Strategies and Tactics"

"Technology for Teaching and Learning"

参加者はこれらのコースを通して、日頃教室内で疑問に思っていることをお互いに話し合い、更に新しい知識を得て、9月の新学期に臨むのであろう。筆者もそんな経験をした一人である。

最後に、このような機会を与えて下さった滋賀県立大学の同僚の方々に、心より謝意を表わしたい。

## 平成10年度在外研修報告

### 長島律子

研修課題：Georges Bernanos の歴史観

研修地：フランス（パリ）、国立図書館

研修期間：1998年7月15日～27日（13日間）

#### 研修内容：

今回の研修は、上記論文の執筆に関わる資料の収集が目的であった。この論文は、ベルナノスの文学作品以外の作品群（いわゆる論戦文）の中から、作家独自の歴史観と歴史思想を読みとろうとするものである。

ベルナノスは、フランス革命から約百年を経た1888年に生まれた。熱心なカトリック信仰を持つ母と、王制派の父の元で育った彼は、38歳で遅い小説家デビューを果たす以前から、シャルル・モラスの率いる保守的な政治グループ、アクション・フランセーズに所属し機関誌に記事を執筆したり自らルアンで王党派の新聞の主幹を務めている。しかしその後、モラスとは一線を画し、カトリック教会と権力との癒着を糾弾し、理想のキリスト教共同体社会の実現を求めて、独自の立場から発言を続けることとなる。同時代の社会に対する彼の批評の中には、歴史的な事件、事象に関する言及が数多く見られるが、それらをつづり合わせて浮かび上がってくる歴史観を読みとろうと試みる。

作家の思想の独自性を論議するためには、現代の歴史観とはすでにかなり異なる当時の歴史書に当たるとともに、幼年期に作家が親しんだ読み物、とりわけ教科書をとって押さえる必要があり、それが今回研修の主な目的である。まず、今世紀初頭の多数の歴史教科書の中から、作家の時代の教科書を選び出さなければならない。これには、「歴史一般」だけのカタログから、題名と年代で初等、中等教育の教科書らしいものを選び出す。さらに、著者とその肩書き、出版社名から、公立学校で使用されたものか、カトリック系の学校で使用されたものかを判断する。

今回、このような作業を通じて、ベルナノスの通っていたカトリック系（A）、共和主義的思想に貫かれた公立系（B）の2系統の学校の教科書の非常に典型的な例を探し出し、複写の送付を受けた。

予想されたことながら、2系統の教科書の記述には、かなりの開きがある。とくに、「中世」の項目の記述に甚だしい差があって、興味深い。即ち、Aの系統では封建制度の弊害を認めつつも、農民の生活は、一般に言われるほどひどいものではなく、現在（20世紀初頭）と変わらないか、むしろよい場合もあった、としている。また、封建君制は、「名誉」の観念（これには、武勲のみならず、忠誠心、戦いにおける潔さ、敵の尊重が含まれる）や、女性に対する尊敬という数々の美德を生み出した点を付け加えている。これに対し、B系統では、封建制度化の農民がいかに領主の横暴に苦しめられたかが強調され、革命をその

圧政からの解放と位置づけ賞賛している。

国立図書館について：

この資料を収集した、フランス国立図書館は、17世紀に現在の場所に移転した王立図書館を前身とし、19世紀中葉にたてられた歴史的建物であるが、今年8月末でその役目を終え、今後はパリ東部の河岸に建築された新しい近代的な図書館（写真）にすべての業務が引き継がれる。この図書館は、あらゆる出版物を網羅的に所蔵しており、ここで見つからなければ、その存在自体が疑わしいほどなのであるが、そのため蔵書の数か莫大で、貴重な図書の保管場所が問題になっていた。新図書館は、広いスペースと、コンピューターを使用して書物を購読者に届ける設備が備わっているという。



長方形の敷地の四隅に、縦長の本を開いてたてたような塔がたっており4つの塔は、半地下の廊下で連結されている。



建物の内部から、中庭を隔てた二つの塔を望む。

## 平成10年度在外研修報告

石田法雄

研修課題：International Association of Shin Buddhist Studies European District Conference (国際真宗学会ヨーロッパ地区大会) にての論文発表と、資料収集

学会テーマ：Shin Buddhism and Western Mind

発表論文：Nietzsche and Samsāra: Suffering and Joy in the Eternal Recurrence

研修地：イギリス (オックスフォード、ロンドン)

オックスフォード大学 (Wadham College)、ロンドン大学

研修期間：1998年8月1日～14日 (14日間)

### 研修内容：

国際真宗学会ヨーロッパ地区大会が1998年8月5日より9日までイギリスのオックスフォード大学にて開催され参加した。その母体である国際真宗学会は日本の京都、北米のカリフォルニア大学バークレー校、ハワイ大学、カナダのカルガリー大学にて隔年に開催されている学会で、会員は現在300名を越えている。第1回大会は、1983年京都にて、当時東京大学花山真勝教授が会長を勤め開催された。その後、会長はハーバード大学 Masatoshi Nagatomi 教授に受け継がれ、現在は龍谷大学稲垣久雄教授がその任務に携わっている。昨年はカルガリー大学で第8回大会が行われ、来年はハワイ大学で第9回大会が開催される。

ヨーロッパ地区大会は、その合間の偶数年に開催される学会であり、ヨーロッパ地区大会に関しては、過去2度ウイーン大学で開催された大会 (1990年、1994年) に参加し、その学術雑誌 (The Pure Land, The Journal of the International Association of Shin Buddhist Studies) に論文をそれぞれ発表してきた。今回のヨーロッパ地区大会は、「Shin Buddhism and Western Mind」のテーマのもと、オックスフォード大学で開催された。

8月5日午後、オックスフォード大学の Wadham College で大会参加者の登録が始まり、その後宿泊先の大学寮を案内された。夕刻には参加者の集いがあり、再会の挨拶を交わしたり、新しく加わった会員などの自己紹介等で一時を過ごした。発表者は北米からが最も多く、他にイギリス、ドイツ、オーストラリア、ブラジル、ポーランド、ハワイ、日本より集っていた。6日は午前9時より大学内の会場にて開会式があり、その後直ちに発表が行われた。発表は8日まで行われ、午前中に2部門、午後2部門とあり、一人の持ち時間が約30分ということで、要約を発表する程度の時間が与えられていた。発表者の論文の原稿は前もって大会登録時に参加者全員に配布されていたので、原稿を事前に読むことが出来、発表後の質疑応答に時間がかけられた。私の発表は最終日8日の最後の部門に組まれていた。質疑応答から学ぶことが多く、後に発表論文に一部手を入れ直すことが出来、有意義な会合であった。最終日9日の午前中は、学会の総括と次回開催地等を検討する会議が開かれ、解散した。学会開催中の7日の午後、主催者の招待でスタッフォードにあるシェイクスピアの生家へのバス



オックスフォード大学にて  
宿泊先の寮より大会の会場に向かう途中



オックスフォード大学にて  
ブラジルからの発表者とともに

観光があった。

発表論文は *Nietzsche and Samsāra: Suffering and Joy in the Eternal Recurrence* と題して、ニーチェの永遠回帰 (eternal recurrence) の思想と仏教における輪廻 (saṃsāra) 観との接点を検証した。まず、ニーチェが理解するモラルと民衆 (herd) に対する考えを解析し、永遠回帰の思想に触れた。そこには一見、「存在」とは何の目的もなく苦を伴いながら繰り返すだけというペシミスティックなニーチェの世界観が見受けられる。これは、仏教の輪廻観に相通づるところがあるとよくいわれるが、ニーチェは当時ヨーロッパで紹介されていた上座部の仏教から一部影響を受けたとされている。本論文においては、ニーチェの一見ペシミスティックにみえる考えはどこからきたものか注目した。

ニーチェの生涯をみるに、決定的に悲劇的な結論に至らしめた二つの大きな出来事がみられる。一つは、ニーチェは幼少の頃より、常に病気と闘っていたことがあげられる。病の中、苦痛の中、様々な才能を発揮し業績を残してきた。ワーグナーとの親交を通しての音楽に対する傾倒も非凡なものがあったが、あと一つの悲劇は、二度にわたる求婚に断られたことがあげられる。特に、二度目のルー・ザロメに対する想いは計り知れないものであったであろう。ニーチェは病魔におそわれたり、時に人を愛し挫折を繰り返したにもかかわらず、その中で主要作品を次々と書き上げた。その結果の一部としてペシミスティックな、時にして病的な世界観をもちながらも、ニーチェはそれを乗り越えようとした。これは、超人 (overman) という概念にあらわれている。この超人は、先程あげた永遠回帰という目的もなく怪物のようにうごめいている存在にしながら、その中でそれを受けとめ、さらに受けとめるだけではなく、運命への愛 (love/joy of fate) を抱いていく世界を示唆していく。そこで、この永遠回帰している存在をそのまま肯定していこうとするニーチェの立場は実存主義的であることは言うまでもないが、大乘仏教が説く「蓮の華は泥沼にしか咲かない」という思想と通じるところがあり、「菩薩は苦に苛まれている衆生そのものの中にしかいない」とする菩薩観とごく自然に呼応していると論述した。

この論文を書き上げる為に、オックスフォード大学での発表前は、ロンドン大学で資料収集と発表に備えての最終準備に取り組み、発表後もロンドン大学に寄り、質問を受けた箇所における点に関して一部書き直しをした。

この発表論文は、今回の紀要に掲載されている。



スタッフォードにて  
シェークスピア生家の中庭より



リバプールにて  
Strawberry Field

## 平成9年度特別研究費研究報告

### 長期間の習慣的な運動が中高年者の成人病危険因子 および体温調節能に及ぼす影響

寄本 明

#### はじめに

現代の日本では高齢化が進む一方で、高血圧症、高脂血症、心疾患、糖尿病など成人病の有病者やその危険性のある者が増加しており、その原因には身体活動量の減少とエネルギー過剰摂取が一因であるといわれている。さらに、高齢人口の増加とともに骨粗しょう症の患者の増加も問題となってきている。他方、高齢化による体温調節能の低下は暑熱障害発生の増加など防衛体力の低下となって表れている。これらことは日常の健康的な生活を著しく障害することになる。その予防法は十分に確立されていないが、運動は有効な予防および治療法のひとつと考えられる。成人病予防に関する運動の効果は、運動の強度、時間、頻度といった条件によって異なることが知られており、安全性と有効性との両面からみて運動強度は重要なファクターである。さらに、運動は継続、習慣化することが効果の維持・継続に重要となる。

本研究では、長期間、習慣的に実施している中高年者の形態、血圧、血液諸成分、行動体力および体温調節能を同一地域に住む同年齢の非実施者と比較し、習慣的な運動が中高年者の成人病危険因子や体温調節能に及ぼす影響を検討した。

#### 研究方法

##### 1. 習慣的に運動を実施している中高年者と同一地域に住むの非実施者との比較

対象者は現在習慣的に運動をしている運動習慣群 75 名と運動を行っていない非運動群（対照群） 301 名である。両群の年齢および身体的特徴を表 1 に示した。年齢、身長、体重の平均値は両群に有意な差は認められない。運動習慣群の運動種目はウォーキング (n=34)、バレーボール (n=11)、ビーチバレーボール (n=9)、体操 (n=8)、テニス (n=4)、ダンス (n=4)、ジョギング (n=2)、その他 (n=3) である。その経験年数は  $5.7 \pm 6.3$  年であり、週に  $3.1 \pm 2.2$  日、1 回  $70 \pm 37$  分間実施している。

これらの被験者について形態、血圧、血液諸成分および体力の各測定を行った。形態は身長、体重の測定、皮下脂肪厚の測定から体脂肪量の推定を行った。血液諸成分は総コレステロール (TC)、高比重

表 1 被験者の身体特性と運動経験年数

	Age (years)	Height (cm)	Weight (kg)	Experience (years)
Exercise	$49.1 \pm 7.7$	$154.2 \pm 4.5$	$54.9 \pm 6.7$	$5.7 \pm 6.3$
Control	$49.5 \pm 8.4$	$153.7 \pm 5.3$	$54.9 \pm 7.0$	—

Exercise : Exercise group, Control : Control group

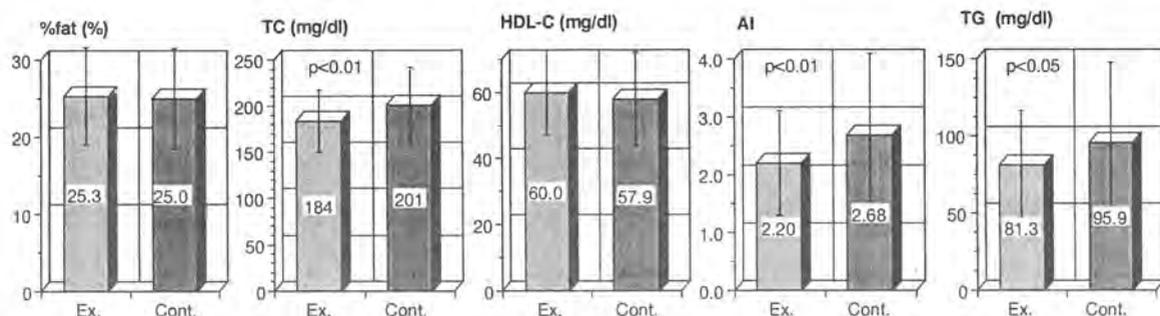


図1 運動習慣群と非運動群の%fat, TC, HDL-C, AI, TG の比較  
Ex. は運動習慣群、Cont.は非運動群（対照群）

リポ蛋白コレステロール（HDL-C）、中性脂肪（TG）を測定し、動脈硬化指数（AI）を求めた。体力測定は握力、光刺激による全身反応時間、立位体前屈、閉眼片足立ち、3分間の踏台昇降運動（台高35cm、昇降24回/分）による最大下作業時の心拍数を測定した。

## II. 運動習慣群と非運動群の体温調節能の比較

習慣的にウォーキングを行っている運動習慣群20名と非運動群16名を対象に夏季、炎天下で50%HR、30分間のウォーキングを行った。運動習慣群は年齢が $53.3 \pm 9.2$ 歳で、週 $3.7 \pm 2.1$ 日、1回 $34 \pm 12$ 分間のウォーキングを実施しており、非運動群は年齢が $52.4 \pm 8.2$ 歳でとくに運動は日常行っていない、いずれも女性である。ウォーキング前後には心拍数、舌下温、体重の測定を行った。なおウォーキング実施時の環境温度はWBGT $26.3^{\circ}\text{C}$ から $29.7^{\circ}\text{C}$ の範囲であった。

## 結 果

### I. 運動習慣群と非運動群の身体組成、血液諸成分、体力値の比較

図1には習慣的に運動を実施している運動習慣群と非運動群の%fat, TC, HDL-C, AI, TGの比較を示した。運動習慣群および非運動群の%fatは平均値で共に25%程度ではほぼ同様な値であった。運動習慣群のTC, TGの平均値は184, 81.3mg/dlで、非運動群の201, 95.9mg/dlに比べ有意に低値を示した( $p < 0.01$ および $p < 0.05$ )。また、運動習慣群のHDL-Cの平均値は60.0mg/dlで、非運動群の57.9mg/dlより僅かに高値であるが、有意な差ではなかった。一方、運動習慣群のAI指数は2.20で、非運動群の2.68より有意に低値( $p < 0.01$ )を示した。

図2には握力、立位体前屈、全身反応時間、閉眼片足立ち、最大下作業時心拍数の各体力値の比較を

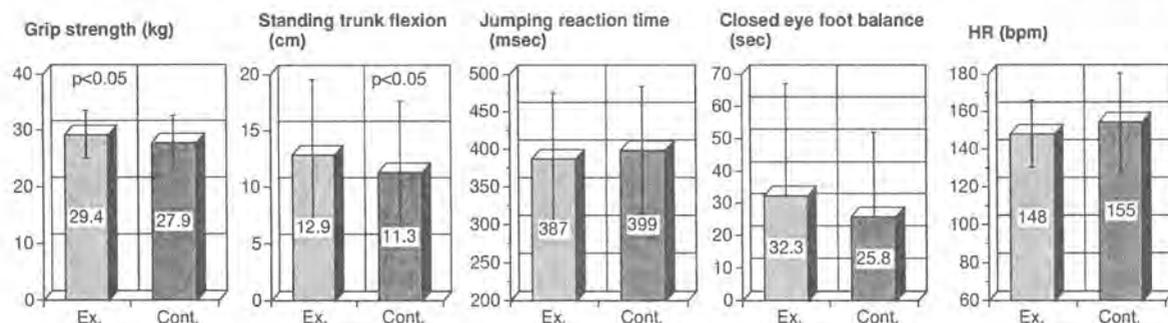


図2 運動習慣群と非運動群の握力、立位体前屈、全身反応時間、閉眼片足立ち、最大下作業時心拍数の比較

Ex. は運動習慣群、Cont.は非運動群（対照群）

示した。握力は左右の平均値であり、運動習慣群が 29.4kg で非運動群の 27.9kg に比べ有意に高値 ( $p<0.05$ ) を示し、立位体前屈も運動習慣群が 12.9cm で非運動群の 11.3 cm に比べ有意に高値 ( $p<0.05$ ) を示した。運動習慣群の全身反応時間および最大下作業時心拍数は非運動群より僅かに低値を示し、運動習慣群の閉眼片足立ちは非運動群のそれより高値を示したが、いずれも有意な差ではなかった。

## II. 運動習慣群と非運動群の体温調節能の比較

図 3 にはウォーキングの運動習慣群と非運動群におけるウォーキング時の運動強度 (%HRmax)、体重減少率および体温上昇度を示した。ウォーキング時の運動強度は平均値で運動習慣群が 50.4%HRmax、非運動群が 49.6%HRmax とほぼ同じであった。ウォーキングによる体重減少量を初期体重に対する割合で示した体重減少率は運動習慣群が 0.49%、非運動群が 0.47%と僅かに運動習慣群が高く、体温の上昇度では運動習慣群が 0.25℃、非運動群が 0.33℃と非運動群に高い傾向が見られたが、いずれも有意な差ではなかった。

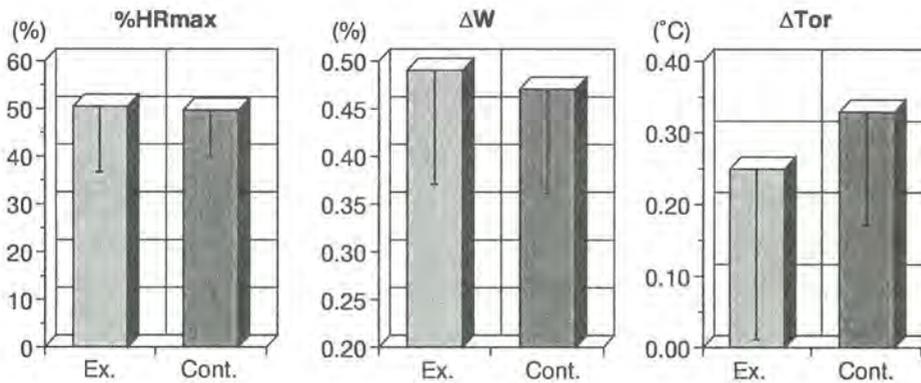


図 3 運動習慣群 (Ex.) と非運動群 (Cont.) におけるウォーキング時の運動強度 (%HRmax)、体重減少率および体温上昇度

## 考 察

血清脂質のうち TC は運動習慣群で非運動群に比べて有意に低値であった。この様に身体トレーニングが TC に与える影響については、運動習慣のある者はない者に比べて TC が低いと報告されている。TG においては運動習慣群で非運動群に比べて有意に低値であった。TG は運動強度が高いほど早期に減少が起り、TG 値の高い者に減少が大きく、継続的に運動を実施している者はその値が非運動者に比べ低いと報告されている。一方、HDL-C は、本研究では運動習慣者に顕著な変化はみられなかったが、運動習慣のある者はない者に比べその値は高いと言われている。HDL-C の増加、特に HDL<sub>2</sub>-C の増加は抗動脈硬化作用があり、冠動脈硬化症の予防として有効であり、持久的運動やウォーキングを長期間実施することで増加することが報告されている。これらのことから、運動習慣は血清脂質に対し、良好な状態に保ち高脂血症を予防する効果がある。

動脈硬化性心疾患とは冠動脈が動脈硬化で細くなったり、閉塞して起こる狭心症や心筋梗塞であり運動不足が大きな要因と考えられている。運動の習慣化によって動脈硬化指数 AI は有意に低値を示していた。この AI は動脈硬化の進行を推測させる指数で、運動習慣のある者で低値を示し、ウォーキングにおいては歩数と負の相関を示すとされている。このように運動習慣者の TC, TG, AI の低値は運動

の習慣化が動脈硬化を予防し、心血管系に対する効果が期待でき、虚血性心疾患や動脈硬化等の心血管系の疾患の予防に寄与することを示唆している。

運動の高血圧に対する効果は、有酸素運動において本態性高血圧に対してその有効性が示されており、軽度から中等度の運動（40～85%  $\dot{V}O_{2max}$ ）で降圧効果が認められている。しかし、今回の運動習慣群では対象とした被験者が正常域の血圧者のため前後に顕著な差がみられず、その正常域を保持していたと考えられる。

体力測定において、運動習慣群は非運動群に比べ握力、立位体前屈で高い値を示し、筋力、柔軟性の優れていることが認められた。高齢者における体力の低下は、複雑な神経支配を必要とする項目や、体重を支えたり移動したりする項目で著しいことが示唆されており、ウォーキングなどの運動の習慣化はこれらの体力低下を予防し、加齢による退行減少を抑制することができると考えられる。また、本研究では閉眼片足立ちに差が見られなかったが、我々の別の研究ではウォーキング実施によりその値は有意に増加し、脚の支持能力や平衡機能の向上を認めている。

運動習慣群は非運動群に比べ、同一の運動強度であるにも関わらず体温上昇度は低く、体重減少率は僅かに大きい傾向にあった。これは運動習慣群が体温調節上優れている可能性を示唆していると思われる。 $\dot{V}O_{2max}$  の高い高齢者は体温調節に優れていることが報告されており、運動継続による有酸素能力の維持は体温調節能力の維持につながると考えられる。

成人病予防としての運動は、一般に比較的軽い運動において週2～3回程度必要であり、たとえ運動量が少なくとも運動習慣の維持が重要であることが示唆されている。ウォーキング・エクササイズにおいては50%HRmax程度の運動強度で、1回20分間以上、週3日以上実施する必要があると考える。

本研究の結果から、比較的軽い運動であっても習慣化することにより、中高年者にとっては成人病予防としての効果は十分期待できると考える。

## まとめ

習慣的な運動が中高年者の成人病危険因子や体温調節能に及ぼす影響を検討するため、長期間（5.7±6.3年）、習慣的（週3.1±2.2日）に運動を実施している運動習慣者75名と非運動者301名を比較した。形態、血圧、血液諸成分、行動体力および体温調節能を観察し、以下の結果を得た。

- 1) 体脂肪率は習慣的な運動実施者と非運動者に差は見られなかった。
- 2) 運動習慣者は非運動者と比べHDL-Cでは差が認められなかったが、TC、TG、AIの値は低かった。運動習慣者のTC、TG、AIの低値は運動の習慣化が動脈硬化を予防し、心血管系に対する効果が期待でき、虚血性心疾患や動脈硬化等の心血管系の疾患の予防に寄与することが示唆された。
- 3) 運動習慣群は非運動群に比べ握力、立位体前屈で高い値を示し、筋力、柔軟性の優れていることが認められた。
- 4) 運動習慣群は非運動群に比べ、運動時時の体温上昇度は低く、体重減少率は僅かに大きい傾向にあった。これは運動習慣群が体温調節上優れている可能性を示唆している。

これらのことより、運動ウォーキングなどの比較的軽い運動であっても習慣化することにより、中高年者にとって成人病予防としての効果は十分期待でき、運動の習慣化は運動条件の中でも重要な要素であると考えられる。

# 平成9年度特別研究費研究報告

## モダリティ表現の生成処理

呉 凌非

### 1 はじめに

#### 1.1 目的

モダリティに関する研究は数多くあるが、言語処理という視点からの研究は、草薙(1989)のほかに、ほとんど見られない。本報告は生成処理の視点から、モダリティについて考察することを目的にするが、今回は「ことになる」に重点をおく。

#### 1.2 モダリティの範囲

モダリティの研究に関しては、広義的捉え方と狭義的捉え方の二種類の方法がある。広義的捉え方としては益岡(1991)が挙げられ、狭義的捉え方としては草薙(1989)が挙げられる。本報告は狭義的捉え方を取る。具体的には、文の述語と共起するモダリティ表現に限定する。

### 2 「ことになる」をモダリティとしてとらえる理由

確かに、今までの研究の中では、「ことになる」を一つのモダリティ表現として扱っている研究は一つも見あたらない。ラッチャニー(1991)と羅聖榮(1995)ではそれぞれ日本語モダリティについての分類を行っているが、いずれも「ことになる」については触れていない。しかし、以下のいくつかの理由により「ことになる」をモダリティ表現としてとらえることができるのではないかと主張したい。

#### 2.1 統語構造上の理由

日本語モダリティ表現は、統語構造的には、タイ、ラシイというような一つのワードからなるものと、ワケニハイカナイ、ハウガイイのような複数のワードからなるものと、さまざまな形を取っている。「ことになる」は構造的には「ワケニハイカナイ」、「ハウガイイ」などと同じ形をしている。

#### 2.2 意味上の理由

例1：彼女は去年の暮れに結婚したことになる。  
という例を見てみよう。「彼女は去年の暮れに結婚した」という部分を命題とすれば、「ことになる」はこの命題全体を包んでおり、意味的には話者の判断を表していることには間違いない。話者の判断である以上、実際「彼女は去年の暮れに結婚した」かどうかということはわからない。つまり「ことになる」は非事実性という特徴も備えている。したがって、パーマー(1986)のモダリティに関する定義で考えれば、「ことになる」は立派なモダリティ表現であるといえる。本報告では、「ことになる」を「結論」型のモ

ダリティと名付ける。

## 2.3 語用上の理由

「ことになる」の「なる」を文の主動詞としてとらえることは無理がある。一つは次例のように、「なる」のテンスは命題全体とはなんら関係していない。

例2：あの人は町長選挙に出馬することになる。

例3：あの人は町長選挙に出馬することになった。

もう一つは「なる」を主動詞としてとらえても、命題に参入した格要素との間にやはりなんら関係していない。逆に「ことになる」をモダリティ表現として明確に決めれば、「こと」「に」「なる」のように三つの単語に分ける必要もなければ、文全体の構造もわかりやすくなる。ちなみに、KNPシステム<sup>16</sup>では、「ことになる」、「かもしれない」などのモダリティ表現にたいして、それぞれ「こと」「に」「なる」、「か」「も」「しれ」「ない」というふうに分けて形態素解析している。モダリティ表現を事前に整理しておけば、文全体の解析精度があがることは期待できよう。

## 3 「ことになる」の生成にかかわるいくつかの要因

中国語の中には、一つのまとまった表現として「ことになる」に完全に対応するようなものはなく、さまざまな対応が見られる。つまり、「ことになる」は中国語という目標言語との間に、一对多の関係になっている。その一对多の関係は次のようないくつかの要因に左右されている。

- 1 共起成分
- 2 主動詞の意味
- 3 主動詞にかかわるテンス・アスペクト
- 4 「ことになる」にかかわるテンス・アスペクト

計算上、上記のすべての要因を考えた場合、「ことになる」は

$$2 \times 2 \times 4 \times 4 = 64$$

通りの形が存在する。しかし、実際のデータを考察した結果、おもに次に述べるような生成パターンが見られる。

### 3.1 主動詞十コニル の場合

例4： これまでにはない連続調査は、地球全体の環境監視に重要な役割を果たすことになる。

この使い方は、これからのなりゆきを表し、中国語の「将」に対応している。もう一つの特徴としては、この使い方は、話者の主観性を押さえ、特に新聞記事に多く見られる。

### 3.2 主動詞十タ十コニル の場合

例5： どこか一カ所でも閲覧することができるようになれば、公表されたことになる。

この使い方は、事実とはもかく、話者が一応それを認めるというような意味を表している。この場合は、中国語の「算是」に対応している。

### 3.3 共起成分 (ヨク、トウトウ、ヤット・・・) 十タ十コニナル の場合

例6： 準備態勢がようやく整ったことになる。

この使い方は、3.2と同様な意味を表すことができるが、ある種の期待が伺える。この場合は、中国語の「惠麻」に対応している。

### 3.4 時刻十コニナル (語用的) の場合

例7： 今年の4月に合併することになる。

この使い方は3.1と同様な意味を表している。ただし、語用的には、中国語において、「定器」という表現が存在し、両者を対応づけることにより、より自然な生成が得られる。

### 3.5 意志動詞十コニナッテル の場合

例8： 双方の大統領が会談することになっている。

この使い方は、すでに決定しているということの意味している。この場合は、中国語の「定好」を選ぶことができる。

### 3.6 非意志動詞十コニナッテル の場合

例9： タイマーで点火した場合、約1時間後に自動的に消えることになっている。

この使い方は、自然の力あるいは法律・常識に左右される成り行きを暗示している。この場合は、中国語では、3.5の「定好」を使うのは不自然で、「注定(粹尖傍)」を選ぶのがよい。

### 3.7 意志動詞十コニナツタ の場合

例10： 高速道路の有料化は取りやめることになった。

この使い方は、3.1とはそれほど変わらないが、命題の客観性を表す点において3.1より強い。あえてそれを区別するとすれば、中国語では、「予定」を選ぶことができる。

### 3.8 非意志動詞十コニナツタ の場合

例11： 結果的に、訪問中止の決定が遅れることになった。

3.7のような意志決定に基づいた推定の使い方とは違い、3.8の使い方は予期できぬ事態を表す意味合いが強い。この場合は、中国語では、「形成」という言葉を選ぶことができる。

### 3.9 コニナル十テイル十タ の場合

例12： アリスティド神父が圧倒的な強さで当選、2月7月に就任することになっていた。

この使い方は、予定変更の意味合いが強いように思える。この使い方に対応した中国語の表現として、「原定」があげられる。

### 3.10 タ十コニナル十テイル の場合

例： その二人の離婚裁判は1月9日に行われたことになっている。

3.2の使い方は、話者の命題にたいする認めを表しているが、3.10の場合はむしろ周りの捉え方、つまり命題が定説になっていることを強調している。この場合は、中国語では、「梓傍」という表現がふさわしい。

以上をまとめると、二つのことが言える。一つは、モダリティ表現を整理することにより、文全体の解析がより明瞭になってくることが予想できる。もう一つは、モダリティ表現は文全体を包んでおり、その生成は単語の生成とは異なり、多くの要因にかかわっていることがわかる。

#### 4 参考文献

- 草薙 裕 1989 法情報に関する日英対照 言語情報処理の高度化研究報告7  
益岡 隆志 1987 命題の文法 くろしお出版  
Palmer, F. R. 1986 Mood and Modality Cambridge University Press.  
ラッチャニー 1991 日本語とタイ語のモダリティの対照研究 筑波大学  
羅聖栄 1995 日本語と韓国語のモダリティの対照研究 筑波大学  
呂叔湘 1980 現代漢語八百詞 商務印書館

---

<sup>15</sup> KNPシステムは京都大学長尾研究室が開発した自然言語処理プログラムである。

## 国際教育センター担当科目に関するアンケート

大学が、教育研究の水準の向上や活性化に努めるとともに、その社会的責任を果たしていくためには、大学自身が不断の自己点検・自己評価を通じて改善への努力を行うことが不可欠である。このために、本学においては教育研究活動のあり方について多角的な点検・評価が全学的に行われている。

国際教育センターでもその一環として、本センターが担当する全学共通科目のうちの国際的なコミュニケーションのための外国語教育、国際的な情報伝達に欠かせない情報処理教育、健康に対する知識と体力を養うための健康・体力教育の科目受講者全員に対する意識調査や授業評価を、平成9年4月より開始し、本年はその2年目に当たる。

各科目系列の授業開始時期が異なるため、本年度に関してはセンター担当科目全体としての調査結果の分析は完了していないが、各科目系列で行ったアンケートの調査結果をここに紹介する。この種のアンケート調査は継続的に行い、その結果を比較・検討することによって、教育研究活動の自己点検・自己評価に役立ていく計画であり、その結果は順次、センター紀要に掲載する予定である。

### 1 外国語の授業に関するアンケート（「各年次終了時のアンケート」の結果の報告）

このアンケートは、外国語や外国語の授業について、受講生の考え方をありのままに問い、本学の外国語教育の改善に役立てようとするものである。

今回の調査の対象は、平成9年度国際教育センター提供の外国語科目の受講者全員である。調査は、環境科学部、工学部、人間文化学部第一外国語（英語）および第二外国語（ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語）の全81クラス中79クラス（ただし、2クラスについては、担当教員のやむをえぬ都合により、この時期に行うことが不可能となった）において、平成9年度授業の最後の2週間にあたる平成10年1月19日から30日の間に行われた。回答総数はのべ2,270名であった。

回答データの集計には、高橋信行助教授と垣立俊和調査員をわずらわした。また、アンケートのとりまとめには大谷泰照があたった。

#### 【1】性別

- |      |              |
|------|--------------|
| 1. 男 | 1,277名 (56%) |
| 2. 女 | 985名 (44%)   |

#### 【2】所属学部学科

- |                  |            |
|------------------|------------|
| 1. 環境科学部環境生態学科   | 136名 (6%)  |
| 2. 環境科学部環境計画学科   | 390名 (17%) |
| 3. 環境科学部生物資源管理学科 | 281名 (12%) |
| 4. 工学部材料科学科      | 310名 (14%) |
| 5. 工学部機械システム工学科  | 312名 (14%) |
| 6. 人間文化学部地域文化学科  | 315名 (14%) |
| 7. 人間文化学部生活文化学科  | 526名 (23%) |

【3】このアンケートが行われる授業名（1）

1. 英語Ⅰ	384名
2. 英語Ⅱ	339名
3. 英語Ⅲ	342名
4. 英語Ⅳ	349名
5. 英語Ⅴ	80名
6. ドイツ語Ⅰ	98名
7. ドイツ語Ⅱ	83名
8. ドイツ語Ⅲ	4名

【4】このアンケートが行われる授業（2）

1. フランス語Ⅰ	77名
2. フランス語Ⅱ	47名
3. フランス語Ⅲ	26名
4. 中国語Ⅰ	231名
5. 中国語Ⅱ	108名
6. 朝鮮語Ⅰ	17名
7. 朝鮮語Ⅱ	25名

【5】あなたは、この [クラスの] 外国語についての自分の学力を、どの程度だと思っていますか。

第一外国語

1. 非常に高い	16名 (1%)
2. どちらかといえば高い	129名 (8%)
3. 普通	772名 (48%)
4. どちらかといえば低い	497名 (31%)
5. 非常に低い	182名 (12%)

第二外国語

1. 非常に高い	8名 (1%)
2. どちらかといえば高い	36名 (6%)
3. 普通	266名 (40%)
4. どちらかといえば低い	207名 (31%)
5. 非常に低い	149名 (22%)

【6】あなたは、このクラスの授業について、全般的にどう感じましたか。

第一外国語

1. 非常に満足している	180名 (11%)
2. どちらかといえば満足している	599名 (38%)
3. どちらともいえない	525名 (33%)
4. どちらかといえば不満足である	218名 (13%)
5. まったく不満足である	78名 (5%)

## 国際教育センター担当科目に関するアンケート

### 第二外国語

- |                   |            |
|-------------------|------------|
| 1. 非常に満足している      | 85名 (13%)  |
| 2. どちらかといえば満足している | 262名 (39%) |
| 3. どちらともいえない      | 224名 (34%) |
| 4. どちらかといえば不満足である | 71名 (11%)  |
| 5. まったく不満足である     | 24名 (4%)   |

### 【7】あなたは、この授業に興味がもてましたか。

#### 第一外国語

- |                     |            |
|---------------------|------------|
| 1. 非常に興味もてた         | 207名 (14%) |
| 2. どちらかといえば興味もてた    | 619名 (41%) |
| 3. どちらともいえない        | 441名 (29%) |
| 4. どちらかといえば興味もてなかった | 144名 (10%) |
| 5. まったく興味もてなかった     | 96名 (6%)   |

#### 第二外国語

- |                     |            |
|---------------------|------------|
| 1. 非常に興味もてた         | 95名 (13%)  |
| 2. どちらかといえば興味もてた    | 276名 (36%) |
| 3. どちらともいえない        | 183名 (24%) |
| 4. どちらかといえば興味もてなかった | 171名 (23%) |
| 5. まったく興味もてなかった     | 34名 (4%)   |

### 【8】あなたは、この授業の内容が理解できましたか。

#### 第一外国語

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 十分に理解できた     | 146名 (9%)  |
| 2. かなり理解できた     | 785名 (49%) |
| 3. あまり理解できなかった  | 602名 (37%) |
| 4. まったく理解できなかった | 75名 (5%)   |

#### 第二外国語

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 十分に理解できた     | 35名 (5%)   |
| 2. かなり理解できた     | 236名 (36%) |
| 3. あまり理解できなかった  | 314名 (49%) |
| 4. まったく理解できなかった | 69名 (11%)  |

### 【9】あなたは、この授業の教科書のレベルをどう感じましたか。

#### 第一外国語

- |             |            |
|-------------|------------|
| 1. 難解すぎた    | 101名 (6%)  |
| 2. やや難解であった | 470名 (28%) |
| 3. 適当であった   | 925名 (55%) |
| 4. やや平易であった | 166名 (10%) |
| 5. 平易すぎた    | 13名 (1%)   |

第二外国語

- |  |              |
|--|--------------|
| 1. 難解すぎた   | 64名 (11%)    |
| 2. やや難解であった  | 53名 (9%)     |
| 3. 適当であった  | 421名 (74%)   |
| 4. やや平易であった  | 33名 (6%)     |
| 5. 平易すぎた   | 2名 (0%)      |
| <b>【10】 教師は熱意をもって指導にあたったと思いますか。</b>  |              |
| 1. そう思う  | 1,151名 (51%) |
| 2. どちらかといえば、そう思う   | 723名 (32%)   |
| 3. どちらともいえない   | 289名 (13%)   |
| 4. どちらかといえば、そう思えない   | 69名 (3%)     |
| 5. そう思えない  | 33名 (1%)     |
| <b>【11】 あなたは、この授業にどの程度出席しましたか。</b>   |              |
| 1. 全部あるいはほとんど全部出席  | 1,502名 (66%) |
| 2. 3分の2くらい出席   | 532名 (24%)   |
| 3. 半分くらい出席   | 159名 (7%)    |
| 4. 3分の1くらい出席   | 46名 (2%)     |
| 5. ほとんど欠席  | 24名 (1%)     |
| <b>【12】 [設問 11 で3か4か5と答えた人のみ] あなたがこの授業にあまり出席しなかった最大の理由は何か。 (いくつ答えてもかまいません)</b> |              |
| 1. 授業内容に興味がなかったから  | 61名          |
| 2. 出欠がとられなかったから  | 28名          |
| 3. 授業の準備ができなかったから  | 57名          |
| 4. 試験さえ受ければよいと思ったから  | 29名          |
| 5. 授業以外のことに忙しかったから   | 96名          |
| 6. その他   | 74名          |
| <b>【13】 あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。</b>  |              |
| 1. 非常に意欲的に取り組んだ  | 139名 (6%)    |
| 2. どちらかといえば意欲的に取り組んだ   | 723名 (32%)   |
| 3. どちらともいえない   | 716名 (32%)   |
| 4. どちらかといえば意欲的でなかった  | 527名 (23%)   |
| 5. まったく意欲的でなかった  | 155名 (7%)    |
| <b>【14】 あなたは、このクラス全体の受講態度は、意欲的であったと思いますか。</b>                                  |              |
| 1. 非常に意欲的であった  | 76名 (3%)     |
| 2. どちらかといえば意欲的であった   | 603名 (27%)   |
| 3. どちらともいえない   | 858名 (39%)   |
| 4. どちらかといえば意欲的でなかった  | 559名 (25%)   |

国際教育センター担当科目に関するアンケート

5. まったく意欲的でなかった 130名 (6%)

【15】あなたは、本学の外国語の授業をよりよくするために、何をどうすればよいと思いますか。も

し意見や要望があれば、自由に書いて下さい。

英語会話の授業を希望	81名
クラスを少人数に	43名
学生がもっとやる気をおこさなければ	29名
すべての外国語を必修から外す	28名
授業の内容をもう少し易しく	21名
学生がクラスや先生を選べるように	21名
海外留学制度の充実を	19名
この授業に満足	18名
面白い教科書を	18名
外国人教員の増員を	16名
面白い授業を	14名
役立つ英語を	12名
第二外国語は週2回1年間に	12名
能力別クラスを	11名
教材がむずかしい	11名
外国語の必修単位が少ない	11名
外国語の種類をもっと多く (イタリア語、スペイン語)	10名
授業の進度をもっとゆっくりと	9名
専門の勉強に必要な英語を	9名
先生がよかった	9名
現状に満足	8名
第二外国語は不要	8名
もっと視聴覚機器を使った授業を	8名
なぜ外国語が必要かを学んで、やる気になった	7名
映画を教材に	7名
一時限目の授業をもっと遅くして	6名
文法をしっかりやってほしい	6名
第二外国語は週1回では身につかない	6名
ディベートの授業を	5名
学生の学力差が大きすぎる	5名
遊びを取り入れた授業を	5名
歌を教材に	5名
文法はやらないで	5名
訳読はやめて	4名

リスニングの授業を	4名
古い英語の教材は使わないで	4名
リーディングは不要	3名
授業に変化を	3名
日本語を使わない授業を	3名
教師によって授業の差が大きすぎる	3名
英語ニュースを使った授業がよかった	3名
3時限目は眠い	3名
授業の進度をもっと速く	3名
映画利用の授業がよかった	3名
テストの範囲をもっと少なく	3名
授業の目的を明確に	3名
授業の現状に満足	3名
視聴覚教室を増やして	3名
英語の単位を減らし、第二外国語の単位を増やして	3名
半期制にして海外へ出やすく	3名
中国語Ⅲを希望	3名
訳はゆっくりと	2名
学生の力に合った教材を	2名
英語だけを使う授業ではついていけない	2名
英語ⅠとⅡに関連性を	2名
先生はすごく熱心だが、学生はすごく不熱心	2名
宿題を多くして	2名
リーディングの授業は不要	2名
教科書は学生に選ばせてほしい	2名
発音指導を希望	2名
第二外国語が希望通りにとれるように	2名

[以下1名分については省略]

【16】あなたは、大学で外国語を学ぶことは、一般に、必要だと思いますか。

- |              |            |
|--------------|------------|
| 1. 必要である     | 859名 (80%) |
| 2. 必要でない     | 71名 (7%)   |
| 3. どちらともいえない | 159名 (13%) |

【17】 [設問16で2と答えた人のみ] なぜ外国語は不必要だと思いますか。(1つ選んで下さい)

- |                      |     |
|----------------------|-----|
| 1. 高校までの外国語で十分である    | 38名 |
| 2. これ以上学んでも効果がない     | 39名 |
| 3. 専門の勉強で忙しい         | 28名 |
| 4. 外国人の側が日本語を学ぶべきである | 26名 |

## 国際教育センター担当科目に関するアンケート

5. その他（自由に書いて下さい） 17名

【18】あなたは、大学の外国語の履修方法は、どのようなものが望ましいと思いますか。

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| 1. 任意の2つの外国語を必修とする | 344名 (32%) |
| 2. 英語だけを必修とする      | 276名 (26%) |
| 3. 英語以外の1外国語を必修とする | 100名 (9%)  |
| 4. すべての外国語を選択とする   | 353名 (33%) |

【19】あなたは、大学の外国語の必修単位数について、どう思いますか。

A. 第一外国語（英語）

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 現在より増やすべきである | 183名 (18%) |
| 2. 現在のままでよい     | 628名 (60%) |
| 3. 現在より減らすべきである | 232名 (22%) |

B. 第二外国語（英語以外の外国語）

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 4. 現在より増やすべきである | 151名 (23%) |
| 5. 現在のままでよい     | 355名 (54%) |
| 6. 現在より減らすべきである | 150名 (23%) |

【20】[学外の学校でも（いわゆるダブルスクールで）外国語の勉強をしている人のみ] その学校で何語を勉強していますか。

- |          |     |
|----------|-----|
| 1. 英語    | 28名 |
| 2. ドイツ語  | 15名 |
| 3. フランス語 | 13名 |
| 4. 中国語   | 4名  |
| 5. 朝鮮語   | 27名 |
| 6. その他   | 20名 |

【21】[設問20に答えた人のみ] その学校に、週に何回通っていますか。

- |        |    |
|--------|----|
| 1. 1回  | 9名 |
| 2. 2回  | 6名 |
| 3. 3回  | 0名 |
| 4. 4回  | 1名 |
| 5. その他 | 4名 |

## 2 外国語教育に関するアンケート（「1年次開始時のアンケート」の結果の報告）

このアンケートは、外国語や外国語の教育について、新入学生の意識のありようをありのままに問い、本学の外国語教育の改善に役立てようとするものである。

今回の調査の対象は、平成10年度の新入学生全員である。調査は、環境科学部、工学部、人間文化学部の英語Ⅰの全11クラスにおいて、入学後3、4週目にあたる4月27日から5月6日の間に行われた。回答総数は437名であった。

回答データの集計には、高橋信行助教授と垣立俊和調査員をわずらわした。また、アンケートのと

りまとめには大谷泰照があたった。

【1】性別

全体

- |      |            |
|------|------------|
| 1. 男 | 228名 (52%) |
| 2. 女 | 209名 (48%) |

(無解答 2名)

合計 437名

学部別

環境科学部

- |      |           |
|------|-----------|
| 1. 男 | 80名 (50%) |
| 2. 女 | 80名 (50%) |

工学部

- |      |            |
|------|------------|
| 1. 男 | 101名 (89%) |
| 2. 女 | 12名 (11%)  |

人間文化学部

- |      |            |
|------|------------|
| 1. 男 | 47名 (29%)  |
| 2. 女 | 117名 (71%) |

【2】所属学部学科

- |                  |            |
|------------------|------------|
| 1. 環境科学部環境生態学科   | 29名 (7%)   |
| 2. 環境科学部環境計画学科   | 81名 (19%)  |
| 3. 環境科学部生物資源管理学科 | 51名 (12%)  |
| 4. 工学部材料科学科      | 55名 (13%)  |
| 5. 工学部機械システム工学科  | 58名 (13%)  |
| 6. 人間文化学部地域文化学科  | 63名 (14%)  |
| 7. 人間文化学部生活文化学科  | 100名 (23%) |

合計 437名

【3】あなたが受験した本学の入試は、次のどれですか。

- |                  |            |
|------------------|------------|
| 1. 特別選抜・推薦入試     | 85名 (19%)  |
| 2. 特別選抜・帰国子女特別選抜 | 0名 (0%)    |
| 3. 一般選抜・前期日程     | 239名 (53%) |
| 4. 一般選抜・後期日程     | 123名 (28%) |

合計 447名

【4】〔海外在住経験のある人のみ〕あなたの海外生活について。

A：それはいつ頃ですか。(いくつ答えてもかまいません)

- |            |    |
|------------|----|
| 1. 小学校入学以前 | 2名 |
| 2. 小学生の頃   | 1名 |
| 3. 中学生の頃   | 3名 |

国際教育センター担当科目に関するアンケート

- |          |    |
|----------|----|
| 4. 高校生の頃 | 6名 |
|----------|----|
- B：それは（合計して）どのくらいの期間ですか。
- |             |    |
|-------------|----|
| 5. 1年未満     | 9名 |
| 6. 1年以上2年未満 | 0名 |
| 7. 2年以上3年未満 | 0名 |
| 8. 3年以上5年未満 | 2名 |
| 9. 5年以上     | 0名 |
- 【5】〔海外在住経験のある人のみ〕あなたは、海外のどの地域に在住しましたか。（いくつ答えてもかまいません）
- |                 |     |
|-----------------|-----|
| 1. 英語圏          | 10名 |
| 2. 英語圏以外のヨーロッパ圏 | 0名  |
| 3. アジア語圏        | 0名  |
| 4. その他          | 0名  |
- 【6】〔中学校入学以前に（国内で）英語を習ったことのある人のみ〕英語を習ったことについて。
- A：それは、いつ頃ですか。
- |             |      |
|-------------|------|
| 1. 小学校入学以前  | 13名  |
| 2. 小学校低学年の頃 | 15名  |
| 3. 小学校高学年の頃 | 102名 |
- B：それは、（合計して）何年くらいですか。
- |          |     |
|----------|-----|
| 4. 1年くらい | 51名 |
| 5. 2年くらい | 22名 |
| 6. 3年くらい | 12名 |
| 7. 4年くらい | 6名  |
| 8. 5年くらい | 7名  |
- 【7】あなたは、中学・高校で受けた外国語の授業をどう思っていますか。
- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| 1. 全体として満足している    | 14名（3%）   |
| 2. どちらかといえば満足している | 73名（17%）  |
| 3. どちらともいえない      | 145名（34%） |
| 4. どちらかといえば不満足である | 130名（30%） |
| 5. 不満足である         | 71名（16%）  |
- 【8】それは、なぜですか。（自由に書いて下さい）
- |                        |    |
|------------------------|----|
| 1. 「全体として満足している」と答えたもの |    |
| 楽しかったから                | 6名 |
| 先生がよかったから              | 3名 |
| よくわかったから               | 3名 |
| 力がついたから                | 2名 |
| 好きだから                  | 1名 |

2. 「どちらかといえば満足している」と答えたもの

先生がよかったから	20名
役に立ったから	11名
楽しいから	9名
分かりやすかったから	6名
英語が読めるようになったから	6名
英語が得意であったから	6名
文法が学べたから	4名
好きだから	1名

3. 「どちらかといえば不満足である」と答えたもの

話せないから	35名
役立たなかったから	23名
文法ばかりであったから	16名
受験本位であったから	13名
面白くなかったから	12名
読むばかりであったから	9名
会話をやらなかったから	8名
分からなかったから	8名
先生の教え方が悪かったから	4名
出来なかったから	2名
授業時間が少なかったから	1名

4. 「不満足である」と答えたもの

話せないから	26名
役立たないから	16名
文法ばかりであったから	12名
受験本位であったから	9名
面白くなかったから	5名
先生が悪かったから	4名
訳してばかりであったから	4名
自分がやらなかったから	2名
会話をやらなかったから	2名
不満足であったから	2名
むずかしいから	1名

【9】あなたは、大学1年次生として、いまの自分の英語の学力をどの程度だと思っていますか。

全体

1. 非常に高い	2名 (0%)
2. どちらかといえば高い	21名 (5%)

国際教育センター担当科目に関するアンケート

3. 普通	138名 (32%)
4. どちらかといえば低い	159名 (37%)
5. 非常に低い	110名 (26%)

入試別入学者

特別選抜・推薦入試

1. 非常に高い	1 (1%)
2. どちらかといえば高い	1 (1%)
3. 普通	11 (13%)
4. どちらかといえば低い	32 (38%)
5. 非常に低い	39 (47%)

一般選抜・前期日程

1. 非常に高い	1 (0%)
2. どちらかといえば高い	16 (7%)
3. 普通	83 (35%)
4. どちらかといえば低い	87 (37%)
5. 非常に低い	48 (21%)

一般選抜・後期日程

1. 非常に高い	0 (0%)
2. どちらかといえば高い	3 (3%)
3. 普通	43 (40%)
4. どちらかといえば低い	38 (36%)
5. 非常に低い	22 (21%)

【10】 [設問9で1か2と答えた人のみ] あなたの英語の学力は、なぜそうなったと思っていますか。  
(いくつ答えてもかまいません)

1. 海外に在住したことがあるから	0名
2. 学校以外(塾、家庭教師、家族など)で習ったから	7名
3. 中学・高校の英語の授業時間数が多かったから	20名
4. 中学・高校の英語の授業が有益であったから	9名
5. 中学・高校の英語の先生がよかったから	7名
6. 自分が努力したから	9名
7. 英語が得意であったから	9名
8. その他(自由に書いて下さい)	
楽しそうだったから	1名
文法がわかったから	1名
英語が好きだったから	1名
外国人の先生に接する機会が多かったから	1名

【11】 [設問9で4か5と答えた人のみ] あなたの英語の学力は、なぜそうなったと思っていますか。

(いくつ答えてもかまいません)

1. 中学・高校の英語の授業時間が少なかったから	12名
2. 中学・高校の英語の授業が役に立たなかったから	33名
3. 中学・高校の英語の授業が受験本位（強制的）であったから	89名
4. 中学・高校の英語の先生がよくなかったから	39名
5. 自分が努力をしなかったから	162名
6. 自分に外国語の能力がなかったから	48名
7. その他（自由に書いて下さい）	
英語が嫌いだから	7名
やる気がないから	4名
英語が苦手だから	3名
単語が覚えられないから	3名
覚えることが多すぎるから	1名
英語を憎んでいるから	1名
ヒアリングを楽しめないから	1名
実用的でなかったから	1名
英語に接することが少なかったから	1名
すぐ忘れてしまうから	1名
役立たなかったから	1名
むずかしいから	1名
努力しなかったから	1名

【12】あなたは、現在、英語の授業について、どの程度の興味をもっていますか。

全体

1. 非常に興味がある	32名（7%）
2. どちらかといえば興味がある	151名（35%）
3. どちらともいえない	112名（26%）
4. どちらかといえば興味がない	98名（23%）
5. まったく興味がない	39名（9%）

学部別

環境科学部

1. 非常に興味がある	19名（12%）
2. どちらかといえば興味がある	52名（33%）
3. どちらともいえない	42名（27%）
4. どちらかといえば興味がない	35名（22%）
5. まったく興味がない	9名（6%）

工学部

1. 非常に興味がある	5名（5%）
-------------	--------

国際教育センター担当科目に関するアンケート

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 2. どちらかといえば興味がある | 35名 (32%) |
| 3. どちらともいえない     | 37名 (33%) |
| 4. どちらかといえば興味がない | 19名 (17%) |
| 5. まったく興味がない     | 15名 (13%) |

人間文化学部

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 1. 非常に興味がある      | 8名 (5%)   |
| 2. どちらかといえば興味がある | 64名 (39%) |
| 3. どちらともいえない     | 33名 (20%) |
| 4. どちらかといえば興味がない | 44名 (27%) |
| 5. まったく興味がない     | 15名 (9%)  |

【13】それは、なぜですか。(自由に書いて下さい)

- |                          |     |
|--------------------------|-----|
| 1. 「非常に興味がある」と答えたもの      |     |
| 英語が出来るようになりたいから          | 12名 |
| 英語が好きだから                 | 10名 |
| 外国で勉強をしたいから              | 4名  |
| 英語圏で仕事をしたいから             | 2名  |
| 役に立つから                   | 1名  |
| 2. 「どちらかといえば興味がある」と答えたもの |     |
| 英語を話したいから                | 33名 |
| 楽しいから                    | 21名 |
| 英語は必要だから                 | 15名 |
| 英語は役に立つから                | 15名 |
| 英語が出来るようになりたいから          | 8名  |
| 外国旅行がしたいから               | 6名  |
| 英語圏で生活したいから              | 6名  |
| 担当の先生がよいから               | 3名  |
| 洋画が好きだから                 | 1名  |
| 3. 「どちらかといえば興味がない」と答えたもの |     |
| 面白くないから                  | 19名 |
| 分からないから                  | 16名 |
| 高校の英語に似ているから             | 9名  |
| 役に立たないから                 | 9名  |
| 不得意だから                   | 8名  |
| つまらないから                  | 8名  |
| むずかしいから                  | 3名  |
| 話せないから                   | 2名  |
| 入試が終わって必要がなくなったから        | 2名  |

専門の勉強に時間をとりたいから	1名
予習が嫌いだから	1名
必要がないから	1名
4. 「まったく興味がない」と答えたもの	
好きになれないから	8名
わからないから	6名
役に立たないから	5名
むずかしいから	3名
嫌いだから	2名
面白くないから	2名
強制されるから	1名
【14】 「設問 12 について」 英語の授業についてそう感じるようになったのは、いつ頃からですか。	
1. 「非常に興味がある」と答えたもの	
1. 小学校	3名
2. 中学1年生	7名
3. 中学2年生	2名
4. 中学3年生	0名
5. 高校1年生	1名
6. 高校2年生	4名
7. 高校3年生	10名
8. 浪人中	3名
9. 大学入学後	2名
2. 「どちらかといえば興味がある」と答えたもの	
1. 小学校	7名
2. 中学1年生	21名
3. 中学2年生	12名
4. 中学3年生	5名
5. 高校1年生	14名
6. 高校2年生	14名
7. 高校3年生	33名
8. 浪人中	12名
9. 大学入学後	32名
3. 「どちらかといえば興味がない」と答えたもの	
1. 小学校	0名
2. 中学1年生	15名
3. 中学2年生	18名
4. 中学3年生	4名

国際教育センター担当科目に関するアンケート

5. 高校1年生	22名
6. 高校2年生	7名
7. 高校3年生	10名
8. 浪人中	0名
9. 大学入学後	20名
4. 「まったく興味がない」と答えたもの	
1. 小学校	1名
2. 中学1年生	8名
3. 中学2年生	5名
4. 中学3年生	5名
5. 高校1年生	5名
6. 高校2年生	3名
7. 高校3年生	5名
8. 浪人中	0名
9. 大学入学後	7名

【15】あなたの本年度の英語クラス（2クラス）は、次のどれですか。

= 省略 =

【16】あなたの本年度の第二外国語クラス（1クラス）は、次のどれですか。

1. ドイツ語Ⅰ（深見）	56名
2. ドイツ語Ⅰ（村上）	66名
3. フランス語Ⅰ（長島）	99名
4. 中国語Ⅰ（呉）	59名
5. 中国語Ⅰ（趙）	3名
6. 中国語Ⅰ（鄧）	61名
7. 中国語Ⅰ（唐）	74名
8. 朝鮮語Ⅰ（金）	5名

他にモンゴル語3名、ロシア語1名

【17】あなたは、第二外国語として、なぜそのことばを選択しましたか。（いくつ答えてもかまいません）

1. 専門の勉強に必要だから	44名
2. 将来、役に立ちそうだから	190名
3. そのことばを話す人口が多いから	44名
4. 美しい（ユニークな）ことばだから	57名
5. 単位がとりやすいと聞いたから	12名
6. 学びやすいことばだから	59名
7. アジアのことばだから	55名
8. その他（自由に書いて下さい）	

なんとなく（ドイツ語）	7名
ドイツへ行きたいから（ドイツ語）	5名
面白そうだから（中国語）	5名
中国へ行きたいから（中国語）	5名
なんとなく（中国語）	4名
行ってみたい国だから（フランス語）	4名
興味があるから（ドイツ語）	4名
何となく（フランス語）	2名
カッコよいから（フランス語）	2名
朝鮮語がとれなかったから（中国語）	2名
特にない（フランス語）	2名
オーストリアが好きだから（ドイツ語）	2名
中国に興味があるから（中国語）	2名
環境問題先進国だから（ドイツ語）	2名

= 1名分は省略 =

【18】あなたは、大学で外国語を学ぶことは、一般に、必要だと思いますか。

1. 必要である	284名 (65%)
2. 必要でない	30名 (7%)
3. どちらともいえない	121名 (28%)

【19】〔設問18で2と答えた人のみ〕なぜ外国語は不必要だと思いますか。（いくつ答えてもかまいません）

1. 高校までの外国語で十分である	12名
2. これ以上学んでもあまり効果がない	27名
3. 専門の勉強で忙しい	11名
4. 外国人の側が日本語を学ぶべきである	27名
5. その他（自由に書いて下さい）	
やりたい人だけやればよい	4名
役に立たない	2名
授業で少しくらいやっても身につかない	1名
文系は数学がないのに、なぜ理系だけ英語なのか	1名

【20】あなたは、大学の外国語の履修方法はどのようなものが望ましいと思いますか。

全体

1. 任意の2つの外国語を必修とする	120名 (27%)
2. 英語だけを必修とする	112名 (26%)
3. 英語以外の1外国語を必修とする	60名 (14%)
4. すべての外国語を選択とする	145名 (33%)

学部別

国際教育センター担当科目に関するアンケート

環境科学部

- |                    |           |
|--------------------|-----------|
| 1. 任意の2つの外国語を必修とする | 45名 (28%) |
| 2. 英語だけを必修とする      | 47名 (30%) |
| 3. 英語以外の1外国語を必修とする | 27名 (17%) |
| 4. すべての外国語を選択とする   | 40名 (25%) |

工学部

- |                    |           |
|--------------------|-----------|
| 1. 任意の2つの外国語を必修とする | 24名 (22%) |
| 2. 英語だけを必修とする      | 34名 (30%) |
| 3. 英語以外の1外国語を必修とする | 15名 (13%) |
| 4. すべての外国語を選択とする   | 39名 (35%) |

人間文化学部

- |                    |           |
|--------------------|-----------|
| 1. 任意の2つの外国語を必修とする | 47名 (30%) |
| 2. 英語だけを必修とする      | 30名 (19%) |
| 3. 英語以外の1外国語を必修とする | 16名 (10%) |
| 4. すべての外国語を選択とする   | 65名 (41%) |

【21】あなたは、大学の外国語の単位数について、どう思いますか。

A：英語

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 現在より増やすべきである | 49名 (12%)  |
| 2. 現在のままでよい     | 280名 (68%) |
| 3. 現在より減らすべきである | 83名 (20%)  |

B：第二外国語

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 4. 現在より増やすべきである | 62名 (19%)  |
| 5. 現在のままでよい     | 211名 (65%) |
| 6. 現在より減らすべきである | 50名 (16%)  |

【22】あなたは、もしも自由に選べるとすれば、どんなことばを母（国）語にしたいと思いますか。

- |                   |      |
|-------------------|------|
| 1. 英語             | 238名 |
| 2. ドイツ語           | 23名  |
| 3. フランス語          | 14名  |
| 4. 中国語            | 23名  |
| 5. 朝鮮語            | 6名   |
| 6. その他（自由に書いて下さい） | 61名  |
| 7. 何語でもよい         | 57名  |

6の内訳：

- |        |     |
|--------|-----|
| 日本語    | 51名 |
| スペイン語  | 4名  |
| ポルトガル語 | 3名  |
| ロシア語   | 3名  |

= 1名分は省略=

【23】それは、なぜですか。（自由に書いて下さい）

1. 英語

国際語だから	176名
英米の映画を見るため	3名
役に立つから	2名
易しいことばだから	2名
きれいなことばだから	2名
他のことばが学びやすいから	2名
なんとなく	2名
=以下1名分は省略=	

2. ドイツ語

好きだから	2名
ひびきがよいから	2名

3. フランス語

きれいだから	2名
カッコよいから	2名

4. 中国語

興味があるから	5名
好きだから	3名
将来性があるから	2名

5. 日本語

好きだから	13名
きれいだから	5名
豊かな表現力をもつから	5名
よいことばだから	4名
自分にむいているから	4名
微妙な表現をもつから	3名
むずかしいことばだから	2名

6. 何語でもよい

何語でもかまわない	12名
ことばは同じだから	6名
なんとなく	3名

【24】本学の外国語の授業について、意見や希望があれば、自由に書いて下さい。

環境科学部

授業の進度をゆっくりと	9名
実用会話を学びたい	7名

## 国際教育センター担当科目に関するアンケート

現状でよい	4名
外国語は嫌い	2名
出席をとらないで	2名
ヒヤリングを希望	2名
文法を教えてほしい	2名
第二外国語の時間を増やして	2名
クラスを能力別に	2名
=以下1名分は省略=	

### 工学部

実用会話を学びたい	5名
基本的なことを、ゆっくりと教えてほしい	4名
高校とは違う授業を	3名
単位がほしい	3名
現状でよい	3名
テキストの全訳を配布してほしい	2名
外国人教師の授業を多く	2名

### 人間文化学部

実用会話を学びたい	10名
面白い授業を	6名
教科書がむずかしい	4名
外国語の授業が少ない	3名
基本的なことを、ゆっくり教えてほしい	2名
高校とは違った授業を	2名
外国語を必修から外して	2名
宿題を出さないで	2名
面白い文章をたくさん読みたい	2名

## 3 情報処理教育に関するアンケート

情報機器や通信網の発達によって国際的な、しかも瞬時のコミュニケーションが可能となった現代において、情報機器を使いこなすことは、全ての者に求められる能力である。したがって情報処理教育においては、コンピュータならびに情報の概念を理解させるとともに、それを自在に活用する能力を身につけ、情報化社会に対応できる基礎能力を修得させることを目標としている。講義では、情報処理の動作原理、その可能性と限界など、情報処理に関する基本的概念を、また演習では、情報を使いこなすことにより情報化社会で活躍できるよう、実習を通してその対応力を修得させることを目標としているが、情報分野での進歩・変革は著しい。さらに、本学に入学した学生が、大学入学までに受ける情報処理教育には、現在の所一定の基準が設けられていない。そこで、情報系列では、各学生が大学入学までに受けた情報処理教育ならびに現実生活で接している情報機器に関する調査を行い、

この結果に基づいた情報処理教育を行うために、アンケート調査を実施している。さらに、情報処理教育終了時には、本学で行う情報処理教育に対する受講者の満足度、問題点並びに教員への評価を目的としたアンケート調査を行っている。

### 3.1 調査方法ならびに調査内容

アンケートは個人を特定しない無記名のマークシート方式（一部自由記述）で行っている。但し、本学では、情報処理教育は全学必修科目であり、文系、理系と問わず受講するため、これを区別するためにクラス名の記入を求めている。授業開始時のアンケートの質問項目は1997年12月刊行の本紀要第2号に掲載したものと同一内容である。また、情報処理教育終了時のアンケートでは下記に示した合計20項目に関して5段階評定尺度法を用いた調査を行っている。さらに、意見、改善点、希望を自由に記入できる自由記述欄を設けた。

1. 授業の内容に興味がありましたか。
2. 授業の内容が理解できましたか。
3. 授業の内容が将来（研究、就職）に役に立つと思いますか。
4. 授業の組み立て、テンポは適切でしたか。
5. 教師の声の大きさ、明瞭度、話す速度は適切でしたか。
6. 教師は、重要な箇所を強調したり、要約してくれましたか。
7. テキストや配布資料は有益でしたか。
8. テキスト、配布資料の難易度・範囲は適切でしたか。
9. あなたにとって、1回の授業内容は適切な量でしたか。
10. 教師は、概ね講義概要に沿った授業をしていましたか。
11. 授業で用いた視聴覚機器(OHP、プロジェクター-TV、ホームページなど)は授業の理解に役立ちましたか。
12. 教師は教科内容に精通し、自信を持って授業をしていましたか。
13. 授業に対する教師の熱意を感じましたか。
14. あなたは、授業にどの程度出席しましたか。
15. あなたは、授業に意欲的に取り組み、積極的に参加しましたか。
16. 授業を理解するために授業時間以外の演習、自習に多くの時間を要しましたか。
17. 授業に刺激され、授業とは別に情報関連関連の勉強、実習を行いましたか。
18. 授業のレベルはあなたにとって適切でしたか。
19. 一連の情報関連の授業に満足していますか。
20. あなたは、これらの授業の受講を後輩にも勧めますか。

### 3.2 調査結果

新入生に対して、最初に受講する情報系授業で大学入学までに受けた情報教育に関するアンケートを行い、その年度の情報教育方針の指針としている。平成9年度のアンケート集計結果（対象者数501名）と平成10年度（対象者数491名）のアンケート集計結果を表1と図1から図3に示す。

表 1 大学入学以前に受けた情報教育

利用経験	工学部		環境科学部		人間文化学部		看護短期大学部	
	1997	1998	1997	1998	1997	1998	1997	1998
ゲーム機	100%	98%	98%	93%	91%	92%	94%	88%
キーボード	88%	96%	90%	94%	95%	91%	97%	93%
マウス	88%	97%	88%	98%	89%	95%	91%	95%
計算機	74%	74%	63%	52%	80%	49%	47%	65%
ワープロ専用機	56%	66%	63%	68%	68%	59%	76%	60%
ワープロソフト	33%	53%	37%	45%	36%	38%	38%	55%
表計算	17%	23%	24%	31%	16%	12%	15%	28%
ネットワーク	10%	23%	19%	39%	15%	23%	9%	25%
電子メール	3%	5%	4%	13%	8%	4%	0%	0%
WWW	10%	35%	23%	58%	16%	32%	3%	60%

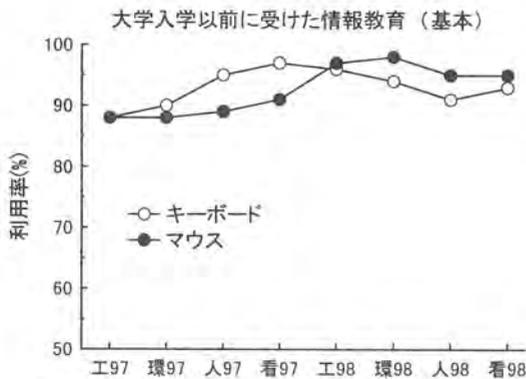


図 2 大学入学以前に受けた情報教育（基礎）

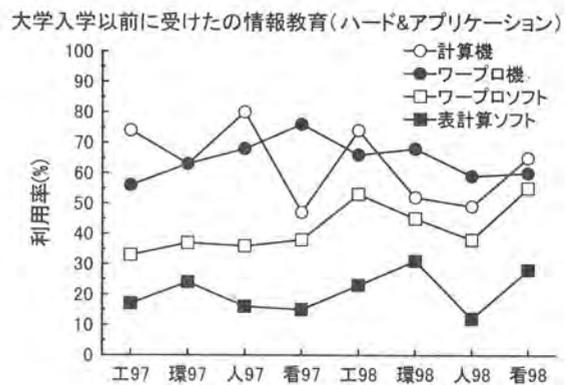


図 3 大学入学以前に受けた情報教育（ハード&アプリケーション）

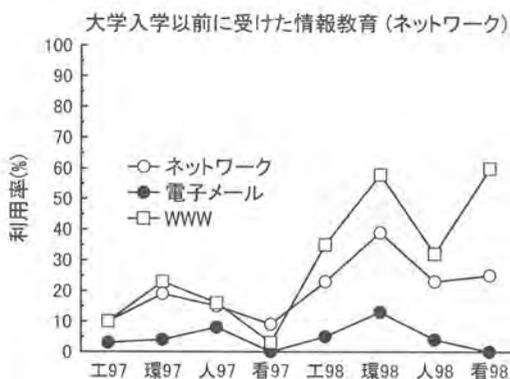


図 1 大学入学以前に受けた情報教育（ネットワーク）

平成 9、10 年度ともに約 5%程度の学生が、入学までに全くキーボードに触れたことがない。また、この傾向は過去 2 回のアンケートを見る限り、入学学部や入学年度に依存していない。一方、マウスの利用経験に関しても、入学学部に対する依存関係が見られないのはキーボードと同様であるが、入学年度に関して顕著な傾向が現れている。すなわち、1997 年度入学生より 1998 年度入学生の方がマウスの利用経験者が平均で 8%増加している。特に、マウスの利用経験者が一様に増加しているのに対して、キーボード利用経験者が横這いであり、入学学部、入学年度による利用経験者の変動が激しいこと

から、大学入学以前に行われる情報教育の質が年々向上、広がりを見せていると考えるよりは、正規の情報教育の場以外で情報機器に触れる機会が増加したことが、このアンケート結果に反映されていると考えられる。これらの傾向を踏まえて、本学における情報教育では現在もキーボード、マウスの利用方法からの講義を行っている。また、大学における情報機器の利用で不可欠なキーボードの利用方法からの講義を今後も行う必要があると考えている。

一方、図2から分かるように計算機のハードウェアやソフトウェアの利用に関しては、データの変動が激しく、入学学部や入学年度に依存するなどの顕著な傾向は認められない。しかし、アンケートの自由記述欄から個人の興味、出身高校、家庭環境など、今回アンケートで数値化出来なかった因子に依存することが推定される。

計算機ネットワークの利用に関しては、最近の傾向を反映してWWWの利用経験者が一年間で非常に大きく伸びている。それに反して、電子メールの利用者には入学年度への依存は認められない。また、計算機ネットワークの利用に関しては入学学部に対する依存性は認められない。このアンケートからは、大学入学以前に学生が理解している計算機ネットワークとはWWW的なもののみであり、WWW以外の「計算機ネットワーク上で実現される多様なサービス」と言う経験、概念は認められない。

表2 情報教育（計算機）に対する関心

計算機への関心	工学部		環境科学部		人間文化学部		看護短期大学部	
	1997	1998	1997	1998	1997	1998	1997	1998
非常にある	31%	30%	39%	38%	26%	22%	29%	23%
関心はある	47%	52%	44%	43%	53%	57%	53%	58%
普通にある	19%	16%	10%	14%	16%	18%	18%	13%
あまりない	1%	5%	2%	3%	3%	2%	0%	3%
ない	0%	0%	1%	0%	1%	1%	0%	5%
全くない	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%

情報教育（計算機）に対する関心

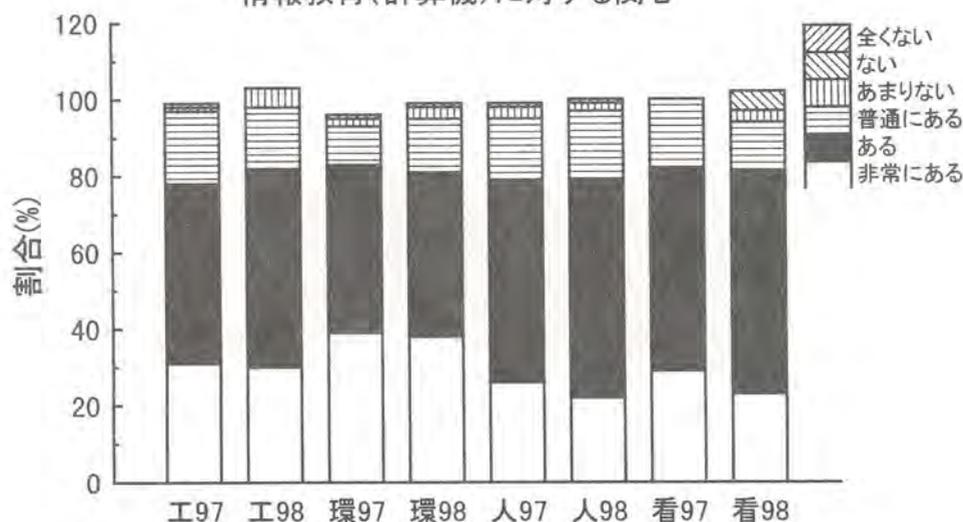


図4 情報教育（計算機）に対する関心

国際教育センター担当科目に関するアンケート

表2、図4には入学当初における情報教育（計算機）に対する関心の度合いを示す。

図2から分かるような全体的な傾向、すなわち、入学学部、入学年度による大きな格差は認められなかった。しかし、情報教育に対して大きな関心を示す層では、入学学部に対する依存性が見られる。特に、理系に属する工学部、環境科学部では、入学年度に対する依存性はないが、入学学部に対して一定の傾向がある。

情報リテラシー教育（情報処理演習Ⅰ、情報科学概論）の終了時に、受講者全員に対して、授業内容の評価、学生の授業への取り組み方、設備に関する調査を目的としたアンケートを行っている。現在、授業の開始時期の違いにより完全にアンケート結果が解析出来ないが、先に示した大学入学以前の情報教育に関するアンケート調査を行った学生のうち、平成9年度に情報リテラシー教育が終了した300名に対して行った「授業評価に関するアンケート」の集計結果の抜粋を表3、図5に示す。

表3 授業評価に関するアンケート結果

評価項目		5段階評価の割合					平均値	標準偏差
		1	2	3	4	5		
受講科目に対する	興味	3%	5%	22%	35%	34%	3.9	1.04
	理解度	4%	16%	36%	30%	14%	3.4	1.03
	内容の難易度	5%	14%	46%	18%	17%	3.3	1.05
	授業の組立	6%	9%	30%	27%	28%	3.6	1.17
	一回の分量	18%	17%	32%	26%	20%	3.5	1.45
	出席の程度	3%	7%	24%	31%	35%	3.9	1.07
	満足	4%	9%	39%	25%	22%	3.5	1.07
テキスト、資料の難易度		2%	4%	10%	17%	68%	4.5	0.93
内容に刺激を受けたか		3%	4%	20%	35%	38%	4.0	1.02
受講内容の利用価値		8%	14%	36%	25%	16%	3.3	1.14
授業外学習の程度		38%	19%	18%	15%	10%	2.4	1.37
教師への信頼度		2%	5%	25%	30%	38%	4.0	1.02

これらのアンケート結果からは次に示すことが分かる。学生全体が情報リテラシー教育内容に興味を持ち、刺激を受けているが、実際の授業の理解度、満足度は興味ほどには高くない。

授業内容の将来への利用価値もあまり認識されていない。学生は授業自体には良く出席しているが、興味や刺激に比例した授業以外での自主的な学習を行っていない。

授業の評価、特に組立、分量に関しては、学生個人により評価が大きく異なっている。これは、大学入学まで受けた情報教育に大きな差があるためと考えられる。アンケート中の自由記述欄にも能力別クラス編成を望む声が多くある。実際、学生個々の能力には大きな差があり、能力別クラス編成が望ましいが、専任教員2名と多くの非常勤

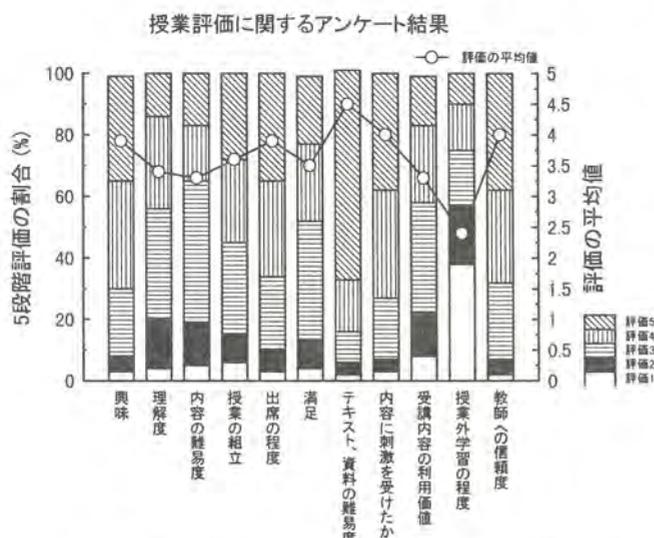


図5 授業評価に関するアンケート結果

講師に頼る現実が、能力別クラス編成、少人数クラスの実現などの情報教育の充実に大きな妨げとなっている。

## 4 健康・体力教育に関するアンケート

健康・体力科学は全学の共通基礎科目の一つとして、1年次に「健康・体力科学Ⅰ」、2年次に「健康・体力科学Ⅱ」をそれぞれ半期1単位、計2単位を配し、必修科目として位置づけられている。本科目は健康および体力の科学的理解と生涯スポーツの定着化をテーマとして、健康や体力、スポーツ文化に対する認識、生涯を通じた生活習慣の改善などをその内容としている。自己点検・自己評価の一環として、これらの現状を把握し、改善点を具体的に明らかにするために、昨年度に引き続きアンケートによる授業評価を実施した。

### 4.1 調査方法

#### (1)調査対象者

調査対象者は健康・体力科学ⅠおよびⅡを履修した380名である。

#### (2)調査方法

平成10年9月の「健康・体力科学Ⅱ」の最終授業時あるいは集中実習終了時に、質問紙と回答用のマークシートを配布し、その場で記入させた。

#### (3)調査内容

質問紙は無記名とし、個人的属性として学部名、健康・体力科学ⅠおよびⅡでの選択コースを記入させた。質問内容は教育目標に対する達成度、授業の内容や方法に対する満足度、学生自身の授業への参加態度などである。質問項目は合計20項目からなり、回答には5段階評定尺度法を用いた。さらに、意見、改善点、希望を自由に記入できる自由記述欄を設けた。(「健康・体力科学授業に関するアンケート」参照)

#### (4)分析

今回は、単純集計に加えて評価尺度の平均値を中心に昨年度との比較および学部別、選択コース別に分析を試みた。

### 4.2 調査結果

表1には各設問における回答数と有効回答数に対する割合を示している。健康・体力科学の教育目標や目的に対する達成度5項目の平均値についてみると、スポーツの享受能力「享受性」、健康や体力への関心「関心度」、生涯スポーツに役立つ知識や経験「知識理解」、スポーツ技術や体力の向上「体力」の順に高く、これらはいずれも平均値で3.4を上回っており、高い評価をしていることがわかる。しかし、スポーツの科学的な理解と実践を尋ねた項目「科学性」では、2.95と唯一3を下回る低値を示している。

授業環境、方法、内容に関する7項目についてみると、教員への評価は、熱意を感じた「熱意」および安全への配慮「安全性」は70%以上が4以上を回答し、評価尺度が高くなるにつれて割合が増加する傾向を示している。平均値を求めると、それぞれ4.16、4.02と全項目の中でもかなり高い評価となっている。授業内容がシラバスに沿っていたか「シラバス」に対しては50%が3と回答しているが、8%がわからないと回答しており、シラバスそのものを理解していないと考えられる学生も見受けら

国際教育センター担当科目に関するアンケート

表1 各設問に対する回答数、割合および評価尺度の平均値

	問1		問2		問3		問4		問5		問6		問7		問8		問9		問10	
	関心度		知識理解		享受性		科学性		体力		シラス		クラスサイズ*		施設		熱意		安全性	
1.思わない	17	5%	23	6%	4	1%	35	9%	16	4%	11	3%	12	3%	10	3%	8	2%	2	1%
2.	22	6%	44	12%	22	6%	79	21%	48	13%	25	7%	27	7%	25	7%	12	3%	20	5%
3.普通	170	45%	123	33%	81	21%	155	41%	133	35%	189	50%	125	33%	90	24%	69	18%	95	25%
4.	98	26%	119	31%	138	36%	78	21%	116	31%	71	19%	98	26%	103	27%	110	29%	115	30%
5.思う	70	18%	63	17%	135	36%	26	7%	60	16%	49	13%	110	29%	148	39%	176	46%	147	39%
わからない	3	8%	6	2%	0	0%	6	2%	7	2%	32	8%	4	1%	2	1%	4	1%	1	0%
平均値	3.48		3.42		3.99		2.95		3.42		3.35		3.72		3.94		4.16		4.02	

	問11		問12		問13		問14		問15		問16		問17		問18		問19		問20	
	満足度		興味		意欲		運動量		協調性		主体性		人間関係		野外活動		野外経費		必修性	
1.思わない	9	2%	5	1%	6	2%	26	7%	6	2%	11	3%	12	3%	9	2%	18	7%	29	8%
2.	27	7%	24	6%	22	6%	47	12%	34	9%	50	13%	40	11%	15	4%	32	13%	22	6%
3.普通	112	30%	115	30%	123	32%	154	41%	134	35%	171	45%	113	30%	58	15%	56	23%	79	21%
4.	125	33%	134	35%	125	33%	84	22%	108	28%	88	23%	112	30%	84	22%	61	25%	76	20%
5.思う	105	28%	100	26%	103	27%	59	16%	95	25%	53	14%	100	26%	193	51%	72	29%	157	42%
わからない	1	0%	2	1%	0	0%	7	2%	2	1%	5	1%	1	0%	17	5%	6	2%	9	2%
平均値	3.77		3.79		3.78		3.28		3.67		3.33		3.66		4.22		3.57		3.85	

れる。施設・設備の整備「施設」およびコース当たりの人数「クラスサイズ」(問8)については55%以上の学生が4以上の回答をしており、ほぼ満足していることが伺われる。しかし、一部の施設においては不満を訴える意見が依然としてみられた。受講して満足「満足度」、内容に興味を持った「興味」の2項目はいずれも60%が4以上の回答をしており、両者の分布パターンも類似していた。

学生自身の取り組みに対する自己評価では5項目を掲げている。これらを平均値でみると最も評価が高い項目は、意欲的態度「意欲」であり、以下、協調的態度「協調性」、新しい人間関係「人間関係」(問17)、主体的態度「主体性」および運動量の確保「運動量」の順である。学外で実施する野外活動授業の必要性「野外活動」では半数以上が5と回答しており、その評価は極めて高い。一方、その経費の適切性「野外経費」については半数が4以上の回答である。健康・体力科学の必修科目としての必要性「必修性」では、肯定する回答(4,5)を示した学生が62%、平均で3.85であり、多くの学生が必修科目としての必要性を認める結果となった。

図1には各設問における評価尺度の平均値について昨年度(1996年度生)と比較している。本年度の評価は昨年度と極めて類似したパターンを示している。本年度は昨年度に比べて、教育目標に対する達成度では5項目とも0.11~0.15とわずかに上回っている。「科学性」では2.84から2.95と改善されたが、なお低値である。授業の満足度に関する7項目は「安全性」がやや下回った他は同値かわずかに上回っている。取り組みに対する自己評価では、5項目のうち「主体性」のみが下回っているが

その差はいずれもわずかであった。

図2には各設問における評価尺度の平均値について学部間で比較している。まず、人間文化学部の特徴的な項目をあげると、「知識理解」、「施設」、「熱意」、「安全性」および「必修性」に高く、「体力」、「興味」に低い。工学部では「関心度」、「科学性」、「体力」、「協調性」、「主体性」および「人間関係」に高く、「安全性」に低い。環境科学部では「クラスサイズ」「施設」「熱意」に低い傾向がみられた。同じ教員集団が担当し、しかも全学共通のシラバスに沿って展開されたのにも関わらず学部間このような差がみられたことは興味深い。

意見、改善点、希望に関する自由記述では、概ね前年度同様の傾向がみられた。おもな意見をあげると、体育館の暑熱対策を要望する意見が最も多くみられた。卓球の授業に利用している柔剣道場は、夏場には構造上の問題もあって熱がこもることから、換気扇を設置して改善を図っている。しかし、依然としてその効果はあまりみられないようである。授業中の暑さを訴える学生の選択したコースを詳しく調べると、バドミントン(12名)、バレーボール(8名)、卓球(8名)、テニス(2名)の順に多く、暑熱問題は柔剣道場だけに限らないことがわかる。体育館のメインアリーナでは、全面ガラス張りということもあって、暑熱以外に明るすぎて眩しいと訴える者がバドミントン(5名)、バレーボール(2名)、バスケットボール(1名)にみられた。希望のコースを履修したい、選択肢を増やして欲しいなど、コース選択に関する要望や不満(11名)も比較的多い意見である。3年生以降においても健康・体力科学を開講して欲しい(8名)も昨年度と同程度みられた。その他コース(種目)ごとに授業の内容や方法に関する要望意見も数多くみられたが、ここでは報告を割愛した。今後、これらの結果をふまえて授業へ反映させたいと考えている。



図1. 評価尺度の平均値による(年度別比較)

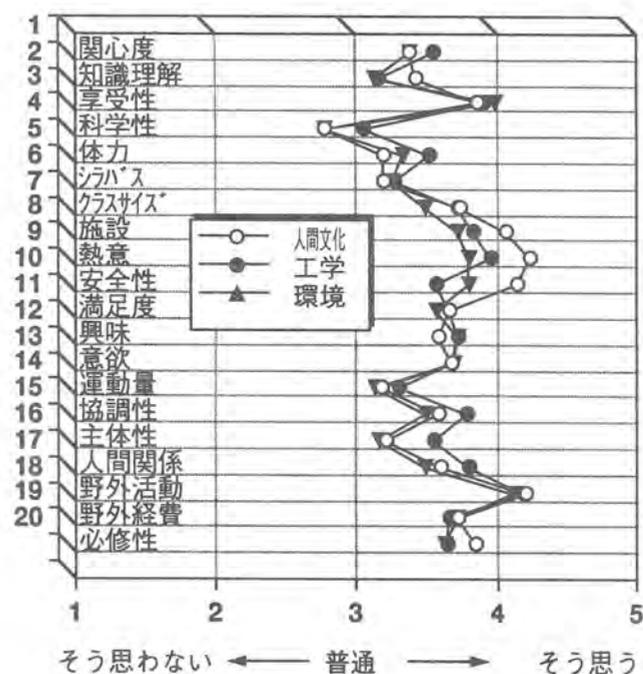


図2. 評価尺度の平均値による(学部別比較)

## 国際教育センター担当科目に関するアンケート

### 『健康・体力科学』授業に関するアンケート

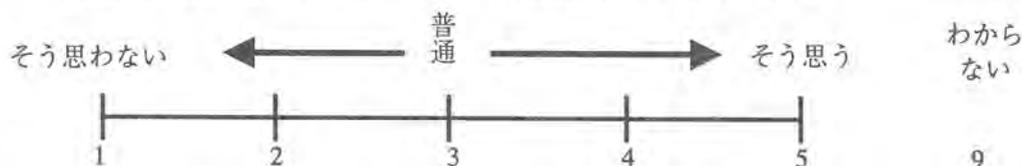
このアンケートは、本学の『健康・体力科学』授業の改善に役立てるために行うものです。健康・体力科学Ⅰ（1年後期）およびⅡ（2年前期）を終え、本授業に対する満足度、評価等について下記の設問に回答して下さい。なお、氏名、学籍番号の記入は不要です。

科目覧 IおよびⅡでの選択コースを下記より選び、科目覧のAからKの記号にマークして下さい（2箇所マーク）。

- A バドミントン B バスケットボール C ソフトボール D テニス  
E スキー F ダンスエクササイズ G 運動処方 H バレーボール  
I 卓球 J ゴルフ K 海洋スポーツ L サッカー

問1～20 1から5までの5段階で評価します。

下記を評価基準として、マークシート用紙にマークして下さい。



- 問1 健康や体力への関心が高まりましたか。  
問2 生涯スポーツに役立つ知識や経験が得られましたか。  
問3 運動やスポーツを行うことの楽しさや喜びを感じましたか。  
問4 スポーツを科学的に考え実践する能力が身につきましたか。  
問5 スポーツ技術や体力が向上しましたか。  
問6 シラバスに沿った授業が展開されましたか。  
問7 コース当たりの学生数は適切でしたか。  
問8 施設・設備は十分に整備されていましたか。  
問9 授業に対する教員の熱意を感じましたか。  
問10 教員は安全に配慮して授業を実施していましたか。  
問11 この授業を受講して満足できましたか。  
問12 この授業を受講して内容に興味をもてましたか。  
問13 授業に意欲的に取り組みましたか。  
問14 自分にとってふさわしい運動量が確保できましたか。  
問15 他の学生やグループで協力的に実施できましたか。  
問16 自主的（主体的）に考えて運動できましたか。  
問17 学生同士で新しい人間関係が生まれましたか。  
問18 学外で行う野外活動授業（スキー、ゴルフ、海洋スポーツ）は必要だと思いますか。  
問19 実習にかかる費用は適切でしたか。（スキー、ゴルフ、海洋スポーツ選択者のみ回答）  
問20 健康・体力科学のような保健体育科目は必修科目として必要だと思いますか。  
問21 以降の欄 意見、改善点、希望があれば自由に書いて下さい。

『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』

編集委員 (○印代表)

語学系 (英)	石田法雄
(仏)	○長島律子
(中)	○呉 凌非
情報系	高橋信行
体育系	岡本 進

1998年12月25日印刷

1998年12月25日発行

編集、発行

滋賀県立大学国際教育センター

522-8533 彦根市八坂町2500

Phone: (0749) 28-8251

Facsimile: (0749) 28-8480

E-mail: [report@ice.usp.ac.jp](mailto:report@ice.usp.ac.jp)  
(<http://www.ice.usp.ac.jp/>)

印刷

サンライズ印刷株式会社

522-0004 彦根市鳥居本町655-1

Phone: (0749) 22-0627

The University of Shiga Prefecture  
The University Center for Intercultural Education  
2500 Hassaka-cho  
Hikone, Shiga 522-8533 JAPAN